

鞠智城シンポジウム 2019 成果報告書

古代の山城と東北城柵

熊本県教育委員会

鞠智城シンボジウム 2019

古代の山城と東北城柵

シンポジウム概要

鞠智城シンポジウム 2019

古代の山城と東北城柵

一 開催日時等

日時 .. 二〇一九年一〇月六日（日）十時三〇分～一七時三〇分

場所 .. 龍谷大学 韶都ホール 京都駅前アバンティ九階（京都駅八条東口向かい）

主催 .. 熊本県・熊本県教育委員会・龍谷大学文学部

後援 .. 明治大学国際日本古代学研究クラスター・熊本県文化財保護協会

協力 .. 文化庁地域文化創生本部



二 講演等プログラム

- ・報告 「古代山城 鞠智城跡の調査と成果」

村崎 孝宏（熊本県教育委員会）

- ・講演① 「古代の城柵と山城」

熊谷 公男（東北学院大学名誉教授）

- ・講演② 「都からみた古代山城と城柵」

國下多美樹（龍谷大学教授）

- ・講演③ 「東北古代城柵の構造と機能」

八木 光則（岩手大学平泉文化研究センター客員教授）

- ・講演④ 「関東・東北の古墳時代社会の動態と城柵の成立」

若狭 徹（明治大学准教授）

- ・パネルディスカッション

コーディネーター 佐藤 信（人間文化研究機構理事）

パネリスト

國下多美樹

八木光則

若狭 徹

村崎 孝宏

目次

シンポジウム概要

主催者あいさつ 1

熊本県教育委員会教育理事 青木 政俊

龍谷大学学長 入澤 崇

5 2

報告「古代山城 鞠智城跡の調査と成果」 村崎 孝宏 9

はじめに 10

一 鞠智城跡の概要 11
二 発掘調査の成果 16

(一) 城門跡と城門周辺の遺構 18

(二) 貯水池跡 20

(三) 土壘の構造とその特徴 21

三 出土遺物、時期区分と変遷 24

(一) 出土遺物 24

(二) 時期区分

第一期	第二期	第三期	第四期	第五期
30	29	28	26	26

まとめ
おわりに

31

32

講演① 「古代の城柵と山城」 熊谷 公男

はじめに

36

一・施設としてのキ（城・柵）

38

二・施設としての城柵と山城の比較

51

35

講演② 「都からみた古代山城と城柵」 國下 多美樹

はじめに

64

一 日本の都・城・柵

71

63

二 都の宮垣と羅城の性格	73
宮垣と一本柱塀	76
築地の導入とその後	80
難波の羅城	83
平城京と長岡・平安京の羅城	84
三 都からみた城柵と山城	86
政局による城柵と山城の変化	86
儀礼空間の影響	90
おわりに	91
講演③「東北古代城柵の構造と機能」八木光則	93
はじめに	94
一 城柵の目的	94
（二）城柵の捉え方	95
（二）軍事拠点か行政府かの議論	96
二 城柵の基本構造と機能	99
（二）城柵の立地・規模	99

(二) 城内の諸施設	99
(一) 外郭線	99
(二) 政府	101
(三) 官衙・曹司	104
(三) 寺院	108
(一) 多賀城廃寺	108
(二) 秋田城廃寺（鶴ノ木地区寺院・図8）	108
三 巨大化する城柵	110
(一) 大崎平野（宮城県北部）の城柵	110
(二) 横手盆地（秋田県内陸部）	114
(三) 三十八年戦争	115
おわりに	117
	119
講演④ 「関東・東北の古墳時代社会の動態と城柵の成立」	120
はじめに	120
一 古墳文化と前方後円墳不ツトワーカ	120
二 古墳文化の成立と北進	122

(一) 前期古墳文化の成立	122
(二) 共立王の登場	126
(三) 古墳文化の最前線	128
三 空疎化する東北の古墳中期前半	
(一) 大型前方後円墳の不在	131
(二) 点的に存在する西の要素	136
四 北進する前方後円墳——中期中葉から後半の動態——	
(一) 関東の渡来人編成と前方後円墳の北上	138
(二) 山形県地域の展開	141
五 東北地方の南北での後期古墳築造の差異	144
(一) 関東における前方後円墳の多出(図16)	144
(二) 東北地方における前方後円墳築造の温度差(図17)	145
六 終末期から末期古墳の動向終末期古墳と横穴墓の展開	147
小結	128
	151

付
録

参考資料

講演④	(若狭 徹)	
講演③	(八木 光則)	
講演②	(國下多美樹)	
講演①	(熊谷 公男)	
報 告	(村崎 孝宏)	
シンポジウム次第		

1 11 25 35 41

【2019年度 鞠智城シンポジウム 資料編】

※今回の成果報告書を刊行するにあたって、当日使用した資料を「資料編」として
卷末にまとめました。

主催者あいさつ

主催者あいさつ①

熊本県教育委員会教育理事 青木政俊

皆さんおはようございます。県の営業部長くまモンのあとに挨拶をするというのは非常に難しいのですけれども、しっかりと挨拶をさせていただきたいと思います。



まず、主催者の挨拶に入る前に皆さま方に熊本地震からの復旧・復興に対するお礼を申しのべたいと存じます。平成二十八年四月の熊本地震の発生から、やがて三年半が過ぎようとしております。この間、ここにいらっしゃる皆さま方を含め、全国の皆さま方から力強く温かいご支援をいただき、例えれば県民の生活の復旧、インフラの復旧、そして先ほど話がありましたけれども、文化財の分野でも例えば昨日、熊本城の特別公開が始まつたり、あるいは鞠智城の発掘調査が始まつたりと、復旧・復興が一歩ずつ進んでいるところでございます。これからも、息の長い取り組みが必要となりますので、引き続きご支援をお願いしたいと存じます。また、私たち熊本県民も熊本地震の教訓を活かしまして、被災地の支援等をこちらからも恩返しをさせていただきたいと存じますのでよろしくお願ひいたし

ます。それでは主催者の挨拶をさせていただきます。

本日はご多用の中、多くの皆さまにご来場いただきありがとうございます。また、コーディネーターの佐藤信先生をはじめ、講師の先生方におかれましては本シンポジウムにご出席、ご出演いただき厚くお礼を申しあげます。さらに龍谷大学の皆さまのご支援をいただくことで本会場にて開催することができました。今回の開催にあたりましては、特に龍谷大学の学生の皆さま、そして先生の皆さまには大変、ご協力をいだいております。重ねて感謝をいたします。

さて、鞠智城は今から千三百五十年前、七世紀後半の激動する東アジア情勢の中、大和政権によつて築かれた古代山城でございます。『続日本紀』などの六国史に記載がある全国有数の重要遺跡として高く評価をされております。熊本県では昭和四二年から鞠智城跡の発掘調査や研究を実施し、その構造解明を進めてまいりました。昨年度からは熊本地震の後、中断しておりました発掘調査を再開し、鞠智城の正門と考えられる堀切門跡周辺の調査を実施いたしまして、城門の構造解明につながる重要な成果が得られたところでございます。本日のシンポジウムでは、「古代の山城と東北城柵」をテーマとして開催をいたします。鞠智城をはじめとする古代山城の機能や役割とその変遷について、より深く理解するために同時期に大和政権により東北支配の軍事、政治の拠点として築城された城柵と比較検討することを目的としております。パネルディスカッションでは活発な議論がなされるものと期待しております。今回のシンポジウムを通じまして、鞠智城を多くの皆さまに知つていただ

き、理解が深まるとともに鞠智城の歴史的、学術的価値がさらに高まることで一日も早く特別史跡に指定されることを願っています。最後になりましたが、本日ご参加いただいた皆さまのご健勝、ご活躍を心から祈念申し上げまして挨拶いたします。本日はどうもありがとうござります。

主催者あいさつ②

龍谷大学学長 入澤 崇



皆さま、ようこそお越しくださいました。龍谷大学学長の入澤でございます。まず初めに本日、鞠智城シンポジウム開催にあたりまして大変ご尽力をいただきました東京大学名誉教授佐藤信先生には、厚くお礼を申しあげます。そして、本日参加してくださいます先生方には、これから実りあるシンポジウムを期待しております。お忙しい中、足をお運びくださいまして本当にありがとうございます。また、本日は熊本から多数の関係者の方々がおいででございます。このたびのシンポジウムの開催にあたりご尽力くださいましたこと、厚くお礼を申しあげます。実は、龍谷大学と熊本とはこのたび協力タッグを組むこととなりました。といいますのは、龍谷大学は二〇一五年に仏教系大学として初めて「農学部」を開設いたしました。その中の一部のグループが熊本の農業支援に取り組んでおりまして、くまモンも授業中に登場するというサプライズもございました。そして、このたび八月下旬に私も、熊本に参りまして蒲島県知事と協定書を取り交わしました。すなわち一つの私

立大学と一つの県が協力タッグを組んだわけであります。今、熊本の水俣の農家の方々、そこに龍谷大学農学部の学生が入りまして柑橘類の生産事業に一緒に取り組んでいるところでございます。また、こうして人文系の学術分野におきましても、この度「鞠智城シンポジウム」が開催できますこと、本当に嬉しく思っております。と申しますのも龍谷大学は本年、創立三百八十年を迎えた。一六三九年、世が徳川家光の時代に西本願寺の中に僧侶教育機関として学寮というものが生まれました。それが本学、龍谷大学のルーツであります。その記念すべき年にこうしたシンポジウムが開催でありますこと本当に嬉しく思っております。また、本日、受付のところに座っていた学生諸君、彼らは文学部の歴史学科、文化遺産学専攻の学生であります。二〇一六年に歴史学科の中に文化遺産学専攻というものができました。本学にありますては一番新しい専攻であります。その文化遺産学とのたび熊本県の関係者の方々、そして考古学者の方々、歴史学者の方々と一緒にこうしたシンポジウムができること、学生諸君にとりましても大きな刺激になると思います。本日のシンポジウムがきっかけとなり、文化遺産学に対する関心がますます深まってくることを大いに期待しております。また私は、個人的にシルクロードの仏教遺跡をこれまで駆けめぐつてまいりました。ある時期に八角形の建造物、八角形の柱というものが流行する時期がございまして、その八角形という建物に異常な関心を示しておるものですから、この度、八角形の鼓楼のある鞠智城、このシンポジウム楽しみにしておりました。残念ながら瀬田学舎のイベントへ、これから参らねばなりません。中身をお聞きすることが

できないこと本当に残念であります、後ほど文化遺産学の先生方から内容を聞かせていただきたいと思つております。皆さまお忙しい中、足をお運びいただきまして本当にありがとうございます。めでたく三百八十年の記念行事の一環としてこのシンポジウムを開催できましたことを大変嬉しく思つております。実りある議論が展開されることを念願し、ご挨拶とさせていただきます。本日は誠にありがとうございました。

報告

古代山城 鞠智城跡の調査と成果

講演者紹介

村崎 孝宏（むらさき たかひろ）

熊本大学大学院文学研究科修士課程修了。熊本県教育厅文化課長補佐を経て、現在、熊本県立裝飾古墳館分館歴史公園鞠智城・温故創生館長。

古代山城 鞠智城跡の調査と成果

熊本県教育委員会 村崎 孝宏

はじめに

皆さんこんにちは、熊本県教育委員会、歴史公園鞠智城・温故創生館の村崎と申します。私の方からは本日、鞠智城跡の調査と成果につきましてご報告をさせていただきます。どうぞよろしくお願ひいたします。



まず、鞠智城跡では昭和四二年から約半世紀に亘って、発掘調査を実施してまいりました。その間、平成一六年二月には「日本の歴史を考える上で特に重要である」ということで、史跡に指定をされております。また、現在発掘調査の成果を基に歴史公園の整備を進めているところでございます。平成二四年三月にはこれまでの発掘調査の成果を総括した総合報告書をまとめています。本日は、その報告書の成果を含め、鞠智城跡の調査と成果についてご報告をさせていただきたいと思います。どうぞよろしくお願ひいたします。



図1 古代山城の分布

六六三年、白村江の戦いの敗戦後、西日本各地に唐と新羅の連合軍が攻めてくるのではないかということを想定されまして、古代山城が築かれてまいります。その一つが、今回の鞠智城跡といたことになります。想定されるルートとして、朝鮮半島に最も近い対馬に金田城、そして大宰府の周辺を守る形で古代山城が築かれています。『日本書紀』や『続日本紀』などの歴史書の中に一一の城名が出てまいります。そのほか、歴史書には記述がない同じ時代の山城もございまして、現在二七カ所の山城の存在が想定をされてます。その中で現在、場所がわかつていいるもの

一 鞠智城跡の概要

これは、古代山城の分布になります（図1）。六六三年、白村江の戦いの敗戦後、西日本各地に唐と新羅の連合軍が攻めてくるのではないかということを想定されまして、古代山城が築かれています。その一つが、今回の鞠智城跡といたことになります。想定されるルートとして、朝鮮半島に最も近い対馬に金田城、そして大宰府の周辺を守る形で古代山城が築かれています。『日本書紀』や『続日本紀』などの歴史書の中に一一の城名が出てまいります。そのほか、歴史書には記述がない同じ時代の山城もございまして、現在二七カ所の山城の存在が想定をされてます。その中で現在、場所がわかつていいもの

のが二二二カ所ということになろうかと思います。これらの山城の中で「鞠智城跡」は一番南側にあります、やや特異な場所、位置関係にあるということになります。

この鞠智城跡なのですが、七世紀後半、今から約一、三〇〇年、あるいは一、三五〇年前という言い方をしたりしますが、大和政権によって築城された古代山城というふうに考えられています。この「一、三五〇年ほど前」というあいまいな言い方をしましたが、これは、築城の記事が歴史書の中に出でこないということに起因しております。城が築かれる契機となつた出来事は、先ほども申しました六六三年に朝鮮半島で起きました白村江の戦いです。白村江の戦いで敗戦をしたあとに築かれます。そもそも六六三年に白村江の戦いに至る原因というのは、六六〇年に朝鮮半島の南西部にあつた百濟という国、この国が東隣にあつた新羅と、それから唐の連合軍から攻められて滅亡します。滅亡した後、百濟の復興を支援するために援軍を送り白村江で戦つた。そして、大敗をすることになります。ですから、その後に築かれた古代山城の中の一つとして、当時の古代日本の防衛体制の一翼を担つた城と考えることができます。

鞠智城の位置は熊本県の北部にございます（図2①）。カルデラで有名な阿蘇がございまして、その阿蘇の外輪山から流れ出す菊池川という河川に近い位置に存在しています。ただ、場所的には菊池川の河口から約三〇キロほど上流にございます。内陸に少し入ったところに位置しています。それから、この部分に大宰府があり、その周辺に古代山城が集中しております。この大宰府からは、直線距

離で南に六三キロ離れています。全体の古代山城の配置からすると、やや特異な位置関係を示す場所に存在しているという城になります。

鞠智城の南側を通っていた、これが当時の官道の想定ルートになります（図2②）。このように想定される官道のルートが通っています。南の方から廻つて熊本市内に入っています。それから福岡方面、大宰府方面に繋がります。また、阿蘇方面に行く、もう一つは山を越えると大部分県北部にも繋がるという交通の要所にあることもこの地に築かれた一つの要因ではないかと考えております。また、この点線で描かれている部分が、古代の官道が整備される前の「車路」と呼ばれる道路のルートになります。鞠智城のすぐ南側を、官道以前の古い「車路」が通っていたであろうと想定されていますので、そういう意味でも重要な位置に築かれているということが分かります。

写真1が上空から見た鞠智城の写真になります。南東方

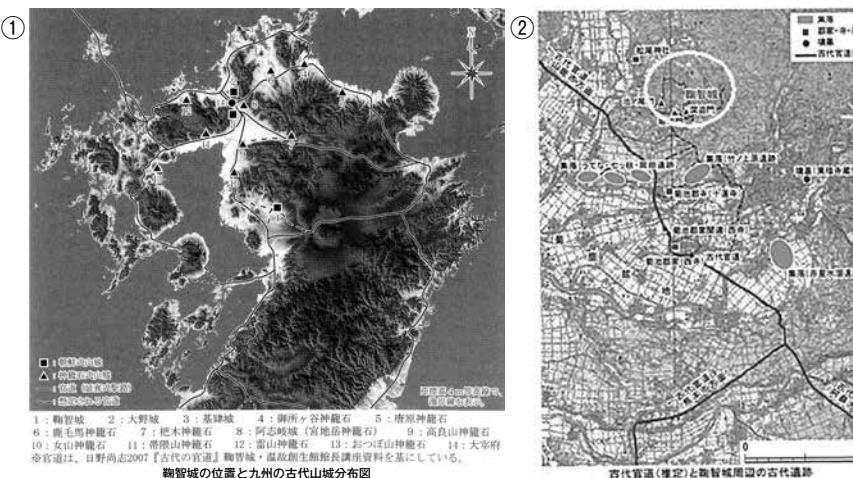


図2 鞠智城の位置



写真 1 鞠智城跡全景（平成 19 年度撮影）

向から撮影した航空写真です。ちょうどこのこんもりとした部分、ここが鞠智城跡になります。面積は五五ヘク。見ていただいて分かるようにそんなに標高の高い地形ではありません。古代山城というと、どちらかといえば標高四〇〇メートルを越える高い山に築かれるというのが一般的ですが、鞠智城の場合は一番低いところで九〇メートル、一番高い場所で一七一メートルということになりますので、比較的低い。建物が集中する長者原地区というエリアの標高が、だいたい一四〇メートル程度ですので、全体的に低く、平坦な地形に築かれている山城ということになると思います。

鞠智城跡については、歴史書にも幾度か記録が見られます（史料1）。一番最初

六国史にみる鞠智城 *「国史体系」吉川弘文館

甲申。令下^ニ大宰府一縕^中一治大野。基肄。鞠智三城上。

(書き下し文)

「甲申、大宰府をして大野・基肄・鞠智の三城を繕い治めしむ。」

『続日本紀』文武天皇二(698)年五月二十五日条

丙辰。肥後国言。菊池城院兵庫鼓自鳴。丁巳。又鳴。

(書き下し文)

「丙辰、肥後国言す、菊池城院の兵庫の鼓自ら鳴る」

『日本文德天皇実錄』天安二(858)年二月二十四・二十五日条

「丁巳、又鳴る」

肥後国菊池城院の兵庫鼓自鳴。同城不動倉十一字火。

(書き下し文)

「肥後国菊池城院の兵庫の鼓自ら鳴る」

「同城不動倉十一字火く」

『日本文德天皇実錄』天安二(858)年六月二十日条

肥後国菊池郡城院兵庫戸自鳴。

(書き下し文)

「肥後国菊池郡城院の兵庫の戸自ら鳴る」

『日本三代実錄』元慶三(879)年三月十六日条

に出てくるのが『続日本紀』の文武天皇二年、六九八年に「大宰府をして、大野、基肄、鞠智の三城を繕い治めしむ」、要は修理させたという記述が出てきます。ですから、築城の時期、いつ頃築かれたのかということについては、これよりも前であろうということが想像されます。そこで、先ほど言いました、大野城、それから基肄城が六六五年に築かれていますので、ほぼ同じ頃に築かれただろうということで一、三五〇年ほど前ということになります。この『続日本紀』の記述の後は、平安時代に入つて八五八年の「兵庫の鼓が自ら鳴る」といった奇怪な現象として書かれています。その後も、同じように自ら鳴ると不動倉が一字焼けたと、一一棟が火災にあつたという記録があります。また、その後、

八七九年の「兵庫の戸が、自ら鳴る」という奇怪な記述を最後に歴史書の記録から姿を消します。ですから、六九八年から八七九年までの間の、少なくとも一八一年は、実際に存続をしたということが歴史書の記録から明らかになります。

二 発掘調査の成果

図三は、鞠智城の平面図になります。この太い線で囲った部分が、鞠智城の範囲になります。城内の面積は五五ヶ所で、周囲の長さは三・五キロです。標高が約九〇メートルから一番高いところで一七一メートル。昭和



図3 城門跡と土塁の位置

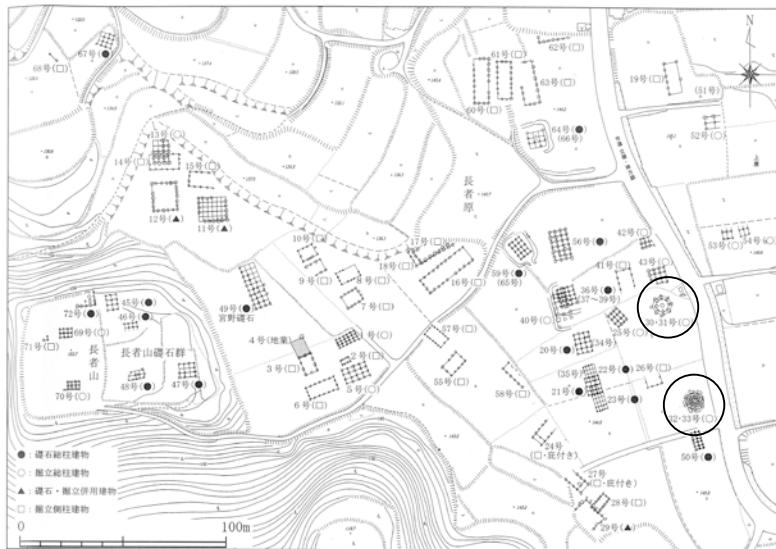


図4 建物遺構配置図

四二年から、昨年、発掘調査を再開をしましたので、今年度で三四次になります。その成果としては、大まかには七二棟の建物跡、それから三箇所の城門跡、貯水池跡が確認されています。それから、土墨跡、この太い線が西側土墨線と、南側土墨線。これらの遺構を確認しています。これは、建物が集中する長者原地区の遺構配置図になります（図4）。この中で特にこの部分、丸で囲った部分に八角形を呈する建物跡、これが二棟検出されています。三〇号と三一号、それから三二号と三三号となっていますが、これは建て替えて重複しているのではないかといふことで、それぞれに番号が振られています。現在、南側の建物跡が、原位置からやや北側に復元をされています。「八角形鼓楼」で、現在、歴史公園鞠智城のシンボルとして、見ることができます。それともう一つ、この六三号建物、それから六二号建

物、それからこの一九号建物、これが「コの字」形に配置されているように見える管理棟的な建物ではないかというふうに考えられています。遺物としてもこの周辺の五九号建物跡から当時の役人が使う刀子が出土しています。それと貯水池の取水口付近からは、硯の破片、円面硯も出ていますので、そういう意味でも管理棟的なというか役所的な機能も一部持っていた可能性が指摘されています。

(一) 城門跡と城門周辺の遺構

続きまして、城門の説明です。これが最も西側にあります池の尾門跡の、調査時に確認をした遺構の写真になります(写真2)。石墨の背面、石積みが残っています。この上部に関しては、崩れて残っていません。この部分、基底面からこの範囲に石墨が築かれていたと、ちょうどこの尾根と



写真2 池ノ尾跡



写真3 堀切門跡

尾根に挟まれた狭い谷部を遮蔽するような形で石墨が築かれているということになります。そこに城内側から城外側に水を抜くような施設、暗渠状に取水口と導水溝の遺構が確認をされています。この部分が取水口です。ここから水を入れて城外に流していくことになります。

次に、これが深迫門跡（写真4）、それからこちらが堀切門跡（写真3）になります。堀切門跡のここに見える白いものが門の唐居敷です。ここ特徴としては、一つの唐居敷に両側に二つ軸摺穴が穿たれている珍しい形態をしています。門の遺構としての場所だとか規格、構造だとかというのがなかなか分かり難いのですが、この唐居敷は、



写真4 深迫門跡

軸摺穴と軸摺穴の間を測ることで門の、開閉する門扉の内側の幅、間隔が分かります。だいたい軸摺穴と軸摺穴の心々間が二・八メートルだったかと思います。門の支柱の痕跡も見つかっていますので、ほぼ位置的にはこの部分で間違いないだろうというふうに考えております。深迫門に関しても同じように尾根と尾根を遮蔽するような形で版築の土壘が確認をされております。先ほどの池の尾門は石壘でしたが、ここは土壘で遮蔽しているということになります。ただ、唐居敷は本来二つなければいけないところなんでしょうけれど、一石だけしか見つかっておりません。なので、門の位置や、構造などについては、今後もう少し調べていかないとつつきりしたことが言えないという状態かと思います。

(二) 貯水池跡

次は貯水池跡になります(写真5)。ちょうどこの部分、このカーブしたところから先に池頭がありまして、ここは池尻になります。で、こういうちょっと歪な形なんですが、池があります。ちょうどこの尾根と尾根に挟まれた谷部に水が貯められて、生活用水など様々な用途に利用されています。調査で、貯水池の範囲を確認するために掘っていきますと、水が溜まつた後に堆積する青灰色の水性粘土の範囲が確認できました。それを基にすると、池全体の広さが五、三〇〇m²ということになります。平成二〇年、この池尻部分の調査で「百濟系銅造菩薩立像」が出土しています。そのほか、池頭に近いところには水汲み場と考えられる「木組遺構」だと、それから建築材などの木材を漬けこんだ「貯木場」(写真6・7)の跡ですとか、また、建築部材である蔓が巻かれた状態で水に漬けられて保存



写真5 貯水池跡（池尻 41Tr）

されている（写真8）のが
確認されています。

（三）土壠の構造とその 特徴

次に、西側土壠線と南側
土壠線について、ご説明し
ます。周囲三・五キロの中
で唯一、土壠線の構造が遺
構として確認ができたの
が、西側土壠線と南側土壠
線になります。ただ、南側
土壠線は先ほど言いました
「車路」や、南側に位置
する肥沃な菊鹿盆地が望め
る位置に造られます。西側
土壠線は、それよりも逆に



写真 6 貯木場跡木材検出状況



写真 7 木材および須恵器出土状況



写真 8 蔓出土状況

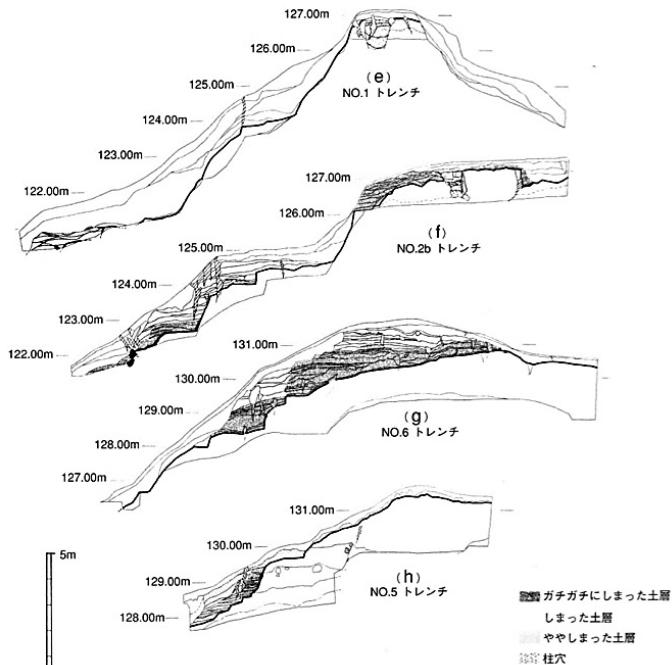


図5 南側土墨線模式図

内側に位置しています。ですので、技術的には造り方は同じなのですが、やや土墨線の高さに少し違いが見られます。南側土墨線の場合は、この2bトレンチのここからここまででほぼ六メートル高い高さがあります（図5）。途中に一段、段を造り出します。西側土墨線の高さは、だいたい二メートルぐらいです。なので、本来的にはほぼ三メートルの高さがあれば充分機能するものと考えられます。それを南側土墨線では、外側に向けて見せるために、少し重厚感を持たせて造り上げているということが言えるのかもしれません。この黒く見えているところが、固くしまった版築状の土層堆積です。

三 出土遺物、時期区分と変遷

(一) 出土遺物



写真9 出土須恵器

次に、鞠智城跡から出土した遺物について、ご説明をいたします。写真9は須恵器です。写真12が土師器、これらは、一般的に土器類と分類されています。鞠智城では、須恵器、土師器が主な出土遺物になります。これについては、総合報告書の中でしっかりと検討をさせていただいて、土器の時期的な変化、変遷にあわせて建物遺構、それから鞠智城全体の変遷過程についても研究を進めているところです。そのほか、先ほど貯水池の中に建築材などの木材が漬けこまれていたというようなお話をしましたが、そういうもの以外にもこういう木製の平鍬ですとか横槌ですか、こういう農具類や工具類などの道具類も同じようく貯水池の中から見つかっています。また、熊本県内でも古手になりますが「单弁八葉蓮華文軒丸瓦」(写真10)も出土しています。ただ、通常考えると軒先を飾る瓦というのは、建物に瓦を葺いていれば、たくさん出土するというのが本来イメージとしてあるかもしれません、鞠智城の場合は少ないので。ですから部分的に使うという程度の飾り方だった可能性もあります。もう一つは、貯水池



写真 12 土師器



写真 11 木簡



写真 10 軒丸瓦

の中から「木簡」という墨で文字が書かれた遺物が出ています（写真11）。書かれている文字、内容、読み方なのですが、現時点で確認できているのは「秦人忍□五斗」。秦、人、□部分に文字が一つあるのですが見えない。次が五斗となります。ですから、五斗という単位で計られるものと考えると「米」だろうと言うことで、「秦人の忍という人が、米を五斗納めた」ということが分かる、そういった史料になります。この木簡の意味するところで、もう一つ重要なのは通常、納税者といいますか納付者は「どこの誰々」という住所が分かるような形で、特定できる内容を一緒に書くのですが、この場合は秦人忍という書き方をされています。ということは、意外と遠くからということではなくて、近隣にその納付者がいるということを想定しても間違いないのかなと考えられます。

もう一つ、池尻から出土しました百濟系銅像菩薩立像（写真13）なのですですが、これも専門の方に見ていただいて、おそらく七世紀の中頃、百濟で作られたものと考えていいだらうという話もございますので、形態的な特徴などを含めて、築城当初に近い段階のものではないかな

と思つています。

(一) 時期区分

これまでの発掘調査で分かつてきたことについては、総合報告書の中にも、それからいろいろなリーフレット類でもまとめてあります。で、全体としては、三〇〇年近い年数存続した期間を五期に区分して考えることができるということが確認がでています。具体的に第Ⅰ期から第Ⅴ期までについて、ご説明させていただきます。

第Ⅰ期（図6）

第Ⅰ期については、マーキングした部分の建物が第Ⅰ期の建物群になろうかと思います。特徴としては、掘立柱建物が作られた時期であり、また、土壘や城門、貯水池跡など、古代山城としての最低限の機能が備わった時期が第Ⅰ期です。七世紀第3四半期から第4四半期までの時期になります。

第Ⅱ期（図7）

続きまして第Ⅱ期になります。先ほどお話をしました「コの字」形に配置された建物が建てられます。こういう建物群の出現が一つ変化として出でできます。それから、もう一つがこの部分です。



写真13 百濟系銅造菩薩立像

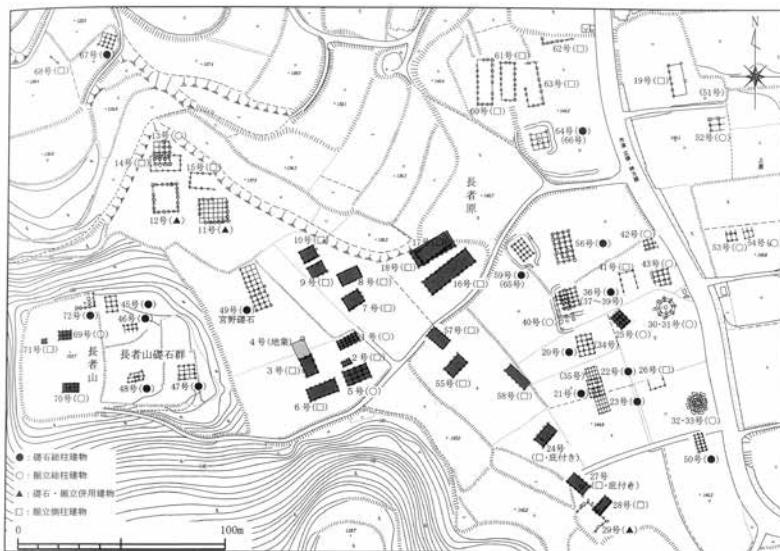


図6 鞠智城の変遷 鞠智城I期（7世紀第3四半期～第4四半期）

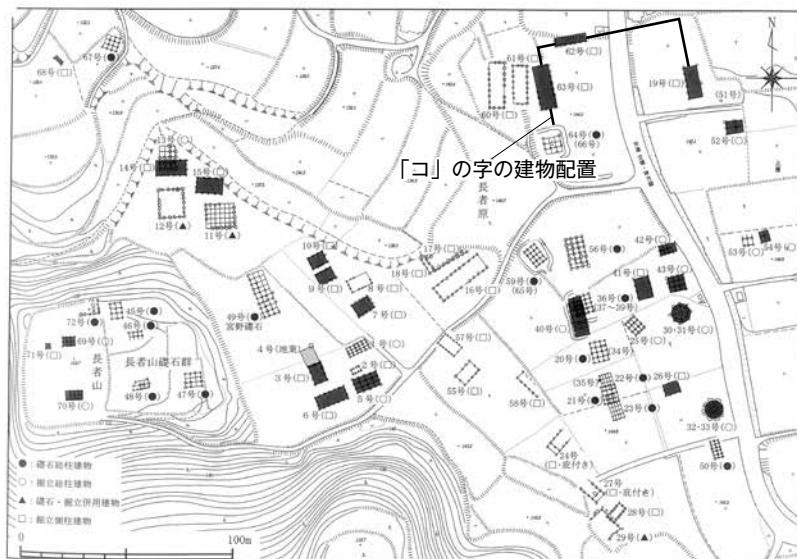


図7 鞠智城の変遷 鞠智城II期（7世紀末～8世紀第1四半期前半）



図8 鞠智城の変遷 鞠智城Ⅲ期（8世紀第1四半期後半～第3四半期）

八角形建物が建てられます。ちょうど、『続日本紀』に記載されている六九八年の繕治の時期に該当するというふうに理解しています。これらの八角形建物やコの字形配置の建物群が出現します。ですから、こういう管理棟的な、管理的な役割、政治的、行政的な役割も少し見られるようになつてくる時期かなと思います。

第三期（図8）

次に、第三期。八世紀第1四半期後半から第3四半期までの時期です。同じように「コの字」形に配置された建物群は継続します。また、八角形建物も存続しています。ただ、全体的な棟数は、現在、確認されているものとしてはさほど多くはありません。ちょうど、この時期は土器の出土量が極端に少なくなります。出土する土器が減少する、空白期がこの段階に見られます。なので第一期から第二期、

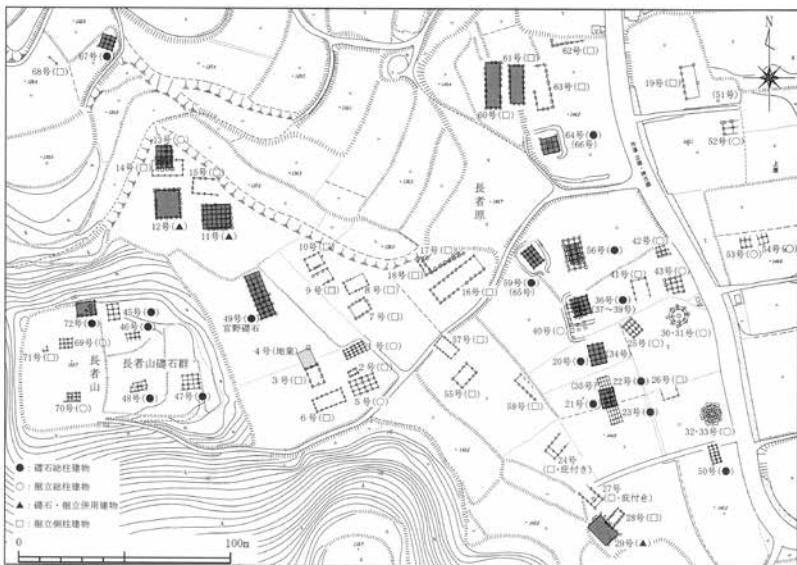


図9 鞠智城の変遷 鞠智城IV期（8世紀第4四半期後半～9世紀第3四半期）

第三期と継続する中で、鞠智城の管理というか運営の在り方が、停滞した時期にあたるのかもしれません。ただし、墨書き文字が記載された「木簡」が出ております。停滞しながらも、何らかの役割を担いながらしつかりと継続をしているという段階かと思います。この段階に礎石建物が出現します。八世紀第1四半期後半です。いろんなところの官衙遺跡と比較しても、この礎石建物の採用、出現が早いということが特徴としてあげられます。

第IV期（図9）

第Ⅳ期になります。八世紀第4四半期後半から九世紀第3四半期にかけて、先ほどありました「コの字」形配置の建物群よりも、少し長めの側柱建物ですとか、全体の建物配置も長者原地区の中央部が空白となり、その両側に広がるようになります。ただ、第Ⅲ期に出現した礎石建物と比較して少し大型化す

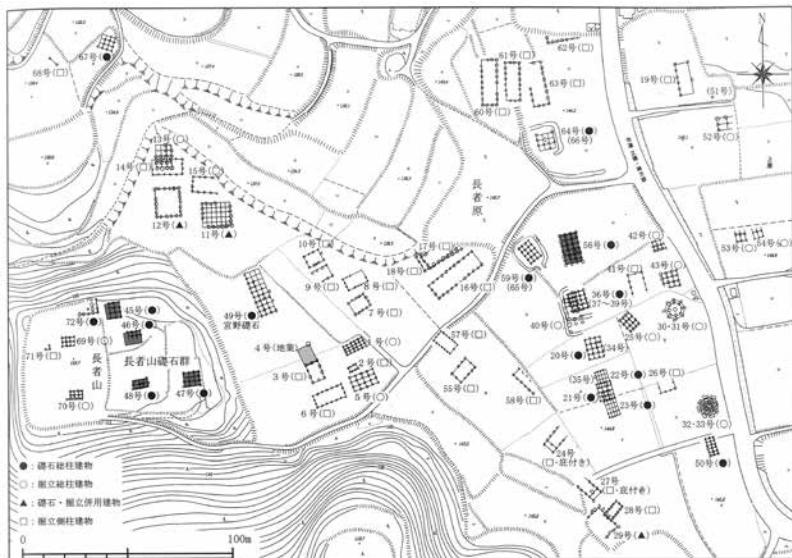


図 10 鞠智城の変遷 鞠智城V期（9世紀第4四半期後半～10世紀第3四半期）

る時期になります。ですから、食糧の備蓄施設としての機能が少し強化された時期ではないかと考えております。

第V期（図10）

『文徳実録』に記載されている八五八年の「鞠智城院の不動倉が一一棟焼けた」という記事が、ちょうど九世紀第3四半期にかかる頃になりますので、第IV期の終わりから第V期にかかる過渡期でしかも、不動倉が一一棟焼けるという出来事が起こったことになります。先ほど第III期で停滞をしたと言ひ方をしましたが、停滞をした後にも礎石建物が大型化をしていきます。一般的には、不動倉が火災で一棟も焼失すると機能が低下し、衰退していくというか、段々と尻窄んでいくんですが、建物の数は減りながらも、第V期に至つてもまだ新しく建物が作られています。なので、倉庫としての機能は維

持されている、継続していくことになると思います。五六号建物跡も第V期に建てられた大型の礎石総柱の建物になります。

まとめ

先ほども少しお話した出土土器の量について簡単にご説明します。七世紀第3四半期が築城期ということになりますが、その前の段階から若干の遺物が出土しています。歴史書に築城記事は出てきませんけど、築城期と想定される頃の土器が少量ですが出土しています。七世紀末の繕治をする時期になると爆発的に土器の出土量が増えます。その後、第III期になると土器の出土量が大きく減少し、一旦停滞をします。さらに、八世紀第4四半期になると、また遺物が出てくる。最終的には十世紀第3四半期以降、遺物が出土しなくなります。おおよそ七世紀第3四半期から一〇世紀第3四半期ぐらいでが鞠智城として機能した時期ではないかと考えております。

このように考え、他の古代山城と比較すると、大野城とそれから基肄城、それから鞠智城、この三つの城は比較的長く継続していますが、そのほかの古代山城は早い段階で停廃され、遺物が見られなくなります。なので、この三つの城、要は同時に繕治された山城に関してのみ長く存続します。ですから、特別、役割を変えながらも存続した城ということが言えると思います。この表1は『月刊文化財』、平成二八年の四月号に福岡県の赤司さんが作られた表をお借りしました。結論的には、

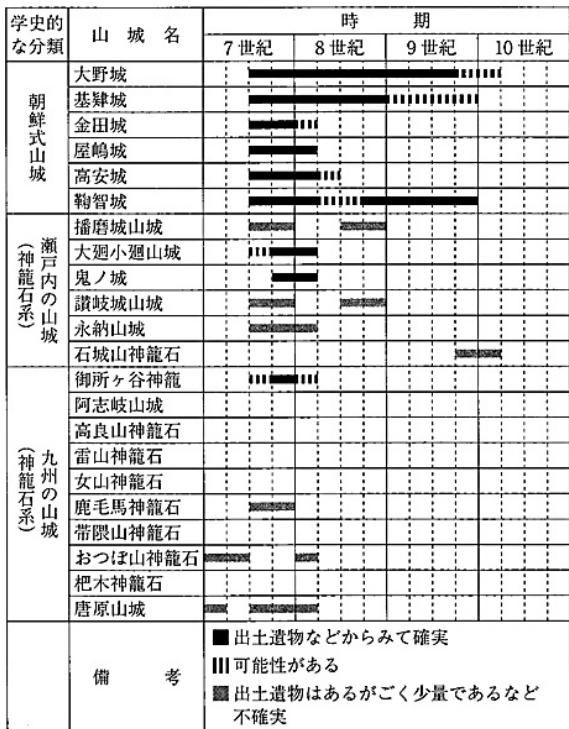


表1 出土土器からみた古代山城の時期消長表

※赤司善彦 2016「古代山城研究の現状と課題」

『月刊文化財』631号より

三〇〇年余りにわたって存続をしたということと、当初の「防衛的機能」から「倉庫的機能」、それから「役所的機能」へと徐々に変化をしていったということが言えると思っています。

おわりに

これまでの34次にわたる発掘調査の成果をもとに、鞠智城では歴史公園として整備を進めていま

す。八角形鼓楼、それから米倉、兵舎と、武器庫、四棟の復元建物を公園内で見ることができます。合わせて、ガイダンス施設として温故創生館を併設しており、そこでは「鞠智城の歴史」について分かり易く展示・解説をしています。まだ、お越しになつたことがない方、興味のある方は、是非、鞠智城に足を運んでいただいて、実際の鞠智城を体感していただければと思います。

また、今年が八年目になりますが「若手研究者育成事業」という取組みを熊本県ではやっています。

毎年四～五名の若手研究者に鞠智城に関する特別研究に研究助成を行つて、研究を進めているところです。文献史学、それから考古学を研究されている若手の方にお声かけをいただいて、来年度以降、是非ご応募いただければと思います。一緒に鞠智城を研究していけばと思いますのでどうぞよろしくお願ひいたします。

長くなりましたが、静聴ありがとうございました。

講演①

古代の城柵と山城

講演者紹介

熊谷公男（くまがい きみお）

東北大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。宮内庁正倉院事務所技官を経て、東北学院大学文学部教授、東北学院大学東北文化研究所所長を歴任。平成二九年三月、退職。現在、東北学院大学名誉教授。専門は、日本古代史。

「古代の城柵と山城」

東北学院大学名誉教授 熊谷 公男

ただいまご紹介いただきました熊谷です。私のテーマは、いまご紹介いただいたように、「古代の城柵と山城」ということです。

はじめに

古代の城柵と山城ということですが、城柵は東北地方、それから山城は九州から瀬戸内、近畿地方にかけての西日本ということになるわけですけども、この二つを比較しなさいというのが与えられたテーマであります。実はこの両方の比較というのは、現在までそんなに行われているわけではないのですね。それには理由がありまして、城柵の遺跡、それから西日本の山城の遺跡、行ってみればすぐわかるのですが、まったく別物です。城柵の方は開けた場所にあることが多く、土墨・石墨などもほとんどみられないでの、これが城なのっていう、そういう印象をもたれる方が多いと思います。山城の方は比較的急峻な山に土墨・石墨が連なっているし、りっぱな水門もあつたりして、行けばああこれはお城だよねってすぐわかる。それぐらい違ひがある。ですから、どうやつて比較するかがむずか

しい。



それから、研究史の中でも東北の城柵に関しては、各地で発掘調査が進められて、城柵の実態というのが実は官衙、つまりお役所だとそういう認識が定着するわけです。官衙といつても例えば国ごとに置かれた国府ですね。国府の中心施設を国府といいますけれども、その国府に非常によく似た政庁が各地の城柵で確認されたんです。ですから、これはもう考古学的には官衙、お役所に決まっていると、こういうことになってきたわけです。一方、西日本の山城というのは、先ほどの村崎さんのお話でもありましたように、六六三年に白村江で負けた後に造られたということで、いつみれば対外的な防衛拠点であるという認識が一般的ですので、役所と防衛拠点をどうやって比較するのかという話なのですね。ですからほとんど比較はされてきませんでした。

ところが最近になつて、少し研究動向が変わつてきております。東北の城柵の方で申しますと、官衙、官衙といつてもやっぱり蝦夷に支配を及ぼすために置かれたというのが東北の城柵の設置の重要な要因です。それは、もう一方で軍事的性格ももつているのだという認識が改めて再確認されるようになつて、城柵の軍事的意義の重要性を認めるということが、現在ではほぼ共通認識になつてているのですね。官衙であると同時に軍事的拠点もあるというのが、いまの東北城柵研究のもつとも一般的

な理解ではないかと思います。

一方、西日本の古代山城に関しては、近年までに発掘調査も進んできて、今回の鞠智城がいちばんの典型ですけれども、いろんなことがわかつてきまして、山城といつても単なる軍事拠点ではないと、いろんな建物が建てられていました。鼓楼も見つかったということで今日こう君も登場したわけですよね。ただの防衛拠点ではないということがはつきりしてきて、地域支配にもいろいろ関わっていたのではないかというようなことも考えられるようになつてきて、東北の城柵と西日本の山城が重なる部分が出てきたというのが、近年の研究動向ではないかと思います。それで、比較の糸口がだんだん出てきたのかなというふうに思つております。

いままであまり比較は行われてなかつたということを申しましたが、阿部義平さんとか、近畿大学の鈴木拓也さんなんかが、近年、先駆的な比較研究を行っています。今回私、初めて与えられたテーマで、もちろん興味はあつたのですが本格的に考えたことはありませんでしたので、このお二人の研究はいろいろと参考にさせていただきました。

一 施設としてのキ（城・柵）

これから古代の城柵、東北の城柵と西日本の山城を比較してみようということなのですが、先ほども申しましたように遺跡としては全く別物といつていいくと思うのですね。それをどうやって比較して

いかということですけれども、私は文献史学、古代史が専門ですので文献史学の立場から考えてみようということで、とっかかりにしたのが古代山城もそれから東北地方の城柵も「○○城」というふうに呼ばれる。そういう共通点がまずあるわけですね。ただし、東北地方の城柵は八世紀の半ばぐらいまでは「○○城」と書いた例はほとんどなくて、多賀城も含めてなのですが、「○○柵」というふうに「柵」という字を使っていた時期が最初の方にあるわけです（表2）。ですけども古代で「城」という字も「柵」という字も訓で読めば同じく「キ」です。「城」という字はもともと「しろ」とは決して読みませんでした。いまは普通に「しろ」といつているんですけども、「しろ」と読むようになったのは、おそらく平安時代の初め以降なのですね。ですから奈良時代までは「城」も「柵」も訓で読めば「キ」なんです。つまり同じ読み方です。その上、東北地方の城柵というのはいまお話したように、最初は「柵」でしたけれど、あとは多くの城柵、まあ例外もありますが、ほとんどの城柵が「○○城」と呼ばれるようになります。そうすると西日本の山城とこれは同じ名称ですよね。一見してまったく別物の施設だと思われるものが、古代ではどちらも「キ」と呼ばれ「○○城」と書かれることがあつたと、これをどう考えるかということからですね、お話をさせていただきたいと思います。

「施設としてのキ（城・柵）」とレジュメに書いてありますが、いまお話したことがこの表題の意味です。それで、古代の文献を見ていきますと『日本書紀』とか『風土記』には、これは伝説的な記事

なのですが、さまざまに「キ」が造られたという話がでてきます。例えば稲を積んで稲城を造った（史料1）とか、あるいは『常陸国風土記』ですと、茨いばらをもつて城を築いたというような、これがいまの茨城県の茨城の地名起源の説話なのですが、そういう話もありますし（史料2）、あるいは『陸奥国風土記』の逸文には、石を積んで石城いわきを造つたとあります。この石城は、今の福島県のいわき市との地名起源の説話なんですね。ですからこういうふうに、どこまで事実かはわかりませんが、少なくとも古代の人の考へでは防御を目的として稲を積んだり、それから茨を積んだり、あるいは石を積んだりして造つた施設を「〇〇のキ」と呼ぶと、こういう考え方なのです。

それから、次第に事実

を記録したと思われる史料が登場してきますけれ

（史料1） 時に狭穂彦さほひこ……稲を積みて城きに作る。其の堅きこと破るべくもあらず。
此これを稻城いなきと謂う。 （『日本書紀』垂仁天皇五年十月己卯朔条）

ども、例えば「大化革新」の直前、蘇我蝦夷あねびが畝傍うねび便すなわち茨城うばらきと謂う。 （『常陸国風土記』茨城郡条）

山の東に家を建てて「池

を穿うがちて城きとなし」と、

どういう形の池なのかわかりませんが、バナナみ

（史料3） 凡そ兵庫かき、及筑紫の城、を越えたらば、徒一年。《陸奥・越後・出羽等の柵さも亦た同じ。》……（衛禁律24越垣及城条、《》は本注。）

たいな格好をしていたのかもしないですし、あるいはリング状の堀みたいな池だったのかもしませんが、ともかく池を掘つて、まわりにめぐらして「城」としたということが出てきます（『日本書紀』皇極三（六四四）年一一月条）。つまり、池をめぐらして防御をかためたということです。あるいは、改新のクーデターの直後、中大兄皇子とか中臣鎌足は、蘇我氏の反撃を警戒して法興寺（飛鳥寺）に入つて「城」として備えた（『日本書紀』皇極四（六四五）六月戊申条）という話もみえます。飛鳥寺を城としたというのです。古代寺院というのはまわりを築地壝で囲つているわけです。築地壝というのは壝ではありますけど、ひじょうに頑丈で高さも三～四メートルあるものでして、その特定の場所に門が開くわけです。ですから、その中を臨時の軍營にすれば、防御に適していると、そういうことじやないかと思うのです。つまり、もともとお寺であるところの防備を固めると「キ」となるというわけです。ですから、まわりを何かで、例えば築地壝みたいなものでかこつていてるだけでは「キ」ではない。そこに兵士が入つて防備を固めれば「キ」になると、こういう意味だと思うのです。で、その直後のところですが、渟足柵とか磐舟柵（いわふね）というのが、これは越（こゝ）の国ですから北陸地方、現在の新潟県のあたりなのですけれども、そういう柵を造つた（図1）。この柵も先ほどいましたように「キ」ですから、東北地方の城柵の初見です。大化改新の直後のことです。

一方、白村江の戦いの後、先ほどのお話にも出てきましたように、天智四年（六六五）、白村江が六六三年ですかから二年後に、大野城とか櫟（き）（基肄（きしり））城を築いた。おそらく、そのころ鞠智城も築かれ

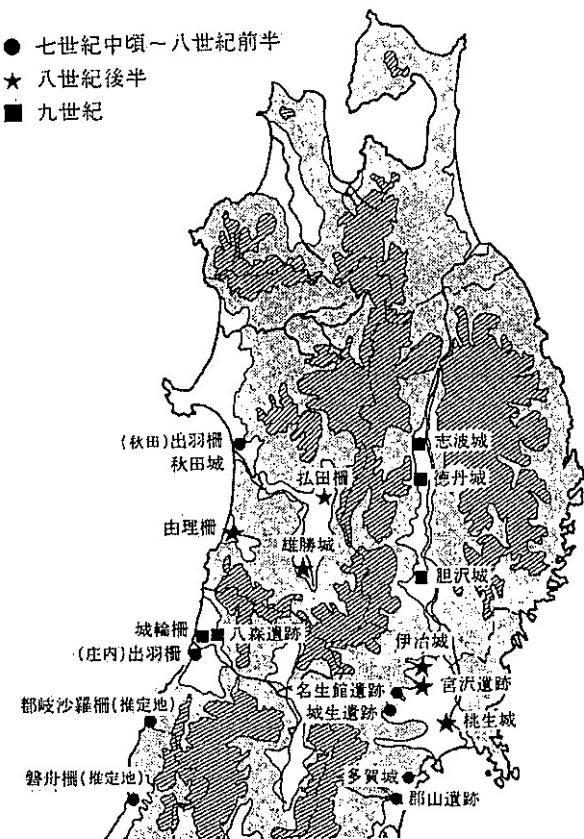


図1 古代城柵分布図（進藤 1994）

たのだろうとこういうことで
すね。ですから、東北地方の
城柵から少し遅れて西日本に
山城が造られるわけです。こ
れはよく知られている事実で
すけれども、六六〇年に百濟
が滅んだ後、たくさんの亡命
人が日本列島に渡つてくるわ
けですね。その中の百濟人の
貴族の中に山城を造る技術を
もつてゐる人がいて、そうい
う人たちの指導のもとにこう
いった大野城とか櫟城が造ら
れたという記事が『日本書
紀』にありますので「朝鮮式
山城」と呼ぶこともあるわけ

ですが、ともかくそういう契機で西日本の山城が造られはじめるということになってしまいます。

このように見えてくると、結局、古代の「キ」は「城」と書いたり「柵」と書いたりしますけれども、これは、稻城とか茨城とか石城なんていうのも出てきましたけれども、いろいろなもので防御施設を外側にめぐらす、その防御施設自体をまず「キ」と呼ぶのですね。例えば土壘であれば土壘自体を「キ」と呼ぶことがあります。あるいは東北地方の城柵ですと初期は木柵、やがて古代寺院と同じような築地が主体になるのですが、木柵とか築地自体も「キ」と呼ぶことがありました。それを示しているのが「衛禁律」^{えごんりつ}という律の第24条です。これを見ると、「兵庫の垣^{かき}、筑紫の城^きを越えたならば徒一年」（史料3）と、柵を無断で不法に越えると懲役刑に処せられるということになっていたわけです。そのあとに注がありますが、これは本注です。律令にもともとついていた注という意味です。で、陸奥・越後では「……等の柵^{さき}」とありますが、これもまた同じで、ここを越えた場合も同罪だと。つまり、ここからはつきりわかるのは、こういう防御施設そのものを「キ」と呼んでいること、それを越えると処罰されたことですね。ですから「キ」の本来の語義は、防御施設そのものなのですね。ところが、やがてといいますか、ほぼ同時かもしれませんけれども、防御施設で囲まれた全体をも「キ」というようになります。ですから、多賀城といった場合、防御施設、これは築地と一部木柵で囲っているのですけれども、その囲まれた全体が多賀の「キ」もあるわけです。

このように古代の山城と城柵を比較する場合、両方同じように「キ」と呼ばれたということですので、

〈城柵〉

名 称	設置(初見)時期	所 在 地	出典、備 考
1 淳足柵	大化2(646)年	新潟市カ 新潟県村上市カ	書紀、遺跡未発見。
2 磐舟柵	大化4(648)年	不明	書紀、遺跡未発見。
3 都岐沙羅柵	齊明天保4(658)年	山形県庄内地方カ	書紀、磐舟柵の別称説あり。
4 出羽柵	和銅2(709)年(初見)	宮城県多賀城市	山形県庄内地方カ 縦紀、遺跡未発見。天平5年12月に秋田村富清水岡に移転。
5 多賀城	神龜1(724)年	宮城県大崎市	天平宝字6年12月1日付多賀城碑、統紀天平9年4月戊午条に多賀柵とみえる。
6 玉造柵	天平9(737)年(初見)	宮城県大崎市	統紀、名生館遺跡に比定。玉作城とも表記。
7 新田柵	天平9(737)年(初見)	宮城県大崎市	統紀
8 牡鹿柵	天平9(737)年(初見)	宮城県東公島市	統紀、赤井遺跡に比定。
9 色麻柵	天平9(737)年(初見)	宮城県加美町カ	統紀、城生柵説が有力。
10 桃生城	天平3(759)年	宮城県石巻市	統紀、桃生柵とも表記。
11 雄勝城	天平宝字3(759)年	秋田県横手市カ	統紀、小勝柵とも表記。延暦21(802)年ごろ、大仙市払田柵跡に移転か。
12 秋田城	天平宝字4(760)年(初見)	秋田市	天平宝字4年3月19日付丸部人解(阿支太城)、このころ出羽柵を改稱。
13 伊治城	神護景雲1(767)年	宮城県要原市	統紀、道鳴三山が中心になって30日足らずで完成。
14 覚鑑城	宝龟11(780)年	不明	統紀、覚鑑柵とも表記。計画の直後に伊治些麻呂の乱勃発、造當中止か。
15 由理柵	宝龟11(780)年(初見)	秋田県由利本荘市カ	統紀、遺跡未発見。
16 大室柵	宝龟11(780)年(初見)	山形県尾花沢市カ	統紀、遺跡未発見。
17 玉造塞	延暦8(789)年(初見)	宮城県大崎市カ	統紀、宮沢遺跡説が有力
18 胆沢城	延暦21(802)年	岩手県奥州市	紀略
19 志波城	延暦22(803)年	岩手県盛岡市	弘仁3年3月ごろ(鈴木拓也説)に徳丹城へ移転。
20 中山柵	延暦23(804)年	宮城県登米市カ	後紀、遺跡未発見。陸奥国小田郡所在。
21 徳丹城	弘仁5(814)年(初見)	岩手県矢巾町	後紀、弘仁3年(812)造営。

表2 文献にみえる城柵一覧

〈山城〉

名 称	設置(初見)時期	所 在 地	出典、備 考
A 大野城	天智4(665)年	福岡県太宰府市・大野城市ほか 佐賀県基山町・福岡県筑紫野市	書紀、櫛城とともに百濟亡命貴族の憚れ福留らが築城。
B 樟城	天智4(665)年	不明	書紀、のちに基津城と表記。
C 長門国の城	天智4(665)年	長崎県対馬市	書紀、百濟亡命貴族の答体春初を長門に派遣して築城、山城名・遺跡は不詳。
D 金田城	天智6(667)年	香川県高松市	書紀、天智3(664)年に吉岐・筑紫とともに防(さきもり)と烽を置く。
E 屋鳴城	天智6(667)年	奈良県平群町ほか	書紀、大宝元(701)年廃城、倉屋・収納物を大倭・河内2国に移す。
F 高安城	天智6(667)年	滋賀県高島市カ	書紀、遺跡未発見。壬申の乱で大海人方の羽田矢国らが攻略した。
G 三尾城	天武1(672)年(初見)	熊本県山鹿市、菊池市	統紀、菊池城とも表記。大野城・基肄城と同時築城か。
H 鞠智城	文武2(638)年初見	福岡市カ	統紀、遺跡未発見。このとき大宰府が三野・稻積二城の修理を命じられている。
I 三野城	文武3年(639)(初見)	福岡県糸島市カ	統紀、
J 稲積城	文武3年(639)(初見)	広島県福山市カ	「備後国安那郡茨城・葦田郡常城を停む」とある。
K 茨城	養老3年(719)(初見)	広島県福山市カ	統紀、遺跡未発見。このとき「備後国安那郡茨城・葦田郡常城を停む」とある。
L 常城	養老3年(719)(初見)	福岡県糸島市	統紀、
M 怡土城	天平勝宝8(756)歳	福岡市カ	このとき吉備真備が築城を専当して造営開始、神護景雲2(763)年に完成。
N 大津城	宝龜3(772)年初見)	福岡市カ	統紀、遺跡未発見。このとき筑紫當大津城監を廢止。

表 1 文献にみえる山城一覧

まず「キ」の意味を正確に理解しておく必要があるのではないかということで、この「キ」の語義からはじまって、どういう用法があつたかということをお話してきました。それから、先ほどの衛禁律（史料3）で面白いのは、筑紫の「城」に対して陸奥・越後では「柵」とあるのですね。この律とは養老律のことですので、養老律の段階では法制的に「城」と「柵」が明確に区別されていたことになります。

これについては、実例を見ても同様の区別があつたことがわかります。表1・2はあくまで文献に出てくる山城・城柵の一覧表です。文献に出てこない山城、城柵というのも結構あるのですね。そこで、出てくるもので見ていきますと、表1が山城です。AからNまでありますが、MとかNというのは奈良時代になつてから造られたものです。ですからしまでが、白村江後の七世紀代に造られた山城と考えられるものですけれども、すべて「城」ですね。一方、表2の城柵の方を見ていただきますと、渟足柵・磐舟柵からはじまって、最初に「城」と出てくるのは多賀城なのですけれども、これは備考の方を見ていただくとわかりますが、この多賀城が最初に文献史料に出てくるのは『続日本紀』の天平九年（七三七）です。そこでは「多賀柵」と書いてあります。最初に出てくるのは多賀柵なのですね。天平宝字六年（七六二）に建てられた「多賀城碑」という石碑が、今も現地に残っているのですが、その石碑に神亀元年（七二四）に大野東人あづまひとという人物が「多賀城」を創建したということが書いてあります。そこでは「多賀城」になつてているのですけど、これはあくまで七六二年の時点の呼び

方です。ですから、それ以前の七三七年の時点では、まだ「多賀柵」と記していたのです。『続日本紀』の同じ記事に出てくる城柵がほかに四つほどあるのですが、すべて「柵」なのですね。^{たまつくり}玉造柵、^{にった}新田柵、^{おしかま}牡鹿柵、^{しかま}色麻柵、全部「柵」ですね。これ以前には「城」と書いてあるものは確認できません。少なくとも正史のレベルでは確認できません。ですから本来、東北の城柵は「柵」と表記されていたんですけども、この多賀城碑の時点では少なくとも多賀城はすでに「多賀柵」じゃなくて「多賀城」と書かれるようになっているわけです。

それから多賀城碑の少し前、三年ほど前なのですが、天平宝字三年に桃生城^{ものう}という城柵と雄勝城^{おがち}という城柵が同時に造られます。これは『続日本紀』にその経緯がだいたい書いてあるのですけれども、おもしろいことに『続日本紀』の記事で同じ城柵を指しているのに、桃生柵と書いたり、桃生城と書いたりしています。同じように雄勝（小勝）柵と書いてある場合もあれば、雄勝城と書く場合もあって、その時点で両方混ざって出てくるのです。ですから、おそらく天平宝字年間ぐらいまでは東北地方の城柵は公的には「柵」としか表記してこなかつた。律令でもはつきり法制的に区別していたものを、このころから「城」とも呼ぶようになつてくる。そういう流れがたどれます。ですからこれ以降は、多くの東北地方の城柵は「○○城」と呼ばれるのですが、その中に若干の例外があります。例えば14の覚鰲城^{かくべつ}は「覚鰲柵」と書く場合もあります。それから15の由理柵^{ゆり}と20の中山柵です。由理柵も中山柵も一回しか出てこないのですが、これは「柵」です。奈良時代半ば以降でも「柵」、あるいは

16、17のように「塞」という字を使って、「大室塞」とか「玉造塞」と書く城柵もあります。ですから多様化はしていくのですが、基本はやっぱり城なのですね。大雑把に言えば、奈良時代半ばを境にして東北地方の城柵は「柵」から「城」へという変遷がたどれます。

それに対して、西日本の山城は一貫して城であるという違いがあるわけです。これはなぜかということ自体が、まず問題になるのですが、よくわからない点もあるのですけれども、基本的には東北地方の城柵が初期に「柵」と呼ばれたのは、文字通り木柵でまわりを囲うのが普通だったからと、そう考えるべきじゃないかなと思っています。いちばんいい例が、仙台市に郡山遺跡という初期の城柵の遺跡がありまして、これは城柵遺跡としてもかなり大きい方でして、おそらく多賀城以前の陸奥の国府が置かれたところと考えられています。陸奥国府である多賀城は七一二四年に造られているわけです。ですからそれ以前は多賀城以外のところに陸奥の国府があつたということにならざるを得ないのです。が、それにあたるのが郡山遺跡だらうと考えられているのです。その郡山遺跡の外堀い、外郭の施設が丸太材をビシッときまなく立て並べる形、考古学的には材木塀ということが多いですけれども、要するに柵なのですね。柵と呼べば、城柵の呼び方とすぐ結びつくと思うのですけど、材木塀といわれてもたぶん、皆さんいまいちピンとこないのではないかと思います。私も実はこれまで考古学の人にならって材木塀という言葉を使ってきましたが、どうもしつくりしません。別にここで考古学に反旗を翻そそうということはさらさらないのでですが、文献との関連を考えるうえでも、木柵とか柵木、

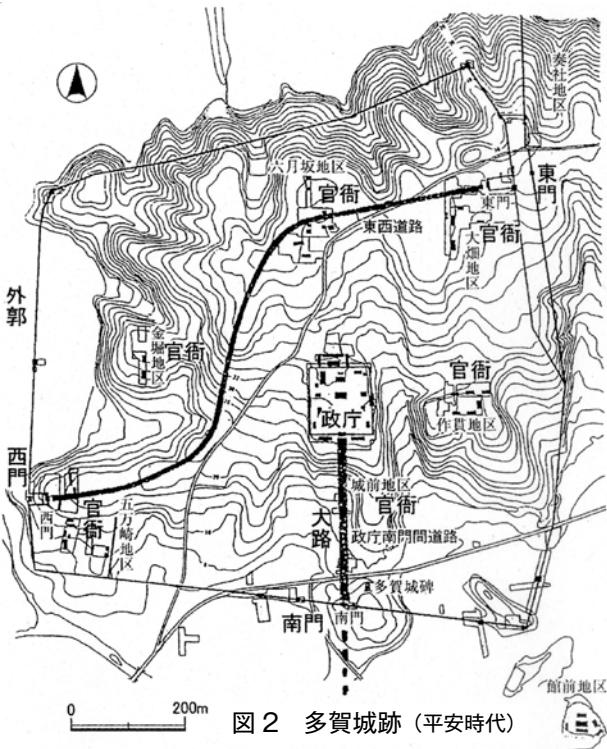


図2 多賀城跡（平安時代）

ただ柵木といつてしまふと柵に使つた木そのものという意味が強いです。やはり、柵とか、ただ柵といえばいいと思うのですね。ですから、ここでは「木柵」というふうに呼びたいと思います。

それで、東北地方の城柵は当初はそういう木柵を立て並べた形の外郭施設、防御施設をともなつていていたのですが、一方、西日本の城柵は基本的には土塁なのです。で、谷間なんかに水門を造つたり、あるいは土塁を造るのがむずかしいところには、石を積むわけです。要するに石垣なのですが、古代の場合は主に土塁に対して石塁というふうに呼んでいます。この土塁と石塁が基本です。くどいようですが東北地方の城柵は木柵か築地塀で

す。後には築地塀が主体になつて多賀城なんかが典型なのですが、低湿地のところだけ木柵にすると
いうような形をとることもあります（図2）。このあと城柵と山城の立地も比較したいと思いますが、
多賀城は低丘陵地に築かれています。外郭は基本的には築地塀なのですが、西辺の大半は低
湿地でいまは田んぼになっています。この部分は築地を造りにくいということもあって木柵にしてい
るのですね。

こういうふうに木柵だつたり築地だつたりというのが東北地方の城柵の基本パターンですから、そ
れから考えていけば柵から城になるというのは木柵だつたものが築地になつていくということなのか
なども思うのですが、どうもそう単純ではなくて平安時代になつてから逆に築地塀から木柵、材木塀
に変わっている例もありますので、どうも柵から城へとなぜ呼称が変化するのかというのを、まだ検
討をする必要があると思つております。

いずれにしましても、城柵と山城は列島の東西に遠く離れて分布していますし、遺跡としても私た
ちにはまったくの別物にしかみえないのですが、それを古代の人はともに「キ」（柵・城）とよんで
いたわけです。それはなぜかという問題は、これまであまり意識されてこなかつたように思います
が、それはどちらも防御機能をもつ「キ」でかこまれた施設という共通点をもつていてからと考えること
ができると思います。城柵・山城の城柵・山城たるゆえんは、防御施設としての「キ」の存在にある
といつて過言ではないでしようか。そしてこのことはこれから城柵論、さらには城柵と山城

を包括した形での古代城郭論を展開していこうとしたばあいにも重要な論点になるのではないかと考
えております。

二 施設としての城柵と山城の比較

「城（キ）」のところでちよつと時間をとつてしましましたので、いそいでつきの施設としての城柵
と山城の比較というところにいきたいと思います。

施設としての城柵と山城の比較で注目したい点は立地です。東北の城柵と西日本の山城では、何度
かお話しましたが、まったく別物といっていいぐらい施設としては違うのです。とくに違うのは立地
だと思います。これは、その施設の性格、機能を考える場合、重要な論点だと思いますので、ここを
まず比較してみたいのですけれども、これに関しては表があります。表3と表4を見てもらいます
と、これは別々の人が作った表ですので、表の項目自体違いますし、簡単に比較できないのですけれ
ども、何がわかれればいいかというと、表1を見てもらいますと立地という項目がありますが、沖積地
か低丘陵のどちらかなのです。沖積地というのは要するに低地です。ですから平坦なところに作った
城柵というのが実はかなりあります。多賀城なんかは低丘陵の部類に入るわけですけれども、丘陵地
ではあるのですが、先ほど見ましたように、とくに西辺はもうまつたくの低湿地です。南辺なども含
めると城外と高低差のない低地のところがかなりあるわけです。ですから、そういうところも取り込
んでいる。ほとんどの城柵がそうです。低丘陵といつても一定部分は城外と比高差がない。それが普

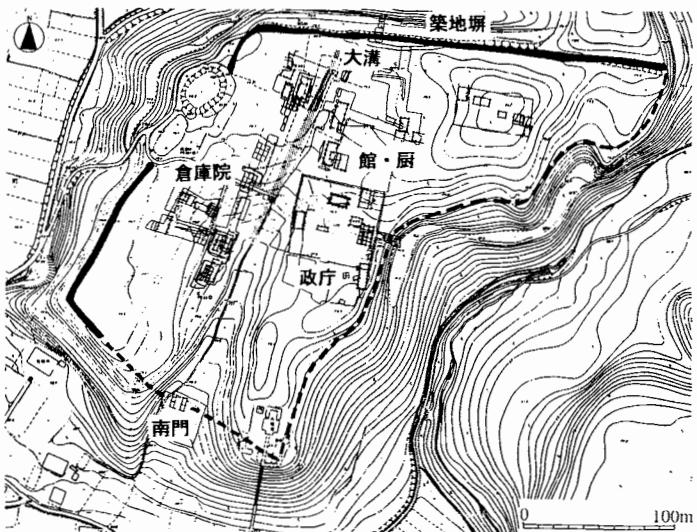


図3 宮城県東山遺跡全体図（進藤編 2010）

通です。東北の城柵のなかで、おそらく唯一、西日本の中城に立地がやや近いのではないかと思われるものがあります。宮城県加美町の東山遺跡がそれで、遺跡の全体図（図3）を載せておきましたのでご覧ください。ここは低丘陵ではあるのですが、低丘陵の一一番上の部分ですね、整地もかなりしているようですがれども、比較的平坦になつていまして、そこに官衙的な施設を造つてまわりを築地堀で囲つています。真ん中には谷も走つていて。そういう遺跡でして、これはキ（外郭）で囲まれていてことからみて城柵といつていいと思うのですが、中心施設としての政府のほかに倉庫群もあります。郡家には正倉院と呼ばれるような倉庫群がたいてい附属しているわけです。その要素も満たしているので、この東山遺跡というのは郡家を築地で囲つたいわば郡家タイプの城柵ではないかというふうに近年考えられていま

遺跡名	外郭区画施設		政 府	立地	存続年代
	規模(坪)	施設類			
那山遺跡Ⅱ期	四〇〇四方	材木列、礎	?	正殿、附殿、後殿、南門、北門、東西廄、南門前殿など	正統、初期
多賀城跡	約八七〇四万	不整形、繩張	一〇〇×一六六	低丘陵	7C末～8C初
坂牛遺跡	三五五四方	無地、邊	?	?	
城生城跡	約八〇〇四方	不整形	?	?	
私田柵遺跡	一二五〇×七五〇	土塁、築地	七二×七、一?	?	
秋田城跡	材木列	?	?	?	
伊治城跡	上葺、牆	?	?	?	
宮殿遺跡	一四〇〇×八五〇 不整形	?	?	?	
祖沢城跡	六六〇四方	築地、溝	六五×七九	正殿、東西廄	8C前半～9C
志波城跡	八四〇四方	築地、溝	九四×九、四?	東西北方建物	
徳舟城	二三三四方	材木列	?	?	
城輪柵跡	一一〇〇四方	材木列	?	?	
柱列早築地	七五×七五	?	?	?	
南門前殿	後殿、四半の門	?	?	?	
神積地	始積地	沖積地	低丘陵	低丘陵	
水	9C前半～11C前半	9C後半～10C	8C末～10C	8C後半～9C初	

表3 主要城柵の構造・規模・立地上の特徴 (進藤 1994)

山城名	所在地	周長 (km)	標高 (m)	外郭編構造				城門		類型
				土塁 石築	星形 態	折曲	版築	水門	城門	
1 檜唐坡山	兵庫県柏原市・新宮町	1.8	458	350 石?	内托	折?	○?	石壘	○?	凹型 遠地1外郭1-b
2 大泡小泡	南山県朝山市・瀬戸町	3.4	198	64 土	内托	折	○	石壘	○	遠地1外郭1-b
3 鬼城山	南山県絶杜市	2.8	403	230 土・石	夾築	折	○	石壘	○	凹○型 遠地1外郭1-a
4 讀岐城山	香川県坂出市・坂山町	6.3	462	270 石・土	内托	折	○	石壘	○	凹型 遠地1外郭1-b
5 永納山	愛媛県東予市	2.5	128	15 土	内托	折	○			遠地1外郭1-b
6 石城山	山口県大和町・田布施町	2.5	350	230 土	内托	折	○	石壘	○	凹型 遠地1外郭1-c
7 御所ヶ谷	福岡県行橋市・勝山町・尾川町	2.9	247	75 土	夾築	折?	○	石壘	○	遠地1外郭1-a
8 宮地岳	福岡県筑紫野市	2.8	339	98 土	内托	折	○?	石壘	○?	遠地1外郭1-c
9 高良山	福岡県久留米市	2.7	252	35 土	内托	曲	○?	石壘?		遠地1外郭2
10 鷺山	福岡県前原市	2.3	483	300 土壘なし (内托)	折			石壘		遠地1外郭2
11 女山	福岡県須恵町	3.0	202	4 土	内托	曲	○	石壘		遠地2外郭2
12 鹿毛馬	福岡県須田町	2.2	70	0 土	内托	曲	○	土壘		遠地2外郭2
13 菊隈山	佐賀県佐賀市	2.4	174	9 土	内托	曲	○	土壘?	○?	遠地2外郭2
14 おつぼ山	佐賀県武雄市	1.9	66	0 土	内托	曲	○	低石壘	○	遠地2外郭2
15 杣木	福岡県杷木町	2.3	130	8 土壘なし (内托)	曲	○?		土壘?		遠地2外郭2
16 唐原	福岡県大平村	1.7	73	0 土壘なし (内托)	曲?			土壘		遠地2外郭2
A 大野城	福岡県太宰府市・宇美町	6.5	410	140 土・石	夾築	折?	○	石壘	○	○型 遠地1外郭1-a
B 喜跡城	佐賀県基山町	4.4	416	130 土	夾築	○?		石壘	○	○型 遠地1外郭1-a
C 金田城	長崎県美津島町	2.8	276	27 石	夾築	折?		石壘	○	○型 遠地1外郭1-a
D 尾鷲城	香川県高松市	4.0	292	260 石	内托	折?			○	遠地1外郭1-b
E 高安城	大阪府八尾市・奈良県平群町	488		土?	内托?					遠地1外郭1-b
F 鞠智城	熊本県菊池町・菊池市	3.7	169	45 土	夾築?	○?		○	○	○型 遠地1外郭1-b

図4 古代山城構造比較一覧（向井2004、一部割愛）

して、私もその考え方には賛成です。この東山遺跡の場合、まわりがみんな等高線が混んでいますよね。だいたい城外の平坦面から見て二〇メートルくらいの高低差があるということなのです。これがおそらく城柵の中でいちばん城外との比高差がある遺跡ではないかなというふうに思います。

一方、表3を見ていただきますと、これは向井一雄さんが作られた表を拝借したのですけれども、いちばん右側の欄に類型というのがあって、そこに選地1、選地2という区別があります。この選地1の方が急峻な山に造られた山城、それから選地2というのが比較的なだらかな山といいますか、丘陵といいますか、そういうところに造られた山城ということで分類されているのですけれども、多くはこの選地1の方なのですが、向井さんの定義では比高差が二〇メートル以上を選地1の急峻な山城、「険山城」というふうに呼ばれていました。それからそれに対して緩やかなところに造られた山城が「緩山城」、それがここでいう選地2とこういうことになると思います。その境が要するに比高差が三〇メートルあるかないかということのようなのですけれども、仮にこれを適用すると、城柵のなかでもっとも比高差のあると思われる先ほどの東山遺跡でさえも比高差二〇メートル程度です。ですから東北の城柵というのは向井さんのおっしゃる「険山城」は一つもなく、「緩山城」に分類できるのが少しあって、大半は「緩山城」とすらもいいがたいのが実態だと思います。それくらい立地に差があるということなんですね。

さらにそれを裏付けるような事実がほかにもいくつあります。例えば外郭を比較すると、これは

先ほどちよつとお話ししたように、山城は土墨が基本で一部に石墨が使われている。それに対して城柵の方は築地か木柵が基本で、奈良時代の後半になつて蝦夷との対立が激しくなるのですけれども、その時期にいまの宮城県域に新たに造られた城柵（桃生城・伊治城）、それから前からあつた城柵の一部（東山遺跡群（図4）・城生柵跡など）に土墨をめぐらします。防御施設として城柵で土墨が使われるのは、この時期だけでごくごく限定的です。だから、城柵はまれに土墨が使われるが、ほとんどは築地か木柵であるといえます。山城が土墨が基本なのに対して、これだけの違いがあるということです。つまり、山城の方が格段に防御性の高いことは誰が見てもあきらかであると思います。

最後に山城と城柵の官衙施設、建物を簡単に

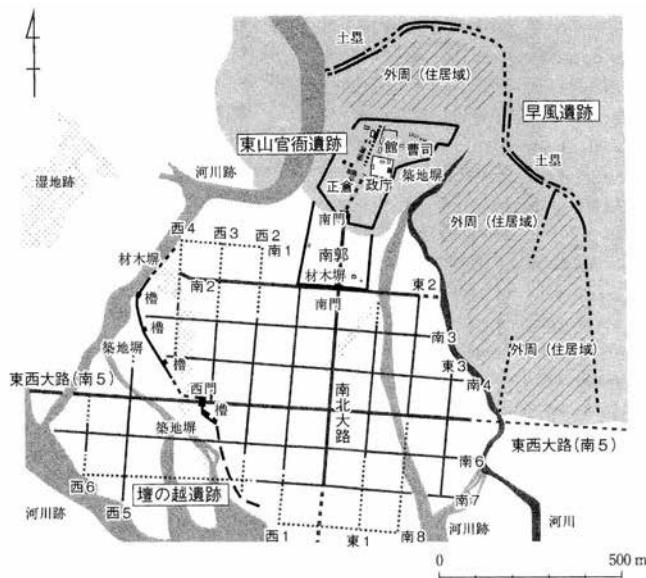


図4 東山遺跡全体図（村田 2015）

比較してみたいと思います。城柵は先ほどの多賀城（図2）、これはいつてみれば立派な城柵、整った城柵ということなのですけれども、中心に政庁があつてまわりを築地か木柵で囲っている。外郭施設です。その間はどうなつていたのかといいますと、この平面図にも書いてありますように、何カ所かにわかつて実務的な官衙、例えば帳簿を付けるとか、公文書を起草するとか、あるいはいろんな物品を作る工房的なものも結構あつたようですけれども、そういうた官衙群が間に建ち並んでいます。地方官衙の政庁というのはよく「コの字」形といいますが、多賀城の政庁の拡大図が図5にありますけれども、東西に長い正殿が中央にあつて、両脇に脇殿と呼ばれる南北棟の殿舎がある、これが基本なのですね。正殿と脇殿のほかにいくつかの建物がつく場合もある。その全体を築地塀で囲うといいう

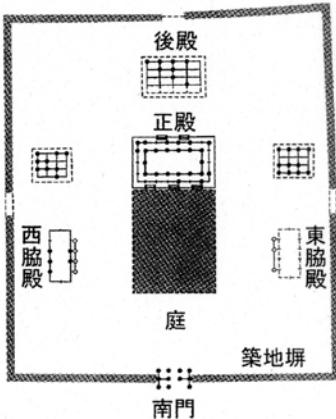


図5 多賀城跡の政庁（平安時代初頭）

ようなのが基本パターンとして、ここは政務も執られたかもしれませんけれども、いろんな儀式、古代のマツリゴト（政治）には儀式がつきものとして、いろんな儀式を行う場としても格式の高い場所、あるいは神聖視された場所といふことになるのです。この政庁を中心にして、そのまわりにいくつかの実務官衙群が配置されていて、さらにその全体を築地、木柵などの「キ」で囲つたのが東北地方の城柵の基本構造ということになると思します。

一方、山城の方ですが、こちらはかなり急峻な山、なかには緩やかなものもありますが、基本的に急峻な山を土壘、それから谷間のところは石壘などで囲います。山城の多くは奈良時代の初めぐらで、今日の村崎さんのお話でもありましたように、ほとんど廃止されてしまうのですが、大野城・基肄城・鞠智城などはその後も残るわけです。発掘調査も大野城とか鞠智城では進んでいます、いろんな建物跡が出てきますが、主体となるのは倉庫です。それから、特に鞠智城では倉庫ではない官衙的な掘立柱建物が結構な数出ているということになります。ただ、これはどうも、にわか勉強なのであまり安易なことはいえないのです、山城の中ではかなり特殊な例ではないかと思います。鞠智城は丘陵地ではあるのですが、山城の中では例外的に平坦な場所が広がっておりまして、そういうところに集中的に官衙風の掘立柱建物とか倉庫を建て並べてあるわけです。その多くは奈良時代以降で、平安時代になつてからもかなり建物が建てられているというようなお話をしました。ですから鞠智城に関しては官衙的な要素が一定程度認められるのですが、大野城とか基肄城に関しては主体となるのが倉庫群です。その管理棟みたいなものは見られますけれども、これをもつて官衙的性格を重視していくかどうかということになりますと、なお検討を要するのではないかと思います。東北古代史を研究してきた立場からお話をすれば、東北地方の城柵は多くの遺跡で政庁が確認されているなど、間違いなく官衙的な要素が強いのですが、鈴木拓也さんによれば、高所にある山城は重貨（重い物品）である稲穀の保管場所としては適していないと。わざわざもつて上がらなきやならないですかね。

鈴木さんはこの点を最大の根拠として、そういう不便なところにあえて倉庫を作つて稻穀を備蓄する目的というのはやはり有事籠城、つまり何か事があつたときに立てこもるという、万一に備えたものとして理解するのが一番いいのではないかということをいわれています。

九州歴史資料館の松川博一さんのご研究によると、西海道は一貫してほかの地域と違う軍制、軍事制度がとられていました。平安時代になつても「統領選士衛卒制」^{とうりょうようせんじえいそつ} というのが西海道だけにしかれていて、そのうちの選士などは大宰府の防備だけではなくて、山城にも配備されていたということを指摘されています。つまり山城は、平安時代になつてもやはり軍事的に重要なところという位置づけがされているわけですね。ですから基本的には鈴木拓也さんのような考え方、あるいは、この松川さんのご研究も参考にすると、高いところにわざわざ倉庫を作るというのは軍事的な意図を抜きにしては考えられないのではないか。ただし、鞠智城に関してはやはり何度もいつていますように、そういう山城の中で立地がやつぱり特殊なのですね。平坦面が広がつている。あるいは、山城の分布でいきますともつとも南ですよね。ですから、もともとの立地が想定される前線よりも遠いところという要素もあって、他の山城と同列に扱えない点があるのではないか。つまり、他の山城に比べると地域支配に関わる要素というのが一定程度あつたということがいえるのではないかと考えています。どうもご静聴ありがとうございました。

〈参考文献〉

赤司善彦 二〇一四「古代山城の倉庫群の形成について—大野城を中心に—」『東アジア古文化論攷二』中国書店

赤司善彦 二〇一六a 「古代山城研究の現状と課題」『月刊文化財』六三一

赤司善彦 二〇一六b 「鞠智城の建物景観の推移」『海と山と里の考古学』

阿部義平 二〇一五「古代の城柵跡について」『日本古代都城制と城柵の研究』吉川弘文館、初出
一九八二

狩野 久 二〇一〇「瀬戸内古代山城の時代—築造から廃止まで—」『坪井清足先生卒寿記念論文集—埋文行政と研究のはざまで—』下、坪井清足先生の卒寿をお祝いする会

亀田修一 二〇一六「西日本の古代山城」『日本古代考古学論集』同成社

熊谷公男 二〇〇四『古代の蝦夷と城柵』〈歴史文化ライブラリー〉吉川弘文館

熊谷公男 二〇〇七「城柵と城司—最近の「玉造等五柵」に関する研究を手がかりとして—」『東北学院大学東北文化研究所紀要』三九

熊谷公男 二〇〇九「城柵論の復権」『宮城考古学』一一

熊本県教育委員会 二〇一三『ここまでわかった鞠智城—調査・整備・研究のあゆみ—』

笹山晴生 二〇一〇「鞠智城と古代の西海道」『古代山城鞠智城を考える』 山川出版社

佐藤 信 二〇一四「鞠智城の歴史的位置」『鞠智城Ⅱ 論考編一』熊本県教育委員会

進藤秋輝 一九九四「古代城柵の設置とその意義」『北日本の考古学』吉川弘文館
進藤秋輝編 二〇一〇『東北の古代遺跡—城柵・官衙と寺院—』高志書院

鈴木拓也 二〇一〇「軍制史からみた古代山城」『古代文化』六一—四

鈴木拓也 二〇一一「文献史料からみた古代山城」『条里制・古代都市研究』二六

鈴木拓也 二〇一八「文献史料からみた古代山城の倉庫」『溝瀆』一六

高橋誠明 二〇〇四「東辺地域における関東系土師器の一様相と出自について」『第三三回古代史サ

マーセミナー資料集』

松川博一 二〇一八「律令制下の大宰府と古代山城」『九州歴史資料館研究論集』四三

向井一雄 二〇〇四「山城・神籠石」『古代の官衙遺跡Ⅱ 遺物・遺跡編』奈良文化財研究所

向井一雄 二〇一七『よみがえる古代山城』〈歴史文化ライブラリー〉吉川弘文館

村田晃一 二〇〇七「陸奥北辺の城柵と郡家—黒川以北十郡の城柵からみえてきたもの—」『宮城考古学』九

村田晃一 二〇一五「版図の拡大と城柵」『蝦夷と城柵の時代』〈東北の古代史3〉吉川弘文館
柳澤和明 二〇〇七「『玉造柵』から『玉造塞』への名称変更とその比定遺跡」『宮城考古学』九

講演②

都からみた古代山城と城柵

講演者紹介

國下 多美樹（くにした たみき）

龍谷大学大学院文学研究科修了。（公財）向日市埋蔵文化財センター勤務を経て、現在、龍谷大学文学部歴史学科文化遺産学専攻教授。文学博士。専門は、日本考古学。

「都からみた古代山城と城柵」

龍谷大学文学部教授 國下 多美樹

はじめに

皆さんこんにちは、龍谷大学の國下と申します。よろしくお願ひいたします。今日は、「都からみた古代山城と城柵」というテーマにさせていただきました。私が普段やっていますのは、古代の日本の都を考えるということでございますので、私の調査研究の土台の都から今日のテーマを考えていこうというようなことにさせていただいた次第でございます。

今日の話の構成は、まず、一番に日本の都、城、柵と題しまして先ほど先生の方からお話をあつたのですが、辞書的な意味でどのような定義ができるのかというお話をしまして、二つ目に都の宮垣と羅城の性格というお話をいたします。都っていうのは、いったいどのような壁で囲んでいたのかということを具体的に考えていくわけです。その中からお城を囲むということと、都を囲むっていうのは少し比較する材料を得たいなというのが、実は狙いでもあります。そして三つ目は都からみた城柵と山城です。今日は、お手元にお配りしている私の資料の中に、年表のようなものをつけてございます。表1(①)～(④)は平成二七年九月の鞠智城シンポジウムの岡田茂弘先生の講演の中から「古代日本東

西の城・柵略年表」という、まさに今日のテーマにあつた内容の表がございました。それをちょっと借用させていただいて、その中に日本の都の変遷を入れさせていただきました。少し小さい字で恐縮なのですが、これもたまに見ていただきながらお話を聞いていただけたらというふうに思います。

さて、初めなんですが、お手元の資料の内容とほぼ文面同じものが流れていきながら、また関連する図や写真が画面に出てまいりますので、お手元の資料にメモをとりながらでも結構ですのでお聞きいただけたら幸いです。

まず、古代律令国家が成立しまして展開し終焉を迎えるまでおよそ二五〇年間あります。都はその位置と形、構造が、その間変化してきたわけです。それは七世紀、王権の拠点を飛鳥の地に固定化した七世紀の終わりから八世紀にかけて、律令国家の政治体制を整えてきたわけです。そして八世紀の末、九世紀、長岡京の都、そして京都の平安京というふうに都の変遷があり、律令国家の体制の整備をしてきたのだけれど、結果的には一〇世紀には律令国家の体制は崩壊に向っていくというふうに、今、一般的に理解されているわけです。その中で都というのは「宮」と「京」という二つの空間を持つていいわけです。で、そういった空間を持つて、しかも列島の中の中央部に一つの都というものを造ってきたですから、これは東アジアの中でも、一つ特質できるよ



8月倭軍、百濟白村江で唐新羅連合軍に敗戦（書紀）					
663	天智 2	この歲剝馬・壹岐等に坊人・條を置き、筑紫に水城を築く（書紀）			
664	天智 3	天智(662-671) 8月百濟官人を派遣、長門国と筑紫國の大野・基様城を築かせる（書紀）			
665	天智 4	11月倭國高安城、諱改封置島城、対馬國金田城を築く（書紀）			
667	天智 6	2月長門に一城、筑紫に二城を築く（書紀）			
669	天智 8				
670	天智 9				
672	天武元	太宰府政行断第1期(7世紀後半～8世紀初頭) 天武(672-686)	6月壬申の乱（書紀） 7月天武軍が三尾城攻略（書紀） 飛鳥淨御原宮に遷る（書紀） 多林鳴の人々を飛鳥寺の西の楓の下で埋葬する（書紀） 難波に羅城を築く（書紀） 隼人を飛鳥寺の西の楓の下で斬立てる（書紀） 飛鳥淨御原令を施行する（書紀）	正月勝東國倭者壘郡の城養蝦夷に赴く（書紀） 門を許す（書紀）	正月勝東國倭者壘郡の城養蝦夷に赴く（書紀） 門を許す（書紀）
677	天武 6	677 天武 8	12月藤原宮遷都（書紀）	この頃仙台郡山遺跡第II期官廄造營	
679	天武 8	682 天武 11	8月高安城修造（統紀）		
689	持統 3	689 持統 3 持統(687-696)	9月高安城修造（統紀）		
694	持統 8	698 文武 2	12月大宰府に三野・稻積の二城を修させる（統紀）	2月越後・佐渡國に再び石船柵を修造させる（統紀）	2月越後・佐渡國に再び石船柵を修造させる（統紀）
699	文武 3	文武(697-707)	3月大宝律令施行（統紀） 8月高安城を廢止（統紀）	3月大宝律令施行（統紀） 8月高安城を廢止（統紀）	3月大宝律令施行（統紀） 8月高安城を廢止（統紀）
700	文武 4		3月平城京遷都（統紀）	7月出羽柵初見（統紀）	7月出羽柵初見（統紀）
701	大宝元				
709	和銅 2	元明(708-714)			
710	和銅 3	12月備後国茨城・常城廢止（統紀）			
719	養老 3	元正(716-723)	2月隼人反し大隅国守殺害（統紀）	3月大伴旅人を征隼人持節大將軍に任命（統紀）	9月隼人反し大隅国守殺害（統紀）
720	養老 4				

表 1-② 古代日本の都・城・柵年表
 (岡田茂弘 2016「古代日本東西の城・柵略年表」もとに加筆)

西暦	和暦	天皇	西南日本（出典）	主要官断 駄智城	都城・畿内（出典）	東北日本（出典）	主要官断
583	敏達12		この猿火葦北国造の子、百济達率 日羅が倭国に召れ、国内要衝に墨 筆を集く等献言（書紀）		小豐田宮に遷る（書紀）		
603	推古11	推古	(592- 628)		飛鳥岡本宮に遷る（書紀）		
630	舒明2	舒明	8	(629- 641)	岡本宮焼亡、田中宮に移る（書紀）		
636	舒明8	舒明	12		百濟宮に遷る（書紀）		
640	舒明12				乙巳の変（書紀）		
645	皇極4	皇極		(642- 644)			
645	大化元				難波長柄豊崎宮に遷る（書紀）		
646	大化2				改新の詔（書紀）		
646	大化3	孝德		(645- 654)			
647	大化3				この猿越国に浮足櫓を造り、櫛戸を 置く		
648	大化4				この猿越国に盤舟櫓を治め蝦夷に備 え、越・信濃の民を櫛戸に配置（書 紀）		
655	齊明天元				飛鳥板蓋宮焼亡、飛鳥川原宮に移る (書紀)		
656	齊明天2	齊明天		(655- 661)	後飛鳥岡本宮に垣を巡らせる（書紀） 田身嶺に垣を造る（書紀） 香山の西より石上山に至る溝を掘 り、舟で石を運んで垣を作る（書 紀）		
658	齊明天4				この猿百濟国王・妃・太子が新羅 の虜になる。國家が西北の畔りに 兵を陣し城柵を修修（書紀）		
660	齊明天6				3月安倍比羅夫が鶴田（あぎた）・ 津代を征討（書紀） この猿都候沙羅櫓造らに授位（書 紀） <仙台郡山1期官衙造営>		
					石上池のほとりに須弥山を作り、萬 横を彌むする（書紀）		

表 1-① 古代日本の都・城・柵年表
(岡田茂弘 2016「古代日本東西の城・柵略年表」もとに加筆)

789	延暦 8		6月征東特軍拒天城での敗戦を報告する (鏡記) 9月征東将軍、箭刀を追上し敗戦の 懲罰を受ける (鏡紀)	3月諸国軍・多賀城に介し賊地に入 る	
791	延暦10	桓武 (781- 805)	7月大伴弟麿呂を副使に任命 上田村麻呂 (後紀)		
794	延暦13		1月征夷大將軍(大使) 大伴弟麿に 筋刀を賜る (後紀) 6月征夷副將軍(副使) 坂上田村麻 呂以下、蠻夷征伐 (後紀) 10月平安京に遷都 (後紀)	正月坂上田村麻呂に陸奥国胆沢城造 營を命ず (紀略) 3月造志波城使坂上田村麻呂辟見 (紀略)	多賀城 政行Ⅲ 期 (789 ~869)
802	延暦21			正月隨奥國中山柵羽羽見 (後紀)	
803	延暦22-			12月隨奥國出羽接索使文室綿麻呂が 志波城遷置を建議し、許される (後 紀)	
804	延暦23			11月胆沢・徳舟の二城に構・塙を收 納 (後紀)	
811	弘仁 2	嵯峨朝 (809- 823)			
815	弘仁 5	文德明 (850- 858)	閏2月肥後國菊池城院の兵庫の 鞍掛が自鳴、6月再び自鳴、不動倉 11字が消失 (文德)		
858	天安 2			5月陸奥國大地震、各地被災、海水 多賀城下に至る (三実)	
869	貞觀 11				
870	貞觀 12	清和朝 (859- 876)	5月大野城の器仗、大宰府庫に准 じ交替検定 (三代格)		
876	貞觀 18		5月大野城衛卒40人の糧米を城庫 に納めさせる (三代格)		
878	元慶 2	陽成朝 (877- 883)	3月大野城院兵庫の戸が自鳴 (三 実)	3月出羽國夷俘反し、秋田城を焼く (三実)	多賀城 政行Ⅳ 期 (869- 889 中頃)
879	元慶 3		3月菊池城院兵庫の戸が自鳴 (三 実)	是歲守藤原保則・秋田城を復立、旧 制に倍する (保則云)	
895	寛平 5	宇多朝 (887- 896)	閏5月新羅の城、肥後國飽田郡に 襲来し民家を燒く (紀略)		
897	寛平 9			9月秋田城の甲冑自鳴 (紀略)	

表 1-④ 古代日本の都・城・柵年表
(岡田茂弘 2016 「古代日本東西の城・柵年表」もとに加筆)

表 1-③ 古代日本の都・城・柵年表
 (岡田茂弘 2016「古代日本東西の城・柵略年表」もとに加筆)

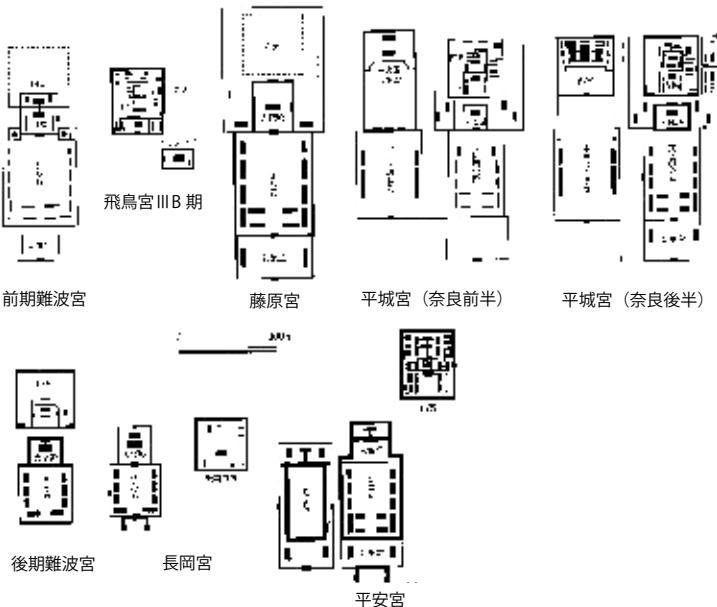


図1 日本の都における中枢施設（内裏・大極殿院・朝堂院）の変遷
(李 2018 を改変・加筆)

うな世界観というものを創つてきているといふうに言えると思います。

さて、日本の都なのですが、これはもうこれまでの研究で明らかですが、大陸の影響を非常によく受けているというふうに言われます。飛鳥時代からその影響を受けてきたわけですから、いかに我々日本という国が大陸、世界というものを意識してきたのかっていうことがよくわかります。その変化っていうものは、まさに宮の形に現れているわけですね。今日の私の資料の中にも宮殿の図が、実は並べてございます。図1です。実は、宮殿ごとに形が違うということは一目でおわかりいただけるかと思いますが、ちょっとこの話は、討論のときに使わせていただこうかなと思います。こういうふうな形で変化しているのだ

なあということでお分かりいただけると思います。基本的に規模が大きくなつて、整備され整つていくというような変化で説明できます。一方で、そういった律令国家の中央の変化とは別に、中央政権というのは各地方に対する政治を行つてきたわけです。それが今日のテーマであるところの東北の城柵であり、あるいは西日本、西南日本にある山城であるということなんだろうと思ひます。そういう意味では中央、列島の政治史というものをまさに反映しているし、外交史も反映しているというふうに見ていいんだろうと思ひます。

一 日本の都・城・柵

さて、古代の山城と城柵を都から見るとどのように見えるのかというのが私のテーマなのですね。私の報告は都における「宮垣」みやがきと「羅城」らじょうの性格をまず確認してまいります。その上で古代の山城や城柵と比較して律令国家がどのように地域支配、国家の支配というものを進めていったのかというところに結びつけていけたらというふうに思つています。まず一番、日本の都、城柵というテーマです。都とは、都城というふうな表現もあつたり、あるいは、宮都とも表現されるわけですが、いわゆる都とは天子の住居のある集落というのが原義、元々の意味であると、和訓での都は宮、つまり「宮」という字と、その場所を表す「処」がついたものであるというふうに、岸俊男先生が述べられたわけですが、これは非常に分かり易い。つまり、天子がおられるその居所とその辺りというのが都の原義で

あるということなのですね。先ほど熊谷先生が詳しい話をされたのでやりにくいのですが、これは教科書的なというか辞書的な説明なのですが、城・柵という言葉ですが、辞書で調べますと「城」というのは内側が城、外を郭というふうに呼び分けている。実は「キ」という、熊谷先生がおっしゃいましたが、都という意味もあるということなのですね。で、「城（じょう）」、「城（キ）」というのは防御のための砦というのもとの意味であると、そうすると城柵という言葉が出てきたのですが、砦と同じ意味で敵に備えるための土を重ねて造つたお城であるということです。一方、「柵」っていうのは丸太を並べたそいつた施設。矢來であるというふうに定義がされています。こんなふうに、まずは定義のところを少し見ていくわけですが、実際には、先ほど先生がおっしゃったように歴史といいう流れの中で、それぞれの持つていてる意味というのはたぶん変わっていくのだろうと思います。そのあたりは、文献史料を使いながら説明していくのが正しい方法だらうと思います。

しかし、今の原義なのですが実際には軍事的な性格つていうのが城柵にはあるわけですが、実際には政庁域というものが伴う。政庁域つていうのは先ほどお話してくださつたように儀式、儀礼を行う場でありますから、軍事的な性格ということでははつきり言つて無関係にも思えるわけですが、これが実状なのですね。それから山城というのも、今日のテーマである鞠智城のような、少し内陸に入つたところに造られて、しかも今日のテーマで議論されます官衙、お役所のような性格をもつてているということになりますと、単純に言葉だけの意味を持つてそれぞれの施設というものを見るわけには

いかないんじやないかということになります。つまり、一言でいうと都と山城、それから城柵っていうのは多様な要素を実は持っているというところが、いわば日本独自の構造というものを持っているというふうに説明できるだらうと思います。次のお話に移ります。

二 都の宮垣と羅城の性格

では、日本の古代の都の宮垣と羅城について文献史料と、少し遺跡の発掘調査の資料を見ながら、どのように今、考えられているのかということを見てまいります。『日本書紀』の天武五年（六七六年）には、「新城に都をつくらんとす」と書かれてございます。実は新しい城というふうに書かれているわけなのですが、この新城なのですが、天武一年（六八二年）にも出てまいります。たびたび登場するわけですね。そして持統五年（六九一年）、持統八年（六九四年）には「新益京」、新しく益した京と書いて「あらましのみやこ」と呼んでいますが表現されました。持統八年には、皆さんよくご存知の藤原京という表現が出てまいります。つまり、同じ場所に作られた都に対して、違った表現がされているということになります。これは議論がまだ続いているわけで決着を見てはいるわけではないのですが、一つの都に対する表現にお城という字を使っているということは、少し注意しておく必要があるだらうと思います。有力な意見だと思いますが、飛鳥にもともと宮殿がありましたから、飛鳥のすぐ北側にできた広大な都市、つまり新たに造った「城」である。新たに益した都であるとい

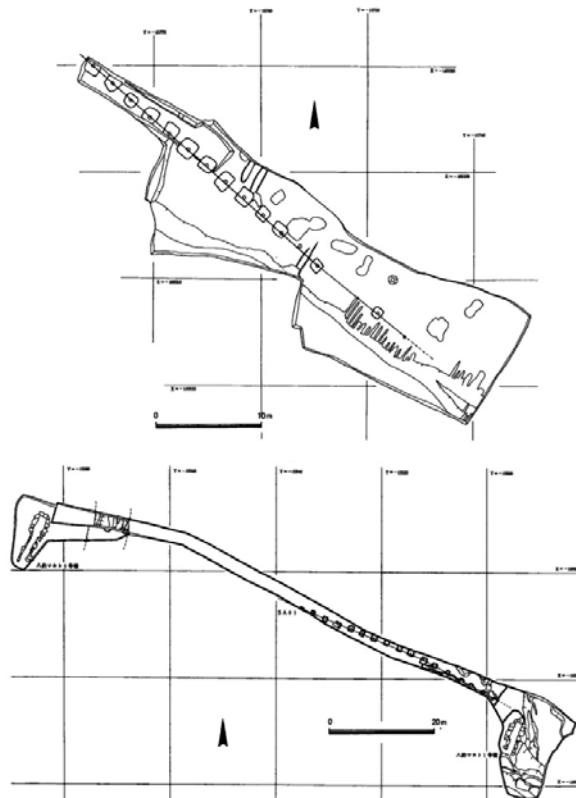


図 1 上 酒船石向イ山地区（明日香村 2000）
下 八釣マキト遺跡（明日香村 2001）

うような意味だらうと解釈される。飛鳥を中心に調査されている相原嘉之さんの意見に私は同意しております。

つまり、そのような形で都の中でも、実は「キ」という表現が出てくるということなのであります。実は、「飛鳥」と「飛鳥の周辺」の発掘調査をしていくと、まるで防御施設かなど思われるものが見つかってきたわけです。例えば、図1です。何が明らかになつたのかといいますと、柱が並んでおります。図のように一本柱塀が出てくるということがありますね。しかも、丘

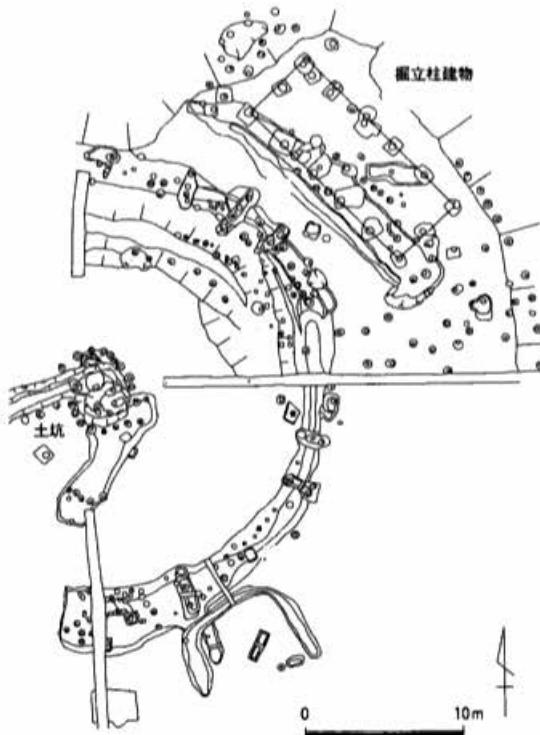


図2 森カシ谷遺跡（高取町 2003）

の上から出てくるということなのです。丘の上でこういった一本柱の屏が出てくるというのは異常ですよね。それをどう評価するかということなのです。それを評価していくのは飛鳥周辺だけじゃなくて、飛鳥から和歌山に繋がる道上ででも、高取町というところからもこのようない不思議な施設が見つかった。図2は森カシ谷遺跡です。ここで烽、つまり烽火^{とぶひ}を上げた跡だろうと思えるような遺跡が見つかっているわけです。そうしますと、飛鳥を中心とした飛鳥時代の宮殿、あるいは都を防衛す



図4 前期難波宮
(植木久『難波宮跡』2009
掲載図を再トレス)

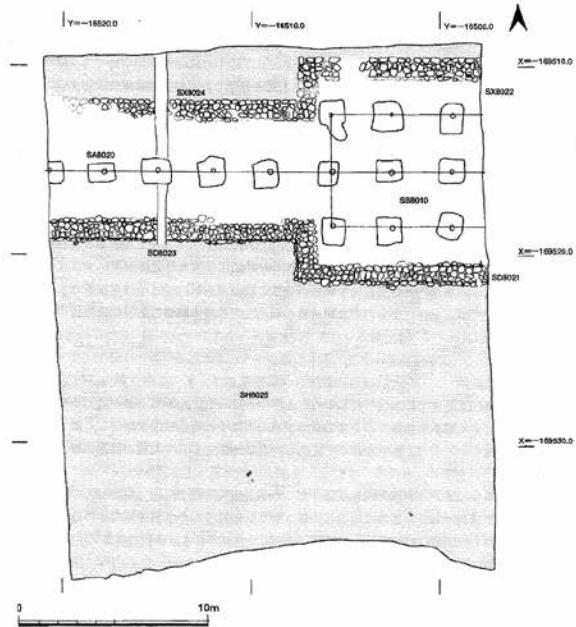


図3 飛鳥宮III期(齊明朝～天武朝)
内郭南門と1本柱塙
(飛鳥京跡III 2008より引用、加筆)

るための施設というものが、もしかすると周りにあるのではないか、あるいは交通の要所にこういった烽というものが造られたのではないかというような推測が当然成り立つといいわけなのですが、まだ実は事実関係といいますか、発掘としては、都を守る施設もある可能性があるのだということを知っておく必要があると思います。私は少しまだ慎重な意見です。

宮垣と一本柱塙

さて、宮垣と一本柱塙というところに入りますが、『日本書紀』の皇極四年の六月に「法興寺に入りて城と備う」とい

う記事が出てまいります。先ほどご紹介がありました。お寺というものが防御施設として使われたということなのです。つまり、寺院というのは、当初から築地ついじという土壙を導入してござります。ただ、お寺が土壙を導入していますが、宮殿の方はといえば土壙ではなくつて、壙なのですね。一本柱の壙なのです。掘立柱の柵が宮殿の実は建築様式として、それが取り入れられるのは平城京の都からとうふうに分かっています。図3の絵は飛鳥宮のⅢ期、齊明天皇の時代と天武天皇の時代の宮殿の内部にあつた内裏の南の正門です。一本柱の壙がとりついています。これこそが、宮殿の内部を区画する施設であると、そしてちょうど飛鳥に都があつたときⅠ期、孝徳天皇の時代に大阪の中央区の法円坂のところに難波宮と呼ばれる宮殿が造られたわけですね。そのときの宮殿は、発掘成果で図4のような絵が描けるところまでいきまして、これで何がわかつたのかというと、いろんなことがわかつたのですけれども、南側を掘立柱で、あの複廊にしていると、複廊というのは複数の複に廊下ですから、廊下が二つあるという施設になります。宮城の南側については莊嚴化しているということがいえるだろうと思います。飛鳥時代に一本柱壙というもののや、あるいはこういった複廊というような壙で構成されるという変化が起き始めるのですが、それが本格的な都市を備えた藤原京の中心部にいついたらどすね。平城宮では、平城宮の内裏・大極殿というところの回廊を発掘したら、図5のような木材を加工したものが出てきたわけですね。それは実は藤原宮から持つていったものであるということが、ほ

ば推定されているのですね。藤原宮の南側にあった朱雀門の東西の一部区間が単廊、廊下が一つだけのもの、あるいは二つだけの複廊形式であつたということなのですが、それがとりついていく。こういうふうな木の塀なのですね、木の柱で土壁を持つた塀であるということなのです。

つまり、これは宮殿を囲んでいる塀の形であるといふことが、平城宮の発掘で明らかになつたということなのです。お手元の資料にも書いてございますが、地面から五トメ¹超えるぐらいの高さです。五トメ¹超えますので、ちょっと乗り越えようなんてことは当然できません。ですので、単なる壁というよりは、やはり、外側と完全に隔絶して中に入れないので、そのような壁を作っているということだろうと思います。さて、文献史料をちょっと見ていくのですが、史料1と2です。まず『日本書紀』の大化四年、六四八年の三月に

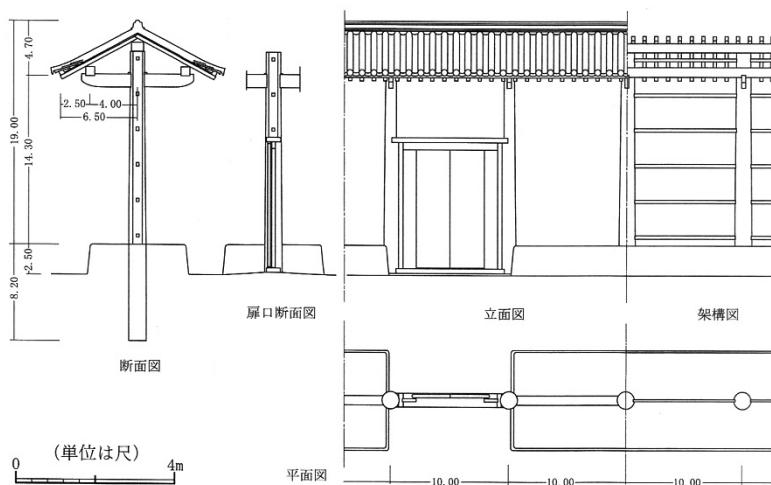


図5 平城宮出土木樁から復元された藤原宮の1本柱構造の宮垣
(平城宮XI報告を再トレース)

は「朱雀門は出御の場であり天皇

の日常空間と非日常空間の境界の役割を担つた」ということを、この記録から読み取ります。

(史料1)

三月乙巳朔辛酉、安倍大臣薨。天皇幸_二朱雀門_一、挙哀而慟。皇祖母尊・皇太子等及諸公卿、悉隨哀哭

『書紀』大化四年（六四八）三月条

(史料2)

三年春正月壬子朔、(中略)。左將軍正五位上大伴宿禰旅人、副將軍從五位下穗積朝臣老、右將軍正五位下佐伯宿禰石湯、副將軍從五位下小野朝臣馬養等、於_二皇城門外朱雀路東西_一分頭、陳_二列騎兵_一、引_二隼人・蝦夷等_一而進。

『続紀』和銅三年（七一〇）正月朔条

意味がある。

もう一つの史料2は、和銅三年、都は平城京に移ろうとしていたそのときに、平城宮の朱雀門に

至つて隼人・蝦夷に対して国家を示威する場になつてゐる。つまり、この史料の上に並んでゐるのは左將軍からはじまつた大伴宿禰旅人以下、いわゆる軍人が軍家が名前を上げています。彼らがどこに立つたかというと皇城門。皇城門というのは、いわば朱雀門の外側の、ようは羅城に相当する門です。羅城の外側はどうなつてゐるかというと、「下ツ道」という道があるわけです。朱雀の道になります。宮殿の真南の大通りに左右に分かれて立つわけです。何のために立つたかというと、それは隼人・蝦夷らが進んで宮殿の中に、天皇にお札に、会いにくるのを、そこで迎えておるわけです。

築地の導入とその後

つまり、そのような場として朱雀門は意味がある。こんなふうに見ていくとどうも宮殿というものの正面側にある堀というのは、やはり意味がどうもありそうですよね。単なる入り口ではなくつて、そこは外から入つてこられる方に対して何か示威する場というふうに考えるのが自然だし、そのように考えられています。実は、平城宮で初めて築地が造られたことは、平城宮の発掘調査で裏付けられています。まず築地なのですが、土を版築して版築っていうのは厚さが五センチ程度、少しづつ土を入れながら突き棒で突いて叩き上げる方法です。それで屋根を葺きあげた。そういう構造のものです。私たちが現在、見ることができるのは法隆寺がありますね、法隆寺に行かれたら重要文化財になっている壁がまさに築地なのです（図6）。ああいつたものが平城宮から採用されていくというこ

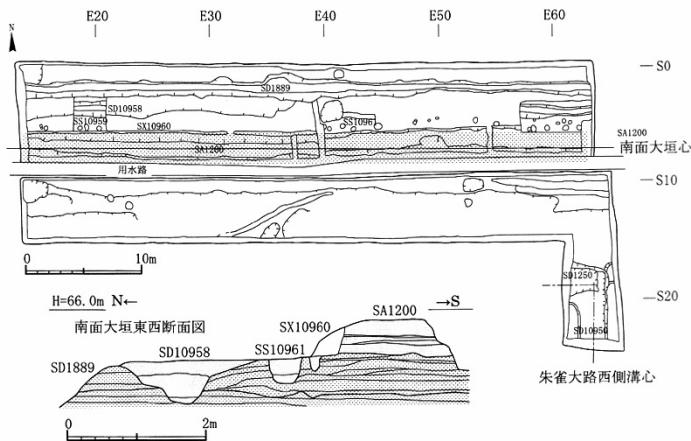


図 7 平城宮朱雀門西方南面大垣遺構図
(平城宮概報 1983 を再トレース)

とが分かっています。右側は平城宮の発掘調査報告書から引用しました(図7)。今、朱雀門ができるがつています。その真下のこの部分が土壙のあつたことを示す部分、この直線的なアミがかかっているところが朱雀門に、とりつく壙の痕跡ということになります。つまり、私が強調したいのは宮殿というのは「宮垣」、つまり垣があるのだということなのです。飛鳥時代は壙、木の壙であると。それが奈良時代、平城宮にいたつて築地という構造のものになつたということがわかります。

史料3には和銅四年、平城京に遷都したその翌年の記事を載せてあります。

宮垣が、つまり、壁がどういう意味を持ったのかということがわかります。

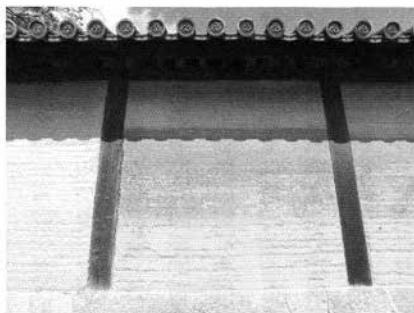


図 6 法隆寺西院南面大垣
(國下撮影)

(史料3)

丙子、勅、頃聞、諸国役民。労_二於造都_一、奔亡猶多。雖レ禁不レ止。今宮垣未_レ成、攻守不_レ備。宜下權立_二軍營_一禁中_一守兵庫上。(後略)

(『続紀』和銅四年(七一二)九月丙子条)

(史料4)

是月、初置_二關於龍田山・大坂山_一。仍難波築_二羅城_一。

(『書紀』天武八年(六七九)一一月条)

(史料5)

壬辰、廢_二河内国高安烽_一、始置_二高見烽及大倭国春日烽_一、以通_二平城_一也。

(『続紀』和銅五年(七一二)正月二三日条)

(史料6)

己卯、新羅使入京。遣_二從六位下布施朝臣人。正七位上大野朝臣東人_一。率_二騎兵一百七十_一。迎_二於三椅_一。

(『続紀』和銅七年(七一四)十二月二六日条)

壁が工事中なので「攻守を備えず」と書いてある。つまり、どこから軍事的な攻撃を受けたら、それを守ることができないということなのです。ですので、武兵をたてると書いてありますから、それなりの防御施設だということはこういった史料からわかります。

実は平城宮の大垣、つまり宮殿の築地は発掘で、土壙の一番下の幅、基底幅というのです。そこが二・七メートルあります。非常に大きい。高さは推定五・六メートル、実は藤原宮

の壁の高さと同じ高さになるのですね。ですので、これはやはり何か伝統的に宮の垣っていうのには意味があるのだろうというふうに思います。

難波の羅城

話は「羅城」に移ります。羅城といえば羅城門。しかし、私たちが、都を研究する者にとって、都の周りにそういういた羅城的なものがあるのかどうかというのは、ずいぶんと関心事でありました。というのもこの史料4と5、防御的な記載が『日本書紀』あるいは『続日本紀』に書かれているからなのです。史料4には難波に羅城を築くというのが、天武八年の一月の条『日本書紀』に出てまいります。どうも難波宮を取り囲む羅城があつたということになるわけですが、いろんな議論が進んでいます。まだ研究途上、調査の方も少し途上だらうと思いますが、一つの有力な候補が宮の北西辺りで見つかりつつある。見つかっているのが一本柱壙なのですね。ですので、飛鳥の宮殿、あるいは藤原京ともよく似ております。もう一つ史料5です。高安、大阪ですね。河内の国、高安とか奈良県にかけて、烽、つまり、「のろし」を上げる場所があつたことがございます。こういった文献記録しかないので実際にあつたかどうかというのは、これから検証する必要があります。しかし、都を守る施設っていうのは、ある可能性があるのだというふうに思つていただけたらと思います。

平城京と長岡・平安京の羅城

さて、時代は奈良時代から奈良時代の終わり平安時代にいきまして、羅城はどうなつたかなんですが、平城京の場合には平城京の南側に発掘調査をしまして羅城門の一部が発掘されました。さらに、その南側も発掘調査をしたら平城京を覆っているのは、南北が九条じやなくつて十条だつたんじやないかというような成果も明らかになりました。当時は下三橋遺跡というふうに呼んでいて、それが今では「平城京南方遺跡」と名称が変更しました。しかし、この三橋という地名は現地にもございまして、その三橋っていうのが史料6に出てきます。新羅の使いが平城京に入つてくるときに、布施朝臣人あるいは大野朝臣東人が、一七〇人の騎兵で迎えにいったところが三橋であつたということなのですね。その三橋こそ羅城門を出た南側のところだらうと推定されている。佐保川という川が今ありますね。そこに三つの橋が架けられていたという説が、それが地名の由来であろうと。つまり、この記事は宮殿の一番南端の、京の南端の門を出たところで外国の使節を迎える場になつていていうことを一つ知ることができる事例なのです。

ちょっと昔、大和郡山市さんが発掘調査されているときに私がスナップ写真撮らせていただいたので、今日出させていただきました（写真1）。二〇〇五年の九月一六日撮影です。これが羅城であります。二本の柱が並走して走つております。こういったものから、いつたいどういう堀が復元できるのかつていうことについて、議論が別れているわけです。図7は、明治大学の大学院の井上先生の復

元を載せておきます。下が平城京、つまり右の絵から復元していると、上が平安京、これからお話する平安京。羅城っていうのが、こういったまるで土壙のような壁であると、問題は中に土が入っているのか入っていないのか、これはよく分かっていないのです。とにかく、こういったものを想定しています。井上先生によると基準尺が違うだけで、基本的に設計は同じだというふうにお話されています。つまり、羅城というのは遺構としては平城京から確認できて、それ以後、設計そのものは平安京に引き継がれていくということになるわけです。と思つてしましたら平安京で羅城が見つかつたと、この会場の中でも平安

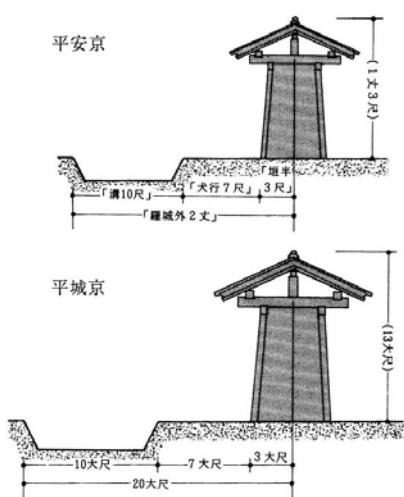


図7 平安京と平城京の羅城
(井上和人『日本古代都城の研究』2008)



写真1 平城京の羅城跡（大和郡山市調査、國下撮影）

安京の羅城の発掘調査の説明会に行かれた方が、たぶんおられると思います。およそ千人ぐらい、全國からいらっしゃっています。平安京九条路、羅城の調査成果ということで説明会の資料からこれを引用させていただいていますが、ここに羅城の土の壁の一番底の部分が見つかったわけです。さらに、その北側は本当の都の南端の通りである九条大路です。この成果は、平安京にも羅城があるということは文献資料には書かれていたけれども、それをはつきりと遺跡として見つけることができたということで、非常に重要な成果でした。しかも、平安京の南の端、右京の九条一坊、九条三坊の四町ですか、その当たりまで広がっていることがわかつてきたという非常に重要な成果があつたのですね。

三 都からみた城柵と山城

政局による城柵と山城の変化

さて、本題というかそろそろ本当に話をすべきところにいくのですが、「都からみた城柵と山城」というところです。実は結論からいうと都は、今日のテーマである東北の城柵と西日本の山城のちょうど中間位置にあるということになりますから、実は当時の律令国家にとつてみれば、いかにその当時の政局あるいは外交関係というものが変化していったのかということを俯瞰できるいい場所にある。そのあたりを見ていただきたいと思うのですが、古代国家の主たる都を中心に七世紀から九世紀の史

料を通史的に総比較するということで、表1をご覧ください。

まず私の主題は都ですが、どこが中心地にまず確定したかと「飛鳥」でした。この表では、推古朝あたりからはじめてございますが、推古朝あたりに飛鳥の中心地、飛鳥盆地、小盆地の中におはりだのみや小墾田宮おはりだのみやというものを造つていくわけです。以降、飛鳥が宮殿の中心地として使わわれていますから、推古朝では少なくとも都というものは固定したんだということですね。ちょうどその頃、東北、西日本がどうなつてているかあまり資料がない。ですので、これはもう発掘調査するしかございません。このあたりの時代のことは、今日ありましたがこの遺跡の表の右側のあたりに書いてある東北でしたら郡山遺跡とか、その前身となる遺跡はないのかっていう、そんなところを見ていかないといけないと思います。そして、東北に一つの経営拠点を創つていくのが孝徳朝であります。孝徳朝の東北經營において渟足柵ぬたりのさきというものを造つていくことになります。そして、柵戸さきど、まあ移民政策を進めていくという意味で、一つの画期が孝徳朝にあるというふうに思います。

そのあと以降も、宮殿は大きく変わることなく飛鳥を拠点に進めています。ここで政治が行われたわけですが、齊明天皇の時代、戯れの天皇ともいわれた齊明天皇の時代には、阿倍比羅夫の東北遠征が始まります。そろそろ古代国家は、東北に対する関心を持ち始める時代なわけです。表1の2ページの部分です。そして、鞠智城の造営の契機になつた白村江の戦いというものが左上にあります。ちょうどそのときに天皇は天智天皇になります。都は大津宮に都がございました。滋賀県の大津

市に都がございました。その中で天智朝の間に西日本の各地に山城が造営されていくということですから、まさに天智朝における大きな動きとしてこれは捉えておかないといけない。一方、東北の方はちょっとあんまり史料がないということなんですね。まあそんなふうに同じ時代なんだけど、東北と西日本というものは、同じ国としての動きがあるはずなのに、同じような史料が残っているかというとそうでもない。ということがここに読み取れますね。

さて、本格的な都ができたのは天武、持統朝の藤原京なんですが、藤原京ができるが持統八年のことになりました。ちょうどその頃、東北では先ほどお話をあった郡山官衙遺跡が、これは仙台市にあるお役所のような施設ですが、最初に木柵堀が作られ始めたという話がありました。これは天武、持統朝における政策と関係付けて、地方政策と関係付けて見ていく必要がやっぱりあるのだろうと思います。そして、この間で左側には、つまり、西南日本の方に冒頭にお話をあつた大宰府に命じて大野城、基肄城、鞠智城の三城を修復させると、いうことがあつたわけです。地方の役所であるところの大宰府に命じて修理させているということですが、どこまで国が関与したのかって問題もちょっと気になるところですね。その中、鞠智城のⅡ期に位置づけられるわけですが、まさに鞠智城の内部が整備されていく時代であつたということになります。表1の2ページの終わりから3ページ目の部分です。時代はもう平城京に移っております。養老四年、七二〇年、三月に大伴旅人を征隼人持節大将軍に任命、隼人というのは九州にいる地元の方々なんですね。それに対する手当もしば

めている。九州に目を向けている。一方、東北では謀叛が、始まる。なかなかうまくいかないわけですね東北経営が。そんな中で東北経営として、これは熊谷先生がおっしゃっている神龜元年体制というふうに呼ばれているんです。七二四年四月、藤原宇合ふじわらのうまちを征夷時節大将軍に任命しているんです。東北においては「多賀城」を置くという大きな事件があつたわけですね。それまでの政庁を引き継ぐ形で、たぶん多賀城に本格的な拠点が作られていくという。七二〇年の「蝦夷の反乱」以降、東北においてはいわゆる「柵」と呼ばれる施設が、悉く陸奥国に建設されていくわけです。東北に対するのてこ入れが進んでいく様子が見えてきます。

平城京に遷都するのが七一〇年、平城京は七八年間なんですね、非常に長い都です。聖武天皇の時代に都をしばらく「恭仁京くにきょう」に移したり、「紫香楽宮しがらきのみや」に移したりと、奉公五年と呼ばれるような時代を経て、また七四五五年に平城京に戻つてくるわけですが、奈良時代の後半になりますと、藤原仲麻呂が当時の実権者として登場して東北の経営に乗り出す。そのときに桃生城もものう、あるいは雄勝柵おからというものが記録上出てくるし、伊治城いじょうというのも出てくるということになるわけです。こんなふうに見ていきまして最後、表1・③・④を見て下さい。私の専門の領域なのですが桓武朝というときに、一つ大きな転換点があつたというふうに考えられています。桓武朝は造営と東北経営の時代であると、経営の時代、征夷の時代であるというような表現があるよう、東北に対しての様々な軍備を増幅して送つていく、作業をしくわけですが、しかし、なかなか都が長岡の地ではうまくいかず「平安京」に都

を移した。その年に有名な坂上田村麻呂が凱旋してくる、というような結果を生むわけです。今日話にあつた近畿大の鈴木さんと、彼が学生の頃、東北と一緒に回った記憶があるんですが、今、そのよう^うに彼が言つているのは、この坂上田村麻呂の凱旋は平安京の遷都を祝うためにやつたんだといふ、そんなこともおつしやつてある。たぶんあたつてあると思いますが、そういうふうに合わせて都に對しての凱旋報告をしていくことまでやるわけです。そこには、東北あるいは西南に對しての、地方に對しての政治つていうものに對して、いかに当時の律令国家の中央の方々が目配りをしていたのかということをよく示す出来事だらうと思ひます。

儀礼空間の影響

儀式空間の影響というものを、レジュメにまとめていきます。結局、宮というものがいつたい地方の城柵や山城と、どのように関係するのかといふところ。つまり、これ政治といふことが一つそなうのでしよう。律令国家で大切なのは、「儀式」をやることなのです。それで、私、東北に行つてまいりました。皆さんも多賀城、素晴らしいです。今、工事されていますが、ぜひとも行かれてみてください。右側は、胆沢城^{いさわ}。左側は多賀城の政府の南大路ですね。ちゃんと坂道になつて凛々しく政庁域が一番高いところにあるのですね。そんなふうに場所を選んで造つてあるといふことなのです。胆沢城の壁、まさに築地です。築地の壁にしています。門も非常に立派でした。こういったものもや

はり宮殿の歩みとともに、東北あるいは九州にある、中四国にある、そのような施設は影響を受けているのだということを眼前で確信を持つて帰つてくることができたわけです。

おわりに

今日は都から古代山城と城柵を見るということで、律令国家という国家がどのような政策を取つていたのかということを見てきたわけですが、基本的にはやはり体制維持で版図拡大していくということが一つ重要である。で、外交関係というのも当然重要なんですが、西日本に分布する古代の山城については飛鳥時代以降、大陸との外交関係についての意識というものがはつきり出てている。さらには、そこの中で軍事的緊張が起きれば、またたく間に城を造り上げるぐらいのエネルギーはあるということなんですね。それは、「水城」であり、「山城」であり大宰府であり、そして鞠智城であるということだろうと。一方、東北の城柵については国家というものが地域をどのように支配していくのかという原理を読み取ることができる。蝦夷への、東北への



写真2 多賀城跡政府南大路（南から、國下撮影）

版図拡大っていうのは、一定の防御制を備えている。一定の防御制ということで完全防備じゃないんです。一定の防御制を備えて、政治支配の拠点となる城柵を造るっていうことが目的であると。城柵の政府、つまり、中心的な施設っていうのは都の宮殿と系譜的につながっているっていう意味で行政庁と外観重視の儀式空間を作っていくっていう意味では、国家権力というものを、ミニチュア版でそこに作つて地方の支配をするための道具にするっていうふうに説明していいんだろうっていうふうに思つています。

以上で私のお話を終えさせていただきます。ありがとうございました。

講演③

東北古代城柵の構造と機能

講演者紹介

八木 光則（やぎ みつのり）

立正大学文学部史学科卒業。盛岡市教育委員会勤務を経て、現在、岩手大学平泉文化研究センター客員教授。博士（歴史学）。専門は日本考古学。

「東北古代城柵の構造と機能」

岩手大学平泉文化研究センター客員教授 八木光則

はじめに

皆さまこんにちは、ただいま紹介いただきました岩手県からまいりました八木と申します、よろしくお願ひいたします。私に与えられたテーマ、「東北の古代城柵について」お話をしたいと思っております。今日の内容ですが時間が四〇分ということで限られています。その関係で絞った内容でお話をさせていただきます。まずは城柵の目的、それから城柵の捉え方、軍事拠点あるいは行政府なのかというそういう一つの議論について簡単に触れたいと思つております。さらに柵囲いの集落を城柵とする説が一五年ほど前ですが出されておりますので、それについても触れたいと思つております。このような城柵の基本構造と機能ということについて前半にお話をしまして、後半では巨大化する城柵と西日本の山城との比較をメインにした話にしたいというふうに考えておりますので、四〇分間ですがお付き合いをいただきたいと思います。

一 城柵の目的

(一) 城柵の捉え方

さて、城柵の捉え方ということですが、城柵は七世紀の中頃ぐらい、飛鳥時代の中頃から平安時代一〇世紀の中頃まで、およそ三〇〇年間東北日本における国家の支配拠点として造られました。東北日本には、在地住民として蝦夷えみしと呼ばれた人たちがいたわけですが、城柵はそういうた蝦夷を主に支配するための拠点という形で捉えられております。

東北地方の主な城柵を地図に落しました（図1）。東北地方の仙台市に「郡山遺跡」があります。そこから北にかけて、一番北の盛岡に「志波城」があります。ですから、だいたい仙台から盛岡までの間ということになります。一方、日本海側の方は最初に新潟平野に渟足柵ぬたり、磐舟柵いわふねというものが造られます。それから秋田城、これが一番北端、ですから新潟市から秋田市の辺りという形になります。東北の中でも北側、青森県とか、あるいはさらにその北の北海道というのは、城柵が造られない地域ということになります。

表1は、現在わかっている城柵、記録に残されていない城柵、それと記録にはあつても遺跡として確認されていない城柵、それも含めてこの一覧に載せております。二六の城柵があつたことになつております。



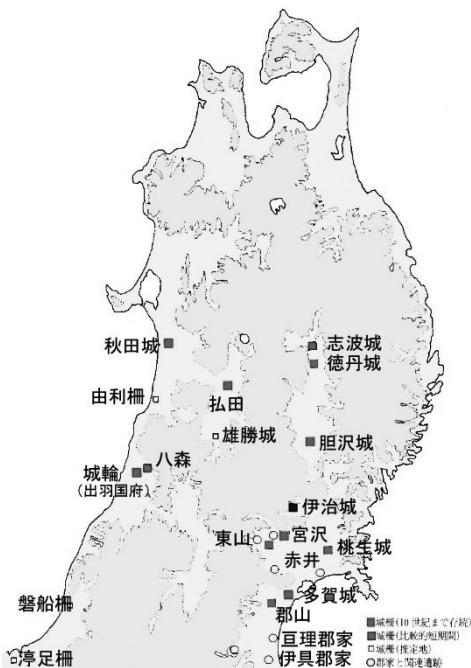


図1 東北古代城柵の配置

世紀の中頃です。そのあたりから一〇世紀中頃まで、そういう形になりました。

今日は一つずつ城柵を取り上げて具体的にお話する時間がありませんので、主なところをご説明をしたいと思つております。先ほどの熊谷先生のお話ともだぶるところがあろうかと思いますが、考古学の立場でお話したいと思つております。

(二) 軍事拠点か行政府かの議論

城柵というのが軍事拠点か行政府かという話ですが、これは、研究史の流れの中では江戸時代から一九六〇年代ぐらいまで、征伐されるべき蝦夷という位置づけがありました。そういうイメージが強

す。造られてからずっと最後まであったかというとそうではなくて、最後には六つの城柵に統合されます。前半の一五〇年間、さつき三〇〇年間城柵の歴史があると言いましたが、前半の一五〇年間は新しく造つたりするような時期でした。で、どんどん増えていきました。残りの後半一五〇年は六つの城柵に統合してそれを維持していくという政策に変わっていく。平安時代の九

城柵名	比定遺跡	造営	廃絶
渟足柵	(不明)	647年	不明
磐舟柵	(不明)	648年	不明
都岐沙羅柵	(不明)	658年以前	不明
優嗜曇(柵)	(不明)	689年以前	不明
(郡山)	郡山遺跡	7世紀中葉	8世紀前葉
<玉造軍団>	名生館遺跡	7世紀後半	9世紀後葉
出羽柵	(不明)	709年以前	737年以降
多賀城	多賀城跡	724年	11世紀前葉
秋田城	秋田城跡	733年	10世紀中葉
牡鹿柵	赤井遺跡	7c末~8c初頭	9世紀前葉
(東山)	東山・壇の腰・早風	8世紀中葉	10世紀前半
色麻柵	城生・羽場遺跡か	8世紀中葉	9世紀初頭
(小寺)	小寺・杉の下遺跡	8世紀中葉	10世紀初頭
玉造柵	宮沢遺跡	8世紀中葉	10世紀
新田柵	大嶺八幡遺跡	8世紀中葉	9世紀前半
(日向館)	日向館・城山裏	8世紀	9世紀
桃生城	桃生城跡	759年	774年
雄勝城	(不明)	759年	802年か
伊治城	城生野遺跡	767年	9世紀前葉
観繁城	(不明)	780年	不明
(払田柵)	払田柵遺跡	802年	10世紀後葉
胆沢城	胆沢城跡	802年	10世紀中葉
志波城	太田方八丁遺跡	803年	812年頃
(城輪柵)	城輪柵遺跡	9世紀初頭	10世紀
中山柵	(不明)	804年以前	不明
徳丹城	徳丹城跡	812年	9世紀中葉

表1 東北の古代城柵一覧

かつたものですから、城柵というのは軍事拠点だと、これはもう当たり前の前提がありました。そして柵戸、関東中部地方から移民を送つて、そして開拓あるいは軍事にあてるという「砦」というような理解が一般的でした。それが一九六〇年代以降、熊谷先生のお話にもありましたが、多賀城跡などの継続的な発掘調査が開始されるようになつてきて、城柵についてだんだんはつきりしてくる。城柵遺跡をかかえる自治体が競うようにして発掘を進めました。その結果、築地塀が都と同じよう外郭に廻る。あるいは、「政庁」が都を模したものということが次第に共通認識として理解されるようにな

り、官衙、行政の役割というものがたいへん強調されるようになりました。そのあと一九九〇年代以降になりますと、今度はちょっと振り戻しがおきます。「櫓」などの遺構がだんだん明らかになってきます。そうしますと軍事的な面も多々あるのだということが着目されて、蝦夷支配の行政と軍事両面の拠点となり、現在もずっと引き継がれています。

そういった中において、近年、近年といつても十五年ぐらい経つのですが、柵で囲った集落を城柵とする説が出されました。これは熊谷先生が、主に述べておられます。先ほど先生は時間の関係で説明を省かれたのですが、城柵というものはいくつかのパターンがあり、そういう中で柵で囲った集落も城柵の範疇に入れるべきだという説を出されました。この説は現在、主に宮城県の研究者を中心にななり強い支持を得ていると思います。この説では外郭施設の存在、木柵であるとか、あるいは築地塹であるとかといった外回りを囲むということがメインであって、その中身、中心に何があるかといふのはそれは問わないという説です。それについては、私自身がまだちょっと検討の余地があるのかなということで、保留をしているといったところです。保留というよりも、私はあまり賛成していないということなのですが、今日は東北での論争をここで繰り返してもあまり生産的ではないと思しますので、これはこれでおしまいにしておきたいと思います。

二 城柵の基本構造と機能

(一) 城柵の立地・規模

さて、城柵の基本構造です。これは先ほどから言わっていますように低い丘陵、あるいは平地に立地します。決して要害の地には立地していないというのが大きな特徴です。規模は大きなもので八町、八町というのは一町がだいたい一〇八メートル前後、実際の施工では伸び縮みがありますので一〇〇メートルから一一〇メートルくらいの誤差があるのですが、だいたい八四〇メートルクラス、小さいものだと三五〇メートルくらいというような規模のものになっています。ただし、一時的に巨大化する城柵があることもだんだん分かってきました。これは後半の話にしたいと思つております。

(二) 城内の諸施設

一) 外郭線

図3は城柵の典型例としてよく使われる多賀城跡です。丘陵を取り込んで、周りをやや不整形ですが方形に、正方形に囲おうとした意識があると思います。実際には丘陵を取り込んでいますから、必ずしも直角にはいきませんけども、だいたい方形を意識したのだらうと思われます。で、中央に政庁を置いています。周りには門を置いています。南門が南側にすでに確認されています。それから東門も北側の方ですが確認されている。そして西門がずっと南のほうに下がっておりますが図のような形であります。東門から西門に至る道路もあつたと推定されております。写真1は上空から見たところで

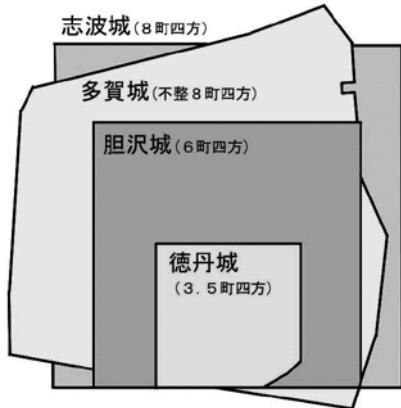


図2 主な城柵の規模

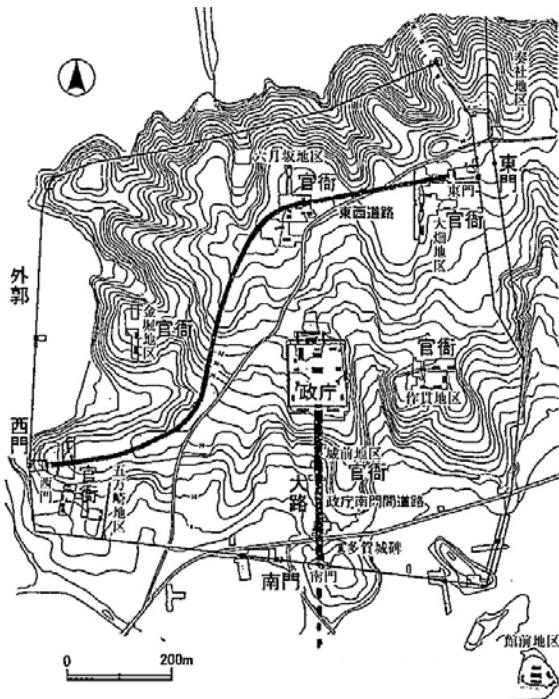


図3 多賀城跡
(高倉敏明 2008『多賀城跡』同成社 図40から転載)

す。あまり高い丘陵でないことは一目瞭然ですね。先ほどの鞠智城のスライドを見ておりましたら立地が比較的似ているのかなと感じました。もしかすると鞠智城と城柵の接点を考えるとすればこういった地形が多少関係するのかもしれません。ただ、これが西日本全体の山城全部の類似点につながるというわけではないことを申し添えておきたいと思います。

規模を比較してみます（図2）。多賀城はだいたい八町四方、不整ですけれども八町四方であろうと考えられます。また、これに匹敵するのが一番北端にありました盛岡市の志波城がほぼ八町四方です。また、それから少し小さくなるのが岩手県の胆沢城です。これが六町四方、一番小さいのが徳丹城、これも岩手県なのですが三・五町四方です。だいたいこのぐらいの規模の範囲で城柵というものが造られております。実際には不整形であったりしますが、このような規模の範囲に収まっています。

二）政庁

政庁というのは城柵には不可欠な施設です。だいたい全体の中央付近、あるいは少し南のほうに寄つたところに政庁を配置しております。政庁はいうまでもなく城柵の中枢になるということになります。政庁の建物の基本的配置は正殿、それから東西の脇殿が片仮名の「コの字」のように配置されています。先ほどの國下先生のお話にもありましたが、都の内裏をかなり小さくしたようなミニチュア版としてこういったものが造られていることになります。このことは基本的には城柵全て共通します。図5の多賀城でも正殿があつて西脇殿、東脇殿がありますが、そのほかにそれぞれ両脇に別の施設、あ

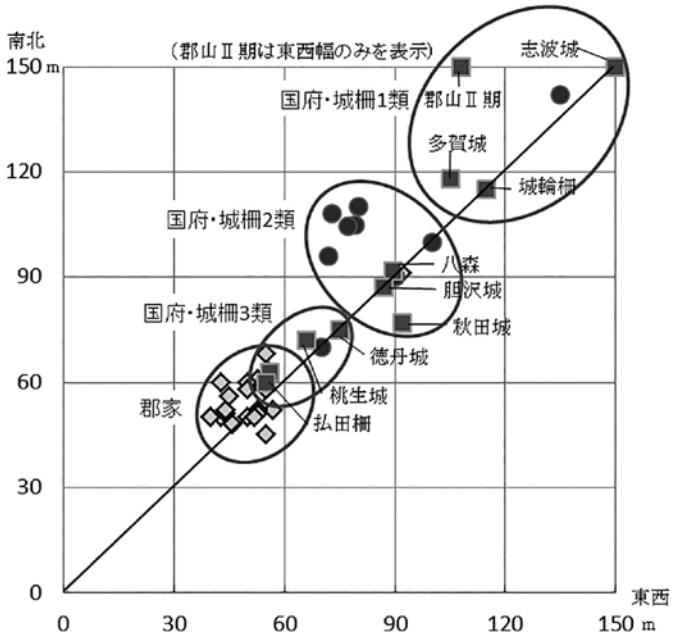


図4 政庁の規模

るいは後殿と呼ばれるような施設もあつたりします。これは城柵ごとの個性として表われてきます。

多賀城の場合には南門があり、築地塀で周りを囲むという形です。そのほかにも例えば胆沢城では「板塀」という、やや簡素な区画施設を持つ例もあります。いずれも政庁といふのは、きつちりと囲うということも大きな特徴の一つになつております。

図4は政庁の規模をグラフに示したものです。政庁の規模は大きくわけると三つに分類ができます。一番大きい城柵は、一辺が一二〇メートルから一五〇メートルくらいの規模になっています。その一番大きいのが志波城で、一五〇メートル四方です。昔の尺でいいますと五百尺、一尺が三〇センチとして五百尺というこ

が書かれておりますが、これはだいたい二〇〇～二五〇尺、六〇トルから七五トルぐらいのランクがあ
るいは陸奥の国の国府の規模になるということになります。志波城は、国府ということではないので
すが、それに匹敵するぐらいの規模を持つていて、それが多賀城の前身の陸奥国府だといわれています。
それから次のランクになりますが、胆沢城と秋田城がだいたい九〇トル級のランクです。三〇〇尺前
後ということになります。この三〇〇尺のランクになる胆沢城というのは国府があつたわけではなく
て、少し別の組織なのですが、「鎮守府」というものが置かれたところです。秋田城は鎮守府ではな
いのですが、おそらくそれに匹敵する規模ですので、鎮守府に相当するような役割を与えられていました
のではないかなどと思われます。それから三つ目、徳丹城、桃生城、あるいは払田柵というような文字

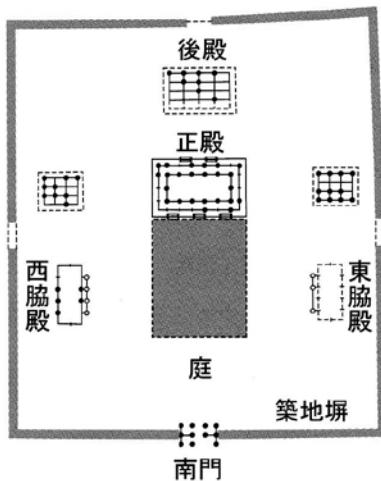


図5 多賀城跡の政府 (平安時代初期)
(宮城県多賀城跡調査研究所 2010『多賀城
跡 政府 補遺編』第56図に加除筆)

となるわけです。そして多賀城も百二十トルぐらい、四百尺です。多賀城には陸奥の国府がありました。それからその上のほうに郡山Ⅱ期とあります。これが多賀城の前身の陸奥国府だといわれています。城輪柵は、固有名詞がわかつていないので遺跡名から城輪柵と言っているのですが、山形県酒田市にあります。つまり平安時代の出羽国府と考えられています。つまりこの一二〇トルから一五〇トルというものは出羽あ

ります。これはかなり小さなものになつてくる。もう一つ小さなランクを橜円で囲つておりますが、「郡家」^{ぐうけ}の政庁です。徳丹城跡などは郡の役所の規模にほぼ匹敵するぐらいですね。ですから、その管轄範囲もおそらくは限られたものであろうというふうに考えられます。このように政庁の規模を分類することによつて、それぞれの城柵に与えられた管轄範囲であるとか、役割であるとかそういうたものを推定することができるのではないかと考えております。

三) 官衙Ⅱ曹司

それから城柵の中には官衙という建物がたくさん造られています。歴史的な用語でいえば曹司と呼ばれたりします。政庁周辺などで主に実務をとる建物群、そういうふたものを官衙といつております。これについては、それぞれの城柵で独自性がありまして、城柵の個性が表れるといったところなのかなというふうに思つております。多賀城は丘陵の平坦部ごとに独立的な官衙群を配置している。これが明らかになつております。図3を見てわかるように、それぞれ丘陵の平坦部に独立的な官衙を造つてある。具体的にどういう役割を果たした役所なのかはわかりませんが、いずれもそれぞれその任務を負つて造られた官衙であろうと思われます。

そういう中でこれから胆沢城をご紹介したいと思います。図6のように胆沢城というのはこのような正方形です。六町四方、六七〇メートル四方の規模です。平坦部にありますのでこういう四角の平面形が取りやすいということもあつたのだと思いますが、本当に真四角です。その中央より少し南に政庁

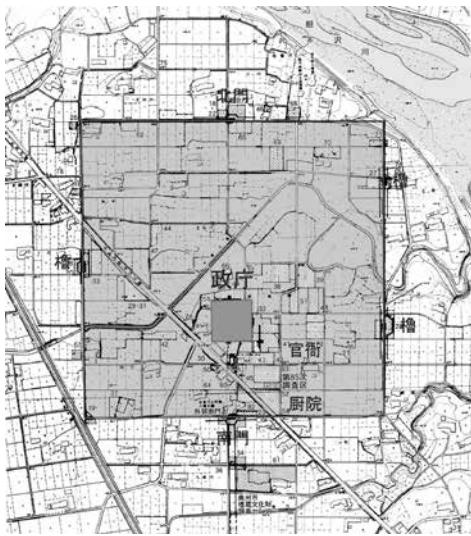


図 6 胆沢城跡

(奥州市教育委員会 2006『胆沢城跡—平成 16 年度発掘調査概報—』第 1 図に加除筆)

があります。それと先ほどの外郭のところであまり詳しくお話ししませんでしたが、外回りには櫓が三カ所確認されています。実際にはもつとあったと思いますけれども今、発掘で確認されているのはこの三カ所です。

また「官衙」に話を戻しますが、政府の周りに官衙というものが造られています。図7の左側は九世紀の前半、この胆沢城というのは西暦八〇二年、九世紀の初めに造られています。そのときの状態というのが左側の図です。政府が左上のほうに見えるかと思います。板塀ですのでそんなに立派な囲いではないですが、その中に正殿があつて東脇殿が確認されています。また西脇殿が発掘されていないのでここには描いていませんけども、おそらく西脇殿もあるだろうと。で、問題はその外側、北東

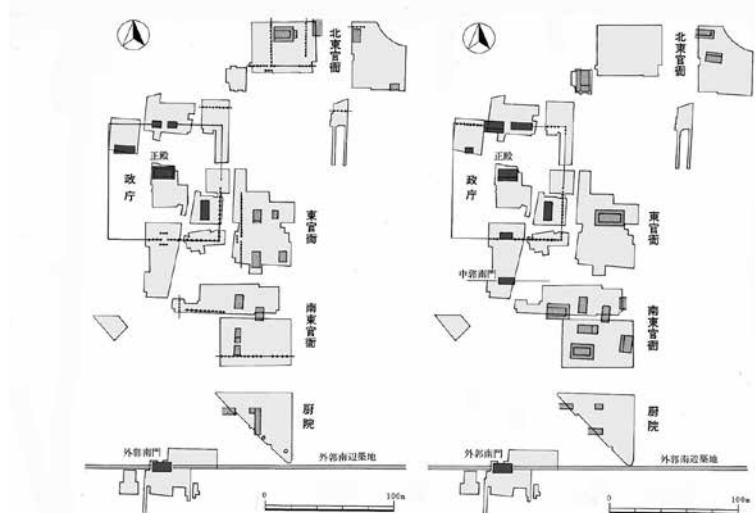


図7 胆沢城跡の官衙（左 9世紀前半、右 9世紀後半）

官衙であるとか東官衙、南東官衙と書いていますが、そういったところにそれぞれ独立的な官衙、役所を置いています。それぞれの官衙をやはり板塀で区画をしています。ですから独立したような形となつております。

この官衙を見てていきますと、北東官衙はちょっと例外的なのですが、東官衙や南東官衙には南北に細長い長方形の建物が見えると思います。これが九世紀の半ばから後半になつて図の右側のほうに変わってきます。政厅のほうも若千の変化はありますけど、官衙が大きく変わります。まず東官衙、南東官衙は今まで南北に細長かつたものが、東西に細長くなる。建物の棟方向が東西を向くようになる。そして建物の周りに「廂」をつける、建物とすれば大きくなる、あるいは格が上になる。外観もおそらくは最初、切妻のような雑な屋根構造になつたりする。そういうふうに大きく

変化します。と同時にこの周りからは、灰釉陶器であるとか、あるいは中国から輸入した白磁、青磁というようなものがたくさん出てきます。これは左側の段階、九世紀の前半にはほとんどありません。ですから、南東官衙あるいは東官衙で行われている内容が変わってきたと考えられます。結論を言えば、おそらくは饗宴などの宴を開いていたのだろうというふうに考えられます。それは灰釉陶器だと白磁には皿とか碗が多いので、そのように考えられるわけなのですが、これは当時、城柵に与えられた役割の一つとして蝦夷をもてなすという、そういう役割があつたことを裏付けています。もてなすという言い方がちょっと唐突でわかりにくいかもしませんが、地域に住んでいた蝦夷、東北の蝦夷たちがこの胆沢城にやつて来るように手ぶらでは来ない。その土地の特産物を持つて来る。貢ぎ物を持つてやつて来る。それに対してこの胆沢城で饗宴を開く。そして、物であつたり、あるいは位階、名前とかそういうものを与える。そういう、相互に利益があるようなことが行われていました。それを行つたのがこの南東官衙あるいは東官衙であろうというふうに考えられます。

九世紀の中頃に変化した理由は、一つにこの北側にあつた志波城あるいは徳丹城という城があつたのですが、それが九世紀の半ばぐらいになくなってしまいます。そして、今の岩手県域では唯一の城柵として胆沢城だけの一城になつてしまします。ですので、おそらくはそういう北からの蝦夷たちの朝貢、貢ぎ物を受けるという役割を一手に引き受ける。そのため、こういった構造に変化したと考えられます。このような官衙の在り方はそれぞれの城柵によつて変わるということは先ほど申した

通りです。

(三) 寺院

一) 多賀城廃寺

それから城柵には附属寺院というものが造られます。多賀城廃寺、具体的には固有名詞、觀世音寺であるとか、そのような名称があつたのでしょうか、発掘した当時はわからなかつたので「多賀城廃寺」という名前がつけられています。多賀城附属の寺院として多賀城の近くに寺院が設けられました。建物は礎石建ちです。大宰府の觀世音寺と同じ伽藍配置を示すということも確認されています。

二) 秋田城廃寺（鵜ノ木地区寺院・図8）

それから秋田城にも附属寺院が建てられていました。ここの場合には掘立柱建物です。礎石建ちではなかつたのですが、今、推定されているものは金堂があつたり、その北のほうには講堂、または僧房と思われるものがある。その中間両側には経蔵や鐘楼も確認されております。金堂の西側には憧竿といわれる幡を立てた柱の跡も見つかつたりしてます。このような附属寺院があつたことが確認されています。

それと一緒に水洗の廁も発掘されています。これは便槽がありまして、その脇に桶か甕かなんか置いていたんでしょう。用を足したあとは杓ひしゃくで流すと、それが北側のほうに沼がありますのでそこに流れています。

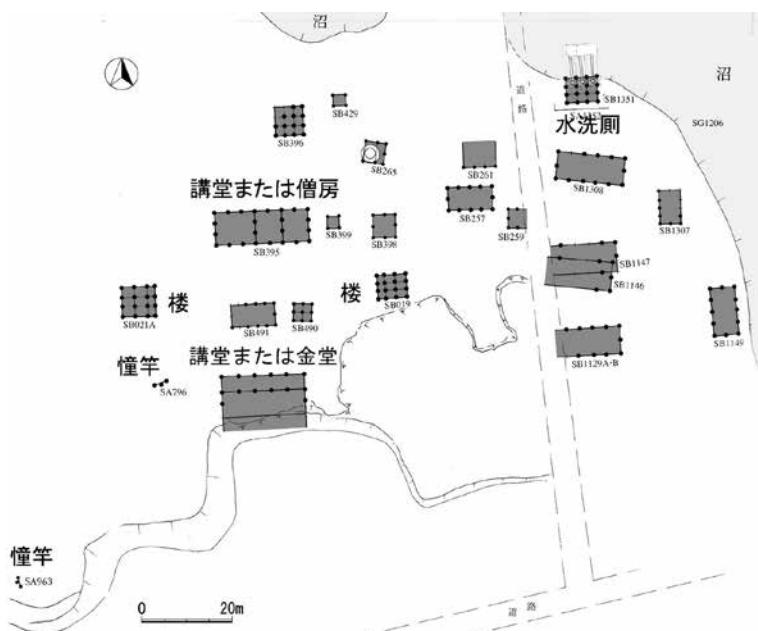


図8 秋田城鶴ノ木地区の寺院跡（奈良時代）
(秋田市教育委員会 2008『秋田城跡～鶴ノ木地区～』第159図を編集)

れるようになつていて。そういう水洗の廁がありました。で、その水洗の廁の土を分析しましたら、有鉤条虫といふ寄生虫が確認されました。それは、豚や猪に寄生するものだと。だから、日常的にそういう豚などを常食としている人たちがここで用を足したのではないか、日本ではまだその頃、豚を常食するということはないものですから、そこで考えられたのは中国大陸、今の朝鮮半島の付け根辺りから北の方に渤海という国がありました。その渤海からの使者が秋田城にやつて来たのではないかといふ、そういうことを示す水洗の廁ですね、廁の寄生虫はそれを示していのではないかといわれています。熊谷先生は、いや渤海使は秋田城には来てないよ、という別の

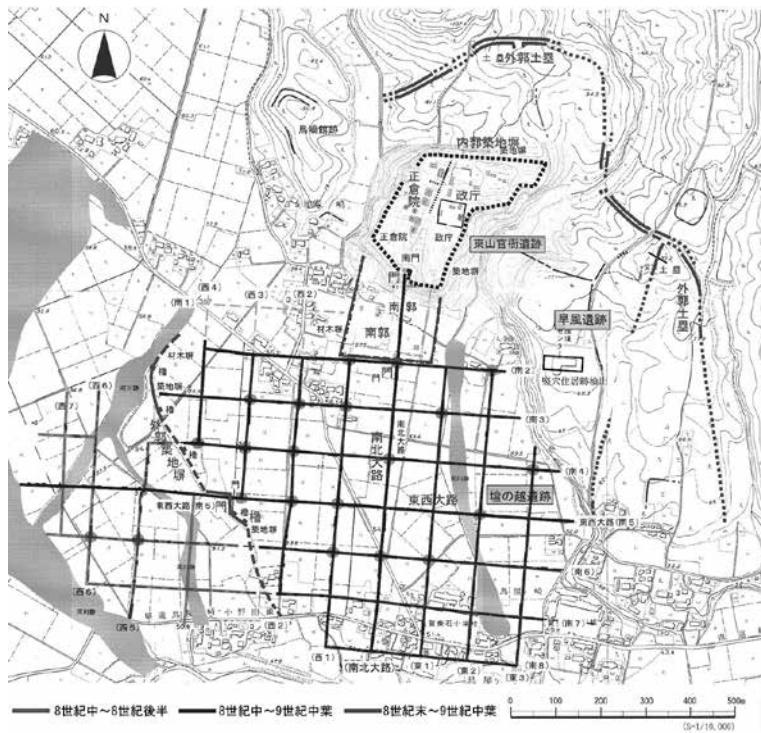


図9 加美町東山・壇の腰・早風遺跡全体図（8世紀末～9世紀中葉）
(加美町教育委員会 2008『壇の腰遺跡 XV』図版125を編集)

説を出されておりますが、それはともかくとして、そういう説もあるとということを紹介しておきたいと思います。

駆け足ですけれども城柵にはこういったようないろいろな施設が造られたということをお話し申し上げました。次は城柵が巨大化する後半の話に移っていきたいと思います。

三 巨大化する城柵

(一) 大崎平野(宮城県北部)の城柵

まず、図9は宮城県加美町にある東山遺跡です。点線で囲った部分が東山遺跡と呼ばれている部分です。内部に政庁があります。その西には



図 10 大崎市玉造柵跡（宮沢遺跡）全体図
(古川市教育委員会 1993『名生館官衛遺跡X III』第1図をもとに編集)

正倉院と呼ばれる倉庫群があり、この政庁と正倉院その構造からここは郡家、郡の役所であるということがわかります。ただ、この周りを囲っている点線の部分は築地塀です。これは郡家の構造はない、郡家の区画施設ではなく、城柵の構造であるということから基本的には、東山は城柵であるという、共通認識がなされています。またおよそ八世紀の中頃ぐらい、奈良時代の真ん中あたりに南側の平野部に碁盤の目のような方格地割が造られます。都ののような区画が広い範囲にできます。図の薄い色の西側部分にもつくられます。それが奈良時代の終わり頃から平安時代の初めにかけて築地塀ができます。そして櫓が建てられる。それから門が建てられる。この築地塀ができたときに、築地塀より西側部分は廢

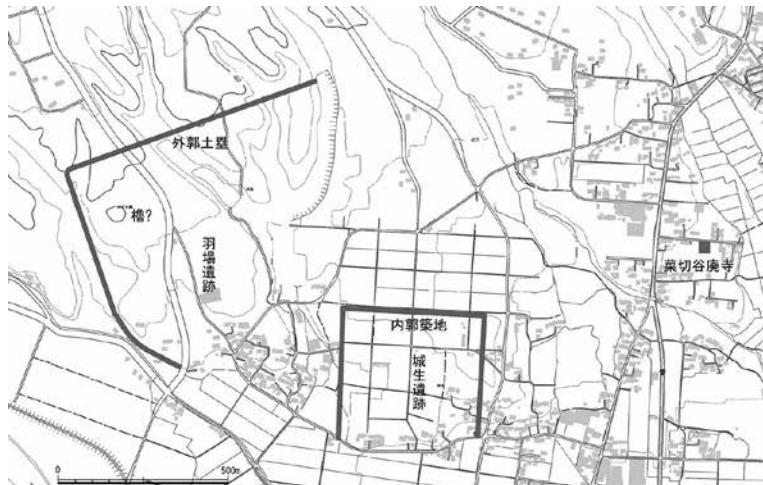
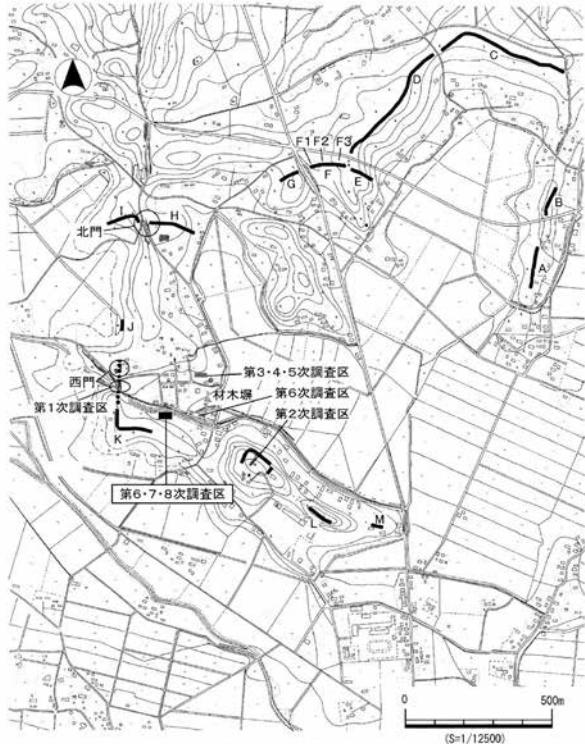


図 11 加美町城生遺跡全体図

棄されます。築地堀から内側に取り込んで、取り込まれた部分が、その後も継続します。さらには北側の方にも土塁が新しく設けられ、全体の規模は東西一二〇〇メートル、南北一四〇〇メートル以上となります。こういう大きな変化が、八世紀末あるいは九世紀の初めに起きているのです。

次に大崎市にある宮沢遺跡をとりあげます。発掘した面積が非常に少ないので、遺跡の性格であるとか年代などについては議論がまだ定まっていないのですが、中央に内郭と呼ばれるような区画がありそうだということがわかつています。このあたりで発掘を何ヶ所かでしているのですが、八世紀の中頃、奈良時代の中頃の時期のものが出ています。役所で使うような硯であるとか、あるいは蓋付きの碗であるとか、そういういたものが出てきますので、このあたりは八世紀の中頃から官衙として機能していた可能性が高い。これが九世紀になると大きな範囲が土塁や築地で囲まれるようになります。先ほど



※A～M 土壘もしくは築地と考えられる遺構

図 12 大崎市新田柵跡

(田尻町教育委員会 1998『新田柵跡推定地』第2図をもとに編集)

の東山遺跡のように最初は小さかった。それが九世紀に東西一五〇〇メートル、南北一三〇〇メートルに拡張されるという同じパターンが見られます。

似たようなものに、その隣の城生遺跡（図11）といわれるところがあります。同じように本体の部分の周囲に年代がはつきり確認されていないのですが、やはり外回りを大きく区画する時期があるということがだんだんわかつてまいりました。

新田柵跡はこれも同じ、少し東のほうにいったところですが、同じような例がわかつてき

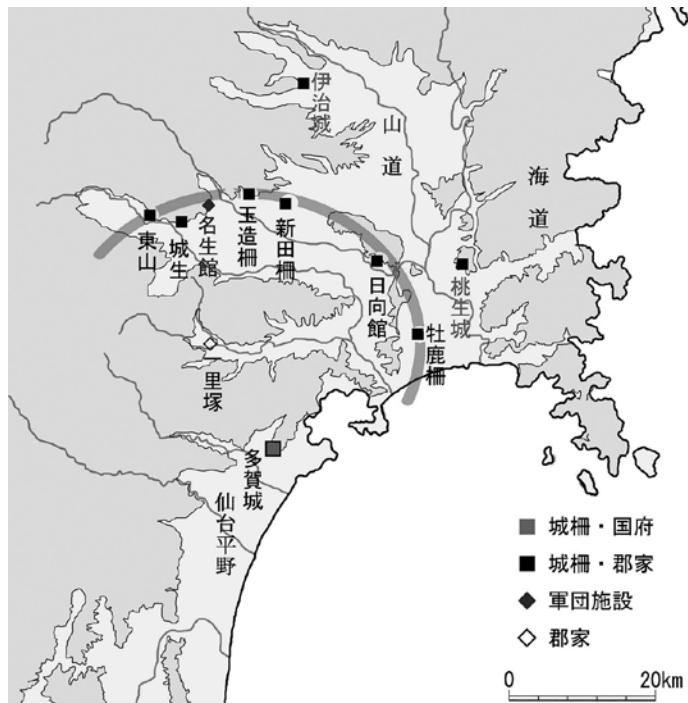


図 13 大崎平野の城柵群（東山～日向館遺跡）

ています。それらを地図（図13）に落しますと、西から東山遺跡、城生遺跡、名生館というのはちよつと置きました。玉造柵・宮沢遺跡、それから新田柵、あるいは日向館というようなどころが分かつてきました。これらを結んでみると、円弧を描くような形、その中心はどこかというと多賀城です。多賀城を扇の要とする扇端のようにみえますので、多賀城を防衛する「扇端防衛ライン」と私は名付けているのですが、こういったようなネットワーク、城柵のネットワークというものが作られています。

(二) 横手盆地（秋田県内陸部）

次に秋田県の払田柵遺跡を見てみま



図 14 大仙市払田柵遺跡全体図
(秋田県埋蔵文化財センター 2009『古代城柵と蝦夷』9ページ図に加除筆)

す。今まで見た地域とはちょっと離れます。この払田柵（図14）というのは、八〇二年に造営された城柵です。今まで見てきたのは八世紀の半ばに造られたものが、九世紀の初めぐらいに拡張するという事例です。ここでは、九世紀の初めに造られ、最初から拡張されています。一番外側に外柵があります。外柵というのは低湿地に角材を立て並べたものです。その内側に外郭があり、北側に角材が並べられています。外郭には櫓が伴います。外側の外柵には櫓がない。ですから、本来的な城の外郭というのは、内側の外郭線になります。外柵のほうはある意味では見せかけの外回りということになります。これは非常に大きい。東西一・三キロの規模です。

（三）三十八年戦争

こういった巨大化する城柵ができる時期は、実は東北地方で中央政府、国家側と蝦夷との戦いが三八年間

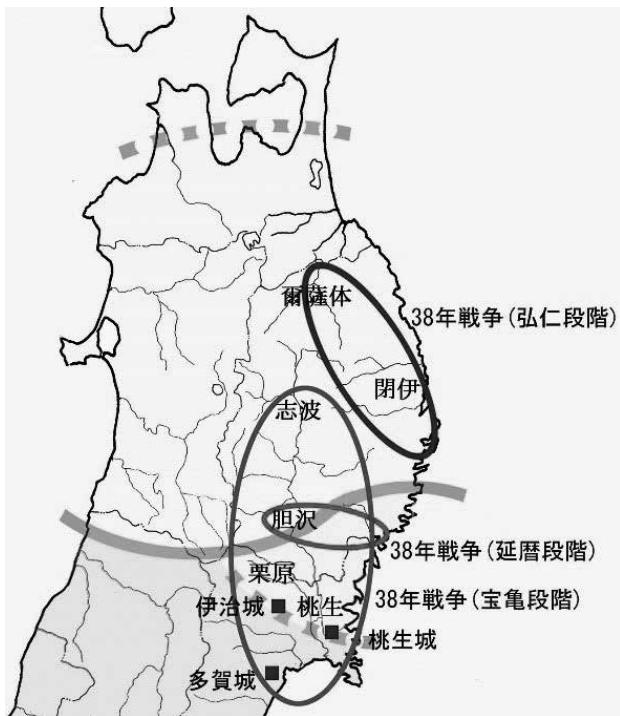


図 15 38 年戦争の対象地域

に及ぶ「三十八年戦争」と呼ばれる大きな戦争の時期にあたります。最初は七七四年、宝亀五年に海道の蝦夷たちが桃生城を襲撃します。発掘でも政庁の建物跡の焼けた跡が実際に確認されています。海道の蝦夷というのは、海側にいた蝦夷というふうにお考えいただきたいと思うんですが。それから数年後、宝亀二年、伊治公皆麻呂これほりのきみあざまろといいう人が、按察使あせちの紀広純きのひろづみを殺害した。中央政府側の、現地のトップの役人を殺してしまった。殺しただけではなく、おそらくは大きな合戦もあつたんだろうと思います。

そして、伊治城こればり、多賀城を焼く。多賀城を焼いたということは、陸奥の国

府を焼いてしまったということです。非常に大きな出来事になるわけですね。先ほど申し上げた多賀城を守る「扇端防衛ライン」というのは、こういった多賀城を含む城柵が焼き討ちにあったという、そういう衝撃を受けて巨大化したものになったんだろうと思われます。三八年間に及ぶその後の戦いもありますが、今日は、これにはあまり触れないでおきたいと思います。いずれにしましても国家側は、城柵の巨大化を行つて多賀城を扇の要とする扇端防衛ラインを強化したと考えられます。

おわりに

なかなか西日本との比較ということまで申しあげることはできなかつたのですが、こういった城柵のネットワークというものは、例えば九州からあるいは瀬戸内海にかけての西日本の古代山城のネットワークと通ずる何かがあるのではないかなどというふうに思つております。また巨大化するのは城柵本体を守るために外郭を大きくして、そして実際にはそれが軍事的に本当に意味があるかどうかはともかくとして、見せかけでもとにかく大きく作ろうということがかなり大きかつたのではないか。先ほどの鞠智城のお話の中で、官道から見えるところだつたでしようか、土塁を造るときに、そちらの方を立派に造つたということがありました。それは見せるための土塁というような意味合いもあつたのだろうと思います。東北の城柵においても同じようにそいつた見せるということが巨大化の大きな要因ではないかなというふうに思います。どうもご静聴ありがとうございました。

講演④

関東・東北の古墳時代社会の動態と城柵の成立

講演者紹介

若狭 徹（わかさ とおる）

明治大学文学部史学地理学科卒業。高崎市教育委員会文化財保護課長を経て、現在、明治大学文学部准教授。史学博士。専門は日本考古学。

「関東・東北の古墳時代社会の動態と城柵の成立」

明治大学文学部准教授　若狭　徹

はじめに

皆さんこんにちは、ご紹介いただきました。明治大学の若狭でございます。私は、これまでの先生方とちょっと研究している時代が違いまして、少し古い古墳時代を専門としております。ですので、今日このあとの議論が囁み合うか、とても不安なんですけれども。私は今日、話題になつております東北城柵の前史をご紹介したいと思います。どのように東北の農耕社会が開かれていくて、城柵が現れるかというプロセスを紹介してまいりたいと思います。よろしくお願ひいたします。

一 古墳文化と前方後円墳ネットワーク

今日話題になつています「城柵」は、飛鳥・奈良時代以降の大規模な列島改変、そこへの国家的なアプローチの象徴だったわけですね。そこで今、ご紹介があつたような対蝦夷戦争も行われているということで、その対象となつた蝦夷のイメージはというと、国家にまつろわぬ人々、王化と制圧の対象、それから中央から見ると得体がしれない存在と、そういう像が描かれているわけです。ただ、果



たしてそうなのかというのを、古墳時代を通じて考えてみたいと思います。と申しますのも、ここにいらっしゃる皆さんは関西、古墳の本場の方々です。巨大前方後円墳があるのを、日々見慣れていらっしゃる方々ですが、東北にも大きな古墳が実はあるのですね。そして、その古墳時代の三五〇年の間には、大規模で波状的な南北関係があるわけなのです。それは大きく三つ。一つは集団移動と耕地開発です。これは環境変動を伴っております。それから渡来技術の導入と新産業の展開、朝鮮半島との交流の中で新しい技術の波、人がやつてくるという波がありました。

そして、それを結ぶ、北海道から朝鮮半島にまで至る「長距離物流ネットワーク」、これが古墳時代に結ばれているわけです。その結果、東北にも前方後円墳が築かれていきます。古墳時代の始まりと終わりは前方後円墳の出現と終わりで象徴されるのですが、そこには「前方後円墳システム」、「前方後円墳ネットワーク」というのが築かれたと考えられております。古墳時代になる前の弥生時代というのは、バラバラに国々が併存している社会です。それを乗り越えて、前方後円墳という同じ形のお墓、同じ考え方で結ばれる連合体ができるのが古墳時代の特色なわけです。ですので、東北に前方後円墳があるということは、そういうシステムに加入しているのだと考えられます。前方後円墳というのはランドマークでありますので、前方後円墳があるところは、安全に物

が行き交うような経済圏が確立している。海運とか陸路とかの安全保障体制、夜盗に襲われず海賊に襲われずに安全に物が行き交うような体制が確立したのです。そういうランドマークとして前方後円墳があるところを目指して、人々が交流する、そういうネットワークができた。これが古墳時代の大きな特色だと思います。そういうシステムに東北は入っているわけです。その辺を確認しておきたいと思います。

二 古墳文化の成立と北進

(一) 前期古墳文化の成立

それで、東北地方の古墳時代がどう始まるかということなのですが、東北地方の弥生時代後期はちょっと人口が少ないのでですね。遺跡が非常に少ない。比較的広い土地が空いているような状態でしょうか。その南にあります関東地方の地図が図1です。関東地方の弥生時代はご覧のように小さな土器様式圏がありまして、それぞれ国々のようなものがあるわけです。そういう状況が三世紀になりますと大きく解消されます。このAとBの波があるのでけれども、東海地方から大量に入ってくるのです。この関東にも人がたくさんいるのですけれども、実は関東の弥生人たちは低湿地の開発が苦手なのです。ジメジメしたところをほつたらかしにしてありました。そういうところに東海地方から木曽三川が流れる濃尾平野を開拓してきたような、ジメジメした土地が好きな集団が大量に入つてく

るのです。そして、在来弥生人がいないような低湿地を大規模に開発していきます。そして使えなかつた低湿地をまたたく間に水田に変えていって関東に大きな前方後円墳や前方後方墳が登場するという流れがあります。この流れが、もう一つの流れを生みます。特に、この房総地域の集団がこの流れに突き動かされて、北関東へ拡散していくのです。それまでこの地域には首長があまりいなかつたり、「環濠集落」という守りの村がない。比較的そういう緩やかな社会が存在していました。そこに東海集団が拡散をしていくて、それまでとは違う階層社会を作り上げていく。そして、この余波がこの「ひたちなか」辺りの大きな港から、さらに船に乗って北のほうに波及していく、あるいは中通りを通つて東北に入つていいくということで、この房総地域の集団が大きく展開をして、東北に大量に入つていく

ということが分かつています。

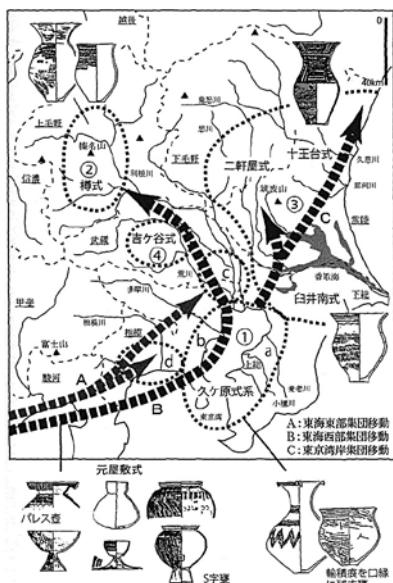


図1 関東における古墳文化の成立

このように、太平洋岸では東海地方の集団が、日本海側では北陸北東部集団が東北地方へ大規模に動いて行く現象がありまして、これは環境難民だという考えが最近なされています。最近、環境学者の研究、自然科学の方の研究がたいへん進みまして、遺物の中に封じ込められた酸素同位体ですとか、湖にたまつた年縞という砂の層、そういう



写真1 宮城県伊治城跡出土の塩釜式土器
(栗原市築館出土文化財管理センター)

うところを分析していく中で環境変動のことが分かつてきて、弥生時代後期にはものすごく雨が降ったということが判明しています。実は、いま我々が暮らす社会はすごく安定期にあります。最近大雨がありますけれども、弥生後期には、ああいう状態が何百年も続いたということが分かっています。要は田んぼが作れなくなつた北陸、あるいは東海の人々が環境難民として北上してくるということが分かつてきました。そういった集団が関東地方の弥生社会を再編すると、玉突きのように千葉県地域の人たちが北進し、東北に定着していくのですが、その結果として成立しているのが東北地方の古墳時代前期の土器様式です（写真1）。この中に在来の東北の弥生系の要素がほとんど残つていなゐのです。特に、右端のような平底の甕、煮炊き具が定着するのですけれども、この甕の形式が房総地域、千葉県地域にあるということで、千葉県地域の集団が大挙して移動していく北関東や東北の太平洋側の弥生文化を開くということが証明されているのです。

そうやって、4世紀の前半には東北地方に前方後円墳が出現してまいります。東北の古墳の変遷を示したのが表1で前期前半、前期後半、中

		前期前	前期後	中期前	中期後	後期前	後期後	飛鳥	城柵
畿内		オオヤマト	佐紀	百舌鳥・古市		今城塚	五条野丸山 藤ノ木	石舞台 岩屋山 野口王墓	
関東	山道	前橋天神山 前橋八幡山 将軍塚	浅間山 大鶴巻 野本将軍塚 上侍塚	太田天神山 別所茶臼山 白石稻荷山 お富士山	井出二子山 並稲荷山 摩利支天塚 埼玉稻荷山	七輿山 埼玉二子山 琵琶塚 丸墓山	綿貫觀音山 八幡觀音塚 埼玉鉄砲山 吾妻	宝塔山 八幡山 壬生車塚 山王塚	
	海道	今富塚山 宝来山 星神社 梵天山	姉崎天神山 蓋間山 高柳跳子塚 三分目大塚	舟塚山 内裏塚	姉崎二子山 祇園大塚山 三昧塚	九条塚 玉里舟塚	三条塚 金冠塚 大堤塚現塚 風返稻荷山	龍角寺岩屋 駄ノ塚 船玉	
陸奥	中通り	● ■	■ 大安場		国見八幡塚 80m~	● ● ● 80m~	● ● ● 80m~	谷地久保 蝦夷穴 ○ ○	
	浜通り	■	■ 桜井 玉山			●	● ●	○ 金冠塚	
	阿武隈下流	●	● 爰宕山	● ●	方領権現 80m~				
	仙台平野	■ ■ 飯野坂	■ ■ ■ 雷神山 ○ ○ ○	経の塚 ○ 名取大塚山 ○ ○ ○	一塚 二塚	○	○ 宝領塚	郡山 多賀城 724	
	大崎平野	■	● 青塚 ○ ○ ○		念南寺 ○			伊治城 767 名生館 城生 宮沢	
	胆沢		会津大塚山		角塚 ○			胆沢城 802	
会津盆地			亀ヶ森						
			○ ○ ○ 古津八幡山 城の山						
越後北		菖蒲塚 ○ ○ ○	○ ○ ○ 古津八幡山 城の山	○ ○ ○ 古津八幡山 城の山	○ ○ ○ 古津八幡山 城の山	○		渟足柵 647 磐舟柵 648	
出羽	米沢盆地	■ ■ ■	● 稲荷森		● ● ● 80m~		○ 金原	優嗜曇柵	
	山形盆地		■ ○	大師森山 石棺	○ ○ ○ 菅沢 2 ○ ○ ○ 大之越				
	庄内			菱津石棺				出羽柵 708	

■ 前方後方
 ● 前方後円
 ○ 円
 ━━ 群集塚
 ━━━ 横穴墓
 ● ● ● 80m~
 ■ ● ○ 50~79m
 ■ ● ○ 20~49m

表 1 古墳の推移と城柵の関係

期前半、中期後半、後期前半、後期後半というふうになつております。

これを見ていただきますと、東北地方では前期のうちにもう大きな前方後円墳がたくさんできているのがわかります。四角い印は前方後方墳で東海系統のお墓、それから丸い印が前方後円墳で大和王権と結びついた豪族のお墓になりますけれども、四世紀の後半にはもう大きな前方後円墳がたくさん林立しているというのがおわかりいただけるかと思います。しかしながら、中期の前半、ヤマトでは古市・百舌鳥古墳群の頃ですが、その頃になるとこうシユーッとしほんでしまうのです。この頃から寒冷化になつたともいわれています。古墳寒冷期というのですけれども、ものすごく寒くなつたと、そういうことで一度定着した農業がここでいつたん破綻している可能性も考えられます。しかし、中期後半になりますとまたグゲツと古墳がたくさんでてくるという振り戻し現象があります。そして後期前半、繼体朝の頃なのですけれども、その頃はまた少し縮みます。そして、後期の後半になりますと福島県を中心に、また振り戻しで前方後円墳が再出現しまして、飛鳥時代になると群集墳とか横穴墓が大量に築かれると、こういう流れを示しています。

(二) 共立王の登場

前方後円墳が出てきたり無くなつたり、出てきたりという繰り返しをしながら継続していくのです。図2は大きな古墳、東北地方における100m級前方後円墳、前方後方墳の図面を貼り込んでみました。前期前半に会津地方の方で大きな前方後円墳が登場しまして、そのあと前期後半にピーカクを

	出羽 越後	会津	中通り 浜通り	仙台平野	大崎平野 胆沢
前期前半		堂ヶ作山		桜井	
前期後半	日本海側最北の前方後円墳 菖蒲塚 稻荷森 亀ヶ森	会津大塚山 大安場 玉山 愛宕山	遠見塚	青塚	0 100m
中期前半		名取大塚山			
中期後半			角塚	日本最北の前方後円墳	

図2 東北地方の大型前方後方墳・前方後円墳
(墳長80m前後以上と最北の事例)

迎えます。雷神山古墳は、宮城県の名取市にあるのですけれども、これなどは一六八mという大きな前方後円墳です。こんなものが登場しているというのが、東北の古墳時代前期の実像ということになります。図3は古墳前期の東日本の状況を示した図なのですけれども、くり返しになりますが、東海集団が南から入ってきた。これに突き動かされた房総の集団が東北の方に陸路、それから海路で入ってきます。この海路で行く途中にも大きな古墳が作られていて、この二つのルートが結ばれるところに雷神山古墳ができます。ですので、仙台平野周辺、名取川の流域というのは陸路と海路が合わさる交通ネットワークの要所、交易の要所だと思います。一方、日本海側の北陸の環境難民は日本海を北上しまして新潟を経由して、阿賀野川ルートから会津に入ります。会津盆地にも大きな古墳がたくさんできるのですが、それは北陸集団が拓いていくのです。このように、北陸集団と東海集団、その余波の南関東集団の北上によって東北の古墳時代は拓かれているという形です。

(三) 古墳文化の最前線

この頃、北海道の続縄文集団

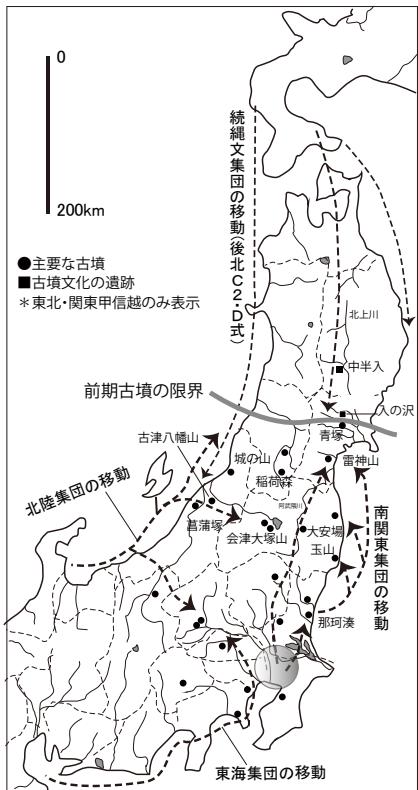
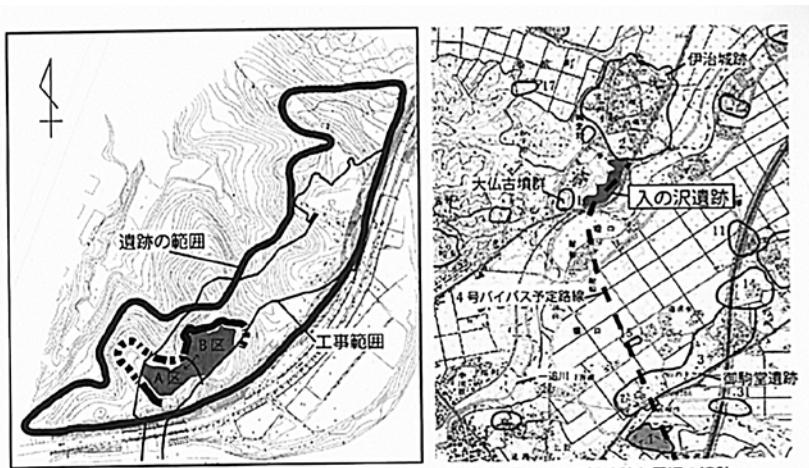


図3 東北・関東の古墳時代前期の関係図

という農耕を行つてない集団が、南下をしてきまして点々と痕跡を残すのですけども、その境界が宮城と新潟を結んだラインになります。これが前期古墳の限界線ですね。この、ここはちょうど先ほど八木先生の城柵ネットワークのあの線と一致しております。青塚古墳というのが最北端の前方後円墳です。そして、この青塚古墳から二〇kmほど北上した宮城県の県北に入る沢遺跡というのが出現します。四世紀後半の環濠集落で、こういう集落（図4）です。尾根のトップのところに深い堀を巡らせ、さらに柵を巡らせているという防衛集落です。この防衛集落のすぐ下が実は伊治城なのです。
伊治公^{これぱり}皆^{のきみ}麻呂^{あざまろ}が反乱を起こした伊治城、律令期の七六七年の最前線、そこと同じところに古墳前期の最前線があるというのは非常に示唆的ではないでしょうか。しかも、伊治城は平地なのですけれども、入の沢遺跡は丘陵上にあるということでより防衛性が高いということなのです。写真2～4が入の沢遺跡です。高いところに深い堀を巡らせています（写真3）。張り出しもあります。それからこれ柵の掘り込み（写真4）なのですけれども、1mぐらいの深い溝を掘つて柵木を立てていくという堅固な集落です。そして、家が焼けています。襲われているのです。その焼けた家のところから青銅鏡が四枚でできているのですけれども、これ通常ですと東北地方の相当上位の古墳に入る鏡です。東北地方では、八〇m級の古墳でも鏡を副葬していらないのがありますので、こここの遺跡にいた主は亡くなれば相当大きな古墳に入つた人だつたということが分かるんです。そういう首長層が、この高い集落で防衛をしているというのが東北の古墳時代最前線であり、まさにその伊治城と同じところにあるとい



遺跡範囲と調査区 (S=1/5,500)
(遺跡範囲は2014年当時、2016年11月に変更)



図4 入の沢遺跡
(村上祐次 2017 「入の沢遺跡の調査結果」『古代倭国北縁の軋轢と交流』雄山閣)



写真 2



写真 3



写真 4

写真 2～4 入の沢遺跡

(写真は辻秀人編 2017『古代倭国北縁の軋轢と交流』
雄山閣より)

うものです。

それからその伊治城の下層部でも古墳前期の溝で囲われた村が出ていますので、平地の拠点と山の上の防衛拠点があるという二重構造を持っています。ただ、この防衛対象が南下する続縄文集団に対してなのか、それとも古墳文化の中の鬭争合いなのか明らかではありません。これからもっと研究が必要かと思います。

三 空疎化する東北の古墳中期前半

(一) 大型前方後円墳の不在

ここで、東北の大きな前方後円墳をご紹介します。写真5が太平洋側最北の大型前方後円墳、青塚古墳です。前方部が削られているのですけど、大崎市にあります。それから日



写真5 青塚古墳（宮城県大崎市）



写真6 稲荷森古墳（山形県南陽市）

本海側最北の前方後円墳としては、山形県の南陽市に稻荷森古墳（写真6）があります。そして、先ほどの八木先生のお話の防衛ラインの要のところの仙台平野には最も大きな一六八mの雷神山古墳が成立をしております。この前期後半の東日本の大規模前方後円墳を挙げていきますと、一番は群馬県の浅間山古墳です。一七二mです。二番目は、甲斐銚子塚古墳で、これは山梨県にあり、一六九m。そして第三位が雷神山古墳。この三基はほぼ同じ大きさですよね。で、四世紀後半の西日本を含めた巨大前方後円墳を挙げていくと大王墓とみられる佐紀陵山古墳、二〇九m、宝来山古墳が二二七mで、東日本の三古墳とあまり差がないで

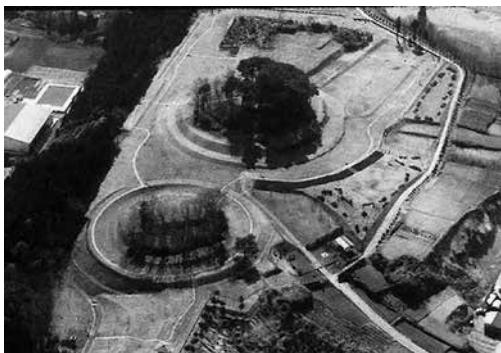


写真 7 雷神山古墳

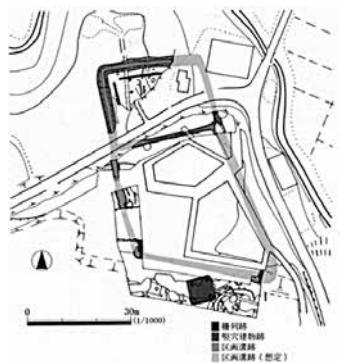


図 5 伊治城の古墳前期遺構
(大谷基 2014『伊治城』『古墳と続縄文文化』高志書院。原典は築館町教委 1988)

すね。倭王権の力が、まだそれほど強固じゃありませんので大王墓と地方豪族墓がそんなに差がない時期です。それから丹後半島にも二百m級の古墳がありますし、播磨の淡路海峡を押さえている五色塚古墳も一九四m、後に吉備氏が登場してくる吉備の金蔵山古墳一六五m、それからなんと九州南端部の大隅半島にも一五〇mの唐仁大塚古墳があるのです。中央の古墳が突出しておらず、周辺にも大きな前方後円墳があるというのがこの頃の特徴です。

したがつて、雷神山古墳に埋葬された人は、東北地方の共立王、諸豪族たちに支えられた人で、私は倭王権の同盟者の一員ではなかつたかと考えております。四世紀後半というのは倭王権と地方豪族の同盟の強化がなされ、王権側は初めて对外進出をするという時期なのです。広開土王碑（中国吉林省集安市）が五世紀初頭に刻れますけども、四世紀の終わり頃に倭と高句麗軍が激突したと書かれています。そういう東アジアと倭国との組みの中に、この東北の王が入つてい

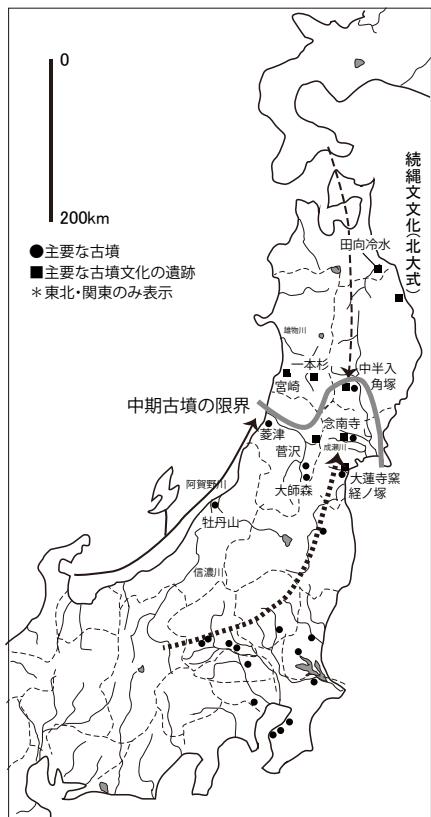


図 6 東北・関東の古墳時代中期の
関係図

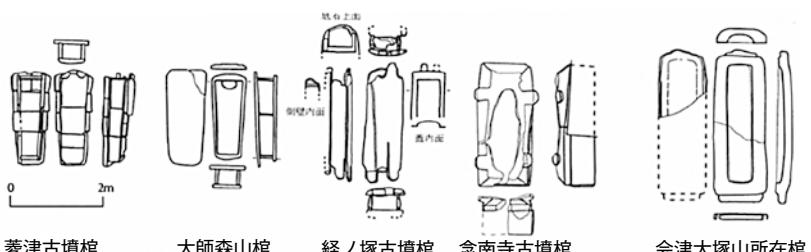


図 7 東北地方の石棺 (石橋 2013)

てもぜんぜんおかしくないんじやないかと思います。



写真8 菅沢2号墳出土の畿内系埴輪

つづいて、中期の前半、ここは少し低調になるのですけども、中期の後半になりますと、またグーッと古墳文化が東北に伸びていくわけです(図6)。一つは日本海ルートが機能しています。新潟市の阿賀野川河口近くに牡丹山古墳(ほたんやま)という新潟県で唯一、埴輪を持つてゐる古墳ができます。後の渟足柵とほぼ重なる場所です。やはり、後の「城柵」は古墳時代の交易拠点、あるいは経営拠点と重なつてゐるということが明らかです。このラインが海沿いに北に伸びていきまして、山形県に石棺文化が及んでいるのです。それから写真8のような畿内系埴輪の文化もこの頃に山形県に導入されていきます。一方、この頃、太平洋側でも前方後円墳が北上しまして、岩手県南部の奥州市の角塚古墳、ここまで北上していくことになります。このように、この時期は古墳群が一番、北進しまして畿内要素が強く入つてくる。そして、鉄器生産や馬生産、それから焼き物、特産品の琥珀の加工などの手工業が隆盛してくる時期です。さらに、東北にも

長持形石棺(4世紀末～5世紀中葉) 以降の石棺文化

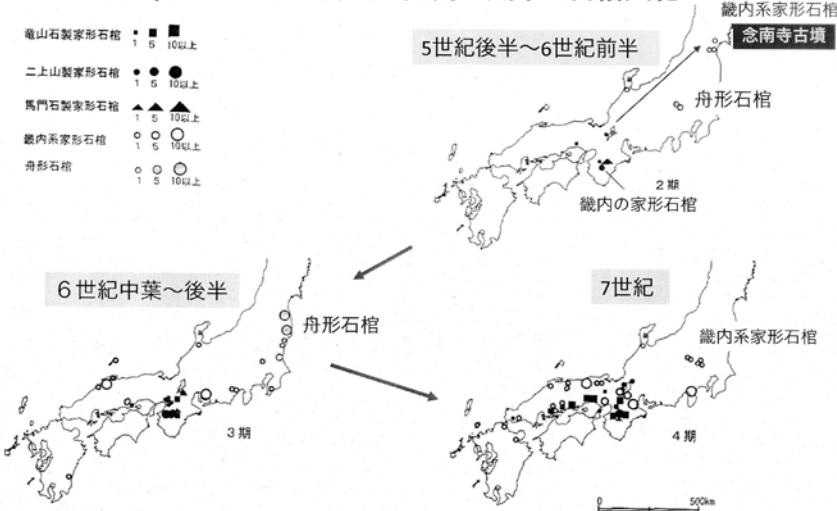


図8 5世紀後半以降の家形石棺・舟形石棺の分布推移図
(石橋宏 2013『古墳時代石棺秩序の復元的研究』六一書房より)

朝鮮半島系文物がちらほら見え始めたり、続縄文集団との交易、南北交易が強化される時期で、図6のような流通ネットワークができるときます。

(二) 点的に存在する西の要素(図8)

西日本系石棺文化の展開について補足すると、この時期には、長持形石棺（石を組み合わせて作る大王の棺といわれている石棺）が畿内では流行するわけですが、その長持形石棺の模倣品、こういう立派な石棺が山形県の山中の洞窟遺跡から出てくるのです（写真9）。これ今年の夏、私、山登ってきたのですが、この洞窟の中にこの立派な長持形石棺が二基置かれています。それから太平洋側でも仙台市周辺の海岸部にやはり長持形石棺が導入されており、この北縁の地まで畿内系の石棺文化がいち早く



写真9 山形県大師山洞窟（左）と長持形石棺（右）



写真10 念南寺古墳の家形石棺

及んでいるということがわかつています。

その長持形石棺に続きまして、畿内の方で流行してくるのが家形石棺なのです。その家形石棺も実は東北地方にあります。日本の中でも古い時期の家形石棺が宮城県から見つかりました。宮城県の北縁部の念南寺古墳の埋葬施設から、この家形石棺が出てきてみんなびっくりしたわけなのです（写真10）。と申しますのも、念南寺古墳の石棺のほかにさらに二つの家形石棺が東北地方にあります。が、実はこの頃の関東にはないんです。関東はこの頃、一段階古いタイプの舟形石棺というのを使つていました。大和の方で家形石棺が採用されるや、その出現したばかりの一番ニューモードの石棺を、関東を飛び越えて東北が持つているという現象なのです。中間地



写真 11 角塚古墳（岩手県奥州市）

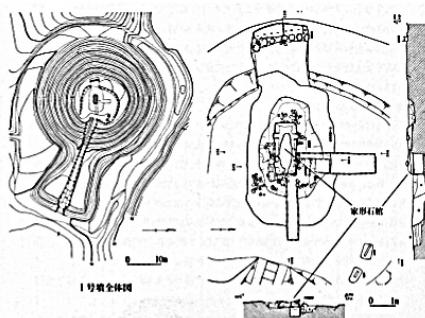


図 9 念南寺古墳と石棺出土状態
(高橋誠明 2014 「古墳築造終焉域の地域社会の動向」『古墳と続縄文文化』。原典は宮城県教委 1998)

点を飛び越えてしまっているということなのです。関東で家形石棺が出てくるというのは六世紀末になつてからなんです。それよりも百年以上古く東北の仙台平野周辺に家形石棺が導入される、そういう動きに注目する必要があります。

四 北進する前方後円墳——中期中葉から後半の動態——

(一) 関東の渡来人編成と前方後円墳の北上

この時期に北まで伸びていった古墳文化の象徴が、北縁の前方後円墳、角塚古墳です（写真11）。この角塚古墳のすぐそばから見つかったのが、中半入遺跡（なかはんにゅうせき）（奥州市）です。三〇m四方ぐらいを堀で囲んだ環濠遺構です（図10）。この中から竪穴住居跡が出てきています。朝鮮半島から竪穴住居跡がたくさん持ち込まれています。加えて、馬の遺体。日本で馬の生産が始まったのが、五世紀頃からなのです。その馬は国家財産になつていくのですけれども、その馬がいち早く五世紀

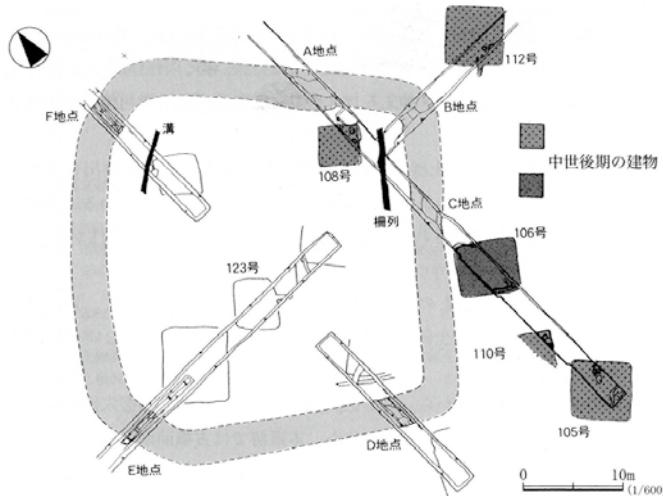


図 10 中半入遺跡の溝区画遺構

(大谷基 2014 「中半入遺跡」『古墳と続縄文文化』高志書院。原典は岩手理文 2002)

後半に東北にまで及んでいる。私はこの一帯で馬生産をしていてもおかしくないのでないかなと思います。そのほかにも鉄器製作痕跡が出てきており、手工業を中心として産業振興をしている豪族がいる。その豪族が、この角塚古墳に葬られるという流れがわかるわけです。

加えて注目されるのが続縄文土器と黒耀石製石器(図11)、これが出てまして、続縄文集団が加工した革などを西に流すという、物流拠点、生産拠点になつてゐる可能性が高いということがわかつています。ということで単なる古墳だけではなくて生産拠点そのものが、ここまで北上し、中半入遺跡などを核にして北の集団と交易網を結んだとみられます。続縄文系の皮革加工職人を抱えこんでいる可能性すらあるわけなのです。この中半入遺跡と角塚古墳が実は後の胆沢城のすぐそば、数kmの距離にあります。

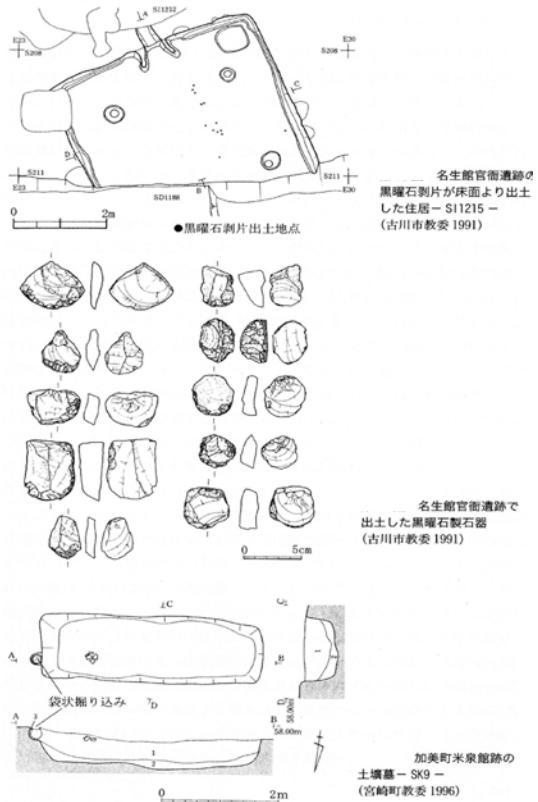


図 11 続縄文系石器と続縄文墓制
(高橋誠明 2014「古墳築造終焉域の地域社会の動向」『古墳と縄文文化』。
原典は古川市教委 1991、宮崎町教委 1996))

伊治城もそうでしたが、古墳時代の交易の最前線、地域経営の最前線が律令期の胆沢城とトレースされているというところも、非常に面白いですね。

なお、前方後円墳はここまでしかないのですが、古墳文化集団はもっと北上していくまして、青森県八戸市田向冷水遺跡からは、竈つきの堅穴住居が見つかっています（図12）。出てくるものも土師器です。北東北の遺跡ですけれども古墳文化の土器を使っているわけですね。そういう集

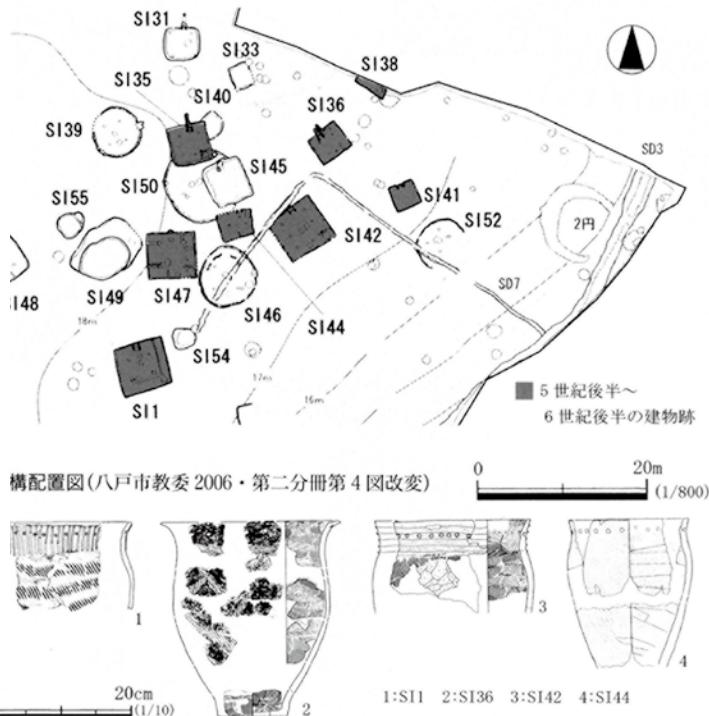


図 12 田向冷水遺跡

(大谷基 2014 「田向冷水遺跡」『古墳と続縄文文化』高志書院 * 原典は八戸市教委 2006)

団が本州北辺に入ってきてている。一方、そういうところに続縄文の土器もあつたり、黒曜石製石器があつたりしながらその交易関係も結んでいる。古墳文化の開拓者、交易者はどんどん北上しているのです。それから、在地の続縄文集団のお墓には、副葬品として立派な須恵器や土師器を入れられています。あちらの集団にも古墳文化側の文物が受容されていることがわかります。

(二) 山形県地域の展開

それから日本海側の山形県にある大之越古墳に触れておきます(図13)。山形盆地にある中規模

の円墳で五世紀後半のものです。この円墳からは、図13の遺物が出ていまして、これペンチなのですから、鉄鋗といいまして、鍛冶屋さんが鉄を打つときに持つペンチなのです。

それから、非常に古い馬具があります。それから鉄の斧があります。ただこの斧もちょっと不思議な形をしておりますので、渡来系の遺物の可能性があります。もう一つはこの大刀です。環頭大刀といつて鳳凰がモチーフの大刀です。日本ではこの大刀はたいへん流行するのですけれど、それは六世紀なのです。ところがこの古墳は五世紀の後半なのです。図14は、五世紀後半の環頭大刀の分布なのですが、ほとんど輸入品です。朝鮮半島から招来された環頭大刀を西日本人たちが持っているのが分かる。しかし、北で持っているのは、この東北の大之越古墳だけなのです。ということでお、大刀の系譜、その他の鉄鋗とか、馬具を持つているということを考えますと、この大之越古墳の被葬者というのは非常に渡来色の強い人の可能性があると思うのです。倭人だとしても渡来系の集団と非常に密接な関係を持っている人でしょう。この時期になりますと東北にも朝鮮半島系の文物を持つ



図13 大之越古墳の出土品

(石井浩幸 2004「山形県南部における古墳主体部の副葬品」『出羽の古墳時代』高志書院)

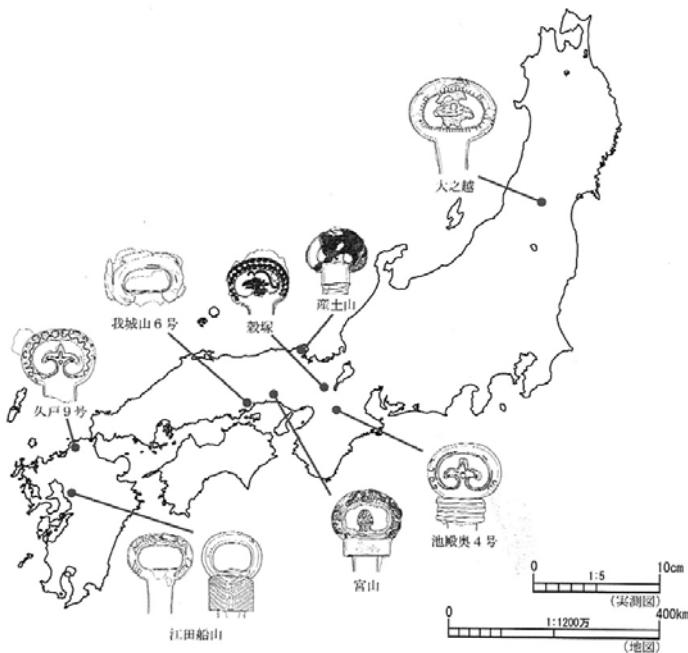


図 14 中期後半における装飾付環頭大刀の分布
(金宇大 2017『金工品から読む古代朝鮮と倭』京都大学学術出版)

た人やその技術が流れこんでいるということなのです。この頃、北関東の群馬県地方、それから長野県地方などでは渡来人を大量に導入しまして馬生産を始めていきます。四世紀末に、高句麗で騎馬軍団に負けた倭人は、これからは東アジアでやっていくには馬を導入しなければと思つて馬生産を始めていくのですね。自動車生産を始めるような感じなのですけれども、そういう新産業を倭王権の委任を受け、東国で始めていると思います。そして、そこで育つた馬を大和に送つていると思うのです。そういう波がこの出羽の地にもいち早く及んでいると考えることが可能です。そして、後期の前半には東北の古墳文化はまたちょっと落ち込むのですが、後期の後半になりますとだいぶ状況が変わってきます。



写真 11 名生館遺跡出土の関東地方土器系（左下）



写真 12 山畠横穴墓群（宮城県大崎市）

五 東北地方の南北での後

期古墳築造の差異

（一）関東における前方

後円墳の多出

欽明朝ぐらいの時期になると、関東で前方後円墳がたくさん造られるようになります（図15）。一方で、大和の方では王権の力が非常に強くなり、それまで前方後円墳を造っていた豪族たちが前方後円墳を止めようになつてくるわけです。官僚化が進んだ状況で、

すぐさまっていると思うのです。その経済力に倭王権は依存をし、またその経済力を高めるために前方後円墳をたくさん造つていたのです。

(二) 東北地方における前方後円墳築造の温度差

られたかといいますと、王家や中央氏族が東国の勢力と強くタイアップをした。経済的・軍事的に東国に依存をして互恵的関係を結んだと考えられます。屯倉のような経済基盤を、東国各地に置いていくということを行います。そういうなかで古い価値体系である前方後円墳制度を温存する状況が残りました。関東の中では倭王権とタイアップしたことを取りに見せつけ、他の在地豪族と差別化するため前方後円墳をたくさん造つていたのです。

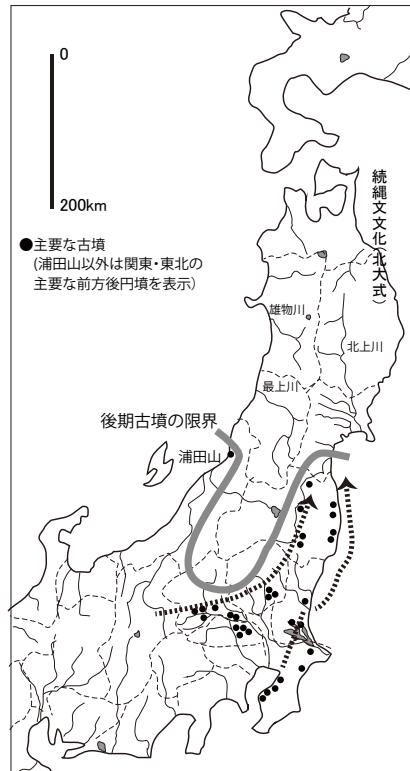


図 15 古墳後期の状況

大王と物部氏とか、有力氏族だけが前方後円墳を造るようになつてきます。そういう中で関東だけ前方後円墳を大量に造りつづけるという現象が起ころんです。六世紀後半の倭の大型前方後円墳の大半は関東にあります。なぜ、関東にこんな前方後円墳がいっぱい造

能性が高いと言っています。このときに、福島県地域に前方後円墳が復活をしていくわけなのです。同時に東北地方南部にも国造が任命されたのではないかと推定をされているところです（図16）。この頃、この東北地方に復活する古墳の様式というのは常陸と非常に似ています。常陸の埴輪様式、それから常陸を介した横穴墓とか装飾古墳などを導入していきますので、東北地方南部をもり立てたのは、在地の人々と共にこの関東の常陸とか、もともと人がやつてきた千葉とか南関東の影響でもう一回、前方後円墳が復活してくる可能性が高いと思います。

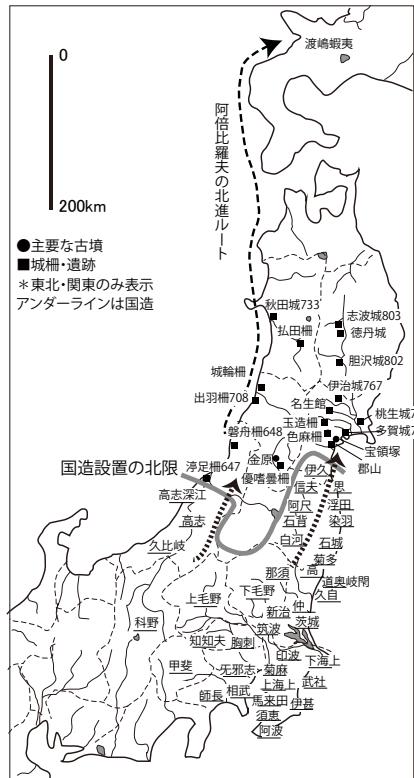


図16 東北・関東の古代の関係図

めに部民を配置したり、新しい渡来系の技術などを投入していくということが行われました。こういう前後円墳乱立の時期の一一番最後におそらく国造の任命があるんだろうと考えられます。専修大学の土生田先生は、各地の最後の前後円墳こそ、初代の国造墓の可

六 終末期から末期古墳の動向終末期古墳と横穴墓の展開

その古墳時代が終わるとき、そこにも大きな画期性があります。一つは関東系土器の出現と集団移住です。六世紀後半ぐらいから仙台平野、それから宮城県にかけて関東系土器が出てきますので、ここでまたかなりの移民が発生したのだろうと言われております（写真11）。そして、大規模群集墳や横穴墓、これが宮城県の北部まで造られています。こういう広域的な関東系土器や人の移動現象というものは、文献の記事よりもちょっと早く起こっています。文献では、上毛野君形名の蝦夷征討將軍かみつけぬのさみかたなの就任ですとか、阿倍比羅夫の北征とか、7世紀の中頃から現れるのですけれども、考古学的にはそれよりもだいぶ早く関東の人たちの北へのアプローチというのは始まっていると考えられます。それから、関東系の人々の影響のほかに、もつと広域的な人の移動というのもあります。その代表は「肥後型横穴墓」です。ここが今日のテーマとちょっとだけ重なつてくるのですけども、鞠智城がある菊池川流域に盛行した肥後型横穴墓というのが宮城県の一番北端に造られているのです（図17）。九州と東北との人的交流がこの頃から起こっていることがわかります。参考としまして、『続日本紀』に陸奥国の志太郡の生王五百足みぶいおたりという人が白村江の戦いに従軍したという記事があるんです。この志太郡というのは、まさにこの大崎地域のことだといわれておりますので、文献と考古学的な証拠というのがマッチングしてくる。いずれにしても、東北で前方後円墳が復活する地域、それと国造が置かれている地域というのが重なっていきます（図15・16）。そして、これより北が城柵が作られていく地

域ということになります。

写真12は大崎市の鳴瀬川南岸にあります川畠横穴墓群の写真ですけれども、これが東北の肥後型横穴墓です。図17のように三方に棺座を作りだします。菊池川流域の横穴墓も三方に棺座を作り出しており、そつくりですね。

小結

時間になりましたのでまとめますけれども、古墳時代における東北へのアクセスというのは、古墳前期の大規模移住から始まります。環境難民が太平洋側、日本海側から東北に大量に移住をしていて古墳文化を開きました。それで前期のうちに農業開発に成功をし、東日本三大前方後円墳の一つである雷神山古墳を造りあげる。私は王権との連合を果たしたのではないかなど思っています。その辺のエリアが、後の伊治城と合致している。

それから中期後半になりますと前方後円墳と古墳文化が北進します。この中期後半というのは、汎列島的な技術革新の時代です。明治維新と同じぐらいの革新の時代だと思っているのですが、朝鮮半島の新しい技術を導入して列島中が技術革新に燃えた時期です。その波がちゃんと東北まで来ています。ささらに、関東を飛び越えた中央との関係も見られます。中期の石棺のダイナミックな動きに加え

て、中期後半には窯業、須恵器生産が始まりますが、東北の須恵器窯は関東の須恵器窯より古く始まるのです。非常に先進的な動きも見せているということになります。

後期後半には、中央の王家や中央氏族との政治的結合を進めた関東と、東北地方南端エリアは同じ流れの中に位置付いてくるということで、国造が置かれるなど、非常に関係性を密にします。そういう流れの中で集団交流が活性化をして、例えば九州から人が動くだとかということも起こってきます。ということで、今後の課題ですけれども、蝦夷とされた人々は、得たいのしれない人たちではなくて、かつては古墳を造っていた人たち、しかも古墳前期には大型前方後円墳を造っていたような古墳文化に浴した人たちも含まれているということですね。歴史的な形成過程は多様で、その多様さを把握していく必要があるだらうと思います。しかしながら、やはり東北地方は環境的に厳しいです。環境変動の中での古墳の築造状況が伸び縮みを繰り返すのですが、その環境変動を克服していくような社会はどう成立していくのだろう、それが



図 17 肥後型横穴墓の比較
(熊本県教委 1984『熊本県装飾古墳総合調査報告書』、池上悟 2000『日本の横穴墓』雄山閣)

律令社会にどう結びつくのだろうと
いうことを、気候変動も含めて考え
ていく必要があるだらうと思います。
そして北海道からも須恵器が出るわ
けですが、そういう広域経済活動と

日本列島全体の「物流ネットワーク」を、これからよく考えていく必要があるだろうと思います。

こういったダイナミックな動きがあつた後に、城柵が造られていくということをご紹介いたしました。どうもありがとうございました。

パネルディスカツション

コーディネーター

佐藤 信（人間文化研究機構理事）

東京大学文学部国史学科卒業。東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了。奈良国立文化財研究所（平城宮跡発掘調査部）研究員、文化庁文化財調査官、聖心女子大学文学部助教授、東京大学大学院人文社会系研究科教授を経て、現在、大学共同利用機構法人人間文化研究機構理事。東京大学名誉教授。専門は日本古代史。博士（文学）。

パネラー

熊谷 公男（東北学院大学名誉教授）

國下多美樹（龍谷大学文学部歴史学科文化遺産学専攻教授）

八木 光則（岩手大学平泉文化研究センター客員教授）

若狭 徹（明治大学文学部准教授）

村崎 孝宏（熊本県教育委員会）

(司会)



皆さまお待たせいたしました。ただいまよりパネルディスカッションを開始いたします。まず初めに、パネリストの方々をご紹介させていただきます。東北学院大学名誉教授熊谷公男様、龍谷大学教授国下多美樹様、岩手大学平泉文化研究センター客員教授八木光則様、明治大学准教授若狭徹様、熊本県教育委員会の村崎孝宏、以上五名の方々にパネリストを務めていただきます。そして、コーディネーターは人間文化研究機構理事佐藤信様にお務めいただきます。それでは佐藤様のプロフィールをご紹介させていただきます。佐藤様は、東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了、奈良国立文化財研究所研究員、文化庁文化財調査官、聖心女子大学文学部助教授を歴任され東京大学文学部助教授、東京大学大学院人文社会研究科教授を経て二〇一八年、平成三十年より大学共同利用機関法人人間文化研究機構理事、東京大学名誉教授でいらっしゃいます。専門は日本古代史です。本日は「古代の山城と東北城柵」をテーマにパネルディスカッションを行なっていただきます。それでは佐藤様、どうぞよろしくお願ひいたします。

(佐藤)

どうぞよろしくお願ひいたします。この鞠智城シンポジウムももう十



回以上になつてきたわけですが今日皆さま方、朝からこの時間まで、五人の先生方のご講演を聞かれてもうだいぶ満腹感がおありじゃないかなと思います。私もまだ今日の話全部整理しきれどおりませんけれども、すごい新しい視覚で鞠智城を巡つて、あるいは今回は山城と城柵との関係等について興味深い話を伺うことができたと思っております。で、今日は、これから十七時三十分までを目指してパネルディスカッションを進めていきたいと思っております。一応、三つぐらいのテーマに分けて章立てをしてみたいというふうに思つております。一番最初が「東北の城柵と西日本の山城との関係」ということで、とくにその中では軍事的な施設であるか行政的な施設であるかと、まあ役所であるのかという面、それは立地の問題とも関係してくると思いますけれども、そういうテーマについて一番目の柱にしたいと思います。二番目の柱はこの山城、東北城柵の造営主体、あるいは造営したあとの経営の主体についてどういうところで造営、どういう単位で造営されたか、あるいは日常的な経営がど

う行われたかということで、これは律令国家との問題もありますし、九州の場合は大宰府が間にに入る場合があると思いますが、それぞれの国、国司ですね、東北の場合は陸奥国司との関係みたいなものもあると思いますし、あるいは郡レベルの名前がついているというお話も今日ありましたけれども、それぞれのレベルが実際の経営には関与してくるんだろうと思います。その主体がどうであつたかというようなお話をしたいなと思っております。最後に三つ目は、一つは鞠智城についてよく言われてきたことなのですがれども、歴史書に名前が載るかどうかかということがちょっと気になつております。そして、鞠智城は六九八年に繕治したという記事があつて、そのとき大野城と基肄城と鞠智城が繕治されたという、その三つの山城が十世紀ぐらいまで機能する。ほかの山城は八世紀の前半ぐらいには、もう機能を終えてしまうのに、その後も機能していくことが言われております。東北の城柵の場合も名前が六国史に留めてあるものとないものとがある。そういうものをどう考えるか。まあ山城の場合は、いわゆる神籠石式の山城つていうのは、あんまり記録を留めていないということがござりますけれども。そういうことを最後にちょっと議論してそしてまとめてみたいということがふうに思つております。

まず最初に、城柵と山城の比較ということで、軍事的な面と行政的な面とについてちょっと議論したいと思つております。最初に熊谷さん、今日はちょっと、このパネルディスカッションでは、「先生」と呼ぶのをやめて「さん」だけで呼ばせていただきたいと思つておりますのでよろしくお願ひします。

熊谷さん言い残したことを持めてちょっとお話ししていただきたいと思います。

(熊谷)

まず立地の問題ということですけれども、先ほどもお話しましたように城柵と山城というのは、非常に対照的な立地だということはもう明らかだと思うのです。立地というのは何を意味しているかと、創建当初の設置目的、あるいはその施設に国家側が期待したといいますか、意図した役割が反映されているというふうに考えられると思うんです。で、端的にいって、最近の議論では先ほどもお話しましたように、支配拠点、地域支配の拠点というような機能と、それから防衛拠点、山城であれば対外的な防衛拠点、城柵であれば東北の蝦夷に対する防衛拠点、こういうことがどう絡んでいるのかということで、議論が行われていると思うのですけれども。これは私のにわか勉強したうえでの考え方なんですけれども、支配の拠点という機能とそれから防衛拠点という機能は極論すると両立したいものだと思うのです。それはどういう意味かというと、支配の拠点というのは地域支配を行うということですから、山のてっぺんにいて地域支配というのが果たして行えるのかということがあると思うのです。やはり、周辺地域を治めるということは周辺地域とのつながりが非常にいいところじゃないと当然うまくいかないと思います。それに對して防衛拠点というのは、敵が攻めてきた場合、どの程度防御できるかっていうことですよね。ですから、これはもう山のてっぺんのほうがいいに決まつ

ているわけです。ですから、非常に単純化したいい方をすれば、いまお話したように両方の機能といふのは両立しがたい、ということが私の基本的な立場です。それで東北の城柵をみてみると、ほとんどが交通の要衝に立地しています。主要な幹線道路あるいは河川、さらには運河などがあります。運河で海なり主要河川とつなげるというようなことをやっています。つまりそういう形で周辺地域との交通といいますか、つながりというのを密にしておかないと支配はできない。ただもう一方でそういうところに立地すると攻められやすいという欠点もあるわけです。ですから現実に八世紀には多賀城、伊治城、そのほかにも桃生城とかが、あるいは秋田城も九世紀末近くになつてから蝦夷に焼き討ちされています。ですから、攻撃を受けるリスクは当然上がるのですが、それ以上にやはり支配をどうするかということの方が優先されたんじゃないかな、城柵はそういう立地ではないかと思うのです。それに對して、山城を見れば、先ほどもお話しましたようにもう違ひは明らかで、少なくとも創建当初の機能というのは当然のことながら、防衛、対外的な防衛の拠点ということが最優先された立地だと考えざるを得ないと思います。問題はその後、二次的に地域支配に関わったのか、関わったとすればどの程度、どういう形で関わったのかということはまた次の問題になると思うのですけれども、この点につきましては、やはり先ほどもお話しましたように鞠智城は別格だと思うのです。そもそも立地が、玄界灘方面から一番奥までありますし、それから大野城とか基肄城と比べてみてもそうだと思いますが、やはり丘陵地であつて、そんなに険しい山ではないというのもあり

ます。ですからこれは、奈良時代にあまり使われなくなる時期があるというお話をしたけれども、そこで性格なり機能が変わつて、二次的に地域支配に関わるようになつたのかなというふうにいまのところ思つております。

(佐藤)

ありがとうございます。まず、立地の方から山城の場合は高いところにあつて、あの、東北城柵は低いところにあるという違い。そして、それぞれの機能で二次的には機能の変遷もあるかもしれないということですが、これについては鞠智城について言いますと、もちろん造られたときは白村江の戦いの後の国際的な緊張の中ですから、防衛ということがあるんですが、九世紀代になると、正倉院的な機能がもっぱら史料には出てくるということも、あるということだったと思いますが、今の点については、村崎さん鞠智城の調査研究されている立場からはいかがでしょうか？鞠智城については防衛的な面とまあ地域支配というか地域支配の面は官衙的な性格をどうみるかということもありますけれども、官衙的な性格をどうみるかということについてはいかがでしょうか。

(村崎)

官衙的な機能について、どう考えるかということなのですけれど、鞠智城で確認されている「コの字」

形に配置された建物群が、正しく「コの字」形配置として官衛的な機能を持った建物施設であるかどうかというのがまだ完全な形で解明ができていません。鞠智城の南側、菊鹿盆地の中にも菊池郡の郡家推定地の西寺遺跡ですとか、それから少し時代的には新しくなるのですが、八世紀代から九世紀代にかけて、鞠智城の北西側に御宇田遺跡という官衛的な建物遺構も見つかっています。ですから、丘陵を下りたところに官衛的な機能を持つた遺跡が見え隠れしている。それじゃ丘陵の上に位置する鞠智城の機能と役割をどう考えたらいいのか。鞠智城にそういう正倉がたくさん造られる。それが、鞠智城周辺の「郡家」、「郡衙」とどう関わるのかというのがこれから詰めていかないといけない課題なのかなというふうに認識しています。

(佐藤)

国際的緊張から離れると、倉庫群としては稻穀とうこくを納める倉庫群としてずっと機能が続いているということは間違いないということですね。九世紀ぐらいでむしろ倉庫群が、総柱の倉庫群が礎石建ちになつて立派になつてくるというお話が今日あつたと思ひますけれども、そういう機能は続いているということかと思いますが、一方で熊谷さんのお話の中では山城は、私は後の城郭、日本城郭史の立場からいくと詰めの城つていうか、敵が攻めてきたときに立てこもつて、そのストックしてある米穀を食べながら耐え忍んで、敵の兵站が切れて、帰っていくのを待つていうことのようなことを、山城

の機能として思うのですけれども、そういう意味ではあの稲穀を貯積するということと逃げ込むといふこと。その点では熊谷さんが鞠智城はやっぱり特別だといわれたのは、鞠智城があんまり山が高くなかったということと、生産地帯のおそらく古代では菊池川流域がもつとも九州では米の生産の中心的な地域であつたというふうに、これは、『和名抄』などに見られる。あるいは『延喜式』の稻の存在形態から見ても九州を代表する米穀生産地帯っていうのは肥後の国なのです。筑前、筑後よりもはるかに多い米穀生産地、農業生産地帯だと、そこに置かれているっていうこともちょっと意味があるかなと思うのですけれども。詰めの城っていうことからいくと平城京などの場合も最初の頃は、高安城があつたりしたっていう感じもするのですが、今日は國下先生が羅城との関係でお話いただいたわけですけれども、そういう点ではちょっと関連してお話をいただけませんでしょうか。

(國下)

軍事か行政かというポイントですが、都を見ていくと、まず行政というか政治でなければならぬということだろうと思うのです。で、その政治を行つて行く上で日本の律令国家の場合には、天皇を頂点とする、ピラミッド構造というのがあって、それは儀式を行う場としての空間が必ず確保されなければならないということが一つのポイントなのだろうと思うのです。今日、私の資料でご説明できなかつた資料で8ページに、宮殿の図がございます。図1は歴代の飛鳥時代から平安京にいたる宮

殿の一番の中心部の絵が描かれているわけです。で、ここがつまり天皇が日常生活をする内裏があり、そして政治を行う場である大極殿、朝堂院があるという基本的な国家の政治を行う、あるいは儀式を行う場であるということなのです。これが一つ、律令国家における政治力の行い方といいますかスタイルというもの的基本形になつていて、このことから思えば、それは地方における行政体として生きていく場合でも、一つのお手本がここにあるということですから、これが模範になつて形として作られていくことなのだろうと思います。従つて政府域つていうものの模範は、一つは内裏ということが言われていましたが、時代によつて内裏もまた使われ方が変化するわけですから、天皇が政治を行うのと同じように、地方における役所に相当する郡家がどのような形で政務を行うのかという、その中心的な行い方こそが政庁として現れるんだろうという、全く無関係なものではないというのをこういうところからおわかりいただけるんじやないかなと思います。



(佐藤)

そういう律令国家の支配ということを考えるとやっぱり、國下先生が言われた「儀礼」というものがいかに大事かということで、そういう儀礼的な空間としての、東北城柵でいうと内郭の政庁に、担当するものが山城の場合にどうあるか、この点は村崎さんいかがでしょうか？

(村崎)

鞠智城の中でそういう儀礼的な空間というのが、現在、想定できるかというと想定できていないというのが現状かなというふうに思います。ただ、祭祀的な建物遺構といいますか特殊な建物として八角形建物が二棟確認されていますので、それがどういうふうな形で、その部分を利用しているのかといふのは今後の検討なのかなというふうには思っています。

(佐藤)

どのランクの政治を行うかという差はあると思いますけれども、地方におかれ公的な施設の場合、私は、正倉院の場合でも正倉院に田租でんそや出拳稻すいことうを納める儀式だとか、あるいは出拳稻を配る儀式、全國の郡家におられた正倉院では行つて、そういう意味でも儀式の場はそれなりにあるんじゃないのかなと思つておりますし、それはレベルがちょっと国府である國府の中心の国府である儀式か郡家の郡

序である儀式かつていうのは別ですけれども、それはそれなりにあるのかなという気はいたしますけれども。鞠智城の中にも正倉だと私も考えております総柱の建物がたくさんあります、あとは配置が本当に郡家におかれる正倉院と同じように北一行の第三の倉庫だとか西の一行目の第四の倉庫だとかそういうのが見えるとそういう正倉院とのリンクもわかつてくると思いますが、山城の正倉の場合はわりと立地に規制されているという気がいたしますが、鞠智城の場合はその中ではちょっと平地が広いなというのでちょっと違うかなという気もいたしますけれども、そういう儀礼つていうものは山城の中でもどう考えるかつていうことはこれから課題だと思いますが。八木さん、今までの議論の防衛、軍事的な機能と統治的な機能、あるいは立地の問題、儀礼空間についてお話をいただけないでしょうか。

(八木)

行政あるいは軍事というのは熊谷先生のおっしゃったところで、基本的な部分は言い尽くされています。で、私が今日申しあげた中で、巨大化するという部分について補足しますと、一つにはその巨大化する意味はなんなのか。先ほど触れましたけれども三十八年戦争というものが大きな契機になつているわけです。そのモデルというのはもしかすると西日本の山城をモデルにして、そして、丘陵部を大きく取り込む。規模からしますと一km以上、一・五kmとかになりますが、一回りすると三km、

四kmというそういうような規模になつていきます。そうしますと、そのモデルというのは山城に求めることもあるがち間違いではないような気もしたりします。そういう意味では、少なくとも巨大化する意味合いというのは、西日本との関連性というものを何か読み取ることができるのでないかなと思っています。それから、政庁などの空間につきましては、やはり基本的には、今のところ山城のほうには見つかっていないということですから、そういうた機能は元々ないのでないかという結論にならざるを得ないだろうと思います。そういう意味ではやはり、東北の城柵と西日本の山城とではやはりあの基本的な性格が違うだろうというように考えられます。

(佐藤)

ありがとうございます。城柵の巨大化というのが、払田柵とか宮沢遺跡とかですかね。それが、律令国家の歴史あるいは蝦夷との関係の中で理解できるということなんですが、その次を考えると一番最後に徳丹城はわりとこじんまりとしています。巨大化の後もそういうのが逆にコンパクトになつて、蝦夷との三十八年戦争も終わりを告げるわけですからそれはそう考えてよろしいでしようか。

(八木)

巨大化するのは、やはり三十八年戦争、宝亀段階の多賀城が焼かれたという国府が焼かれたという、

そういういた衝撃が大きかつただらうというふうに思います。徳丹城ができるのは、その三十八年戦争の直後にできるわけですけれども、その間にいわゆる徳政相論ということが起きます。徳政相論は、八町規模の志波城が八〇三年に造られて、その二年後に徳政相論が起きます。桓武天皇の前で、公卿の主だった二人が議論をするわけです。平安時代の初めですからそのときは平安京の造営と、それから東北の軍事行動、これが非常に大きな負担になつていきました。ですからその二大事業を止めようとすることが議論されました。桓武天皇も晩年で、中止案が裁可されます。そういういた後に徳丹城ということができますので、かなり緊縮財政の下で造らざるをえなくなつた。そうすると巨大化というような波からもうすっかり外れてしまします。その前にできた払田柵の場合には徳政相論の前にできましたから、巨大化が行われたんだろうというふうに思います。八〇五年の動きが中に介在しているので徳丹城とは違うということになりますね。

(佐藤)

それはその後ということですね、分かりました。それでは、今の問題とリンクするんですが、第二の柱に早速入つていきたいと思つておるんですが、造営や経営の主体がどうであつたかということで、東北の城柵や西日本の山城が、例えば九州の鞠智城の場合は六九八年の『続日本紀』の記事だと律令国家が大宰府に命じて大野城と基肄城と鞠智城を修理させたと、繕治させたと繕い治めさせたという

ことでありまして、主体は律令国家なんですけれど、直接には大宰府が財源も出すし大宰府によつて修理をさせたということになります。これは肥後の国が鞠智城を直接やつたということでは記録には出てこないということなんです。東北の城柵の場合も、郡山遺跡、多賀城の前身の郡山遺跡は、藤原京の時代の遺構や遺物がたくさん出てくるということで、おそらく中央政府が直接関与していると私は思つてゐるんです。多賀城もそうだと思いますけれども、その後どうなつていくかっていうことも含めてだと思うのですが、これについては、八木さんいかがですか。

(八木)

おっしゃるように、造営にあたつては中央政府の大きな力で動いているはずです。先ほど申し上げた徳政相論の前、緊縮財政になる前は東北、関東中部地方からの人であるとか物であるとかそういうものが大量に動員されてきた。徵發されてきたわけですが、それが相論後はかなわなくなつた。例えば、陸奥の国から陸奥の国というその範囲で動かざるをえなくなつてしまつたということからしますと、その経営というものはだんだんと國家から陸奥国あるいは出羽国という、そういうふたつた規模に縮小した可能性が考えられるのでないかなと、そういうふうに考えております。

(佐藤)

今の点については熊谷さんいかがでしようか。造営と経営がまたちょっと違うこともあると思ってますし、私は律令国家が造ったとしても国も関与するし、地元にある郡も関与して、鞠智城の場合は地元の菊池郡からの五斗一俵の米の荷札木簡が鞠智城から出土しています。これは地元の郡の郡名が書いてないことからすると菊池郡衙の、郡内的人が鞠智城に五斗一俵の米を納入しているということは確実だと思つておるんですけども、あのそういう造営とか経営のレベルの問題というのはいかがでしようか。

(熊谷)

東北の城柵の場合、文献史料から見ると奈良時代から鎮守府が主導している例というのが、いくつか見えてきますので、そういう意味では、例えば「鎮兵」とか「柵戸」（城柵周辺へ送り込まれた移民）を労働力として動員して造営していることが分かるケースがあります。あとは例えば、伊治城これぱりを造営するときには地元の有力豪族である道嶋氏みちしまというのがいたのですけど、いまの石巻のあたりに。道嶋三山という人物が国司に抜擢されて、それが陸奥の国内の労働力の徴発の責任者みたいになつて、一ヶ月に満たない短期間で完成させたというような記事が『続日本紀』に出てきます。ですから、史料から分かる範囲でいえば、そういうふうに、陸奥国レベルでは、奈良時代の鎮守府というのは陸奥の国

司が兼務しているのが大半なのです。ですから、そういうことから考へても国が主導していたというふうに見えるのですが、じゃ国は国独自の裁量でそういうことを全部やれたのかというと、それは律令国家のシステムからいって考えがたいので、中央の指示を受けたうえで国が主導して造営に当たるというような形だったのかなというふうに思います。

(佐藤)

だから、伊治城の造営のときも、道嶋の宿禰も関係するけれども、実際には伊治^{これほり}皆^{あざ}麻呂^{まろ}も郡司大領として関係していく、そこで差別的な扱いを受けて頭にきて決起したみたいなところがあるのかなと思うのですが、だからやっぱりそれは律令国家の命も受けているし、国府のあるいは鎮守府将軍の命も受けるし地元の郡も協力してできるということですよね。

(熊谷)

指示はいちばん上は国家からくると思うのですが、結局労働力の動員というレベルになるとやはり地元の顔役といいますか、なんか最近原発でも聞いたような話ですけれども、そういうことが大きな意味を持つてくると思いますので、重層的だったのじゃないかというふうに思います。

(佐藤)

その地域の勢力っていうのもやっぱり大事だったと。そこで、若狭さんによると、今日は古墳時代に遡って、古墳時代以来、前方後円墳とかの時代以来、大和の王権と東北の間も密接な関係がある時期、ない時期あって、それはそれぞれの段階でやっぱり中央の大王の権力と東北の地方豪族が同盟したりしながら、だんだんと律令国家のもとでは、もう地方豪族が軍事みたいな形になっていくのかなと思いますけども。それでも、律令国家の時代でも今の熊谷さんのお話のように伊治郡の郡司がやっぱり協力するとかしないとかっていう、ときには反乱することもあるというようなことだと思うんですけど。その大和王権と東北の勢力との関係っていうのをどういうふうに見て、私たちはどちらかというと律令国家の時代の国家組織から遡ってみてみると、あたかももう最初から地方豪族が従属的な位置であるかつていうとそうでもない。同盟的な関係も私はあり得たというふうに思うんですけども、そこらへんはどうどうでしょう。今日のお話の弥生時代から律令国家の時代までを見たとき中央とか畿内の王権、あるいは律令国家と東北地方との関係というのをその間に東国の勢力が関係することもまたあつたと思うのですけども。どうみたらいいかというのをちょっとお考えがあれば聞かせていただきたいのですが。

想像を交えて申しあげますと、やはり東北の広い大地と潜在的な生産力や資源、それを東国の人々は希求しているんだと思うんです。古墳時代前期には広大な土地が空いていて、そこに環境難民が来る。首長に率いられて組織的に来ているんだと思うんです。それなので、大きな古墳もすぐできる。そういう首長たちが大挙して来ているので、その枠組みの人たちが共立王を推し立てて一六八mもの前方後円墳を築くことができた。王権と東北圏との連合の中心となる大勢力がまつりあげられたんだろうと考えます。しかし、東北はたいへん厳しい環境なので寒冷化とかによつて、それが萎んでしまつたりする。それは弥生時代にもあるんです。弥生時代前期末には、いち早く稻作を津軽に導入していますが、これは関東より早いわけです。稻作は、関東、中部よりも早く津軽に入っているけども、それが終息していくという流れがあつた。そういう新しいものを取り入れる、それは東北の人だけでではなくて南の人も新天地を目指してその広大な資源に着目し、東北を目指す。しかし、環境の変化との闘いのなかで、また撤退せざるをえないという繰り返しだと思うんですね。

実は、律令期もそうなのではないか。つまり律令期の国家的北方政策の裏に、東北の豊かな資源、それは農地だけではなく、海産物・皮革・鉱山資源などに対する経済的な欲求がないまぜになつて、進出していくのでしょうか。そういう観点で政治制度の裏にある経済的な欲求や軍事力への憧憬とかそういういたものを含めて、東北の社会や首長たちを考えなければいけないと思っています。

(佐藤)

今日は、遠距離交易みたいな交易がいかに盛んだったかっていうことを、改めて若狭さんのお話で実感したのですけれど。東北の立場からいくと、やっぱり北方の産物で馬だと金とか、それから北方との交流の中でも昆布とか獸の毛皮だとそういうのが、大和王権から見ても律令国家もそうだったわけですけれども、喉から手が出るぐらい。これは、平安時代の摂関時代の貴族もそうだったと思いますけど手が出るぐらい欲しいというようなことがあって、その交易を仲介するということだと思いますが、今日の若狭さんのお話の中で東国の人々がこっちに関東に移って、関東地方の人々、東国の人々が北にまたに来るっていうようなお話があつて。例えば、若狭さんおられたのが上毛野國におられたわけなのですけれども、上毛野君も『日本書紀』なんかでは蝦夷と大和王権の戦いの中では將軍になつたりしているっていう、そういう東北の勢力が間に介在するっていうこともあるわけでしょうか、今日は北陸の勢力のお話もあつたんですけども。

(若狭)

古墳時代後期後半、六世紀後半段階では関東地方の豪族たちの北進というのも当然あつたと思つています。国造が設置されなかつた北の仙台平野などは有力な終末期古墳がありますし、そこと常陸の関係が示唆されています。常陸の首長層の一部が拠点を移すということも当然あつたでしょう。そ

いった人たちが次の担い手になつていく可能性は高いと思いますが、それとちょっと違う形で気にはるのは宮城県北部の状況で、ここには首長墓がないのです。群集墳と横穴墓しかない。ただそれらは大量にあるし、関東系土器が多く出てくる。ということで、その東北地方の集団の中にも首長に統括されている人たちとそうでない人たちという多面性があります。その辺りをしつかり研究していく必要があるんじゃないかと思っています。

(佐藤)

だから東北と大和との関係が、そう一元的な関係じゃなくて私はもうちょっと東海だと東北の勢力だとか北陸の勢力とかあいだに介在しているっていう場合もあるかなあというそういう様々な意味でのこう境界を越えた広い意味でいうと交流みたいなものの中で東北の歴史もあつたかなという。熊谷さん、律令時代でも東北の人々がたくさん柵戸などとしていて東国の地名が東北にもいつたりしていますよね、それはやっぱり人的にも鎮兵もそうだけれども、かなりいって思つてよろしいでしようか。

(熊谷)

いちばん最初に城柵を造ると出てくる渟足柵ぬたり、磐舟柵いわふねのときから『日本書紀』に出てくるわけです

けれども、柵戸^{さくど}、本来の読みはキノへですけれども、その柵戸^{さくど}というのが、北陸などから連れてこられるというのがあつて、その後も、多賀城ができる少し前ぐらいに陸奥それから出羽、そのころ出羽国ができるわけですけど、出羽国でも建国直後ぐらいに非常に組織的に柵戸^{さくど}が連れてこられるんです。それは、おそらく城柵のまわりにそういう人たちを住まわせないと、城柵の維持経営というのが非常にむずかしい。これは面的な支配ですので地域支配なのですね、城柵の場合。ですから、城柵を造れば終わりではなくて、城柵を造つたらそれを維持していくための人員も必ず連れてくると、そういうシステムをとつていたわけです。ですからかなりたくさんの人たちが東国なり北陸から陸奥・出羽にやつてきたということは間違いないと思います。考古学的にも先ほどもお話に出てきましたけど、関東系の土師器というのが、柵戸が文献に出てくるよりは少し早めぐらいからなのですが、かなりの量が見つかっているというのもありますので。ですから、数としてもかなり来ていたのかなというふうに思います。

(佐藤)

これは八木さん、考古学的に関東地方の土器が今日のお話にもあつたように思いますが、東北でも出るけれど。私はそういう交流って一方通行はないと思っていて、相互交流だと思いますので東北のものがまた内国、律令国家の内国というかそつちにいくつていう場合もあるよう思うんです

が、そういった点いかがでしょうか。

(八木)

数はまだそれほど多くはないんですけども、例えば山梨県や東京都で岩手県の北上盆地の土器に似たようなものが入っています。そういったこともありますし、あるいは千葉県の方に宮城県の土器が入つていつたりとそういうことも明らかになっていますので、決して一方通行ではないと思います。ただ、数の面でいえば圧倒的に東北に流れていますことは事実だらうと思います。で、そういった土器と一緒に住居の造りも入つてきています。東北地方の住居というのは、竈かまどが作られるんですけども、その竈は壁にトンネルを掘つて外に煙を出すという煙の道、煙道を長く作るというのが大きな特徴です。関東地方にはそういうのがないわけではないのですけども、多いのは煙道が長く伸びないタイプの方が一般的です。そういったものがかなり東北地方に入つてきているのも事実です。移民というものを考古学的にどう捉えるかということなのですが、そういった土器が入つてていること、そしてその住居の造りが入つていてること、そういったものを総合的に判断する、あるいはその集落の中でどのぐらいの割合を占めるのかっていうことを一つずつ検証していくって、移民というものを考えていくべきなのかなというふうに思っています。そういう意味でたくさん本当に来ているとは思うんですが、まだちょっと検討の余地がある遺跡もあるのかなというふうには思つてているところです。

(佐藤)

そういう、國下さん中央の都を例えれば七世紀代に、飛鳥の遺跡では蝦夷や隼人を饗宴あいとうえんでもてなしたみたいな記事が『日本書紀』にいっぱい出てくるわけですけれど。その後の、平城京も含めて中央の長岡京とか平安京あたりでもって、そういう北方だとかあるいは南方のものが出てくるとか、そういうことはありませんでしようか？いかでしようか。

(國下)

もちろん、東北の土器も出ますし九州の土器も出てくるわけですが、ただ数は少ないですね、未だに。やはり、さつきおっしゃったように数の面では現地の方がたぶん多いんじゃないかなと。畿内産土師器きうちさんって呼ばれるような、暗文を施す土師器は都の土器として都らしい土器としてよく作られるわけですが、それが今日のお話にもありましたが、鞠智城からも出ています。そういうようなことで都から逆にいくものもあるというようなこともあつたり、あるいは、東北と都とを結ぶ焼き物としては須恵器の長頸の壺ながくびのつぼがですね「壺G」っていうものが出ていて、それは伊豆で生産されているものだけども関東や東北から出てくると、都からもちようど長岡京の時期前後に集中的に消費されているっていうようなことで、一つの焼き物が都と生産地とそして東北、多賀城あたりと繋げていく材料にもなっていますよね。

(佐藤)

都はもちろん、諸国から調庸物が集まつてきて私、専門の木簡の荷札木簡なんかは都からも長岡京、平安京も平城京もそうですけれど、たくさん各地のものが出てきてそういう意味でのなんか非常に幅広い交流が古代でもあつたというふうには思つてゐるんですけど、八木さんどうぞお願ひします。

(八木)

先ほどちょっとと言い忘れたのですが、九州でも東北と似たような土器が出てまいります。長い煙道えんどうも福岡県黒添・赤木遺跡など、九州で見つかってしています。そういう意味では東北地方から人の流れというものが見てとれるのですが、ただ土器を見ても東北の土器そのものではないんです。やはり少しアレンジされている。もしかすると、一世ではなくて二世、その子どもとか孫が作ったものなのかもしれません。蝦夷の場合には俘囚ふしゅうの移配といふことがあります。俘囚は蝦夷が地元から離されて、全国各地に流されるわけですが、それらは交流とか交易というものとはまた別の視点で見なければいけないと思つています。

(佐藤)

じゃあ國下さん。

(國下)

堅穴建物の話が出たのですが、実は都っていうのは、基本的に住まいは掘立柱建物であるということが基本で、土間床どまゆかで貼床なものもあるのでしょうか。それは基本なのだけれども意外に都の中から堅穴建物が出る。堅穴住居が出るのですね。住居と特定できないのは工房のような使われ方をするものもあつたりする。平城京でも右京の北部の方で出た、あるいは長岡京でもそんなのが出ているのですね。そんなものも、もしかしたらそういうものと今お話をうたのと関係するということもちょっとこれから検討しないといけないなと思ってお聞きしていました。

(佐藤)

あの村崎さん今、そういう考古学的な遺物や遺構の面で各地との交流みたいなのが分からぬ、先ほど八木さんのお話した俘囚つていうのは、律令国家に帰順してきた蝦夷の人たちを律令国家がそれぞの内国の諸国に安置するといいましょうか、住まわせるということで、これは全国に及んでおります。で、その俘囚のために財源を用意しております、そのための俘囚料稻つていう稻を律令国家諸国に置かせているのですけれども、肥後の国なんかかなりの量の俘囚料稻を持つてまして、これは蝦夷の俘囚の人たちが肥後の国にはたくさん来ていたということは間違いないのですけれども、そういうものが鞠智城で出土するかどうかというようなことを、俘囚の人たちは国府の周囲、わりと

国府の近くに置かれて、ときにはその武力として国司が俘囚の人たちを使うというようなこともあります。平安の時代のことですけれどもあり得るのです。鞠智城を掘られていて発掘されていてあるいは熊本県の発掘調査でそういう交流の痕跡を示すような遺物や遺構っていうのはいかがでしょうか。

(村崎)

すみません。そのへん不勉強なのですが鞠智城に関していえば、現在までに東北地方の土器が出土したというのは確認されていません。現時点では、ないということになります。ただ、他の地域から入ってきたものとしては、先ほど言われた畿内系の暗文を施した土師器だけだというふうに思っています。で、その他、熊本県内での事例については、改めて調べてみないといけないと考えています。

(佐藤)

畿内系の土師器は七世紀後半ぐらいに鞠智城の造営、繕治の頃に土器が来てると思つてよろしいんでしょうか。

(村崎)

時期的にはその頃になります。

(佐藤)

そうすると、鞠智城の繕治の頃に畿内の人も鞠智城の造営で来ている。繕治の為に来ている可能性がありますね。

(村崎)

関わっている可能性はあるだろうと思います。ただ、繕治された後、礎石建物が出てくる段階も含めてなんですけれども「大宰府をして：」という部分を考えたときに、建物の規格性で見てみると大野城、基肄城に関しては三間×五間で共通していますが、鞠智城の場合は、三間×四間で規格が小さい。揃っていないのです。それに、大野城、基肄城の柱間の寸法はおよそ一・一mですが、鞠智城では、それより短いものもあれば、長いものもある。それぞれが不揃いで揃っていない。なので、大宰府の関わりと畿内系土師器の出土とを含め、どのように大宰府や中央政権が関わって、あるいは肥後国、菊池郡が関わって繕治が行われたのかということについては、今後、整理していく課題なのかなどというふうに思っています。

(佐藤)

あの、渡来系との関係で大野城と基肄城は百濟からの亡命将軍が築城を指揮したという『日本書紀』

の記事がありますが、鞠智城の場合は百濟からの仏像が出ていますよね。

(村崎)

そうですね。七世紀の後半でいいだろうという、百濟系の菩薩立像が出ています。ただ、そういうのも当初のその規格性つていうのですか、建物の規格性からするとどうしても大野城や基肄城と比べると規格性が煩雑というか、弱いといった形になるのかなというふうに思います。

(佐藤)

はい、わかりました。今ちょっとその造営、経営の主体つていうことを話していたんですが、鞠智城の場合はその大宰府だと国司だと郡司との関係というのはいかがでしょうか。

(村崎)

先ほども言いましたように、建物の規格性が大野城、基肄城と比べて弱い。違うことで、直接的に大宰府が、大きく関与する、建て替えまで関与するということでは基本的にはないのかもしれません。ただ、その命令を受けた国司あるいは郡司なのか、どのレベルなのか分かりませんが、在地の技術を多様した形で造営がなされているのかなというふうに思っています。

(佐藤)

大宰府は九国三島を統治する機関なので、大宰府が中央政府から命令を受けた場合、肥後国司にちゃんとしなさいという場合もあるとは思いますけど、熊谷さんそこらへんはいかがでしようかね。あと、9世紀の鞠智城院の菊池郡城院の記事を今日お話しておられたけれども。

(熊谷)

東北の城柵と比較した場合、やはり何といつても最大の違いは先ほど来お話に出ていますけれども、政庁が確認されていないということです。それは鞠智城でも同じで、「コの字」形ではないかという建物配置は今日もご指摘がありましたけれども、あれも典型的な「コの字」形と比べるとちょっとそのままではない。違うかなという印象なのですが、結局「コの字」形の建物配置というのは、官衙によくあるものですけれども、これは主に儀式に使われるわけです。古代の政治、マツリゴトというのは、儀式と不可分な面があつて、政庁は支配拠点のさらに中枢の施設という位置づけになるわけです。山城でそれがまだ確認されてないということは、やはり地域支配という機能があつたにしても中枢の施設ということは、いまの段階ではいえないんじゃないかという感じがしていますけれども。

(佐藤)

今の儀礼の話と合わせて考えると、律令国家の権威の示威、見せるということを國下さんもお話あつたんですけども見せるっていうところからいくと、鞠智城では八角形の建物なんかは見せるような機能があるかなという気もいたしますが、一方で城門の話を聞くとなかなか最近の発掘調査でも南に正門があるか、方位の問題ですね。律令国家の時代だとだいたい南面して正殿を建てて政庁を作るっていうのがあるのですけども、そこらへん村崎さんいかがですか。鞠智城で、後、八角形の建物についてもちよつと話していただけませんか。

(村崎)

八角形の建物に関しても、その位置の中で周辺の遺構との関わり、絡みがどういうふうになるのか、まだ、はつきりしないところがあります。で、二棟が対で存在しているということになれば、単に縦列で並ぶということではたぶんにないのだろうと思います。なので、並んだその左右にどういう形で、どういう建物が配置されていたのか。このことについても、今後検討していかないといけない問題かなというふうに思っています。で、南に向いているということでこれまで「堀切門」が正門ではないかという考え方で整理をされていました。ただ、堀切門の構造自体が懸門構造であることが明らかになつてきましたので、そういう意味では懸門である堀切門が正門であるというのは、人の出入りそれ

から物の搬入等を考えた場合、適していないだろうと思つております。なので、やや南から少し東あるいは西にふれますけども深迫門、あるいは池ノ尾門が、版築土塁で両側をきちんと固めている。あるいは石墨で谷部を遮蔽して重厚に造つていて、このどちらかが正門である可能性というのも、今後検討しないといけないのかなというふうに思つています。

(佐藤)

確かに堀切門は懸門といいまして、こう歩いて登つてきても最後、階段で上に何メートルか比高差があるところに門ができていて、物資を運搬しようにも階段を間に、挟まなくちゃいけない。ちょっと物を運びこむというわけにもいかないし、大勢の人がそこを通るつてもなかなか難しいということだと思いますが、一方で、古代の山城の中には私は例え、大野城の大宰府口城門などは、下からも見上げれば見えたんじやないかなというふうに思いますが、屋嶋城の懸門ではあるけれども、あれも遠くから見えるような見せるためのあるいは基肄城もそうですかね。見せるための門じやないかなと思うような門もあるのですけれどもそういう点はいかかでしょうかね。

(村崎)

外から見えるっていう位置関係にあるのは、堀切門だけになります。深迫門にしても池ノ尾門にし

ても谷部を取り込んで造られていますので、南側あるいはやや南東側からも見えません。外から見る、外に見せるという意味でいけば、正面に位置するのが掘切門ということになりますね。

(佐藤)

あるいは最も高いところの烽からうけるんじやないかっていう辺りは、わりと目立つ場所ではありますよね。

(村崎)

そうですね、地形的にもそういう場所にあるかと思います。

(佐藤)

はい、それでは歴史書に載るか載らないかっていうことも、ちょっとだけ議論したいと思つているのですけれども。今日は、時間の都合で八木さんが早めに退席されるというお話もありますので、八木さんその歴史書に残るか残らないかっていうところで東北城柵もそういうのがあると思うのですがどうも何かお考えありませんでしょうか。

(八木)

そうですね、確かに記録のない城柵もあります。例えば出羽の城輪柵(きのわ)という遺跡、これもないのですが、現在は出羽国府と考えられています。ですから、そういう大事な遺跡でも記録に載っていない。その年代の記事が欠落しているということもあると思いますが、そういうことも考えますと、必ずしもその全部が全部載っているわけではない。それが意味があるかどうかは、個々に考えていかなければならぬと思います。答えにもなりませんけれども、そういうふうに考えております。

(佐藤)

今日のご講演を含めた形で、お話しそこなつたこととかあつたらついでにお話していただけるといいと思いますがよろしいですか。それでは時間になりましたらどうぞご退席ください。今の歴史書に載る、載らないという点は熊谷さんいかがでしようか。

(熊谷)

はい、まずは『日本書紀』の段階と『続日本紀』以降の段階は、ある程度区別する必要があるのかなどと思いますが、『日本書紀』で最初に出てくるのが渟足柵、磐舟柵ですけれども、これは当時、越(こしのくに)国といったわけです。後に越前、越中、越後などに別れるわけですが、その越国に城柵を造つたとい

うことが出てくるのですが、『日本書紀』のその時期の記事というのは日本海側にひじょうにかたよっているのですね。これは城柵に限らず、有名な阿倍比羅夫の北方遠征というのがその時期の記事としてはかなり詳しく『日本書紀』に載せられているのですけれども、おそらく比羅夫の遠征に類似したような遠征っていうのは太平洋側でもあつたのではないかと考えております。これはそれをにおわすような記事が『風土記』に載っているのでそう考えられるのですけれども、そうすると『日本書紀』は太平洋側についてはまったく何も伝えていないということになります。ですから、その辺から考えると、この時期、七世紀後半の時期の城柵遺跡として宮城県仙台市の郡山遺跡というのが見つかっていいるわけですけれども、これは先ほどもお話をあつたように多賀城以前の陸奥の国府と考えられているものとして、陸奥国では間違いなく最大級のものなのです。それが文献に載っていないということは、今のような『日本書紀』の記事の残り方からすれば、これは多分に偶発的な要因と思われます。ちなみに、阿倍比羅夫の北方遠征関係の記事は阿倍氏の家記、つまり家の記録などから採用されたといふふうに考えられているのですけれども、それに相当するような史料が太平洋側、陸奥方面に関しても残されていなかつたと、そういうことなのかなと思います。で、そのあと『続日本紀』以降ですが、『続日本紀』の時代になつても実は大きな落ちがあつて、絶対載せていいとおかしいのに載つていらないケースがあります。その代表が多賀城の創建記事なのです。これがありません。さきほどお話をしましたように、多賀城の創建年次は多賀城碑からわかるのです。それから、実はその多賀城より

少し古い段階で出羽柵というのが出てくるのですが、これもいきなり出てきて、おそらくその直前に造られたんじゃないかと思うのですけれども、いつ造られたかという記事がない。その手のものはたくさんあって奈良時代でも、例えば天平九年に多賀柵が最初に出てくるのですが、それと同時に先ほども触れたように、玉造柵とか新田柵、それから牡鹿柵とか色麻柵、こういった城柵が出てくるのですが、どれも創建記事がありません。そのうち玉造柵以外はそこに一回しか出てこないわけです。ですからこれもたまたま出てきたという可能性が高いのですね。ただもう一方で、何回か出てくるような城柵もあるわけです。多賀城は創建記事はありませんが、それ以降何度も出てくるわけですね。それから、秋田城とか雄勝城とか、陸奥側でいえば胆沢城、志波城も何回か出てくるわけで、そういうふうに何回も出てくる城柵というのは、やはり重要な城柵に違いないと思うのです。ですから一回しか出てこないのはたまたまの可能性も大いにあると思うのですが、なかなか判断が難しいですね。それで、山城の場合、昔から「神籠石」といわれている文献にまったく出てこない山城がたくさんあるわけですよね。これがどうして出てこないのか、昔は朝鮮式山城を六六三年の白村江の戦い以降と考えて、神籠石系というのはもつとずっと古いとか考えられていたわけですけど、近年の研究からするとどちらもほとんど同じ時期とみた方がいい。場合によつては、神籠石系の方が下るんじゃないかという説さえもあるわけですよね。ですから、それなのになぜかなり多くの白村江の戦い以降に造られたと思われる山城が、文献に記録が残されていたり、残されていなかつたりするのかっていうのはひ

じょうに難しい問題だと思います。おそらく、偶発的な要因というのがかなりあるのかなと、ちょっと漠然としていますけど考えています。

(佐藤)

これは以前、鞠智城については六九八年に修理したという繩治という記事が大野城、基肄城とともにあって、私はそれからしても大野城、基肄城が築城されてから三十年ぐらい経つて修理が必要になつたということで、鞠智城もそれと一緒に書いてありますから間違いなく私は大野城、基肄城とそう違わない年代に建てたと言つていいと思うんです。けれども、造営記事がないっていうのをずいぶん気にしておられたことがあります、今の熊谷さんのお話だと多賀城でもないということですのでそんなに気にしなくともということでしょうか。で、一方で長門城のように『日本書紀』に築城記事が書かれている、未だにどこにあるか分からぬ。こういう時代になつても二十一世紀になつても分からぬというのもあります。また、文献史料が、特に地方史料についてはやつぱり全てが書かれているということではないということかなという気もするけど、その点國下さんはいかがでしょうか。あの都のことはいっぱい書いてあると思うんですけど。

(國下)

いや、軍事施設ならば当然記録は残さないのは当たり前なのかと思うんですが、そうでもないということですので、今残っている記録で本当に物語を作れるかというと作れませんからやっぱり断片的な史料ということなのかな、先ほどの多賀城の創建の記事さえもないっていう不思議なことは都の成立からすると考えられないことですね。そのあたりは、その当時の事情が反映しているのかなあという感じがしますね。

(佐藤)

都のことは、やっぱり書いてありますよね。今日、若狭さんのお話は『古事記』、『日本書紀』以前のお話ですごく、歴史像を描いて、ダイナミックに描いてくださったと思うんですけど、若狭さん今のお話にあるかないかっていうのはいかがですか。考古学の立場っていうのはやっぱりあると思うのですけど。

(若狭)

事件がなかつたから書かれなかつたと思うのですね。東北城柵の日常の平和的な性格っていうんでしょうか、そういうのを反映している気がいたしますね。つまり、蝦夷といつも戦っているのでは

なく、基本的には平和裡に競合したり、経済活動をしたりが常態であつて、平和だからこそ書かれたかった。特殊な事件や戦闘だからこそ書かれたのではないかと思います。猛々しい蝦夷像を別なものに変えていって、東北に暮らす様々な人たちという視点で見直す必要があるのかなと思いました。

(佐藤)

ありがとうございました。律令国家の対蝦夷政策っていうのは、一番最初には供給政策で先ほど来、お話をあつたように蝦夷の人たちがやつてきたらそれを饗應してお土産を持たせて帰すっていうような形のもので、抵抗する場合は制圧するというのがその次にきて、それから後、北方情勢を偵察するつていうのが陸奥では越後の国司の役割であり城柵もそれを担つていたと思いますけど。三十八年戦争の勇ましい戦争の戦いのときだけが注目されがちだけれども、日常的にはむしろ平和的に蝦夷と交流していたという儀式の場で交流していたということを考えた方がよくて、そういうことは歴史に残りにくいということでしょうか。それではあと10分を切つてしましましたので、今日お話をいただいた先生方にこれから鞠智城の今日のシンポジウムを受けてこういうところが課題じゃないかみたいな話があれば一言ずつお願ひしたいと思うのですけれども、順番にまず熊谷さんいかがでしょうか。

(熊谷)

こういう城柵と山城の比較研究ということ自体、私も今日のお話の最初でお話ししましたようにあまり行われていない未開拓分野なのですね。ですから、今回こういう形で「鞠智城シンポジウム」で両方の比較をテーマにしていただいたというのは、今後の研究のためにとても意義があるんじゃないかなというふうに思つております。個人的なことでいえば、断片的な勉強はそれなりにはしていたつもりなのですが、今回比較をしなさいというテーマをいただいて、いわばにわか勉強を慌ててやつたということもあって、これはひじょうに重要で興味あるテーマじやないかなと、やはり比較することによって城柵、山城、それぞれの個性が、よりはつきりしてくる。そういうメリットは絶対あると思うんですね。で、そういう観点から言わせていただくと鞠智城、それから西日本の山城に関しては、地域支配という視点が近年重んじられてきているわけですけれども、その場合やはり間違いなく地域支配の拠点になっていたのが東北の城柵ですので、それと比較してこういうところは通じる面があるけれどもこういう点は違うんじゃないかというような視点を入れていただけるとこちらもより興味が深まりますし、勉強にもなるんじやないかなということです。

(佐藤)

ありがとうございます。それでは國下さん。

このシンポジウムの前に、改めて鞠智城に足を運んで、見たこともない話はできませんから、まずは見にいこうということで知り合いと一緒に行きまして。最初に思ったのは、外郭の土壘と中心的な施設群とのあいだに谷がありましてね、で、水田経営がされるような谷なわけですね。本当にこれ城なのだろうかと。本当にその防御的な機能っていうのはあるんだろうかっていうことを現地で思いました。しかし、今日改めてシンポジウムで、いろんな形の城柵なり山城を見ますと、当然これは鞠智城がこの地に選択された意味っていうのはたぶんあるのだろうというふうに改めて思いました。そうしますと鞠智城が持つていてる機能つていつたいどういうところがあるのかつていうのをはやり比較研究をしていくことが必要なのだろうなというふうに思いました。今日の冒頭のお話ともつながるかと思います。それともう一つ、私は都の研究をやっているのですが、やはり井の中の蛙ということですて、都のことばかりやつていますと国会議事堂ばっかり見てるようなことですのでやはり、律令国家というは列島があつて地方の政治があつてこそ成り立つてることを改めて、今日感じました。それぞれの東北なり九州なりの長い城柵なり山城研究の礎があつてこそできあがつて、今日感じました。今、研究というのは東アジアのような視点でやつていかなければならぬ状況ではありますかが、そういうたところまで目配りして、これからも考えていただきたいなというふうな感想を持ちました。ありがとうございました。

(佐藤)

ありがとうございます。それでは若狭さん。

(若狭)

私も五年前に鞠智城に行つたことがあるのですけれども。何故こんな内陸にあるのかというのが疑問でした。むしろ海から来る唐・新羅を迎えて打つならば、沿岸部にあつてしかるべきなのに、何故ここなのだろうというのがとても疑問だったのですが、菊池川流域は古墳文化もやはり非常に特殊、特徴的です。装飾古墳があつて、今日ご紹介した宮城県までその肥後型の横穴墓がきています。ですので、鞠智城の成立にあたってはやはり前史から、今日、私がちょっとお話をさせていただいたように弥生時代、古墳時代からの地域色、その独自性とか歴史的な位置だとか交通上の問題だとかを丹念にあらつていくことによって、その像が結ばれるんじやないかと思いました。それと私はかつて自治体で史跡整備を担当しておりましたので、是非、シンポジウムの成果を活かして魅力的な史跡公園を整備し、多くの方々を迎えていただきたいと思います。よろしくお願ひいたします。

(佐藤)

史跡公園の課題も出てきましたけど、村崎さんじやあ最後にお願いします。

(村崎)

今日は、城柵との比較ということでいろいろなご意見をいただきました。そこで、鞠智城から地域支配の在り方をきちんと見ていく、どのように見ていくのか、こういう新たな課題をいただいたような気がします。それと、鞠智城の前史である古墳時代の社会がどのように築城やその場所の選地、あるいはバツクボーンとしてどういうふうな影響を与えたのか、そのことについても今後、検討していくかないといけないのかなというふうに思っています。で、菊鹿盆地の築城前夜を俯瞰すると古墳時代中期後半では、盆地の西側の方に大きな古墳がたくさん築かれ、この状態は後期前半まで大きくは変わりません。それが、後期後半になると一変して東へ移ってきます。そして、東端の丘陵上に鞠智城が築かれる。その勢力の移動についても、もう少し検討していく必要があると考えています。築城の経緯だとその後の経営のあり方だとかということを考えるうえでも重要だと思っています。そういう意味で、いい刺激になりました。ありがとうございました。

(佐藤)

あの鞠智城につきまして今までのお話を伺っていると、まだまだ研究しなくちゃいけない課題がいっぱいあるというふうに思います。環境史の問題も今日、若狭さんから出ましたし、私は菊池川の下流域つてラグーンがだいぶ内側まで入っているのじゃないかと思っていて、あまり今の海岸線で考

えないほうがいいと思つてゐるのですけど。そういうことも含めてまだまだ課題があるのかなというふうに思いました。今日は5人の先生方の講演を聞いていただきました。そのあと、パネルディスカッションのほうは私の司会の不手際でちょっと時間が偏つてしまつたかもしれませんけれども、鞠智城が持つ魅力といいましょうか、人文知の楽しい世界を、あの感じていただけたんじやないのかなと思います。今後ともぜひ鞠智城につきましては来年の3月には若手研究助成の成果の報告会が熊本でもありますし、今後とも関心をお持ちいただいて、ぜひ現地にもおいでいただければと思います。今日はどうもありがとうございました。先生方ありがとうございました。

(司会)

コーディネーターの佐藤様、パネリストの熊谷様、國下様、若狭様、長時間にわたりまことにありがとうございました。会場のみなさま今一度盛大な拍手をおくりください。

どうもありがとうございました。本当にあの鞠智城の魅力に触れることができましたし、ご専門の先生方の深いお話を伺いることができました。まことにありがとうございました。以上を持ちまして本日の全てのプログラムを終了いたします。長時間にわたりまして最後までご聴講をいただきまして皆さまありがとうございました。受付におきましてはアンケートの回収をおこなつております。お帰りの際にはアンケートへのご協力をどうぞよろしくお願ひいたします。本日は鞠智城シンポジウム

ム、古代の山城と東北城柵にご来場いただきまして誠にありがとうございました。



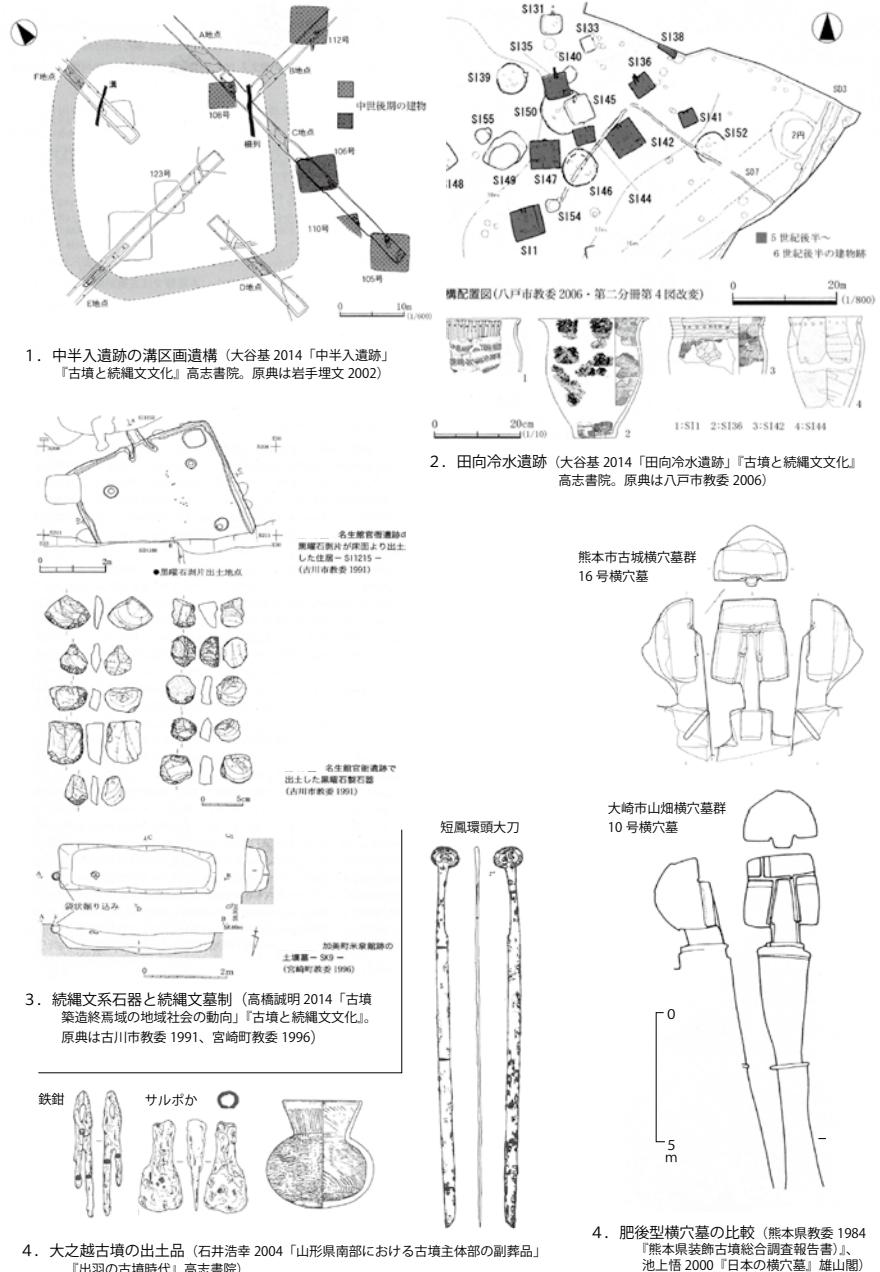
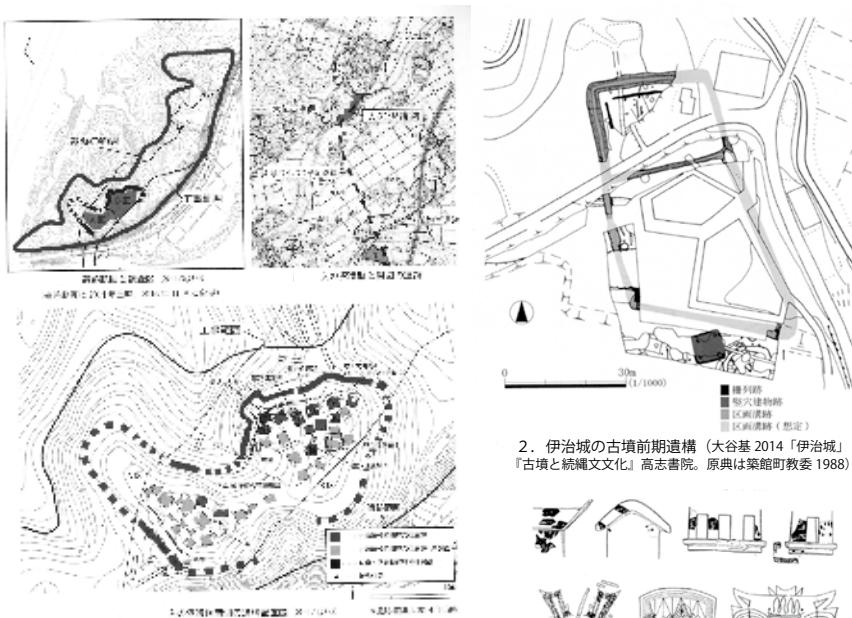
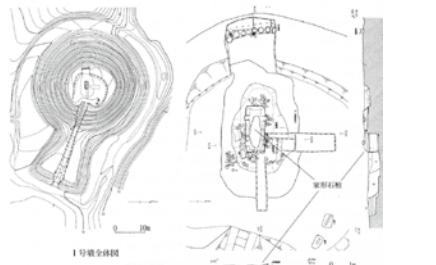


図5 東北の古墳時代中期・後期の問題資料

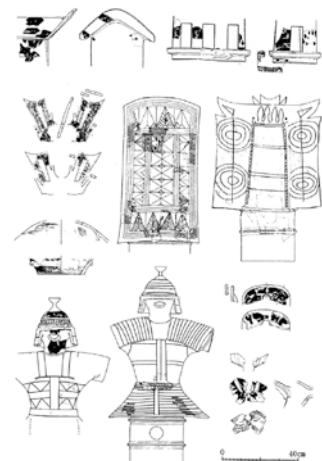


1. 入の沢遺跡（村上裕次 2017「入の沢遺跡の調査成果」『古代倭国北緯の軌跡と交流』雄山閣）

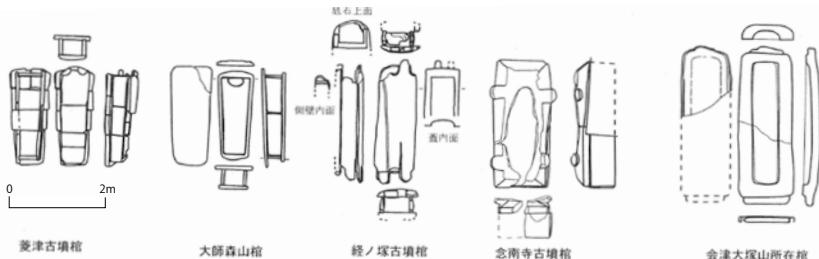
2. 伊賀城の古墳前期遺構（大谷基 2014「伊賀城」『古墳と続縄文文化』高志書院。原典は築館町教委 1988）



3. 伊勢山古墳（高橋誠明 2014「古墳建築終焉域の地域社会の動向」『古墳と続縄文文化』。原典は宮城県教委 1998）



4. 菅沢2号墳の形象埴輪（福村圭一 2004「菅沢2号墳」『出羽の古墳時代』高志書院。原典は山形市教委 1991）



5. 東北地方の石棺（石橋 2013）

図4 東北の古墳時代前期・中期の問題資料

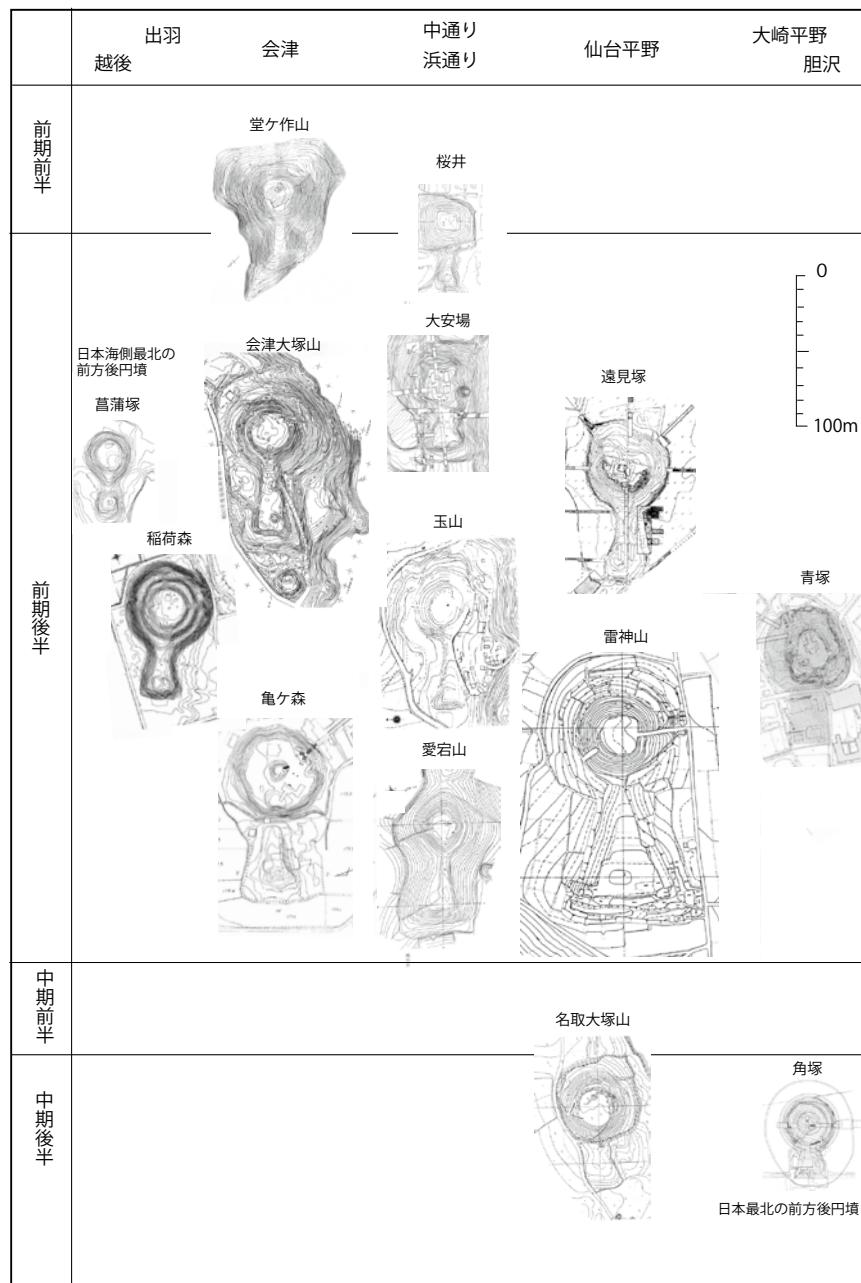


図3 東北地方の大型前方後方墳・前方後円墳（墳頂80m前後以上と最北の事例）

		前期前	前期後	中期前	中期後	後期前	後期後	飛鳥	城柵
畿内		オオヤマト	佐紀	百舌鳥・古市		今城塚	五条野丸山 藤ノ木	石舞台 岩屋山 野口王墓	
関東	山道	前橋天神山 前橋八幡山 将軍塚	浅間山 大鶴巻 野本将軍塚 上侍塚	太田天神山 別所茶臼山 白石稻荷山 お富士山	井出二子山 並榎稻荷山 摩利支天塚 埼玉稻荷山	七輿山 埼玉二子山 琵琶塚 丸墓山	綿貫觀音山 八幡觀音塚 埼玉鐵砲山 吾妻	宝塔山 八幡山 壬生車塚 山王塚	
	海道	今富塚山 宝来山 星神社 梵天山	姉崎天神山 葦間山 芝丸山	舟塚山 内裏塚 高柳銚子塚 三分目大塚	姉崎二子山 祇園大塚山 三昧塚	九条塚 玉里舟塚	三条塚 金冠塚 大堤権現塚 風返稻荷山	龍角寺岩屋 駄ノ塚 船玉	
陸奥	中通り	● ■	■ 大安場		国見八幡塚 ● ● ●	● ● ● 下総塚 ● ○	谷地久保 蝦夷穴 ○ ○		
	浜通り	■	■ 桜井 玉山			●	● ●	○ 金冠塚	
	阿武隈下流	●	● 愛宕山	● ●	方領権現 ● ● ○				
	仙台平野	■ ■ 飯野坂	■ ■ ■ ■ 経の塚 ○ ○ ○ ○ 雷神山	○ 経の塚 ○ ○ ○ ○ 雷神山	名取大塚山 ○ ○ ○ ○	○ 一塚 二塚		○ 宝領塚	郡山 多賀城 724
	大崎平野	■	● 青塚		● ● 念南寺 ○ ○ ○ ○				伊治城 767 名生館 城生 宮沢
	胆沢		会津大塚山		● 角塚				胆沢城 802
越後北	会津盆地	● ● ● ■ ■ ■	● ● ● ○ ○ ○	一亀ヶ森 ○ ○ ○ ○					
	菖蒲塚	● ■	○ 牡丹山		○				渟足柵 647 磐舟柵 648
	城の山	○ ○ ○ ○	古津八幡山						
出羽	米沢盆地	■ ■ ■	●		● ● ○			○ 金原	優嗜曇柵
	山形盆地		● ○	大師森山 石榴	○ 菅沢2 ● ○ 大之越				
	庄内			菱津石榴					出羽柵 708

■ 前方後方 ● 前方後円 ○ 円
 ━━ 群集塚 ━━ 横穴墓

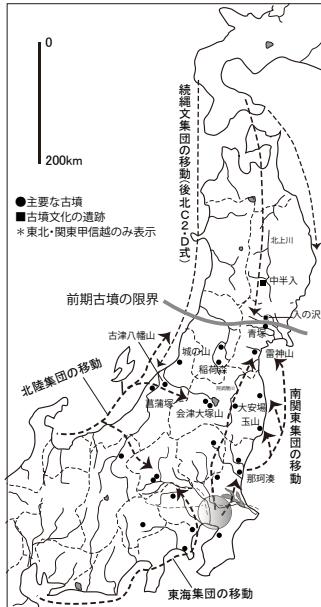
● 80m~

■ ● ○ 50~79m

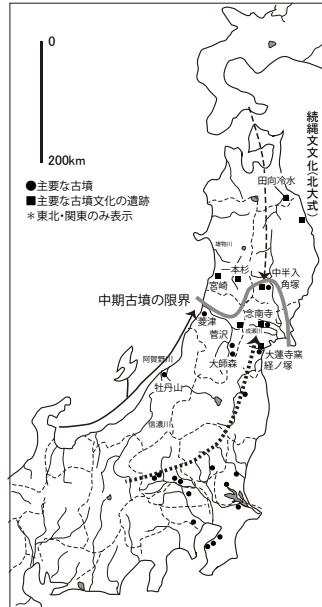
■ ● ○ 20~49m

図2 古墳の推移と城柵の関係

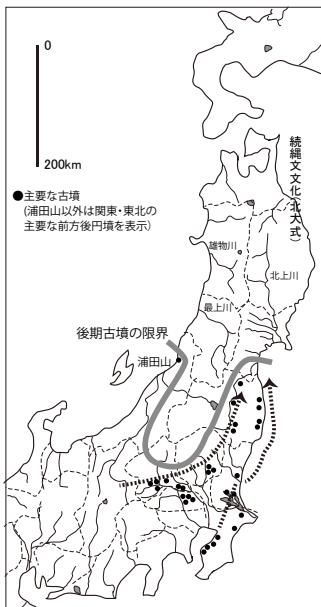
1. 古墳前期



2. 古墳中期



3. 古墳後期



4. 古代

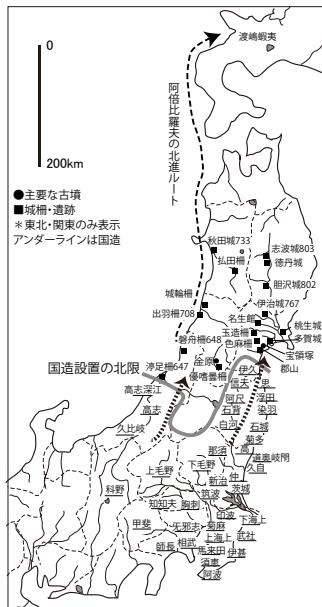


図1 東北・関東の古墳時代・古代の関係図

小 結

以上、きわめて粗削りながら、東北地方の古墳文化と、関東地方の状況を重ねつつ紹介してきた。古墳文化の最前線は時期によって北上、南下を繰り返したが、その時々の北限は、後の城柵の造営位置とオーバーラップしていた。国家的な蝦夷征討や柵戸の配置（移民）を行なう遙か以前から、地域開発や產品流通を目的として大掛かりな人の移動があり、長大な情報・物流ネットワークの構築が行われてきたのである。

4世紀の古墳文化の北上は、8世紀の柵戸の移住以上に大規模で急速だった可能性が高い。古墳時代の集団関係は手工業の扶植とともに、皮革や鉄器の取得を主軸とした北と南の経済ネットワークの構築が主眼であったようにもみえ、そこには関東を飛び越して、より西と結んだ先進性もあった。律令期の北方進出は、王化思想と38年戦争の軍事的側面が強調されるが、改めて経済的側面からもとらえ直すことが必要ではないだろうか。

参考文献

- 池上悟 2000『日本の横穴墓』雄山閣
- 石橋宏 2013『古墳時代石棺秩序の復元的研究』六一書房
- 草野潤平 2015「横穴式石室からみた東北・関東の交流－阿武隈川流域を中心として」『阿武隈川流域における古墳時代首長層の動向把握のための基礎的研究』福島大学行政学類
- 熊谷公男編 2004『古代の蝦夷と城柵』吉川弘文館
- 白石太一郎 1992「関東の後期大型前方後円墳」『国立歴史民俗博物館研究報告』44
- 菅原祥夫 2016「律令国家形成期の移民と集落」『蝦夷と城柵の時代』吉川弘文館
- 田中良之 2015「古人骨からよみがえる甲を着た古墳人の姿」『よみがえれ古墳人』群馬県
- 辻秀人編 2017『古代倭国北縁の転轍と交流』別冊季刊考古学 24、雄山閣
- 都出比呂志 1991「日本古代の国家形成論序説－前方後円墳体制の提唱」『日本史研究』343
- 中塚武 2015「酸素同位体比年輪年代法がもたらす新しい考古学研究の可能性」『考古学研究』62-2 考古学研究会
- 林正之 2015「末期古墳の再検討」『古代』137 早稲田大学考古学会
- 比田井克仁 2004「古墳時代前期における関東土器圏の北上」『史館』33 史館同人会
- 藤沢敦 2009「墳墓から見た古代の本州島北部と北海道」『国立歴史民俗博物館研究報告』152
- 藤沢敦 2013「古墳時代から飛鳥・奈良時代にかけての東北地方日本海側の様相」『国立歴史民俗博物館研究報告』179
- 古川一明 2013「宮城県地域における古代地方行政単位の形成過程について」『国立歴史民俗博物館研究報告』179
- 松本建連 2011『蝦夷とは誰か』同成社
- 八木光則 2010『古代蝦夷社会の成立』同成社
- 若狭徹 2017『前方後円墳と東国社会』(古代の東国1) 吉川弘文館

出自の豪族が東北経営に関わっていたことを示唆する（上毛野君の祖の征夷伝承は、景行紀、仁徳紀にもみられる）。また初期の陸奥按察使・陸奥守を上毛野朝臣氏が歴任することも、從前からの東北経営の実績を踏まえたものと理解される。

群集墳と共に横穴墓も盛行する。南関東タイプの存在も指摘されるが、大崎市では肥後型横穴墓（山畠装飾横穴墓群、大迫〔高岩・八ツ穴〕横穴墓群など）が特筆される（池上 2000、古川 2013）。ドーム型天井の玄室をもち、コの字型に3つ有縁棺台を配する型式で、装飾モチーフとともに熊本県菊池川流域の横穴墓と酷似することから、肥後からの人の移動が推定される（図5）。菊池川流域には、白村江の戦（663年）敗戦後の危機に対処して造営された鞠智城が存在することが注意される。西域の山城防衛のために東国から防人が徵発され、また俘囚が筑紫国に送られた（神亀2〔725〕年に578人）ように、国家形成期の境界領域の防衛・経営にともなって、東西の地域間で集團移動や人的交流があったことを想像させる。陸奥国信太郡（現大崎市）の生王五百足が百済救援（663年）に従軍して俘虜となり、40年後に生還した記事（『続日本紀』慶雲4〔707〕年）なども想起されるところである。

関東・東北における九州系横穴墓・装飾古墳の出現は6世紀末までさかのぼり、人の動きは文献記録より早く始まっている。関東系土器の移動に関してこれと同じである。移住者の出自は多様であり、関東系土器の国別型式の移入に時間差があることも指摘されている（菅原 2016）。いずれにしても、この時期の古墳・横穴墓の北限は北上川下流の江合川流域であり、古墳前期の最前線と同じ位置にあることが注意されよう。

日本海側の山形県米沢地域でも6世紀後半の空白期間を置き、7世紀から横穴式石室をもつ群集墳が出現する。最大のものは山形県高畠町金原古墳（円24m）で、優嗜羨柵や置賜郡（評）家推定地と隣接する。新潟県域の新式群集墳の北限は高田平野で、新潟平野には見られない。また横穴墓は、新潟県・山形県には展開しない。横穴墓は上野や信濃でほとんど受容されておらず、出羽の柵戸（和銅7〔714〕・靈亀2〔716〕・養老元〔717〕年）が上野・信濃の民を主軸に編成されたことと親和的である。

（2）末期古墳の展開

東北北部から北海道において、6世紀末から10世紀にかけて存続した墓制として末期古墳がある。円形に周溝を巡らし、埋葬施設に土坑（木棺使用）と礫槧を用いたものが知られ、蝦夷の墓制と認識されている。礫槧系は单葬の横穴式石室を基本としており、東北北部でも南の北上川中・下流域に広がりをもち、南方に接した古墳文化の新式群集墳からの影響が説かれている。一方、土坑系は北上川上流から太平洋沿岸、さらに秋田県や青森県津軽地方、北海道石狩低地に展開する。埋葬施設の土坑は続縄文の土壙墓と関係し、それが古墳の影響を受けつつ独自に生成したとされてきた（八木 2010・藤沢 2009）が、近年では関東地方の常総地域からの影響とみる意見もある（林 2015）。末期古墳の系譜の検討は、蝦夷の出自の組み合わせ（続縄文系・古墳文化系）を検討するうえで重要な問題であるが、林正之や松本建速（松本 2011）などは、蝦夷の大半は関東からの大規模移民（松本は馬匹生産集団）とする立場を取る。

遺物をもつ例もみられる。

日本海側の北限の横穴式石室は新潟県村上市浦田山2号墳で海岸部に位置する。6世紀初頭の堅穴系横口式石室（北部九州系）であり、同型式の石室が若狭や佐渡にみられることから、北陸を介した海路での集団移動と交流が推定される。これは、中期前半の牡丹山諏訪神社古墳の成立背景に港湾の掌握が推定されるのと同じである。ちなみに、浦田山古墳群は、磐舟柵（大化4〔648〕年）の推定地一帯に位置する。

東北地方中・北部は、古墳中期後半に中央と結んだが、再びこの段階で古墳築造は低調となった。一方東北南部では、前方後円墳の再出現がみられ、会津を除いてその広がりは国造設置エリアと重なっている。古墳後期における前方後円墳の存否は、律令期における国家側と蝦夷側のエリアを規定する指標の一つとなる。

この時期は、畿内勢力が関東地方との結びつきを強化した時期であった。ただし、王権と関東地方諸勢力との関係は多分に個別的でギブアンドテイクの色彩が強く、前方後円墳の多数承認などをみても、関東は自立的である。大化改新後の東国国司の派遣による東国の規制強化は、こうした自立性の解消を企図したものと理解できる。

6 終末期から末期古墳の動向

（1）終末期古墳と横穴墓の展開

東北地方での終末期古墳（7世紀）の展開は、国造設置域に広くみられる。中通り中部では須賀川市の前川田大塚古墳や蝦夷穴古墳（円36m）で大型横穴式石室が成立する。浜通りでもいわき市に勿来金冠塚古墳（円30）が存在する。これら大型横穴式石室は、常陸北部からの系譜が指摘される（草野2015）。

福島県中通り南部の白河地域では谷地久保古墳・野地久保古墳など畿内的な横口式石槨をもつ古墳が造られ、白河関と併せた陸奥の入口部の掌握が進められたとみられる。

仙台平野は国造領域の外側となるが、仙台市方領塚古墳（円墳・55m）のような大型の終末期古墳が築造され、6世紀末から群集墳や横穴墓群が盛行するとともに関東系土器が移入し始める。7世紀中頃には官衙的性格をもち、最初期の城柵とも評価される郡山遺跡が出現し、移入した有力勢力を核にした拠点形成が進んだ。この地域の古墳時代前・中期以来の交通・政治拠点としての立地は踏襲されている。

宮城県北部（大崎・栗原地域）は8世紀中頃以降に城柵集中地域となるが、江合川流域を北限として7世紀中葉以降に大規模な群集墳の出現が知られる。代表例は色麻町色麻古墳群（7世紀中葉から8世紀）で推定500基が築造され、胴張单室の横穴式石室の構造は北西関東との関係が指摘される。その他の群集墳や横穴墓群の出現も、移民との関りが推定されている。靈龜元（715）年に「上野国など6国の富民1000戸」の移住政策との関係が考えられるが、古墳の築造や防衛的な集落はそれより早く始まっており、移住や地域形成は先行して進められていたとみられる。舒明天皇9（637）年、大仁上毛野君形名が反乱蝦夷を鎮圧する將軍として派遣された記事（「日本書紀」）は、国家的征夷事業の前の大化前代に関東

渡来系集団の移入が考えられる。また陶質土器の出土も伝承される。高畠町松沢古墳群には積石塚が2基知られている。地山が岩盤であるため自生説が優勢だが、渡来文化との関係を疑って調査する必要を感じる。この時期に馬生産を強く推進していた至近地は上毛野西部地域であるが、近年火碎流の下から小札甲を着装した状態で見つかった同地の首長（渋川市金井東裏遺跡1号人骨）は渡来形質が指摘されている（田中2015）。この時期の馬匹生産と渡来系集団の移動は、倭王権と連携した施策として注視しておくべきと考える。

（3）続縄文文化と古墳文化

続縄文集団は日本海側では古墳前期に南下し、海伝いに越後までの展開が知られる。太平洋岸で最も南下するのは、古墳中期後半である。岩手県胆沢地域から宮崎県大崎平野を中心として仙台平野まで続縄文土器が確認され、宮城県湯倉産黒曜石の利用と流通が知られる（図5）。皮革と鉄製品を核とした続縄文集団の生産活動と古墳文化側との交易が推定される。

また、古墳文化の集落も遡上する。青森県八戸市の田向冷水遺跡などでカマドをもつ方形堅穴住居が知られ、堅穴住居と土師器・須恵器をもつ古墳文化の集落が北東北に展開する（図5）。日本海側でも秋田県由利本荘市宮崎遺跡や横手市一本杉遺跡で古墳文化の集落が検出された。続縄文集団の土壙墓には、須恵器や土師器の副葬が見られるようになる。

5 東北地方の南北での後期古墳築造の差異

（1）関東における前方後円墳の多出

古墳後期前半（6世紀前半）は百舌鳥・古市古墳群が終焉し、列島全体で古墳系列の組み換えがみられる。「日本書紀」には継体期から安閑期にかけて、西の筑紫地域、東の武藏・上毛野地域において内乱と王権の闘争が記されており、これを契機にして屯倉制や国造制の展開が始まる。前方後円墳は、大王墓や王権中枢の氏族墓を除いて小型化、ないしは終焉し、各地で円墳が主体となる。

一方、関東地方では大型前方後円墳の築造が盛行し、特に6世紀後半以降、倭の大型前方後円墳の大半は関東地方に築造される（白石1992）。横穴式石室が関東全域に展開するが畿内型は少なく、小地域毎に多様な系譜・型式の石室が併存する。後の関東地方には伴造系氏族が多く存在することから、王家や中央氏族が屯倉經營などを通じて関東の豪族と個別に結びついたと考えられる。中央は経済的・軍事的基盤として東国に依拠する一方、東国側では中央の権威と技術基盤を求めて地域内部での地位上昇を図った。いわばギブアンドテイクの関係であった。このため古い権威である前方後円墳が温存されたのである。

（2）東北地方における前方後円墳築造の温度差

東北地方では岩手県や宮城県で前方後円墳の築造が停止し、低調化する。しかし、南部の宮城県南端部・福島県中通り・浜通りでは後期後半になると前方後円墳が復活した。ただし大型墳ではなく、白河市下総塚古墳（72m）、桑折町錦木塚古墳（43m）程度の中型墳が最大規模となる。この時期以降、横穴墓が出現するが、いわき市の中田横穴墓のように首長級の

らがその傘下に配備したことが渡来系文物の分布から推定できる。そのため先の利益共同体は分解し、各首長が夫々に渡来技術をパックとした地域経営を開拓したのである。

またこの時期は、一転して東北地方の古墳文化が活気づき、北進する時期である。前方後円墳は岩手県奥州市（胆沢地域）の角塚古墳（54m）まで展開し、埴輪も樹立する。近くの中半入遺跡では、柵列を伴う方形環濠を中心に、カマドをもつ竪穴住居の集落が展開し、古式須恵器・石製模造品・琥珀・黒曜石製石器・馬遺存体複数が出土する。続縄文土器も客体ながら存在する。小鍛冶の痕跡から鉄器加工や、琥珀製品の加工、黒曜石製石器を用いた皮革生産などが推定されており、角塚古墳被葬者にかかる地域拠点であり、続縄文文化との交流のハブでもあったと考えられる（図5）。馬の存在は特筆されるが、同時期の馬生産は長野県伊那谷から上毛野西部にかけて盛行しており、その地域との関係が考慮される。

宮城県の全域でも前方後円墳が造られ、名取大塚山古墳（90m）のように大型墳も見られる。福島県中通りには人物埴輪をもつ帆立貝形古墳が築かれる。また、仙台市大蓮寺須恵器窯が5世紀中頃（ON46式期）、福島県泉崎窯が後半（TK23式期）に開窯しており、多賀城市山王・市川橋遺跡では鉄器生産や韓式系土器がみられるなど、手工業の振興が特徴的である。須恵器生産の開始は現状では関東地方より古い。

ところで、近年注目されるのは大崎平野の色麻町念南寺古墳（前方後円墳・56m・図4）、仙台市一塚古墳・二塚古墳（各々20mほどの円墳）である。いずれも5世紀後半から6世紀初頭の古式の家形石棺を内部に納める。これは、東日本で最古の家形石棺の一群である。関東地方では家形石棺は6世紀末の群馬県今泉口八幡山古墳や総社愛宕山古墳が初出となるので東北の一群は相当に古い（石橋2013）。須恵器や石棺とともに、東海・関東地方を飛び越えた新文物の移入が成されたことになる。この時期には、埼玉稻荷山古墳の鉄劍銘に見るよう、上番制の開始など王権と地方豪族の直接的な関係形成が指摘されており、これらの石棺は中間地域を飛び越え王権（あるいは九州）との繋がりを想定しないと説明しにくい。特に念南寺石棺は、畿内のの大王墓にも運ばれた九州熊本県宇土半島の馬門石製家形石棺と（石材は異なるが）同型式とされる（石橋2013）。

なお、会津では喜多方市灰塚山古墳の第二埋葬施設が中期後半に下る可能性があり、同市にはこの時期の大型首長居館である古屋敷遺跡が知られている。

ところで、先述した角塚古墳や中半入遺跡は、胆沢城（延暦21〔802〕年設置）に近接することが注意される。古墳中期後半における古墳文化の最前線は、律令期城柵の後半期の最前線と合致するのである。

（2）山形県地域の展開

山形県域では、川西町下小松古墳群などで小型前方後円墳を中心とした古式群集墳が出現する。群集墳の形成は関東に遅れていない。既述のとおり中期中葉には畿内的な埴輪を出す菅沼2号墳が築かれている。また、渡来系文物が散見され、山形市大之越古墳（円墳・15m・図5）では鍛冶具（鉄鉗）、鎧子、古式の馬具、日本で最古級となる单鳳環頭大刀、サルボの可能性がある鉄製品などが伴っている。馬をたずさえ、最新の冶金技術を保持した

結びつき、大首長を共立した結果であり、それは倭王権の一員として対外交流を担うための代表者の選定であったとみている(若狭 2017)。渡来人の移入による新しい地域経営のため、利益共同体として上毛野の族長たちが共立したのが太田天神山古墳の成立要因と考える。

この時期の東北地方の低調化は、対外的進出のために共同して大首長を衰退するような社会情勢に発展しなかったことを示唆する。雷神山古墳を生んだ共体制は 5 世紀には霧散し、有力首長の存在すら不明瞭になる。5 世紀から 7 世紀は再び寒冷化が進んだと考えられており、その影響を検討することも必要である。

(2) 点的に存在する西の要素

しかしながら、低調とはいえた太平洋岸では、長持形石棺をもつ宮城県経ノ塚古墳(円墳・36m)が築かれている。また、山形県米沢盆地の高畠町大師森洞穴にも長持形石棺が 2 基あり、同じく山形県庄内平野の鶴岡市菱津古墳にも長持形石棺が見られる(図 4)。

長持形石棺は、百舌鳥・古市古墳群で創始された大王の棺であり、大王と畿内主要豪族などに限定して採用された。関東地方では、上毛野の太田天神山古墳とお富士山古墳に畿内と遜色ない長持形石棺が採用されただけであり、上総・下総・南武藏にその模倣品といえる類長持形石棺が知られているだけである。山形県の 3 例は石棺文化が定着していた丹後との関係が指摘され石棺文化が長駆して及んだものと考えられる(石橋 2013)。また山形県では菅沢 2 号墳に中期中葉とみられる畿内型の器財埴輪(盾・鞍・甲冑形埴輪)が採用されている(図 4)。

このように、中期前半～中葉は日本海側からの動きが活発であるが、越後の新潟市東区でみつかった牡丹山諫訪神社古墳が注目される。越後で唯一の埴輪樹立古墳であり、中期前半の埴輪を樹立し、短甲を保持していた。信濃川・阿賀野川河口の海岸砂丘上の位置からしても日本海側の港湾を押さえた首長像が想定される。この古墳の位置は後の淳足柵(大化 3 [647] 年)の推定地一帯であり、倭王権の日本海側の港湾拠点として、一貫して重要な位置を占めていたことが確認できる。この時期には、上毛野に連接する魚野川流域に群集墳(飯綱山古墳群)が登場し、短甲などを副葬しており、筆者は上毛野勢力と日本海側(越後)を結ぶルートも考慮すべきと考える。

4. 北進する前方後円墳—中期中葉から後半の動態—

(1) 関東の渡来人編成と前方後円墳の北上

関東では、中期後半(5 世紀後半)になると巨大前方後円墳被葬者を共立する体制が解体し、100m級前方後円墳が各地に併存するようになる。上毛野では 5 世紀前半から渡来文物が一定量出土し始め、その後半には厚く見られることから、対外活動を通じて渡来人集団が獲得されたとみられる。「日本書紀」神功紀～仁徳紀にかけて、上毛野氏祖らが王権の命によって百濟との外交活動を担い、新羅征討の將軍として活動する記事が収録される。その中に「新羅の四邑の民を連れ帰った」とする記載があるが、渡来文物を出土する考古学的所見とマッチする。上毛野では中期前半からの対外活動をへて獲得した渡来人を、地域毎の首長

同盟者になったのであろう。この時期には、丹後に 200m級前方後円墳（京都府網野銚子塚古墳・神明山古墳）が、また東北と同じく周縁と評価される南九州に唐仁大塚古墳（鹿児島県大隅地域・156m）が出現しており、東北の王もまた列島史のなかで評価すべきと考える。

雷神山古墳は、太平洋を望む愛島丘陵の縁辺部に側面を向ける。名取川河口のラグーンに近く、ここに拠点的な津が形成されていたのであろう。被葬者は畿内からの長大な海運ルートの終着地を押さえたこの地域全域の共立王とみるべきであろう。

東北地方とつながる関東地方の動静としては、浜通りに向けての外港となる常陸の那珂川河口・涸沼一帯には磯浜古墳群などが存在し、常陸唯一の三角縁神獣鏡が出土している。また、久慈川下流には関東の前期前半で最大の梵天山古墳（160m）が築かれた。中通りへのルートでは、常陸の筑波山西麓に葦間山古墳（140m）、長辺寺山古墳（120m）が築造され、那須地域には大型前方後方墳が 4 基連続して築造されている（上待塚古墳 114mなど）。これらの地域を通じて、東北地方太平洋側とのネットワークが構築されたのである。

（3）古墳前期文化の最前線

近年では、宮城県栗原市入の沢遺跡の発見が注目される（辻 2017、図 4）。北上川支流迫川南岸の独立丘を占めた環濠集落で、150×100m範囲に環濠と材木柵を巡らし、張り出しを設ける。保存のため完全調査していないが、多くの堅穴住居が焼失し、住居からは併せて 4 面の小型倭製鏡、勾玉・管玉などの玉類、石製品、多数の鉄斧・鉄鋤先などが出土している。本遺跡のリーダーは、死後には中型以上の古墳被葬者となる階層であった。

しかしながら、宮城県最北の栗原地域には当該期の古墳は不明である。入の沢遺跡から 20km 南方の江合川流域（大崎地方）が前期古墳の北限で、ここには青塚古墳（90m）や中型円墳が複数築かれている。入の沢遺跡は、古墳築造地から張り出した古墳前期における古墳文化北縁の防衛拠点であったとみられる。入の沢遺跡の眼下には伊治城（神護景雲元〔767〕年設置。下層からは古墳前期の溝区画遺構も検出がある）。宝亀 11（780）年、王権に帰属し郡領となっていた蝦夷の有力者伊治公砦麻呂が反乱した地でもある。古墳前期の古墳文化最前線は、8 世紀後半の古代国家形成の際にも防衛ラインとなった地点と同じであった。

3. 空疎化する東北の古墳中期前半

（1）大型前方後円墳の不在

中期前半（5 世紀前半）は、畿内では百舌鳥・古市古墳群が大規模に展開する時期である。列島各地の古墳の最大化はこの時期に生じているが、東北の古墳文化は低調化する時期となっている。前期古墳の活況は影を潜め、ある程度の古墳がみられるのは仙台平野・会津盆地にほぼ限られる（会津喜多方の灰塚山古墳〔61m〕が中期に位置づくことが判明し、前半～中葉の築造とされている）。

この時期、関東では上毛野の太田天神山古墳（210m）、常陸の舟塚山古墳（186m）、上総の内裏塚古墳（144m）など古墳が最大化し、上毛野には倭王権中枢と同格の長持形石棺が許されている。筆者は太田天神山古墳の成立は、地元経済圏を越えた上毛野全体の首長らが

2. 古墳文化の成立と北進

(1) 前期古墳文化の成立

関東地方の古墳文化は、弥生時代末の大規模な集団移動から始まる（図1）。東海東部集団、続いて東海西部集団、加えて北陸北東部集団が大規模に動く。倭王権の成立期にかかる社会変動がその背景であるが、筆者は政治的な動きとともに多雨を伴った環境変動（中塚2015）を要因の一つとして推定する。多雨の連鎖で経営難に陥った東海・北陸の低地性集団の一部がそのソフトウェアを携え、人口圧が少ない関東地方に移動したとみる。3・4世紀は温暖化傾向であり、稻作の北進と生産力の拡大には適合していたと考えられる。

主として南関東には東海東部集団、西関東には東海西部集団が定着し、在来集団と交わりながら地域を形成した。3世紀末には前方後方墳（東海地方を震源とした墓制）が広く成立するが、沿岸部には早い段階で前方後円墳が登場する。海運ネットワークでいち早くヤマトとつながった集団が前方後円墳を採用したと考えられる。

なお、東北地方へは大別して2つの動きが加速する。一是、日本海側から越後を介して福島県会津盆地に古墳文化が波及する流れである。移動したのは主として北陸北東部集団であった。会津では3世紀末の前方後円墳（杵ヶ森古墳）からスタートし、4世紀には大型前方後円墳を連続して造営した。会津大塚山古墳（114m）は東北地方唯一の三角縁神獣鏡を出土し、亀ヶ森古墳は墳長130mに達している（図2・3）。

その二是太平洋側を北上する流れである。土器の系譜から見てその震源は房総地域にあり（比田井2004）、弥生時代まで方形周溝墓や環壕集落がなかった常陸や下毛野、さらには東北地方南部太平洋側にむけて集団が大規模に拡散する。その動きには、①下総から鬼怒川流域を北上し、福島県中通りから宮城県南部に至る動きと、②常陸から太平洋伝いに浜通りを経て、宮城県南部に至る二ルートが知られる。

以上、北陸と南関東からの大規模な人の移動を原因として、東北地方に古墳文化が成立したのであった。古墳前期の前方後円墳は、越後では蒲原地方（菖蒲塚古墳53m）、内陸部では会津の北の米沢盆地（稻荷森古墳90m）、太平洋岸では宮城県大崎平野（青塚古墳90m）にまで及んだ。前方後円墳以外の円墳はそれぞれさらに少し北にまで（越後では胎内市、山形では山形盆地）に到達している。太平洋岸の中通りや浜通りなど仙台平野までの経路には、大安場古墳（中通り・前方後方墳83m）、桜井古墳（浜通り・前方後方墳75m）、玉山1号墳（浜通り・前方後円墳114m）、飯野坂古墳群（仙台平野・前方後方墳66mほか）、遠見塚古墳（仙台平野・前方後円墳110m）などの大型古墳が構築された。

(2) 共立王の登場

驚くべきは前期後半になって、宮城県名取市に墳長168mの雷神山古墳が登場したことだ。古墳前期の東日本においては上毛野の浅間山古墳（172m）・甲斐の銚子塚古墳（168m）に並ぶ規模を誇る。陸奥の首長らは、古墳前期の半世紀ほどで耕地開発や物流システムを構築し、共立王を押し立てて、毛野や甲斐の王と同様に倭王権（おそらく佐紀政権）の主要な

【講演④】

関東・東北の古墳時代社会の動態と城柵の成立

若狭 崇（明治大学文学部准教授）

はじめに

東日本の古代史において、律令国家による列島北縁地域の経営問題はきわめて重要な眼の一つである。国家は、東北地方北部に盤踞する人々を「蝦夷」と呼び、「城柵」という政治的・軍事的拠点を北に漸進させながら經營を実践した。なかでも8世紀後半から9世紀初頭にかけての抗争（38年戦争）は、国家威信をかけて実行されたものとして知られる。

こうした北方へのアクセスは、一般に飛鳥時代以降の事案と捉えられがちであるが、実際にはそれ以前の古墳時代から、繰り返し行われてきた。本発表では、筆者の専門である古墳時代を中心に据え、東北・関東の古墳文化の境界問題についてその動態を整理したい。

1. 古墳文化と前方後円墳ネットワーク

古墳文化とは、日本列島の中央部に、3世紀中頃から6世紀末まで存続した文化である。稻作を中心とする農耕や手工業生産を経済基盤とした階層社会であり、地域首長らは多様な形の墳墓を造営した。なかでも、ヤマト地方の豪族を核として、「前方後円墳」が最上位の墳墓として確立され、それを共有した豪族連合が日本列島の中央部に広がりを見せた（都出1991）。その前方後円墳を共有する広がりが古墳文化の範囲と規定できる（図1）。

前方後円墳には規模の大小があり、政治連合内での序列が表示された。また、前方後円墳の広がりは、鉄と稻を中心とした広域な経済連合体の証でもあり、その物流は大陸に接続していた。またこの繋がりは、舟運を核としたネットワークを機能させる安全保障体制でもあった。前方後円墳は、こうしたシステムに加入した首長とその配下集団のシンボルであるとともに、地域中心の所在を示すランドマークとしての社会的機能を担った。このため、長期に、また広域にわたって築造されたのである。

古墳文化の時間幅は、巨大前方後円墳（奈良県箸墓古墳〔280m〕）が登場した3世紀中頃から、最後の巨大前方後円墳（奈良県五条野丸山古墳〔320m〕）が完成した6世紀後半までと規定できる。空間は若干の伸び縮みがあるが、最大で岩手県胆沢地方から鹿児島県大隅地方までであり、その時期は5世紀となる。

古墳文化とともに日本列島にはあと二つの文化が存在した。沖縄を中心とした南西諸島に展開した貝塚後期文化、北海道から東北北部に展開した統繩文文化である。いずれも農耕を基軸としない狩猟採集文化であったが、特産物の交易を軸に古墳文化と結びついた。

(2) 横手盆地(秋田県内陸部)

- ・ 払田柵遺跡は、802年造営（年輪年代による）。10世紀後葉まで存続。
- ・ 外柵、内郭、政庁の三重構造。
- ・ 外柵（角材列）は創建当初に設置されるが、建て替えられることなく廃絶。
- ・ 内郭線（築地・角材列）は10世紀末まで建て替えられて存続。
- ・ 檜は外柵ではなく、内郭線に設置。
- ・ 外柵は東西約1,370m、南北約780m。外郭は東西765m、南北320m。



(3) 38年戦争

1) 経緯

- ・ 宝亀5(774)年、海道蝦夷えののきが桃生城を襲撃。
- ・ 宝亀11(780)年、伊治公皆麻呂が按察使紀廣純これはりひろじゅんを殺害、伊治城・多賀城を焼く。
- ・ 胆沢への出兵、志波での数度の戦いも起きる。
- ・ 延暦8(799)年、同13(794)年、胆沢で合戦、蝦夷側の勝利。
- ・ 延暦20(801)年、胆沢で合戦。翌年アテルイらが坂上田村麻呂に降伏。
- ・ 弘仁2(811)年、爾薩体にさなたい・閉伊攻略。

2) 宝亀段階の衝撃による城柵の軍事強化

- ・ 国家側は、城柵の巨大化を行い、多賀城を扇央とする扇端防衛ラインを構築。



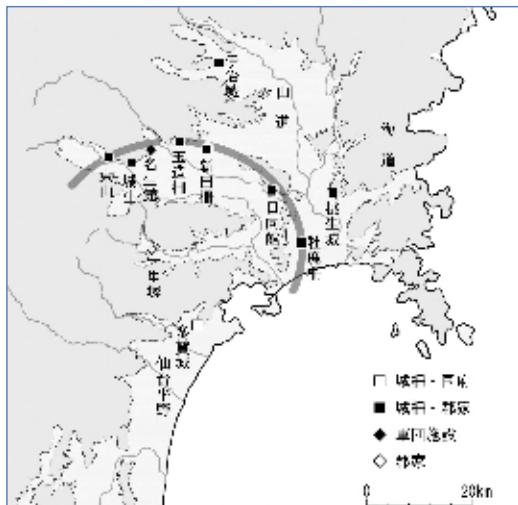


大崎市玉造柵跡（宮沢遺跡）全体図

(古川市教育委員会 1993『名生館官衛遺跡X III』第1図をもとに編集)

3) 大崎平野北縁の城柵

- ・ 城生一羽場遺跡、新田柵（大嶺八幡遺跡）、
日向館一城山裏遺跡
は、外郭線の時期や全
体構造が不明確ながら
も、東山、玉造柵と同
様の丘陵を取り込む大
規模城柵。
- ・ 8世紀末～9世紀初頭
の外郭線拡大の可能
性。
- ・ 山道・海道地域を意識
した城柵規模の拡大。



大崎平野の城柵群（東山～日向館遺跡）

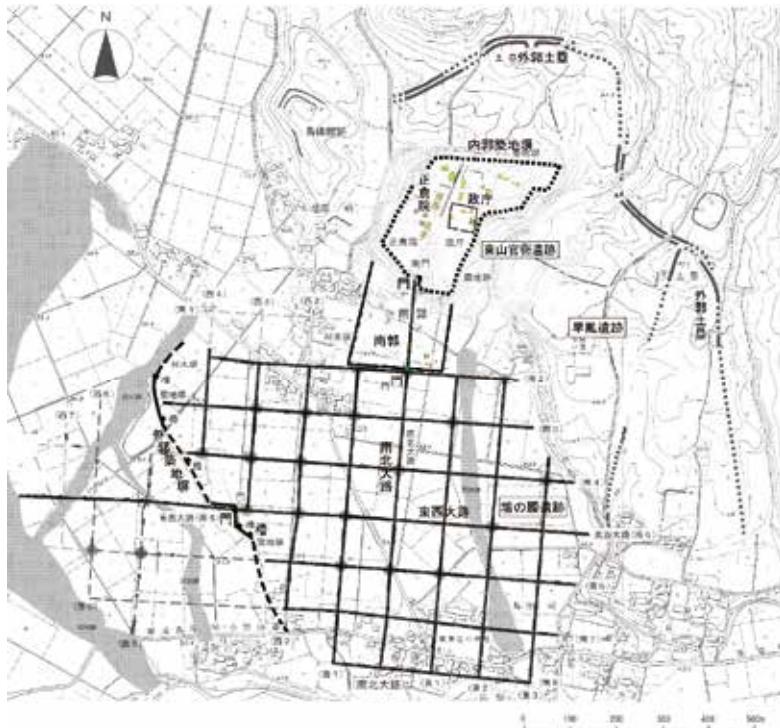
※名生館遺跡は7世紀後半設置の軍團施設と推定

3 巨大化する城柵

(1) 大崎平野(宮城県北部)の城柵

1) 東山遺跡

- ・ 8世紀中葉創建の郡家併設の城柵。東西300m、南北250m。
 - ・ 南側の壇の腰遺跡で方格地割ができる。東山との比高差は約20m。
 - ・ 8世紀末～9世紀中葉に壇の腰遺跡の西側に築地塀・西門・櫓、北～東の丘陵部の早風遺跡に土塁が造られる。東西1200m、南北1400m以上の規模。



加美町東山・壇の腰・早風遺跡全体図（8世紀末～9世紀中葉）

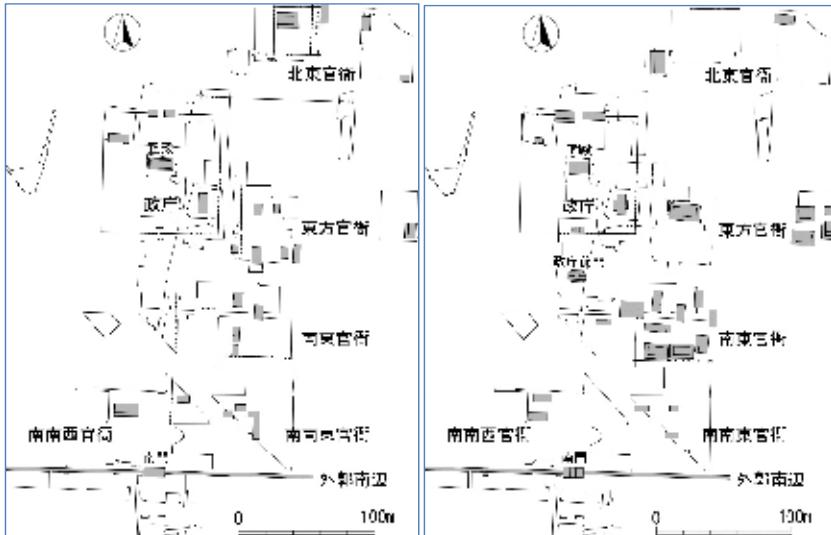
(加美町教育委員会 2008『壇の腰遺跡XV』図版125を編集)

2) 玉造柵(宮沢遺跡)

- ・内郭の内外から官衙的な須恵器蓋・高台付壺・円面鏡など8世紀中葉の土器があり、創建は8世紀中葉とみられ、玉造柵に比定。
 - ・東西680m、南北360mの略楕円形、政庁は未確認。
 - ・外郭線は複数の築地・土壘で構成され、9世紀前葉に構築（9世紀後葉まで存続）。
 - ・拡張された外郭線は、東西約1500m、南北約1300mの規模。

3) 官衙 = 曹司

- ・政庁周辺などに実務を取る官衙建物群を設置。
 - ・それぞれの城柵の個性が表れる。
 - ・多賀城は丘陵の平坦部ごとに独立的な官衙群を配置。
 - ・胆沢城は板塀でそれぞれの官衙を区画。9世紀前半の実務官衙から中葉以降の
遷給官衙へ移行。



胆沢城跡の官衙 (左: 9世紀前半 右: 9世紀後半)

(3) 寺院

1) 多賀城廃寺

- ・ 多賀城付属寺院。礎石建。
 - ・ 大宰府觀世音寺と同じ伽藍配置。

2) 秋田城廃寺（鶴ノ木地区寺院）

- ・ 秋田城付属寺院。掘立柱建物。
 - ・ 水洗厕からブタに寄生する寄生虫が検出され、渤海国使の来着を想定。
 - ・ 寺院を客館として使用。
宿



秋田城跡鶴ノ木地区の寺院跡（奈良時代）

(秋田市教育委員会 2008『秋田城跡一鶴ノ木地区』第159図を編集) ※建物名称は推定

2 城柵の基本構造と機能

(1) 城柵の立地・規模

- 丘陵または平地に立地。
- 要害の地には立地せず。
- 規模は8町～3.5町規模。一時的に巨大化。



(2) 城内の諸施設

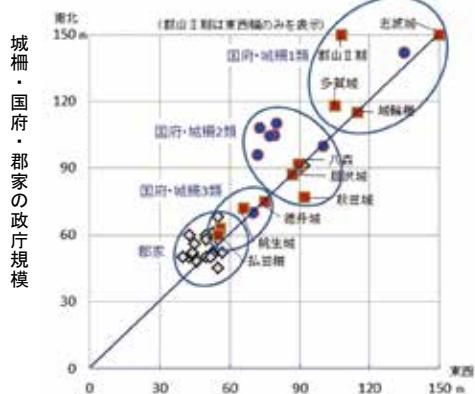
1) 外郭線

- 外周を囲む施設。
- 築地塀・木材塀・土塁による区画。
- 四至には門を配置。
- 外郭線をまたぐ櫓を設置。
- (城柵特有の施設)



2) 政府

- 中央付近に区画された政府を配置。
- 政府は城柵の中核部。
- 政府の建物配置は、正殿・東西脇殿がコの字形に配置（都宮の内裏のミニチュア）。
- 政府の規模による城柵の格付け。



多賀城跡の政府 (平安時代初頭)

【講演③】

東北古代城柵の構造と機能

八木 光則（岩手大学平泉文化研究センター客員教授）

1 城柵の目的

(1) 城柵のとらえ方

1) 城柵とは

- ・ 7世紀中頃～10世紀中頃までの東北日本における国家の支配拠点。
- ・ 東北日本在地住民は蝦夷と呼ばれた人々、城柵はおもに蝦夷（えみし）支配の拠点。

2) 城柵の当初目的（前半期）

- 1 櫻戸（きのへ）の移民（開墾や軍事が目的）
- 2 軍事力による蝦夷の統制
- 3 律令の地域支配（国都制の施行）
- 4 芝巣な造作による国家の威信誇示
- 5 北方産物の入手
(馬・鷺鷹の羽・海陸獣の毛皮・昆布など)

(2) 軍事拠点か行政府かの議論

- ・ 1960年代まで、蝦夷征伐のイメージが強く城柵は軍事拠点、櫻戸移配の堡砦と理解。
- ・ 1960年代以降、多賀城跡などの継続的発掘調査が開始され、築地塀や政府が都宮を模したものとして官衙=行政府の役割を強調。
- ・ 1990年代以降、櫓跡など軍事的遺構にも着目し、蝦夷支配の行政・軍事両面の拠点と理解。



城柵名	比定遺跡	造営	廢絶
渟足柵	(不明)	647年	不明
磐舟柵	(不明)	648年	不明
郡岐沙羅柵	(不明)	658年以前	不明
優曇曇（柵）	(不明)	689年以前	不明
（郡山）郡山遺跡		7世紀中葉	8世紀前葉
く玉造園（团）名生館遺跡		7世紀後半	9世紀後葉
出羽柵	(不明)	709年以前	737年以降
多賀城	多賀城跡	724年	11世紀前葉
秋田城	秋田城跡	733年	10世紀中葉
牡鹿柵	赤井遺跡	7c末～8c初頭	9世紀前葉
（東山）東山・壇の腰・早風		8世紀中葉	10世紀前半
色麻柵	城生・羽揚遺跡か	8世紀中葉	9世紀初頭
（小寺）小寺・杉の下遺跡		8世紀中葉	10世紀初頭
玉造柵	宮沢遺跡	8世紀中葉	10世紀
新田柵	大嶺八幡遺跡	8世紀中葉	9世紀前半
（日向館）日向館・城山裏		8世紀	9世紀
桃生城	桃生城跡	759年	774年
雄勝城	(不明)	759年	802年か
伊治城	城生野遺跡	767年	9世紀前葉
覚驚城	(不明)	780年	不明
（払田柵）払田柵遺跡		802年	10世紀後葉
胆沢城	胆沢城跡	802年	10世紀中葉
志波城	太田方八丁遺跡	803年	812年頃
（城輪柵）城輪柵遺跡		9世紀初頭	10世紀
中山柵	(不明)	804年以前	不明
徳丹城	徳丹城跡	812年	9世紀中葉

る。一方、東北の城柵は、国家の地域支配の原理を説明する。蝦夷への版図拡大は、一定の防御性を備え、政治支配の拠点となる城柵をまず設けた。そして、城柵の政庁は都の宮殿と系譜的に繋がる行政庁と外観重視の儀式空間をつくり、国家権力を誇示することで支配を拡大する政策をとったのである。

【文献註】

- 相原嘉之 2004 「倭京の”守り”－古代都市飛鳥の防衛システム構想－」『明日香村文化財調査研究紀要』4
- 相原嘉之 2017 『古代飛鳥の都市構造』吉川弘文館
- 井上和人 2008 『日本古代都城制の研究－藤原京・平城京の史的意義』吉川弘文館
- 井上和人 2014 『平城京左京南辺特殊地区再論』『条里制・古代都市研究』第30号 条里制・古代都市研究会
- 岸俊男 1981 『日本の古代宮都』(NHK大学講座) 日本放送出版協会
- 國下多美樹 2014 「古代宮垣廻」『龍谷大学論集』第484号 龍谷大学龍谷学会
- 熊谷公男 2000 「養老4年の蝦夷の反乱と多賀城の創建」『国立歴史民俗博物館研究報告』84
- 黒崎直 1997 「掘立柱塀と築地塀－藤原宮と平城宮の外周施設をめぐって」『立命館大学考古学論集Ⅰ』立命館大学考古学論集刊行会
- 黒田慶一 2014 「難波京の防衛システム」『大阪上町台地の総合的研究』(科研報告書) 大阪歴史博物館・大阪文化財研究所
- 鈴木拓也 2008 『戦争の日本史3 蝦夷と東北戦争』吉川弘文館
- 積山洋 2019 「難波羅城の一試論」『都城制研究会 発表資料』2019年6月15日 大阪歴史博物館
- 鶴見泰寿 2013 「平城京羅城門周辺の発掘調査」『条里制・古代都市研究』第29号 条里制・古代都市研究会
- 廣谷和也 2018 「多賀城政庁と周辺城柵・郡衙の政庁域の変遷と特質」『地方官衙政庁域の変遷と特質』(第21回古代官衙・集落研究会報告書) クバプロ
- 村田晃一 2011 「日本古代城柵の検討（一）」『宮城考古』13
- 山川均・佐藤亜聖 2008 「平城京・下三橋遺跡の調査成果とその意義」『日本考古学』第25号 日本考古学协会
- 山中敏史 2003 「V-2 築地塀」『古代の官衙遺跡』I 遺構編 奈良文化財研究所
- 李陽浩 2015 「前期難波宮の内裏規模をめぐる一考察」『建築史学』第65号 建築史学会
- 李陽浩 2018 「国庁・郡庁建築と前期難波宮」『地方官衙政庁城の変遷と特質』クバプロ
- 【調査報告書】
- 明日香村教育委員会 2006 『酒船石遺跡発掘調査報告書一付 飛鳥東垣内遺跡・飛鳥宮ノ下遺跡-』
- 明日香村教育委員会 2001 「1999-3次 八釣・東山古墳群の調査」『明日香村遺跡調査概報平成11年度』
- 大阪文化財研究所 2018 『細工谷遺跡発掘調査報告』III 大阪市博物館協会
- 高取町教育委員会 2003 「高取町森カシ谷遺跡調査概要」『平成14年度奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会資料』奈良県内市町村埋蔵文化財技術担当者連絡協議会
- 奈良国立文化財研究所 1982 『平城宮発掘調査報告X I』
- 大和郡山市 1972 『平城京羅城門跡発掘調査報告』奈良国立文化財研究所編

722	養老 6					8月陸奥鎮所初見（統紀）
724	神亀元					多賀城 政府 I 期 (717- 奈良時代中頃)
733	天平 5					
737	天平 9					
740	天平 12	聖武 (724- 748)			4月藤原宇合を征夷持節大將軍に任命 (統紀)	多賀城 政府 I 期 (717- 奈良時代中頃)
742	天平 14				1月藤原麻呂を持節大使に任命（統紀）	多賀城 政府 I 期 (717- 奈良時代中頃)
743	天平 15				12月恭仁宮遷都（統紀）	
744	天平 16				12月紫香楽宮に幸す（統紀）	
745	天平 17				2月難波宮を皇都とする（統紀）	
749	天平 21				5月平城京に都を戻す（統紀）	
756	天平勝宝 8	孝謙 (749- 757)			2月陸奥國小田郡で金產出（統日本紀）	
758	天平宝字 2	淳仁 (758- 763)				
762	天平宝字 6	称德 (764- 769)			12月桃生城、雄勝橋を造らず（統紀）	
767	神護景雲元				12月節度使藤原忠美朝氣が多賀城貢進（多賀城碑）	
768	神護景雲 2				10月陸奥國伊治城作了（統紀）	
774	宝龟 5				7月海道の蝦夷反し、桃生城西郭を破る（統紀）	
780	宝龟 11	光仁 (770- 780)			対蝦夷三十八年戦争開始	
784	延暦 3				3月奥羽越城造営着手、伊治郡 越反し守宗らを伊治城で殺害、反 後も多賀城を侵す。	
788	延暦 7				8月出羽国由利権・大室塞初見（統紀）	
789	延暦 8				2月大伴家持を持節征東將軍に任命 (統紀)	
791	延暦 10	桓武 (781- 805)			11月長岡京に遷都（統紀）	
794	延暦 13				7月紀古佐美を征東大使に任命（統紀）	
802	延暦 21				6月征東將軍忍足城での敗戦を報告 (統紀)	
803	延暦 22				9月征東將軍、箭刀を進上し敗戦の 喰問を受ける（統紀）	
804	延暦 23				7月大伴弟麻呂を征夷（東）大使、坂 上田村麻呂を副使に任命（統紀）	
811	弘仁 2	嵯峨朝 (809- 823)			1月征夷大將軍（大使）大伴弟麻呂に 箭刀を賜る（後紀）	
815	弘仁 5				6月征夷副將軍（副使）坂上田村麻 呂以下、蝦夷征伐（後紀）	
858	天安 2	文德朝 (850- 858)			10月平安京に遷都（後紀）	
869	貞觀 11					
870	貞觀 12	清和朝 (859- 876)			正月坂上田村麻呂に陸奥國胆沢城 を命ぜ（紀略）	
876	貞觀 18				3月造志波城使坂上田村麻呂辟見 (紀略)	
878	元慶 2	陽成朝 (877- 883)			正月坂上田村麻呂に胆沢城造営を命 ぜ（紀略）	
879	元慶 3				12月陸奥國出羽按察使文室綿麻呂が 志波城遷置を建議し、許される（後 紀）	
895	寛平 5	宇多朝 (887- 896)			11月丹波の二城に繩・塙を取 納（後紀）	
897	寛平 9					
898					5月陸奥國大地震、各地被災、海水 多賀城下に至る（三実）	
					3月出羽國夷存反し、秋田城を焼く (三実)	
					是賀守藤原保則、秋田城を復立、旧 制に倍する（保則伝）	
					9月秋田城の申畠自鳴（紀略）	

表1 古代日本の都・城・柵年表(岡田茂弘2016「古代日本東西の城・柵略年表」もとに加筆)

西暦	和暦	天皇	西南日本(出典)	主要官衙	鞠智城	都城・畿内(出典)	東北日本(出典)	主要官衙
583	敏達12		この歲火葦北國の子、百速達卒日羅が倭国に召され、国内要害に里塞を築く等獻言(書紀)					
603	推古11	推古 (592-628)				小野宮に遷る(書紀)		
630	舒明2	舒明 (629-641)				飛鳥岡本宮に遷る(書紀)		
636	舒明8					岡本宮焼亡、田中宮に移る(書紀)		
640	舒明12					百濟宮に遷る(書紀)		
645	皇極4	皇極 (642-644)				乙巳の変(書紀)		
645	大化元					難波長柄豊崎宮に遷る(書紀)		
646	大化2					改新の詔(書紀)		
647	大化3	孝德 (645-654)					この歲越年に浮足柵を造り、柵戸を置く(書紀)	
648	大化4						この歲越年に船舟柵を治め蝦夷に備え、越・信濃の民を柵戸に配置(書紀)	
655	齊明天					飛鳥板葺宮焼亡、飛鳥川原宮に移る(書紀)		
656	齊明天2	齊明天 (655-661)				後飛鳥岡本宮に遷る(書紀) 田身嶺に垣を巡らせ、両櫛宮を造る(書紀)		
658	齊明天4		この歲百濟国王・妃・太子が新羅の虜になる。國家が西北の畔りに兵を伸し城壁を繕修(書紀)			香山の西より石上山に至る溝を掘り、舟で石を運んで垣を作る(書紀)		
660	齊明天6						4月安倍比羅夫が鷲田(あきた)・渟代を征討(書紀) この歲都岐沙羅柵造らに授位(書紀) <仙台郡山1期官衙造営>	
663	天智2		8月倭軍・百濟白村江で唐新羅連合軍に敗戦(書紀)				石上池のほとりに須弥山を作り、肅慎を慶応する(書紀)	3月安倍比羅夫、蝦夷・肅慎を征討(書紀)
664	天智3		この歲対馬・壱岐等に坊人・烽を置き、筑紫に水城を築く(書紀)					
665	天智4	天智 (662-671)	8月百濟官人を派遣、長門国と筑紫国の大野・基塚城を築かせる(書紀)			近江大津宮に遷る(書紀)		
667	天智6		11月倭国高安城、讃岐国屋島城、対馬国金田城を築く(書紀)			冬高安城を修理(書紀)		
669	天智8							
670	天智9		2月長門に一城、筑紫に二城を築く(書紀)			6月壬申の乱(書紀)		
672	天武元					7月天武軍が三尾城攻略(書紀)		
677	天武6	天武 (672-686)				飛鳥淨御原宮に遷る(書紀)		
679	天武8					多物嶺の人々を飛鳥寺の西の機の下に慶応する(書紀)		
682	天武11					難波に羅城を築く(書紀)		
689	持統3	持統 (687-696)				隼人衆飛鳥寺の西の機の下で慶応する(書紀)		
694	持統8					飛鳥淨御原令を施行する(書紀)	正月薩英国優耆那郡の城養蝦夷に沙門を許す(書紀)	
698	文武2		8月大宰府に大野・基塚・鞠智の三城を縛治させる(統紀)			12月麻呂原宮遷都(書紀)	12月麻呂原宮遷都(書紀)	
699	文武3	文武 (697-707)						
700	文武4		12月大宰府に三野・稻穂の二城を修ませる(統紀)			9月高安城修造(統紀)		
701	大宝元							
709	和銅2	元明 (708-714)				2月越後・佐渡国に再び石船柵を修營させる(統紀)		
710	和銅3		12月備後国次城・常城廢止(統紀)			3月大宝律令施行(統紀)		
719	養老3	元正 (716-723)				8月高安城を廢止(統紀)	7月出羽柵初見(統紀)	
720	養老4		2月隼人反し大隅国守殺害(統紀)			3月平城京遷都(統紀)		
						7月接察使設置(統紀)		
						3月大伴旅人を征集し持節大將軍に任命(統紀)	3月謀反し接察使殺害、征東將軍任命(統紀)	

7世紀第3四半期から第4四半期

郡山官衙遺跡Ⅰ期(7世紀後半~末葉)

郡山官衙遺跡Ⅱ期(7世紀末葉~)

この間の7世紀後半～末は都を除く東西の城と柵に軍事的变化は見られない時代である。

持統8年（694）天武の意思を受け継いだ持統天皇は、都を藤原京に遷した。東北日本では、郡山遺跡II期官衙が陸奥国府として機能し始めた可能性が高い。文武朝に至って、西南日本では大野城、基肄城、鞠智城を築治させ、新たな地域支配の拠点と下。鞠智城はII期にあたり「コ」字状配置の建物が出現する。

大宝元年（701）に国郡制が導入され、都が平城京に遷された8世紀初め頃の東北地方の版図は、太平洋側が大崎平野、日本海側は庄内平野まで拡大した。そうした中でも養老4年（720）の蝦夷反乱を契機に古代国家は「神龜元年体制」（熊谷2000）と言われる蝦夷支配体制の見直しを行った。その後、聖武朝には領域拡大政策が中止されたが、8世紀半ば過ぎの孝謙朝の仲麻呂政権になると蝦夷支配体制の強化が進む。この時期に桃生城、雄勝城の造営、多賀城の修造が行われた。その圧力は、宝亀5年（774）の海道蝦夷の桃生城の襲撃へと繋がり、戦線は次第に山道、出羽国に拡大、いわゆる三十八年戦争に突入することになる。

延暦3年（784）、都は平城京から長岡京へ遷された。桓武天皇は、大和から山背への遷都を実現し、新皇統の都と位置付けた。光仁朝から征夷事業を引き継いだ桓武朝に於いては、延暦8年から3回の征夷が行われている。10年後の平安遷都の年には征夷將軍大伴弟麻呂から戦勝報告を受けており、二度目の遷都を演出したものとみられる（鈴木2008）。

一方、西南日本の山城は、高安城の廃城を皮切りに8世紀前半にはかなりの施設が役割を失ってしまった。大野城、基肄城、鞠智城は継続し、新羅との緊張関係が続いたことが関係する。

儀式空間の影響 さて奈良～平安時代の国府である多賀城政府は、都の政庁の影響を受けてI期（養老・神龜年間～8世紀中頃）から主殿の左右の脇殿を配置する「品」字形配置をとる。周囲は築地塀で区画された。II期（8世紀中頃～780年）には、建物が全面礎石建物に変更され瓦葺きとなる。特に、正殿前は石敷き広場隣、南門が翼廊となるなど儀式空間の整備が進み東北の城柵の構造に影響を与えた（廣谷和也2018）。政庁1町の規模も城柵政府の基準となり、役割に応じて変化した（村田晃一2011）。東北の城柵は、莊嚴施設として築地を採用し（中山敏史2003）、官衙配置は多賀城から影響を受けている。

一方、西海道諸国に対する総管の役割を担う大宰府では、遅くとも8世紀後半のII期には宮の大極殿、朝堂院を模倣した礎石建瓦葺きの中心施設を築地で囲む政庁が造営された。

このように、多賀城と太宰府という列島の東西に配置された政治的中枢施設は、まさに都の影響を色濃く持つ建築様式の施設が採用されており、国威の証としての装置の役割を担ったのであろう。

おわりに

都から古代山城と城柵をみると、当時の律令国家がどのような政策を持って体制維持・拡大をしていたのかが良くわかる。まず、西日本に分布する古代山城は、飛鳥時代以降、大陸との外交関係を常に意識し、軍事的緊張関係にも対応していたことを示す。水城と山城が代表的な事例となろう。そして、これらを政治的に統合していたのが大宰府となる。そして鞠智城の性格は、この両者を備えてい

ではないかとする考え方もある（鶴見泰寿 2013）。

長岡京では未だ羅城を確認できていない。続く、平安京では、『延喜式』左京職京程条で羅城の規模が記される。羅城の中心から外に向けて2丈（20尺）をとるもので、内訳は、羅城の築垣の半分が3尺、犬行7尺、溝の幅1丈（10尺）となる。井上氏の指摘するように、平安京羅城の規模は、平城京羅城の大尺を小尺に読み替えたものと一致し、平城京羅城が小尺に統一される和銅6年以前の当初の造営であることを示す（井上和人 2008）。

都の垣と城そして羅城の性格 都における垣ないし城の主な目的は宮殿の莊厳化にある。都の造営の手本は中国都城の宮殿にあったが、日本独自の形の宮殿を作り上げてきたものであった。羅城もまた築地ないし単廊構造で、大陸にみる防御性をもった城壁ではなく、門を含む正面観の莊厳性・威厳性を示すための建築意匠（装置）としての性格が強い。羅城は、都の玄関口としての内と外の境界であり、下ツ道-羅城門-朱雀大路-朱雀門-朝堂院-大極殿という、南から北に向けて展開した古代国家の宮殿の軸線の演出を高めるものであった。平城京の羅城である二本柱列は、径30cmという柱材を利用するが、単なる築地塀ではなく、羅城の性格を勘案すれば翼廊のような施設を想定しても良いのかもしれません。

3 都からみた城柵と山城

政局による城柵と山城の変化 東北地方に分布する古代城柵は、古代国家による東北地方への版図拡大が目的であった。具体的には、蝦夷との境界付近に城柵を築き、周辺に柵戸（移民）を居住させる政策が進められた。そして724年に多賀城という政治拠点の建設が進められ、その後は9世紀まで常に軍事的な緊張下で政治による支配の両立をしなければならなかつた。

西日本各地にある古代山城は、天智2年（663）8月、白村江で唐新羅連合軍に倭軍が敗戦したことを契機とする、対外的緊張関係を背景に次々と造営され、要となる大野城、基肄城、鞠智城以外は8世紀第1四半期にほぼ消滅したのである。従って、その第一の造営目的は軍事的な防衛にあったことは認められるところであろう。

まず、古代国家の首都たる都を中心に7世紀から9世紀の柵と城を通史的に相互比較すると何が見えるのであろうか。表1は、飛鳥宮から平安京までの都城の動きを中心軸において、東北日本の城柵と主要官衙、西南日本の山城と主要官衙の動向を通史的に配列したものである。

まず、推古天皇が推古11年（603）に小墾田宮を造営して以後、飛鳥を中心宮殿が固定化され、古代律令国家の礎ができた。そして始まったのは、孝德朝の東北への領域拡大であり、齐明朝の阿部比羅夫の遠征、郡山1期官衙造営に至る東北への進出があった。この間、西日本における軍事的活動はほとんど記録に残らない。

そして、天智2年（663年）の白村江の戦いにおける敗戦は、都も含め西日本各地に山城を成立させた。太宰府の成立、水城、大野城、基肄城を中心に軍事的緊張を反映した軍事施設が相次いで造営された。鞠智城もこの時期に成立した内陸の山城であった。飛鳥の都は、おそらく軍事目的から大津宮に遷された。壬申の乱に勝利した天武天皇は、飛鳥に都を戻し本格的な都城建設を目指すことになる。

(史料4)

是月、初置_ニ關於龍田山・大坂山_ニ。仍難波築_ニ羅城_ニ。

(『書紀』天武8年(679)11月条)

(史料5)

壬辰、廢_ニ河内国高安烽_ニ、始置_ニ高見烽及大倭国春日烽_ニ、以通_ニ平城_ニ成。

(『続紀』和銅5年(712)正月23日条)

史料4を根拠に天武朝難波宮に羅城があったとする考えは、滝川政次郎氏を先鞭に、岸俊男、吉田晶、直木孝次郎の各氏が示していた。最近では黒田慶一氏が難波京左京域にある細工谷遺跡の奈良時代柱列を土留め柱とみて、天武朝には遡らないが奈良時代前葉の羅城の城門とみている(黒田慶一2014)。しかし、その後の調査報告でそのような解釈はされることはなかった(大阪文化財研究所2018)。この遺構について、積山洋氏は、細工谷遺跡の柱列を南羅城とした時に京内に位置すること、そもそも版築層でないことから羅城の可能性を否定する。そして、新たな候補地として前期難波宮の内裏北西で確認された東西方向の柱列を羅城の候補と見ている(積山洋2019)。前期難波宮内裏の北西地点では、谷地形から古代の東西方向の柱列が確認されている。径約30cmの柱を残し、約2.3m間隔で並ぶ3基の柱列で、前期難波宮宮城門の北751.8mにあり、7世紀後半に造営された宮城外郭と再評価された(李陽浩2015)。積山氏はこれを天武朝の羅城とみる。私も難波の羅城は施工されたものと推定する。その構造は、飛鳥宮の防御施設のあり方から見て、版築土塁ではなく一本柱列であったのではないかと考え、積山氏の評価に近い。

一方、史料5に見られるように、平城京遷都に伴い、高安烽を廃止し、高見烽と春日烽を新たに設けた。高見烽は、天照山に当てる意見もあるが、現状では確証に乏しい。

平城京と長岡・平安京の羅城 平城京の正門である羅城門は、正面5間の重層瓦葺き礎石建物であることが明らかになっている(大和郡山市1972)。これは、羅城に取り付く門であり、次の史料6などから外国使節を迎える際に国威を示すための施設として機能したことが知られる。

(史料6)

己卯、新羅使入京。遣_ニ從六位下布施朝臣人・正七位上大野朝臣東人_ニ、率_ニ騎兵一百七十_ニ。迎_ニ於三椅_ニ。

(『続紀』和銅七年12月26日条)

三椅(みつはし)とは、羅城門外の佐保川に近い下三橋の地名(現平城京南方遺跡:旧下三橋遺跡)と考えられ、城外が外国使節を迎える場であった。この羅城門の発掘以降、羅城門周辺と以南の調査が進み、平城京が当初十条まで施工されていたことが判明しつつある。特に、羅城は東西一坊分で2条柱列が走行する状況で確認されている(右京は一部のみの確認)。柱間は南北1.5~1.8m、東西2.7mを基本とする。同報告では、削平を受けていないことから築地構造でない、柱抜き取り穴から多量の瓦が出土することが述べられる(山川均・佐藤垂聖2008)。井上和人氏は、この成果を踏まえ東西一坊にあった施設を単廊形式と表現して、それ以外は左京九条四坊南辺の成果から築地であったと想定した(井上和人2014)。ただし、平城京羅城の単廊という形式は、南北柱間(梁行)が5~6尺と狭く、通路としての機能を十分に果たすとは思えないから、大規模な寄柱とみて築地と見た方が良いの

宮の堀は、掘立柱穴は、約 2.7m 等間であるから、藤原宮は、飛鳥宮の伝統を引き継いだ宮垣の構造を持つていたことになる。藤原宮の宮垣の柱は全て抜き取られ、平城宮に運ばれたと推定されている。

移転先の有力な候補地は平城宮第一次大極殿院である（奈文研 1982）。同東面築地回廊の発掘調査で柱の内部が割り貫かれた木樋が発見され、藤原宮宮垣の柱材の可能性が指摘される（黒崎直 1997）。

この木樋から復原された掘立柱堀は、屋根と径約 40cm の柱、土壁で構成される地上高 19 尺（約 5.7m）の防御性を有する壁である。ただし、「城」のように内が高く、外が低い関係ではないから実際の防御性の維持という点では劣る構造である。このように藤原宮で復原できた一本柱堀は、正面のみ複雑な構造をもち正面観を豪壮にする変化が見られた。白雉 3 年（652）9 月、孝徳天皇は難波に難波長柄豊崎宮を造営し、朱鳥元年（686）の焼失まで都とした（前期難波宮）。この宮垣は、朱雀門の両側を掘立柱複廊とした「翼廊」の可能性が高い。従って、正面観を豪壮化することは孝徳朝を初源として、藤原宮に引き継がれることになる。また、朱雀門の存在も重要である。

（史料 1）

三月乙巳朔辛酉、安倍大臣薨。天皇幸_二朱雀門_一、舉哀而慟。皇祖母尊・皇太子等及諸公卿、悉隨哀哭
（『書紀』大化 4 年（648）3 月条）

孝徳天皇は、左大臣である安倍内麻呂の死を皇極上皇や皇太子中大兄皇子等とともに悼み悲しんだ。朱雀門は出御の場であり、天皇の日常空間と非日常空間との境界の役割を果たすようになる。宮垣は朱雀門と結びついで、南面する天皇の出御の空間も付与されるようになった（史料 1）。

そして、平城宮朱雀門に至り、隼人・蝦夷に対して国家を示威する場にもなった（史料 2）。

（史料 2）

三年春正月壬子朔、（中略）。左將軍正五位上大伴宿禰旅人・副將軍從五位下穗積朝臣老、右將軍正五位下佐伯宿禰石湯・副將軍從五位下小野朝臣馬養等、於_二皇城門外朱雀路東西_一分頭、陳_二列騎兵_一、引_二隼人・蝦夷等_一而進。
（『統紀』和銅 3 年（710）正月朔条）

築地の導入とその後 土を版築して厚い壁を作り、屋根を葺いた築地（築垣）は、平城宮で初めて都に採用された。次の史料 3 から築地は防御性を持ったものと認識されていたことがわかる。

（史料 3）

丙子、勅、頃聞、諸国役民。労_二於造都_一、奔亡猶多。雖_レ禁不_レ止。今宮垣未_レ成、攻守不_レ備。宜下權立_二軍營_一禁_二守兵庫_一上。（後略）（『統紀』和銅 4 年（711）9 月丙子条）

この史料にみる築地は、宮城の周囲に巡らされた規模の大きな築地（大垣）に推定されている。平城宮の大垣は、発掘によって基底幅 2.7m（約 9 尺）と判明しており、推定高は 5.64m であったと見られている。この規模は、飛鳥時代の都の規模と類似しており、その系譜上で築地が導入されたことを物語る。

難波の羅城 難波京に羅城を置く、そして平城京と難波京との連絡路に烽が設けられたとする記事がある（史料 4・5）。

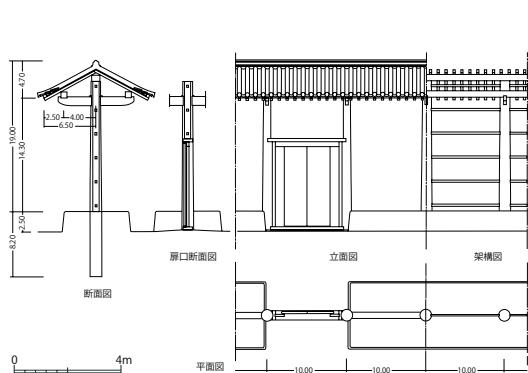


図1 平城宮出土木桶から復原された藤原宮の
1本柱構造の宮垣(平城宮X1報告を再トレース)

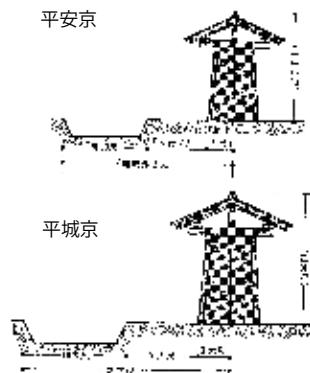


図2 平安京と平城京の羅城
(井上2008に加筆)

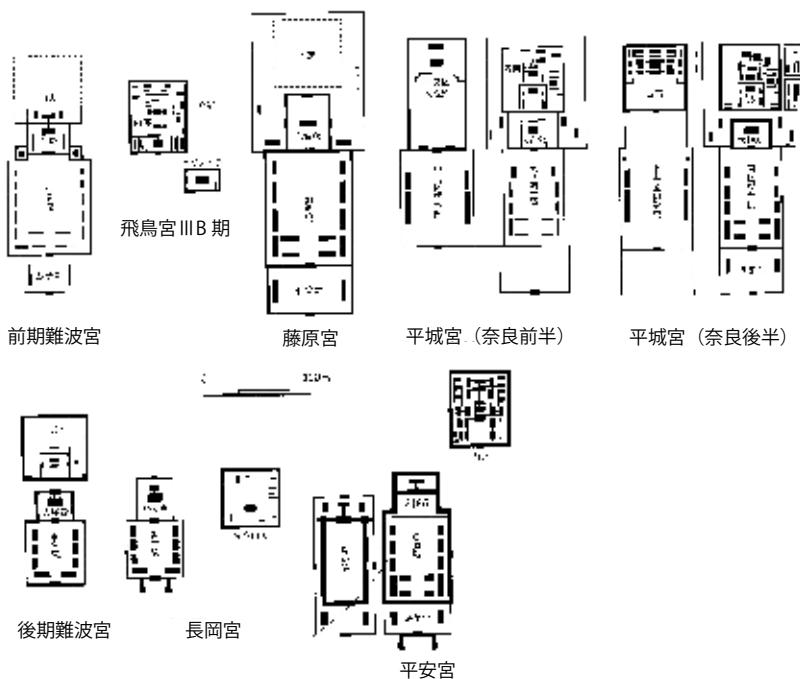


図3 日本の都における中枢施設（内裏・大極殿院・朝堂院）の変遷
(李 2018 を改変・加筆)

2 都の宮垣と羅城の性格

日本の古代の都は、7世紀に飛鳥の小盆地に宮殿を固定化した。そして7世紀末に大和三山のある交通の要所、広義の飛鳥の地に条坊制を備えた藤原京が成立し本格的な都市が營まれることになる。

まず、天武5年（676）、「新城に都をつくらむとす」（『日本書紀』同年是歳條）と記される。以降、「新城（にいき）」は、天武11年3月1日条、同年3月16日条に登場する。また、持統5年10月、持統6年1月に「新益京」とも表現された。そして、持統8年（694）12月、「藤原京の遷し居します」とあって藤原京に遷都されたのである。

日本書紀には、「新城」、「新益京」、「藤原京」の表現がある。なぜ「新城」と表現したのかについて解釈は別れている。いわゆる藤原京との関係は、「新城」が飛鳥の北西の古道に囲まれた方形街区を指して、「新益京」はこれを拡大整備した大藤原京という見方がある（相原嘉之 2017）。そうすると、同じ藤原京の造営過程の中で、異なる表現がされていたことになる。つまり、「城」は「みやこ」を示すことになる。

近年、飛鳥とその周辺では、丘陵上の遺構の中に軍事的な施設と推定される遺跡が存在することが明らかになりつつある（相原嘉之 2004）。標高130mを超える丘陵上で掘立柱列が確認される事例が増えている。酒船石遺跡イ山地区では、尾根の稜線上で年代不明ながら15基以上の掘立柱列を検出している（明日香村 2006）。また、八釣りマキト遺跡では尾根稜線上で7世紀中頃～後半の16基以上の掘立柱列を検出している（明日香村教育委員会 2001）。相原嘉之氏は、このような掘立柱列の存在から飛鳥の宮殿を囲む丘陵上に柵が巡っていたと推定し、「羅城の施設」を想定する。また、土壘状の遺構が巡っていたことは推測して良いがまだ検証を重ねる必要がある。

さらに、飛鳥に連なる紀路に面する丘陵上で7世紀中～後半の砦遺跡が確認された（森カシ遺跡、高取町教育委員会 2003）。「火振山（ヒフリヤマ）」地名も合わせて、交通の要所に烽が存在した可能性は高いであろう。

宮垣と一本柱塀 『日本書紀』皇極4年（645）6月、「法興寺に入りて、城として備ふ」と記され、飛鳥寺が防御性のある城と表現される。これは寺院の築地が防御性を持つと認識されたからに他ならない。寺院は当初から築地を導入したのに対して、飛鳥の宮殿では、伝統的な掘立柱の柵が塀として用いられ、築地の導入は奈良時代に降る。

ここでは、宮城を囲む施設を「宮垣」と呼称して、構造と時期による変化を見ていこう（國下多美樹 2014）。まず、飛鳥宮内郭は南門に取り付く一本柱列が方形にめぐり、東辺の丘陵との境界に外郭に相当する一本柱が囲むと推定される。西辺は飛鳥川となる。齊明朝～天武朝に位置付けられている飛鳥宮跡Ⅲ期の内郭南門S B8010に取り付く南辺の一本柱列S A8020は、門両脇のみ約3m（10尺）等間で、以外は2.7m（9尺）と大規模である。柱掘り方は、掘り方に対して柱径が小さく、相当な高さを有する柵と見られる。

本格的な条坊制が導入された藤原京においても宮垣がある。藤原宮は、方形を呈し四面に三箇所の門を配置、一本柱塀で囲む。ただし、宮城正面の朱雀門の東西のみ一部区間单廊か複廊となる。藤原

【講演②】

都からみた古代山城と城柵

國下 多美樹（龍谷大学文学部教授）

古代律令国家が成立し、展開、終焉をむかえるまでのおよそ350年間、都はその位置、形、構造が変化してきた。そして、都は宮と京とを備えた一大都市を形成したという、東アジアを代表する古代国家の歩みを有している。すなわち、7世紀には王権の拠点が飛鳥に固定化され、7世紀後半から8世紀には律令国家の政治体制の整備が進んだ。8世紀末～9世紀前半には都が大和から山城に移り体制の再編が行われたが、10世紀後半に衰退することになる。

この古代律令国家の過程の中で、日本（倭国）は、常に中国・朝鮮半島の王権が有する理念や思想を学び支配の論理につながる先進的な政策を行ってきた。例えば、唐・新羅連合軍に対し、百濟救援を目的とした軍事行動は、663年の白村江の敗戦という結果となり、西日本各地に当時の軍事的緊張関係を伝える古代山城が造営された。

一方、中央政権は早くから列島各地への版図拡大を進めていた。東北地方の蝦夷に対しては、大化3年（648）の渟足柵設置以降、弘仁年間の最後の征夷まで征夷が繰り返された。この状況は当時の王権が東北経営こそ中央集権国家の実現を端的に示すものと認識されていたからに他ならない。

では、今回のテーマである古代の山城と城柵を都から見るとどのように見えるのか。本報告は、都における宮垣と羅城の性格を明らかにして、古代の山城や城柵との比較から律令国家支配のあり方を考えみたい。

1 日本の都・城・柵

都とは 都城ないし宮都とも表現される「都」とは、天子の住居のある集落というのが原義であり、和訓での「ミヤコ」は、「ミヤ（宮）」に場所を表す「コ（処）」が付いたものとする岸俊男氏の説明がある（岸俊男 1981）。すなわち、天皇の居住する建物を中心とする一帯ということになろうか。中國では城壁で四周を囲む城の構造をとるから、「都城」、「京城」と呼ばれる。日本の都は巨大な城壁こそ伴わないが、これを意識した日本固有の垣を巡らした。

城・柵とは 「城」は、内を「城」、外を「郭」と呼び分け、「みやこ」という意味をもつ。もちろん「城」は防御のための砦という原義がある。「城柵」は砦と同義で敵に備えるため土を重ねて作った城である。「柵」は、丸太などの矢來を意味する。

しかし、近年の考古学的調査は、城柵が軍事的性格のみならず政府域を有する官衙を構成していることを明らかにした。また、山城についても、鞠智城のような内陸部に入り、官衙的性格を有するものも存在することが明らかになっている。

古代の都と山城、そして城柵は、中国や朝鮮半島など大陸の影響を受けながらも多様な要素を持つ日本独自の構造を形成した点に特色がある。



図1. 古代城柵分布図（石川1994）



図2. 宮城県東山道跡全体図（下藤編2010）



図3. 東山道跡・塙の越邊跡・早見造跡関係図（下藤編2010）

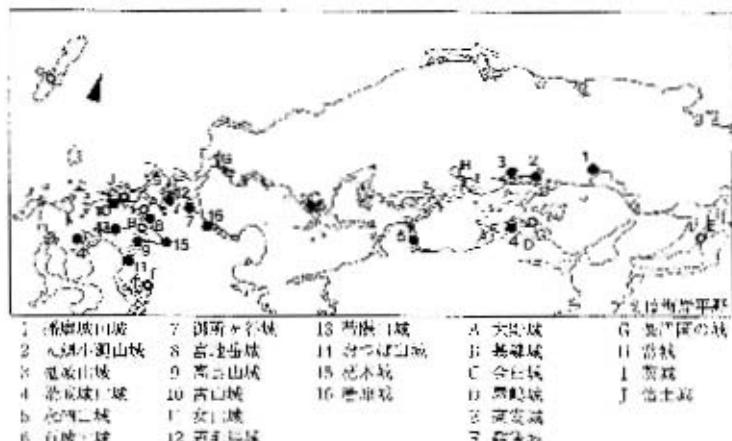


図4. 古代山城分布図（向井2004）

第2章 古代山東地圖之比較 (西漢200A-一魏晉)

表 3. 主要城鎮的街道、胡同、立牌上的地名（據 1964 年

表：文献にみえる山城・城柵一覧

名 称	設置(初見)時期	所 在 地	出典、備 考
<山城>			
A 大野城	天智4(665)年	福岡県太宰府市・大野城市ほか	書紀、豫城とともに百濟亡命貴族の憶礼福留らが築城。
B 榛城	天智4(665)年	佐賀県基山町・福岡県筑紫野市	書紀、のちに基肆城と表記。
C 長門国の城	天智4(665)年	不明	書紀、百济亡命貴族の答体春初を長門に派遣して築城、山城名、遺跡は不詳。
D 金田城	天智6(667)年	長崎県対馬市	書紀、天智3(664)年に吉岐・筑紫とともに防(さきもり)と烽を置く。
E 屋嶋城	天智6(667)年	香川県高松市	書紀
F 高安城	天智6(667)年	奈良県平群町ほか	書紀、大宝元(701)年庵城、舍屋・収納物を大倭、河内2国に移す。
G 三尾城	天武1(672)年(初見)	滋賀県高島市カ	書紀、遺跡未発見。壬申の乱で大海人方の羽田矢国らが攻略した。
H 鶴智城	文武2(698)年(初見)	熊本県山鹿市・菊池市	続紀、菊池城とも表記。大野城・基肆城と同時築城か。
I 三野城	文武3年(699)(初見)	福岡市カ	続紀、遺跡未発見。このとき大宰府が三野・稻積二城の修理を命じられている。
J 稲積城	文武3年(699)(初見)	福岡県糸島市カ	続紀、〃
K 茨城	養老3年(719)(初見)	広島県福山市カ	続紀、遺跡未発見。このとき「備後国安那郡茨城・葦田郡常城を停む」とある。
L 常城	養老3年(719)(初見)	広島県福山市カ	続紀、〃
M 怡土城	天平勝至8(756)歳	福岡県糸島市	続紀、このとき吉備真備が築城を専として造営開始、神護景雲2(763)年に完成。
N 大津城	宝龟3(772)年(初見)	福岡市カ	続紀、遺跡未発見。このとき筑紫宮大津城監を廃止。
<城柵>			
1 清足柵	大化2(646)年	新潟市カ	書紀、遺跡未発見。
2 磐舟柵	大化4(648)年	新潟県村上市カ	書紀、遺跡未発見。
3 都岐沙羅柵	齊明4(658)年	不明	書紀、磐舟柵の別称説あり。
4 出羽柵	和銅2(709)年(初見)	山形県庄内地方カ	続紀、遺跡未発見。天平5年12月に秋田村高清水岡に移転。
5 多賀城	神龟1(724)年	宮城県多賀城市	天平宝字6年12月1日付多賀城碑、続紀天平9年4月戊午条に多賀柵とみえる。
6 玉造柵	天平9(737)年(初見)	宮城県大崎市	続紀、名生館遺跡に比定。玉作城とも表記。
7 新田柵	天平9(737)年(初見)	宮城県大崎市	続紀
8 牡鹿柵	天平9(737)年(初見)	宮城県東松島市	続紀、赤井遺跡に比定。
9 色麻柵	天平9(737)年(初見)	宮城県加美町カ	続紀、城生柵跡説が有力。
10 桃生城	天平宝字3(759)年	宮城県石巻市	続紀、桃生柵とも表記。
11 雄勝城	天平宝字3(759)年	秋田県横手市カ	続紀、小勝柵とも表記。延暦21(802)年ごろ、大仙市払田柵跡に移転か。
12 秋田城	天平宝字4(760)年(初見)	秋田市	天平宝字4年3月19日付丸部足人解(阿支太城)、このころ出羽柵を改称。
13 伊治城	神護景雲1(767)年	宮城県栗原市	続紀、道嶋三山が中心になって30日足らずで完成。
14 覚鰲城	宝龟11(780)年	不明	続紀、覚鰲柵とも表記。計画の直後に伊治啓麻呂の乱勃発、造営中止か。
15 由理柵	宝龟11(780)年(初見)	秋田県由利本荘市カ	続紀、遺跡未発見。
16 大室塞	宝龟11(780)年(初見)	山形県尾花沢市カ	続紀、遺跡未発見。
17 玉造塞	延暦8(789)年(初見)	宮城県大崎市カ	続紀、宮沢遺跡説が有力
18 膀沢城	延暦21(802)年	岩手県奥州市	紀略
19 志波城	延暦22(803)年	岩手県盛岡市	紀略、弘仁3年3月ごろ(鈴木拓也説)に徳丹城へ移転。
20 中山柵	延暦23(804)年	宮城県登米市カ	後紀、遺跡未発見。陸奥国小田郡所在。
21 徳丹城	弘仁5(814)年(初見)	岩手県矢巾町	後紀、弘仁3年(812)造営。

- 熊谷公男 2004『古代の蝦夷と城柵』〈歴史文化ライブラリー〉吉川弘文館
- 熊谷公男 2007「城柵と城司」『東北学院大学東北文化研究所紀要』39
- 熊谷公男 2009「城柵論の復権」『宮城考古学』11
- 熊本県教育委員会 2013『ここまでわかった鞠智城—調査・整備・研究のあゆみ—』
- 佐々木茂楨 2010「古代陸奥国の「名取以南一十四郡」と多賀・階上二郡の権置」『国史談話会雑誌』50
- 笛山晴生 2010「鞠智城と古代の西海道」『古代山城 鞠智城を考える』山川出版社
- 佐藤 信 2014「鞠智城の歴史的位置」『鞠智城II 論考編1』熊本県教育委員会
- 進藤秋輝 1994「古代城柵の設置とその意義」『北日本の考古学』吉川弘文館
- 進藤秋輝編 2010『東北の古代遺跡—城柵・官衙と寺院—』高志書院
- 鈴木拓也 1998「払田柵と雄勝城に関する試論」『古代東北の支配構造』吉川弘文館
- 鈴木拓也 2010「軍制史からみた古代山城」『古代文化』61－4
- 鈴木拓也 2011「文献史料からみた古代山城」『条里制・古代都市研究』26
- 鈴木拓也 2018「文献史料からみた古代山城の倉庫」『溝渓』16号
- 鈴木靖民 2011「七世紀後半の日本と東アジアの情勢—山城造営の背景—」『日本の古代国家形成と東アジア』吉川弘文館
- 高橋誠明 2004「東辺地域における関東系土師器の一様相と出自について」『第32回古代史サマーセミナー資料集』
- 松川博一 2018「律令制下の大宰府と古代山城」『九州歴史資料館研究論集』43
- 向井一雄 2004「山城・神籠石」『古代の官衙遺跡 II 遺物・遺跡編』奈良文化財研究所
- 向井一雄 2010「古代山城論—学史と展望—」『古代文化』62-2
- 向井一雄 2017『よみがえる古代山城』〈歴史文化ライブラリー〉吉川弘文館
- 村田晃一 2007「陸奥北辺の城柵と郡家」『宮城考古学』9
- 柳澤和明 2007「『玉造柵』から『玉造塞』への名称変更とその比定遺跡」『宮城考古学』9

官衙的要素が比較的つよい点で、大野城・基肄城とは様相を異にしているし、8世紀にいったん稻穀の備蓄が中断したとみられるので、その後菊池郡の城院として地域支配にかかわるようになったと考えることができるようと思われる。

最後に、城柵と官衙の関係について筆者の立場を述べておきたい。現在では城柵官衙説の問題点が明らかとなり、城柵の軍事的性格は十分に認識されるようになったと思われるが、鈴木氏が城柵を『武装した官衙』といっているように、いまなお官衙であることが城柵に必須の要素、すなわち『官衙でない城柵はありえない』と考える傾向がつよい。しかし果たしてそうであろうか。前節で、城柵が通常郡名を冠するのは、政庁に象徴される地域支配の拠点という城柵の性格に対応することを指摘した。そうすると、例外的に郡名と一致しない城柵名を有する覚鱉柵（城）・中山柵・徳丹城・由理柵・大室塞の5城柵は軍事的性格のつよい城柵と考えうことになる。

このうち徳丹城のみは「城」とよばれているし、志波城の移転先なので別とすると、残りの4つは、いずれも軍事的拠点としての性格がつよいことが文献史料から指摘できる。覚鱉柵（城）は、宝亀11（780）年2月にその造當が計画されたときに、「覚鱉城を造りて、胆沢の地を得るべし」とか「覚鱉城を造りて兵を置きて鎮成せん」と造営目的が語られているように、胆沢の地を制圧するための戦略的軍事拠点として計画された。由理柵は伊治皆麻呂の乱の直後の宝亀11年8月に鎮狹使が秋田城に派遣されたときに「賊の要害に居りて、秋田の道を承く」といわれ、兵を派遣して防備を固めるよう命じられているし、大室塞も同年12月に皆麻呂の乱後の混乱を制圧するために征東使を派遣して陸奥の蝦夷の拠点を制圧したときに、さらに出羽の要害の地にある大室塞の防備を固めるよう命じている。さらに中山柵は延暦23（804）年に征夷のための軍糧が坂東諸国から運び込まれている。このように4つの城柵はいずれも征夷に直接関連して戦略的に重要な城柵として史料に現れる点で共通する。これら4つの城柵は、城柵名が郡名に一致せず、「柵」や「塞」という、この時期としては変則的な呼称が用いられ、さらにいざれも戦略的拠点として現れるので、報告者は、政庁をもたない軍事拠点としての城柵とみてよいのではないかと考えた（熊谷2007）。どれも遺跡が未発見なので（覚鱉城は計画のみか）、あくまでも一つの仮説に過ぎないが、この機会に改めて私見を提示しておく。

＜参考文献＞

- 赤司善彦 2014 「古代山城の倉庫群の形成について—大野城を衷心に—」『東アジア古文化論攷 2』中国書店
- 赤司善彦 2016a 「古代山城研究の現状と課題」『月刊 文化財』631
- 赤司善彦 2016b 「鞠智城の建物景観の推移」『海と山と里の考古学』
- 阿部義平 2015 「古代の城柵跡について」『日本古代都城制と城柵の研究』吉川弘文館、初出 1982
- 狩野 久 2010 「瀬戸内古代山城の時代—築造から廃止まで—」『坪井清足先生卒寿記念論文集—埋文行政と研究のはざまで—』下、坪井清足先生の卒寿をお祝いする会
- 亀田修一 2016 「西日本の古代山城」『日本古代考古学論集』同成社

拠点という点で類似しよう。いってみれば、政庁に象徴される城柵の地域支配の拠点という性格と郡名を冠した城柵名が対応しているというのが私見である（熊谷 2009）。

それに対して西日本の山城は、第一義的には白村江の敗戦を契機に築城された籠城戦に備えた“防衛拠点”として築かれたものであったから、山城の名称としては、所在地の地点を明示する小地名を冠する方がその性格にふさわしかったと考えられる。そのなかで鞠智城のみが例外的に郡名を冠しているのは、その官衙的な性格の強さに対応しているのではないかろうか。なお『日本三代実録』元慶3(879)年3月16日条に「肥後国菊池郡城院兵庫」とあるのは、この段階の鞠智城が菊池郡の管轄下にあったことを示していよう。

以上、城柵と山城の名称を比較検討してきた。その結果、両者の対照的なあり方が明らかとなった。それは地域支配の拠点としての“武装した官衙”と籠城戦に備えた“対外的防衛拠点”という、両者の城郭としての基本的な性格の相違に由来するものと考えられる。

おわりに　—地域支配の拠点としての山城と軍事拠点としての城柵—

以上、本報告では、城柵と山城の比較を試みて、両者の基本的性格を再確認してきたが、最後にそれをふまえながら城柵と山城の研究において、近年問題とされるようになった新しい見方について報告者の現時点での見通しを述べておきたい。

まず、山城を白村江の敗戦を契機に築かれた、対外的防衛のための逃げ込み城とみる見方に対しては、大きく二つの点で批判がある。一つは、鬼ノ城などの瀬戸内地域の神籠石系山城の成立を、出土土器などから7世紀第4四半期にまでくだるとみて、そうすると白村江を契機とする“対外的防衛拠点”的構築としては考えにくいとして、同時期の惣領制などと結びつけて、この地域の支配拠点として理解しようとするのである（向井 2010・2017）。興味深い見方であるが、山城の成立時期に関してはもう少し遡らせる見解もあるようだし、何よりも蝦夷支配の拠点としての城柵をはるかにしのぐ防御性を備えた施設をこの地域の支配拠点として築く必要性とはどのようなもので、どのような地域勢力に対してだったのかという点の具体的な説明がほしいところである。

古代山城に関して、もう一つ、地域支配の機能を重視するのは、8世紀初頭以降も存続する北九州の大野城・基肄城・鞠智城の3つの山城で多数の倉庫群が形成されていくのは、軍事的要因のみでは理解できないとする考え方である。そこでこれらの山城は防衛拠点から稻穀の備蓄施設へと性格を変え、「大宰府の独自財源」として用いられたり（向井 2017）、自然災害や盜難などに備えた不動倉のような役割があった（赤司 2014・2016a）という見解が提起されている。

このような見方に対して、最近、鈴木拓也氏が文献史学の立場から批判を展開している。鈴木氏によれば、高所にある山城は重貨である稻穀の保管場所としては適しておらず、「大宰府の独自財源」とみる根拠も不十分であるとして、山城にあえて倉庫を造って稻穀を備蓄する目的は“有事籠城”以外には理解しがたいとする（鈴木拓 2018）。天長3年(826)に統領・選士・衛卒制が創出されているように、9世紀に至るまで西海道には独自の軍制が敷かれ、山城の守衛をおこなっていた（松川 2018）ことからみても、報告者は基本的に鈴木説に賛成である。ただ鞠智城は、平坦地が多く、

伊治城は栗原郡に所在するので、厳密には郡名に一致しないが、栗原は現地地名の伊治＝コレハリを和語風にいい換えて郡名にしたと考えられるので、ここでは郡名に一致する城柵名に準じて考えた。

出羽柵は、天平5年(733)に秋田村高清水岡に移転したあともしばらくは「出羽柵」とよばれたが、天平宝字年間(757-765)の全面的な改修にともなって秋田(阿支太)城に改称されたと考えられる。また大仙市払田柵跡は、年輪年代学によって延暦21(802)年ごろの創建であることが判明しているが、近年はこれを第2次雄勝城とみる説が有力である(鈴木拓1998)。そうであれば、払田柵跡は山本郡域に所在しているので、雄勝郡内にあった旧城柵名を移転後も引き継いだと解することができる。また大崎市宮沢遺跡は、玉造塞(延暦8(789)年初見)に比定する説が有力である(高橋2004・柳澤2007)。その場合、8世紀末に玉作城(玉造柵)がここに移転してきたと考えるのであるが、宮沢遺跡は長岡郡域に属するので、この場合も旧施設の固有名を継承した事例ということになる。

以上のやや変則的な例も含めると、東北の城柵の名称は大半が郡名と一致することになる。一致しないのは、磐舟柵の別称説のある都岐沙羅柵を別にすれば、覚鰲柵(城)・中山柵・徳丹城・由理柵・大室塞の5つの城柵である。

つぎに、西日本の山城名を検討してみよう。

- ・郡名と一致する山城名一椽(基肄)城(肥前国基肄郡)、鞠智城(肥後国菊池郡)、怡土城(筑前国怡土郡)
- ・郡名と一致しない山城名一大野城(筑前国)、三野城・稻積城(大宰府管内、筑前国か)、金田城(対馬国)、高安城(大和国)、屋嶋城(讃岐国)、茨城・常城(備後国)

大野城は、山上憶良が「大野山霧立ちわたる我が嘆くおきその風に霧立ちわたる」(『万葉集』卷五799)と詠っているように、山城が築かれた山の名をとったことが明らかである。また椽(基肄)城は肥前国の郡名と一致するが、山城が所在する山が基山(ヤマ)なので、同じく山の名に由来するとみた方がよさそうである。高安城も、河内国に高安郡があるが、『日本書紀』に「倭国高安城」と明記されているので、郡(評)名ではなく、やはり山城が築かれた山の名(高安山)によったものと解してよい。そうすると明確に郡(評)名によったとみられるのは鞠智城と怡土城の2つだけであり、奈良時代初頭までに築かれた山城にかぎれば鞠智城ただ一つということになるのである。

このように西日本の山城名が総じて郡名に一致しないのは、山城の所在地である山など、郡よりも下位の小地名を名称としたからと考えられる。これは東北の諸城柵の固有名のあり方と比べてまさに対照的である。そこで両者の名称になぜこれほど顕著な相違があるのかを考えてみたい。

主要な城柵は中心部に政庁をおくところから「武装した官衙」ともいわれるが、それは城柵が蝦夷支配・地域支配の拠点であって、国家機構のうえで郡かそれ以上の地位を占めるからである。そのような地域支配の拠点という性格を示すために、いわば公的地名である所在郡の郡名をとて城柵名としたのではないかと考える。同様の名称の付け方をするものに軍団がある。軍団は2~4郡に一つ置かれ、軍団名には原則として所在郡の名を冠した。軍団は郡支配を基礎としながら、軍団兵の徵発、訓練を担当する機関であるが、城柵もまた辺郡に1~数郡ごとに一つずつおかれた支配

にみられる独自の利用形態といえそうである。

神籠石系では建物の検出例が少ないが、鬼ノ城では礎石建ちの総柱建物 5 棟や、管理棟とみられる大型の側柱建物 2 棟がみつかっている。

以上、山城で発見された建物遺構についてみてきた。神籠石系では実態が不明な点が多いが、鬼ノ城で若干の倉庫建物と側柱建物がみつかっているが、目立つのは 8 世紀以降まで存続した大野城・基肄城・鞠智城の 3 城の倉庫建物である。また鞠智城は、官衙風の掘立柱建物が比較的多く、山城の中でも異彩を放っている。

本節では、施設としての城柵と山城の構成を比較してみた。その結果、両者のはきわめて対照的な性格を有していることが確認できたと思われる。城柵が低丘陵や平坦な沖積地に立地し、外郭はほとんどが築地か木柵で、官衙的色彩が強いのに対して、山城は比較的低位の丘陵の場合もあるが、比高の大きな急峻な山地に立地することが多く、外郭は土壘・石壘構造であり、城内は平坦面が少ないとため建物は分散して分布し、それも備蓄用の倉庫が主体であり、官衙的要素は鞠智城を別にすればほとんどみられないといってよい。しかも、防御性では城柵のほとんどが、立地や外郭構造からみて緩山城以下とみられ、逆に官衙的要素では、山城でもっとも顕著な鞠智城でさえも、主要な城柵に備わっている政庁が確認できないなど、大きく異なったあり方を示すことが確かめられたと思われる。

3. 名称からみた城柵と山城の比較

そこでつぎに、このような両者の性格の相違を名称の比較から裏づけてみたい。

まず、東北の城柵の名称は、大多数が所在地の郡名と一致し、郡名と異なる城柵名は例外的にしかみられない。

- ・郡名と一致する城柵名—渟足柵・磐舟柵（以上越後国）、多賀柵（城）・玉造柵（玉作城）・新田柵・牡鹿柵・色麻柵・桃生柵（城）・伊治城・玉造塞・胆沢城・志波城（以上陸奥国）、出羽柵・小勝（雄勝）柵（城）・秋田（阿支太）城（以上出羽国）
- ・郡名と一致しない城柵名—都岐沙羅柵（越国）、覚鰲柵（城）・中山柵・徳丹城（以上陸奥国）、由理柵・大室塞（以上出羽国）

このうち多賀柵（城）は、『延喜式』・『和名類聚抄』所載の郡でいえば宮城郡に所在するので、郡名と一致しないことになるが、奈良時代には多賀郡という郡が存在していた。『続日本紀』延暦 4 年（785）4 月辛未条によれば、それまで国府の東西には多賀・階上 2 郡を権に置き、そこに百姓を集めて「人兵を国府に足らしめ」、国府の防衛としてきたが、このとき「統領之人」すなわち郡司を置いて「真郡」としている。近年の研究によれば、多賀郡が権置されたのは養老 4（720）年 11 月～翌 5 年 10 月の間と考えられる（佐々木 2010）。これはちょうど多賀城の創建期にあたっているので、多賀城の造営開始とともに、その東西に多賀・階上 2 郡を権置したのであろう。その後、延暦 4 年に郡司が任命されて正規の郡になったが、9 世紀代に宮城郡に併合されて消滅したと考えられる。とすれば、多賀城もまた所在郡の郡名に由来するとみてよいことになる。

人を城司として城柵に常駐させていたという想定が行われて、城柵を郡よりも上位の国レベルの官衙とする見方が通説であった。しかし近年、城柵遺跡の調査が進み、新たな城柵遺跡も発見されると、栗原市伊治城跡のような『三重構造城柵』、宮城県加美町東山遺跡のように郡庁的政府や正倉群などに外郭をめぐらした『郡家型城柵』など、城柵に多様な形態があることが知られるようになり、またすべての城柵に城司を常駐させるという想定も数的に困難となって、城柵を一律に国レベルの官衙ととらえる説は成立が困難になってきている（村田 2007・熊谷 2007）。

そこで私は、従来の（1）『国府型』（多賀城・渟足柵・出羽柵・郡山遺跡II期官衙・城輪柵跡など）と（2）城司が常駐する『準國府型』（秋田城・雄勝城・胆沢城など）の二つに加えて、（3）『郡家型』（牡鹿柵・新田柵・色麻柵・東山遺跡・城生柵跡など）、（4）『軍事拠点型』（由理柵・中山柵・覚鰲城（柵）・大室塞など）、（5）7世紀後半代の木柵と大溝をめぐらした移民集落である『「柵」型』（仙台市長町駅東遺跡・宮城県大和町一里塚遺跡・多賀城市山王遺跡・宮城県蔵王町十郎田遺跡など）の5類型の城柵があると考えている（熊谷 2007）。このうち（3）の類型が存在することは、近年、東北古代史研究者の間で共通理解になりつつあると思われる。（4）（5）は政府施設をともなわない城柵ということになるが、こちらはとくに考古学者には評判がよくないようであるが、古代においては防御施設をめぐらせていればキ（城・柵）とされたので、政庁は決してキに必須の要素ではない。いずれにしても、『武装した官衙』という表現があるように（鈴木拓 2010）、少なくとも主要な城柵は官衙を築地や木柵（＝キ）で囲んだ施設とみてよい。

それに対して山城は、官衙的要素は非常に希薄である。7世紀後半の百濟滅亡を契機として築造されたとみられる古代山城は、その大半が8世紀初頭には廃城になるとみられるが、そのなかで北九州の大野城・基肄城・鞠智城の3城がそれ以降も存続したことが、文献史料や出土遺物から判明している。

文献史料によれば、高安城に「舍屋」、大野城に「四王寺」「城庫」、鞠智城に「不動倉」「兵庫」などがあった。また、大宰府出土木簡から基肄城に大宰府管轄下に置かれた、稻穀を貯蔵した倉庫があつたことも知られる（鈴木拓 2011）。

考古学的にも、発掘調査が進んでいる大野城・鞠智城では建物の分布と変遷の大要が把握されるようになった。また基肄城でも礎石などの地表観察によって建物の所在・規模が大体把握されている（赤司 2014・2016b）。大野城や基肄城では、掘立柱・礎石建物合わせて50棟が確認されており、とくに定型化した礎石式倉庫がしだいに増築されていく様子がうかがわれるとされる。また大野・基肄両城では、丘陵の狭い頂部や丘陵斜面を利用して建物を分散して建てているのに対して、鞠智城では、山城としては例外的に台地状地形の平坦面が広がっているので、地形の利用に大きな制約を受けることなく、長者原・上原地区に建物が集中して営まれているという。鞠智城では掘立柱・礎石建ち合わせて68棟ほどの建物跡が発見されているが、倉庫とみられる縦柱建物が半数の34棟ある。そのうち掘立柱の側柱建物が26棟と比較的多く、なかにはL字型の官衙風の配置をとるものもある。また特異な八角形建物が4棟検出されている。このように鞠智城では、広い平坦面に建物跡が広がっており、倉庫建物だけでなく、官衙風の建物も一定数みられるが、この点は鞠智城だけ

城も、等しくキとよばれたのはそのためである。

そこでつぎに、いずれも古代のキ、あるいは城郭の範疇に含まれる城柵と山城を、その施設としてのあり方を中心に比較を行って、両者の基本的性格の違いを明らかにしてみたい。

まず立地であるが、東北の城柵は比較的平坦な沖積地と低丘陵に二分される。多賀城の場合、最高部で標高 52 m の低丘陵に立地するが、南辺や西辺の一部は沖積地を取り込んでおり、そこでは城外と比高差はない。『続日本紀』に「大河を跨え、峻嶺を凌ぎ、桃生柵を作りて賊の肝胆を奪う」（天平宝字 4 年正月丙寅条）とあるように、比較的急峻な丘陵地に立地する桃生城でも、最高部で標高 79 m 程度であり、南辺は一部平旦部を取り込んでいる。ただし多賀城も桃生城も蝦夷の地に面した北側は比較的急な斜面となっている。また宮城県加美町東山遺跡は、郡庁・正倉院・厨などの実務官衙群を築地で取り囲んだ郡家型城柵であり、最高部が標高 82 m 程度で、ほぼ桃生城と同じであるが、城外との比高差が 20 m ほどある丘陵上の平旦部に遺構群が立ち並んでいる。これがもっとも比高差のある城柵であろう。その他、郡山遺跡・胆沢城・志波城・徳丹城などは、いずれも河川近傍の自然堤防や低位段丘などほぼ平坦な場所に立地し、城外との比高差もほとんどない。陸奥国最北の城柵である志波城などは、しばしば水害に見舞われて徳丹城に移転したほどである。

一方、山城は、向井一雄氏によれば、城壁最低点比高が 30 m 以上の嶮山城と最低点が平地近くまで下る緩山城に類型化され、多くは前者に属するが、後者としては有明海側の山城を中心に 6 城ほどあげられるという（向井 2017）。

このように城柵と山城の立地を比較すると、その相違は明らかである。山城では、嶮山城はほとんどが標高 200 m 以上で、400 m を超えるものも少なくないし、比高もかなり高い。緩山城といえども標高 60 m 以上で、だいたい桃生城・東山遺跡レベルである。つまり城柵の防御性は、立地からいえばそのほとんどが緩山城以下といえよう。

つぎに外郭の構造であるが、山城は土塁が基本で谷部などに石塁を用いることが多い。なかには金田城のように、外郭に石塁だけを用いた山城もある。一方、城柵はそのほとんどが築地か木柵（材木塀）で、土塁は桃生城・伊治城・大崎市宮沢遺跡など、蝦夷との対立が激しくなる奈良時代後半に築かれた城柵に部分的に用いられるか、加美町東山遺跡や同町城生柵跡などのように奈良時代前半に築かれた城柵の外側に奈良時代後半に土塁が付加される例があるくらいで、現在のところ宮城县内に限られる。また、郡山遺跡・多賀城・志波城などのように、外郭に櫓が取り付く場合もある。このように外郭の構造でも、城柵にくらべて山城の方がはるかに防御性の高い造りになっている。

また山城には、通常、谷が取り込まれるので、城外に流れ出る部分に水門が築かれたり、水を引き込んで貯水池が作られたりしているが、このような施設は城柵では見つかっていない。

一方、城柵を特色づけるものは、何といっても政庁や曹司（実務官衙）などの官衙施設である。東北の城柵は、かつて考古学者を中心に城柵官衙説が優勢であったように、官衙的性格が顕著である。定型的な城柵の基本構造は、正殿・脇殿等をコの字型に配置し、周囲を築地で区画した政庁を中心にして、まわりに複数の曹司区域や工房群が配置される。そしてこれら全体を築地・木柵等の外郭施設で取り囲むのである。従来、その政庁が国府の政庁（国庁）に類似することや、国司の一

この条文は、垣（築地）および城柵などの外囲いの施設を不法に乗り越えたものの罰則を規定したものであるが、ここでは兵庫の「垣」に筑紫の「城」と陸奥・越後・出羽等の「柵」がそれぞれ対応しているから、この場合の「城」と「柵」は外郭施設そのものを意味することになる。したがって「筑紫の城」とは、大野城・基肄城などの外囲いの土星（一部は石星）を指し、「陸奥・越後・出羽等の柵」とは陸奥の郡山遺跡、越後の渟足柵・磐舟柵、出羽の出羽柵などの「柵」、おそらくは郡山遺跡のような木柵を指すことになる。ちなみに兵庫の「垣」とは築地塀のこととみられ、同条にはこの後に曹司・大宰府・国・郡・坊・市などの「垣」を越えた場合の罰則規定がみえる。

なお城柵には、考古学的な実態は不明であるが、東北以外にもう1つのグループがあった。『続日本紀』大宝2(702)年10月丁酉条に「唱更の国司等〈今薩摩國なり。〉言（モ）さく、「国内の要害之地に柵を建てて、戍（守備兵）を置きて守らむ」と。許す。」とみえるのがそれで、隼人に備えるために置かれた「柵」である。「柵」と呼称されていることからみて、これも木柵を周囲にめぐらすタイプの城柵であったと考えられる。

8世紀前半から存在した東北の城柵は、8世紀半ばを境に、多賀柵→多賀城、玉造柵→玉作城、出羽柵→秋田城などのように、おおむね「柵」から「城」に呼称が変化していく（表参照）。天平宝字3(759)年に完成した桃生城と雄勝城は、創建期には「桃生柵」「小勝柵」とも記されるので、このころが柵から城への過渡期であったとみられる。

東北の城柵が8世紀の前半まで「○○柵」と称されたのは、既述のように、それを取り囲む防御施設（外郭）がもともと木柵であったことに関係するとみられるが、では8世紀半ば以降、大半の城柵が「○○城」と表記されるようになるのも、外郭施設が築地に変化していくことに対応していると考えてよいかというと、どうも一概にそうとはいえないようである。というのは、秋田城や大仙市払田柵跡の外郭では、平安初期に逆に築地塀から木柵へという変遷がみられるし、少数ではあるが8世紀後半以降も、由理柵や中山柵のように「○○柵」と表記される城柵もみられるからである。

「稻城」「茨城」「石城」「水城」などの呼称があるように、そもそも「城」は、土築に限らず防御施設一般を意味したとみられる。したがって東北の城柵が「○○城」とよばれるようになるのは、当初、法制的にも山城から区別されていた城柵が、古代の城郭一般に含まれる施設と認識されるようになつたことを示すとみられるが、その要因についてはなお検討が必要である。また城柵の大半が「○○城」とよばれるようになった後にも、「○○柵」や「○○塞」とよばれる城柵が存在することは、城柵の多様な存在形態を示しうるものとして注目される。この点は、のちに改めて取り上げることにしたい。

2. 施設としての城柵と山城の比較

前節の考察によって、古代のキ（城・柵）とは土星・石星・木柵・築地・濠などをめぐらして防御を固めた施設というところに本質があり、その要件を満たせば多様な施設がキ（城・柵）とよばれたことをみてきた。蝦夷支配・地域支配の拠点としての城柵も、対外的防衛施設に起源をもつ山

これらは伝説的な記事ではあるが、キの概念を理解するうえでは有用である。また『日本書紀』のより実録的な記事でも、大化改新直前の皇極3(644)年11月条には、蘇我蝦夷が畠傍山の東に家を建てて「池を穿ちて城とし」たとあり、皇極4(645)年、板蓋宮でクーデターを決行して入鹿を殺害した中大兄皇子らは、蘇我氏側の反撃を警戒して「即ち法興寺に入り、城として備」えたとある（同年6月戊申条）。これは築地で囲まれた寺院を臨時の軍営として立て籠もった事例である。さらに白村江戦後の天智3(664)年には「筑紫に、大堤を築きて水を貯え、名けて水城と曰う」（天智3年是歳条）という、著名な水城築造の記事がある。翌天智4年には大野城や櫟城が築かれ、いわゆる朝鮮式山城の築城がはじまるが、それらもキであることはいうまでもない。

また改新の直後には、「渟足柵を造り、柵戸を置く」（大化3年是歳条）、あるいは「磐舟柵を治めて、以て蝦夷に備う。遂に越と信濃との民を選びて、始めて柵戸を置く」と、蝦夷の地に新たに柵（キ）を造営し、柵戸とよばれる移民を移住させて古代国家の領域を北に拡大していく政策をはじめとする。これが城柵造営のはじまりである。ここでキが「柵」と書かれているのは、後述するように、その防衛施設が木柵であったためと考えられる。

このようにみると、キとはもともと稲城・茨城・石城（石墨）・濠（または池）・築地（牆垣）・土壘・木柵などさまざまなもので構築された防衛施設そのものを意味したが、転じてそのような防衛施設を周囲にめぐらした施設全体をもキ（城・柵）とよんだことが知られる。水城のように、防衛施設が全周していないなくても、防衛機能があればキとよばれたし、中大兄皇子らが飛鳥寺に入ってキとして備えたとあるので、築地で囲まれた寺院を臨時の軍営として防衛的機能を付加することで、寺院がキとしての機能を合わせもつようにもなった。すなわち、単に区画施設をめぐらしただけではではキとはいはず、何らかの防衛的機能を有することがキとしての要件であったと考えられる。

防衛的機能を有する区画施設には多様なものがあり、池や濠をめぐらしたものでもキとよばれることがありえた。またキには城柵・山城のような恒久施設ばかりでなく、応急のパリケード状の施設や臨時の軍営も含まれ、その性格もさまざまである。要するに、土壘・石墨・木柵・築地・濠などをともなう防衛機能を備えた施設であれば、臨時か、恒久かを問わずキ（城・柵）とよばれたのであり、施設本体がいかなるものかにはかかわらない概念であることに注意しておきたい。別といい方をすれば、キとは何らかの防衛的機能を有する区画施設をともなう施設というところに本質があり、施設自体はさまざまな形態のものがありえたということである（熊谷2004・2007）。

さきに示した事例からもわかるように、キはその防衛施設の種類如何を問わず、「城」という字を用いることを原則とした。ところが、改新後に古代国家の北辺で造られはじめる城柵には「柵」という字が用いられている。それは、「柵」が木を立て並べた塀という意味であり、この時期の城柵遺跡である仙台市郡山遺跡の外郭施設が材木を立て並べたいわゆる材木列塀であることからみても、防衛施設（外郭）が木柵であったことに関係すると考えられる（阿部義平2015）。

「城」と「柵」という区分は、法制上もみられる。

凡そ兵庫の垣、及筑紫の城を越えたらば、徒一年。《陸奥・越後・出羽等の柵も亦た同じ。》……（衛禁律24越垣及城条、《 》は割注。）

【講演①】

古代の城柵と山城

熊谷 公男（東北学院大学名誉教授）

はじめに

私に与えられたテーマは古代東北地方の城柵と西日本の古代山城の比較である。両者とも○○城という名称でよばれ、7世紀半ば以降に築造され、奈良・平安時代まで存続したという共通点があるが、従来、城柵については官衙の一類型とみる城柵官衙説が考古学分野を中心に主流を占め、また山城は対外的防衛施設という理解が一般的であったため、両者に接点が乏しく、比較研究はあまりおこなわれてこなかった。そのなかで、阿部義平氏の外郭構造の研究（阿部 2015）や鈴木拓也氏の軍制上の比較研究（鈴木拓 2010）は先駆的な研究と思われる。

しかしながら、近年、城柵研究では軍事的機能が再評価されてきている一方で、山城については有事の逃げ込み城という理解から、地域支配の拠点という性格を重視する説もとなえられてきている（向井・赤司など）。こうして城柵も山城も、軍事的機能と地域支配の両面から研究が行われるようになり、両者の比較研究は従来よりも糸口が増えてきていているといえよう。そこで東北古代史の研究者の立場から、両者の比較研究を試みてみたい。

なお本報告では、東北の城柵は「城柵」、西日本の山城は「山城」（いわゆる神籠石系山城も含む）、両者を含む総称として「キ」または「城郭」という用語を使用する。

1. 施設としてのキ（城・柵）

西日本の山城は、当時の文献史料によれば例外なく「○○城」とよばれ、東北の城柵も、当初こそ「○○柵」と表記されたが、奈良時代半ば以降は大半が「○○城」とよばれるようになる（表1参照）。しかも「城」も「柵」も、訓はキである。すなわち、山城・城柵とともに「○○城」と表記されたことがあり、「城」も「柵」もキと読まれたということになつて、古代においては双方とも同じキ、あるいは「城」の範疇に入る施設と認識されていたことになろう。報告者は、この点を両者の比較の出発点としたい。

そこでまず文献史料からキ（城・柵）の形態を考えてみよう。『日本書紀』『風土記』などをみてみると、キにはさまざまな防衛施設がともなうことが知られる。『日本書紀』垂仁5年10月己卯朔条には反乱を起こした狹穂彦が「稻を積みて城を作る。其の堅きこと破るべくもあらず。此を稻城と謂ふ。」とあって、稻束を積んでバリケード状の防御施設とした「稻城」の話がみえる。また『常陸国風土記』茨城郡条には「黒坂命、この賊を規り滅さむと、次もて城を造りき。所以に地の名を便ち茨城と謂ふ」と、いばらを積んで防壁としたという「茨城」の地名起源説話がみえているし、『陸奥国風土記』逸文八槻郷条には土知朱らが津軽の蝦夷と共に謀して、石を積んで造った「石城」に陣取つて日本武尊の軍勢に抵抗したという話がみえている。

鞠智城跡変遷表

年代	鞠智城の変遷				関連事項
7C	3	鞠智城Ⅰ期			
		掘立柱建物の建築	城門の構築(深迫・堀切・池ノ尾門)	貯水池の造成	土壙線の構築
	4				・白村江の敗戦(663) ・防人、烽設置(664) ・長門国城築城(665) ・大野、豫城築城(665) ・金田、屋崎、高安城築城(667)
		鞠智城Ⅱ期			
8C	1	建物配置の改変			・大野、基肆、鞠智城修理(698) ・福積、三野城修理(699) ・高安城修理(698,699)
	2	建物配置の改変			・高安城廢城(701) ・備後国茨城、常城停める(719)
	3				
	4	鞠智城Ⅲ期			
		礎石建物の出現			
		鞠智城Ⅳ期			
		礎石建物の大型化	池中心部廃絶		・肥後国が大国に昇格(795)
9C	1				
	2				
	3				
		鞠智城Ⅴ期			
		礎石建物の再建			・菊池城院、兵庫鼓鳴、不動倉11宇火く(858) ・肥後國山本郡設置(859)
	4				・菊池城院、兵庫鼓鳴、(879)
10C	1				
	2				
	3				
		廢城			



■: 勘智城Ⅰ期の遺物



■: 勘智城Ⅱ期の遺物



■: 勘智城Ⅲ期の遺物



■: 勘智城跡Ⅳ期の遺物



■: 勘智城跡Ⅴ期の遺物

第4図 建物遺構の変遷

また、礎石・掘立柱併用建物2棟も確認されている。

⑤鞠智城V期（9世紀第4四半期～10世紀第3四半期）

鞠智城の終末期。城内の建物数は減少し、城の機能は低下するものの、大型の礎石建物を建てなおすなど、食糧等の備蓄機能は存続する。

4 今後の課題

これまでの調査研究によって、鞠智城の変遷について5期に区分し整理を行っている。その結果、鞠智城の築城にかかる当初の目的である対外的な軍事施設としての機能（I～III期）から、食糧の備蓄施設としての機能（IV～V期）へと変化したことが明らかになった。特にI～III期までの変化については、大宰府と連動していることから、大宰府防衛の一端を担っていたこと、また、城の維持・管理に大宰府が大きく関与していたものと考えられる。

今後に残された課題を整理すると、古くから議論されてきた広域説、狭域説の問題があろう。現在、狭域説の一部、土壘線と崖線で囲繞された内城地区を真の城域として、それを含む範囲を史跡に指定しているが、現在の城域が城の本体であることは確かであると思われるが、自然地形を俯瞰すれば城域がさらに広がる可能性も否定できない。現在のところ、遺構は検出されておらず判然としないが、自然地形をそのまま利用した防御ラインとする見解もあり、今後、検証が必要であろう。

次に、他の遺跡との関連を検討することも課題の一つである。大野城、基肄城をはじめ、他の古代山城はもとより、大宰府や肥後国府、菊池郡家などの官衙遺跡との関連から、鞠智城跡の機能・性格をより詳細に分析する必要がある。

このほか、出土遺物のより詳細な分析から、遺物の諸特徴や製作技術といった属性について分析を加え、産地や流通経路を行うことで、鞠智城への物資の供給など、鞠智城の管理・運営にかかる問題の一端を解き明かしてくれることが期待できる。

鞠智城を総合的に捉えていくためには、こうした課題の調査・研究を進めていくことが、鞠智城跡の全容解明につながっていくものと思われる。

【引用・参考文献】

西住欣一郎ほか 2012 『鞠智城跡II - 鞠智城跡第8～32次調査報告 -』 熊本県文化財調査報告第276集

めている。貯水池跡は、確認された水成粘土層の広がりから約5,300m²に及ぶことが判明している。池頭付近に飲料水を汲むための木組遺構が検出され、この遺構から北西方向に離れた箇所に貯木場が所在する。貯木場には、柱や桁等の大型の建築材と木舞（壁の下地等）や蔓等の小型の建築材、材料とを分けて保管しており、池の内部を機能的に使い分け、迅速な建築や補修に備えていたことが想定される。

また、上記の水汲み場や貯木場を包含する堆積土の層厚が薄いことから、定期的に堆積土を除去する等のメンテナンスが行われていた可能性が高い。その後、8世紀の終わり頃には貯水池の維持・管理活動がされなくなり、9世紀の初め頃には池中央部の機能が停止したと考えられる。



20号建物跡

3 時期区分と変遷

これまでの発掘調査により検出された遺構の変遷及び出土遺物の分析によって「役割」や「機能」を変化させながら、7世紀後半から10世紀中ごろまでの約300年間存続したことが判明し、大きく5期（I～V期）に時期区分がなされ変遷したことが明らかになった。第I期～第V期それぞれの変遷については以下のとおりである。

①鞠智城I期（7世紀第3四半期～第4四半期）

鞠智城の創建期。創建年代を、『続日本紀』文武2(698)年に「繕治」した大野、基肄の2城の創建(665年)とほぼ同時期と推定している。外郭線上に3箇所の城門、土壙線、城内に掘立柱建物、貯水池などを緊急的に整備し、城としての最低限の機能を備えた段階と考えられる。

②鞠智城II期（7世紀末～8世紀第1四半期前半）

鞠智城の隆盛期。第II期は、年代的に『続日本紀』文武2(698)年5月条にみられる「繕治」の前後にあたる。城内施設は総柱建物が少なく、小型の側柱建物が多く配置されていた第I期と異なり、「コ」字形に掘立柱建物を配置した管理棟的建物群が出現し、その南側に八角形建物（写真12）や総柱建物を配置するなど、城内施設の配置が大きく変化し充実が図られる。当該期の土器の出土量も多く、城の管理・運営に多くの人員が配置されたものと考えられる。

③鞠智城III期（8世紀第1四半期後半～第3四半期）

鞠智城の転換期。城内の建物配置はII期を踏襲しながらも、総柱建物が小型礎石を利用した礎石建物に建て替えられる。出土土器の空白期にあたることから、城の存続上必要な最小限度の維持・管理がなされていたものと考えられる。

④鞠智城IV期（8世紀第4四半期～9世紀第3四半期）

鞠智城の変革期。管理棟的建物群の消失や貯水池中央部の機能低下がある一方、III期の礎石建物が大型礎石を利用した礎石建物に建て替えられ、食糧等の備蓄機能が主体となる。これら建物群は、当該期末に焼失しており、『文徳天皇実録』天安2(858)年の不動倉火災との関連が想定される。

残存高 5.0 ~ 8.0 m と比較的高く、中位にテラス部を設ける 2 段構造となるのに対して、西側土塁線北端部の土塁（6 トレンチ）では、高さ約 3.6 m、奥行 6.0 m 程度の段を有しない構造となる。南側土塁線西端部の南面する土塁については、官道が位置する南に向けて城の堅固さなど視覚的効果を狙った可能性もあるが、西側土塁線の土塁高 3.6 m は南側土塁線西端部の南面する土塁（2 b トレンチ）の下段の高さ約 3.0 m と近似しており、3.0 m 前後あれば防御機能を果たし得たものと考えられる。

土塁の構築にあたっては、西側土塁線北端部において心々で 2.1 m 間隔で配置された前面柱穴列と約 1.3 ~ 2.3 m 間隔で配置された背面柱穴が確認されており、地山を鉤状に整形した後、版築を施す内托式の構造が採用されていることが判明している。深迫でも、心々で 1.8 m 間隔の前面柱穴列が検出されている。また、同じ内托構造でも、南側土塁線西端部の土塁と堀切門跡の土塁下段では、地山を階段状に整形しているのに対して、西側土塁線北端部ではやや棚状の平坦面が認められるものの、約 1.5 ~ 1.8 m の基底部までほぼ垂直に切り落とすなど、地山整形に差異が認められる。

このほか、南側土塁線西端部の南面する土塁においては、2 段構造の上段を削り出し、下段を版築盛土により整形する。これは堀切門跡でも認められる特徴である。南側土塁線の土塁では、さらに頂部に夾築気味の盛土が一部に認められる。また、土塁を構築する際の盛土材には、それぞれが立地する基盤面の土砂が利用されていることから、土塁を構築するにあたっては、それが立地する地形など基盤面の差異により構築手法が採択された可能性が考えられる。

このほか、深迫において土塁本体とは別に検出された土塁裾部を補強する盛土は、土塁裾部を被覆するように礫をバラス状に敷き込み、その上に版築様の盛土を行っている。これは、土塁前面の柱掘方との関係から当初から施工されたものと考えられ、大野城跡の土塁裾部で検出されている「外被盛土」に類似するものと思われる。

（2）貯水池跡

貯水池跡は長者原地区の北側谷部で確認された。自然地形を巧みに利用しながら人工的な造作を施し湧水を溜



貯木場跡



木組遺構



八角形建物跡（32/33 号建物跡）

礎石の原位置が推定された。前面に比高差約1.2mの段差があることから懸門式の構造が想定される。また、通路の東脇には、高さ約12.8mの城壁が所在し、裾部から約5.0m上にテラス部を設けた2段構造を有する点が特徴としてあげられる。上段を地山削り出し、下段を版築盛土により整形していることが推定されている。

ウ 池ノ尾門跡

池ノ尾門跡では、幅約20mの谷部を遮断する形で奥行9.6mの石壘が検出されている。平面形状は城内側に向かってやや弓なりとなる。その延長線上、市道が通る北東端に城門が推定されている。石壘については、背面の南西よりの一部に空石積みが認められるのみで、後世の攪乱により大部分が欠失しているが、下部に幅・高さとも約70cmの通水溝を設けた水門構造が確認されている。約7.8m程城内側に配置された取水口の前面には、取水口まで水を導くための底幅0.7~1.2mの導水溝が設けられている。その周囲を囲うように、土手状盛土遺構も認められる。

また、この石壘の城外側20m程の南斜面上には基底部に礫を敷き込む盛土状遺構が残存する。後世に開削された塩井川により全体構造が検証できていないが、複郭構造となる土壘をなすものか、石壘から延びてくる土壘の一部か、あるいは時期の異なる土壘の一部かは、現在のところ判別しがたい。今後、南側土壘線西端部へ延びる外郭線の延長も含めて解明すべき課題の一つと言えよう。

②土壘の構造とその特徴

鞠智城跡の外郭線のうち、南側土壘線西端部約70mの範囲と同東端部の一部、西側土壘線北端部約50mの範囲で土壘が検出されている。また、これら土壘線上の土壘のほか、深迫・堀切・池ノ尾においても土壘が検出されている。

土壘の規格については、南側土壘線西端部の南面する土壘（1・2bトレント）では、



南側土壘線西端部



西側土壘線



深迫門跡の土壘

簡や百濟系の銅造菩薩立像などが出土している。これらの発掘調査成果については、『鞠智城跡(1~7次)』(1983)、『鞠智城跡II(8~32次)』(2012)で報告されているので参考されたい。以下に、『鞠智城跡II』の報告について概要をまとめる。

(1) 外郭構造

鞠智城の城域については、前述したように「広域説」と「狭域説」として議論されてきたが、ここでは、狭域説のうち総延長3.5km、面積55haの範囲の内城地区について説明を行う。

第3図に示すように、城域の北と南にそれぞれ谷部を包括する包谷式の山城で、その外郭線は標高90~171mの間で推移する、比較的起伏に富む地形に立地する。この外郭線上には深迫、堀切、池ノ尾の3ヶ所に城門跡が、また、南側と西側に土壘線が確認されている。これまでの調査で、深迫では土壘、堀切では門の支柱と考えられる柱掘方、通路、土壘、池ノ尾では石壘等の遺構がそれぞれ検出されており、また、南側と西側に位置する土壘線においても、土壘の構造や構築技術などが明らかになるなど外郭構造の解明に進展がみられる。

①城門跡と城門周辺の遺構

城門跡は、現在、門礎石の存在から深迫・堀切・池ノ尾の3ヵ所に比定される。門礎石は、いずれも礎石表面に径15~20cm、深さ14~15cm程の軸摺り穴を持つ花崗岩製であり、堀切門礎石にのみ両縁辺部に円形の割り込みを持つ。また、堀切門礎石は、一石に心々で約2.8m間隔の2つの軸摺り穴を設けたものであり、原位置から動いた状態であるが、門幅を特定することができるが、城門構造については門礎石の存在を除けば、具体的な構造を言及できるまでに至っていないのが現状である。

ア 深迫門跡

深迫門跡では、残存する土壘盛土の範囲及び土壘前面の柱掘方の配列状況から、谷中央に想定される門口を挟んでL字状に配置された南北の土壘の存在が明らかになっている。土壘裾部に土留めのための石列を置く内托式の構造で、土壘裾部にはさらに盛土で補強する構造も認められた。土壘裾部の石列を覆う盛土は下に10~30cm大の石をバラス状に敷き込んだ状況が認められている。

イ 堀切門跡

堀切門跡では、阿蘇溶結凝灰岩の崖地の南西側を掘りきって通路を通している。通路は路面幅1.8~2.7mを測り、路面を粘質土により整形し、両・片脇に側溝を有する。傾斜角は約20°を測り、下位に舟形状のクランクを伴うことを特徴とする。通路上方の傾斜変換点に、門の支柱穴と考えられる柱掘方を検出し、門



堀切門跡・門跡と道路跡



池ノ尾門跡・水門

鞠智城の城域については、早くから広域説、狭域説として議論されてきたが、現在では狭域説のうち土墨線と崖線で囲繞する周長 3.5 km、面積 55ha の範囲を真の城域（第 2 図）とし、それを包括する約 64.8ha が国史跡に指定されている。

2 発掘調査の成果

鞠智城跡の発掘調査は、昭和42(1967)年度の第1次調査から始まり、今年度で34次を数える。これまでに、古代山城では唯一となる八角形建物跡をはじめとする72棟の建物跡や5,300m²の規模をもつ貯水池跡と、外郭線上には城門の門礎石、版築工法による土壙跡などの遺構が検出されるとともに、須恵器、土師器などの土器や単弁八葉蓮華文軒丸瓦をはじめとする瓦類、建築用材、木製品に加え「秦人忍口五斗」と墨書きされた付札木



第3図 鞠智城跡全体図



①銅造菩薩立像



② 「秦人忍□五斗」銘



⑤須恵器



③单弁八葉蓮華文軒丸瓦 ④木製品（平鋸・横槌）



⑥土師器

【報告】

古代山城鞠智城跡の調査と成果

村崎 孝宏（熊本県教育委員会）

1 鞠智城跡の概要

鞠智城は、東アジア情勢が緊迫した7世紀後半に、朝鮮半島で起きた白村江の戦い(663年)での敗戦を契機に、大和政権によって九州北部の防衛拠点として構築された古代山城の一つである。その城名は、『統日本紀』文武天皇2(698)年5月条「大宰府をして大

野、基肄、鞠智三城を繕治せしむ」を初見とし、『日本文德天皇実錄』天安2(858)年2月、6月条の「菊池城院」、『日本三代実錄』元慶3(879)年3月条の「菊池郡城院」など、国史に記載されている。

城域は、熊本県の北部、阿蘇北外輪山から有明海へと西流する菊池川(総延長72km)の中流域、山鹿市、菊池市に跨る。県境に位置する筑肥山地の主峰八方ヶ岳(標高1,052m)南西麓に形成された丘陵地帯の南端近く、中心標高145m前後の丘陵上(通称:米原台地)に立地し、南には菊池川沿いに発達した肥沃な菊鹿盆地が広がる。「車路」の地名によって復元された古代官道も推定されており、福岡、大分、阿蘇、熊本方面へと伸びる交通の要衝地にある。

当該地域は古代律令制下において肥後國菊池郡に属し、城周辺に残る「木野」の地名から『和名類聚抄』にみえる「城野郷」に比定される。



第1図 古代山城の分布図



第2図 鞠智城城域図

鞠智城シンポジウム 「古代の山城と東北城柵」

日時：令和元年（2019年）10月6日（日） 10:30～17:30

場所：龍谷大学 韶都ホール 京都アバンティ 9F

（京都府京都市南区東九条西山王町31）

主催：熊本県・熊本県教育委員会・龍谷大学文学部

後援：明治大学国際日本古代学研究クラスター・熊本県文化財保護協会

協力：文化庁 地域文化創生本部

日程

9:30 開場

10:30 開会

挨拶 熊本県教育委員会教育理事 青木 政俊
龍谷大学学長 入澤 崇
来賓紹介

11:10 報告 11:10～11:50

「古代山城 鞠智城跡の調査と成果」
熊本県教育委員会 村崎 孝宏

11:50 昼食休憩 11:50～12:50

12:50 講演① 12:50～13:30

「古代の城柵と山城」
東北学院大学名誉教授 熊谷 公男 氏

13:30 講演② 13:30～14:10

「都からみた古代山城と城柵」
龍谷大学教授 國下 多美樹 氏

14:10 休憩 14:10～14:25

14:25 講演③ 14:25～15:05

「東北古代城柵の構造と機能」
岩手大学平泉文化研究センター客員教授 八木 光則 氏

15:05 講演④ 15:05～15:45

「関東・東北の古墳時代社会の動態と城柵の成立」
明治大学准教授 若狭 徹 氏

15:45 休憩 15:45～16:00

16:00 パネルディスカッション 16:00～17:30

コーディネーター 佐藤 信 氏（人間文化研究機構理事）
パネリスト 熊谷 公男 氏、國下 多美樹 氏、八木 光則 氏
若狭 徹 氏、村崎 孝宏

17:30 閉会

2019年度 鞠智城シンポジウム
(2019年10月6日開催)

資料編

鞠智城シンポジウム 2019
成果報告書

鞠智城シンポジウム二〇一九成果報告書

古代の山城と東北城柵

発行年月日 令和二（二〇二〇）年三月三一日

編集・発行 熊本県教育委員会

〒八六二一八六〇九

熊本市中央区水前寺六丁目一八番一号

電話 ○九六一三八三一一一一（代表）

サンコー・コミュニケーションズ株式会社

印 刷



発行者：熊本県教育委員会
所 属：装飾古墳館
発行年度：令和元年度

この電子書籍は、古代の山城と東北城柵 鞠智城シンポジウム成果報告 2019 を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、古代山城がある市町村教育委員会、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：古代の山城と東北城柵

鞠智城シンポジウム成果報告 2019

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本県中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号

電話： 096-383-1111

URL : <http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：西暦 2022 年 7 月 21 日